

三沢南崎遺跡 3

—小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第242集

2009

小郡市教育委員会

三沢南崎遺跡3

—小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告—
小郡市文化財調査報告書第242集

2009

小郡市教育委員会

三沢南崎遺跡3

小郡市文化財調査報告書第242集

2009

小郡市教育委員会



序

福岡県の中部に位置する小郡市は、九州自動車道と大分自動車道の交差する、九州内でも有数の交通の要衝であり、その地理的条件を活かして近年めざましい発展を遂げてきました。モータリゼーション化がますます進行する現在、交通網の整備は急務の課題であり、市内各地ではより安全で便利な交通・流通のために、道路の整備事業を進めています。

今回ここに報告いたします三沢南崎遺跡は、県道本郷基山線道路改良工事事業に伴って発掘調査を行いました。ここでは、今から約1700年前の集落跡が発見され、弥生時代から古墳時代へと社会構造が大きく変化する時代に生きた人びとの様子がうかがえる資料が多数出土しています。遺跡そのものは、調査終了後に工事によって破壊されてしまいます。しかし、この報告を行なうことで、日常生活に使用する道路の下にこのような貴重な資料が眠っていたのだということを知り、広くみなさまに知っていただけるよう、願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり地元三沢区のみならず、福岡県久留米土木事務所及び小郡市役所都市建設部道路建設課には多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げる次第です。

平成21年3月13日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

- 本書は小郡市三沢南崎に所在する埋蔵文化財包蔵地 三沢南崎遺跡内に計画された「都市計画道路本郷基山線 沿路緊急地方道路整備事業」に伴う発掘調査報告書である。本調査は福岡県久留米土木事務所から委託を受け、小郡市教育委員会文化財課が実施した。
調査参加者（敬称略、五十音順）
石原春代 牛島信雄 小川真征 小野美代子 黒瀬明 黒瀬シゲ子 桑原美恵子 柳文子 執行弘子 庄司龍之介 田中安美子 田中賢二 田中ワジ子 西初代 原野照子 福田浪子 福田康博 藤田ツナ子 松田徳代 松本弘弘 宮崎隆明 森下弥寿治 横田豊江 山内鉄男 山本順子 山本聡子（以上小郡市在住）
井上ヤス子 古賀美子（以上筑紫野市在住）
有村栄 久野隆 中原輝英 松本義徳 溝田楓夫（以上三井郡大刀洗町在住）
平田和明 村島弘（以上筑紫鳥栖市在住）
- 本書に掲載した個別遺構図面は、調査担当者及び原野・西・横田・山本の作成した。製図は調査担当者が行なった。遺構配置図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。
- 本書に掲載した個別遺構写真は調査担当者が撮影し、調査区全景写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
- 遺物の洗浄・復元には井上千代美・船藤知嘉子・丸野明子・佐々木智子・田中悠美子・田瀬桂子・原野照子・百嶋八千代の協力を得た。
- 遺物実測は上部の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に、石器を同階級株式会社に委託した。その他は調査担当者と馬田妙子が行なった。製図は馬田・横本智子・吉田あや子が行なった。
- 遺物写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。
- 本書の執筆・編集は調査担当者が行なった。
- 本調査に関する出土遺物・図面・写真・カールスライド等については、全て小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希冀する。

凡例

- 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は世界測地系座標に拠っている。
- 本書で用いた標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
- 本書の遺構配置図において下記の遺構略号を用いている。

壁状住居：SK	溝状遺構：SD	土壌墓：SR
土坑：SK	ピット：SP	その他・不明遺構：SX



本文目次

序 例言 凡例	
I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. I区の遺構・遺物	8
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
IV. II区の遺構・遺物	29
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
V. III区の遺構・遺物	50
(1) 調査の概要	
(2) 遺構と遺物	
VI. 調査成果のまとめと検討	159
(1) 三沢南崎遺跡における集落の変遷と住居の形状	
(2) 三沢南崎遺跡の環濠	
(3) 出土遺物の様相	
遺物観察表	
写真図版	
抄録 奥付	





挿図目次

第1図 小都市地形図	2	第43図 25号住居 (S=1/40)	45
第2図 調査区位置図 (S=1/2500)	2	第44図 26号住居 (S=1/40)	45
第3図 周辺道路分布図 (S=1/50000)	4	第45図 25号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	46
第4図 調査区全体図 (S=1/250)	5・6	第46図 10・11・13号土坑 (S=1/40)	48
第5図 I区遺構配置図 (S=1/150)	7	第47図 14号土坑	48
第6図 1号住居 (S=1/40)	8	第48図 III区遺構配置図 (S=1/250)	49
第7図 2号住居 (S=1/40)	9	第49図 19号住居 (S=1/40)	50
第8図 3号住居 (S=1/40)	9	第50図 27号住居 (S=1/60)	51
第9図 4号住居 (S=1/60)	11	第51図 25・27・29号住居出土土器 (S=1/4)	52
第10図 5号住居 (S=1/40)	12	第52図 28号住居 (S=1/60)	53・54
第11図 6号住居 (S=1/40)	13	第53図 23・24・27号住居出土土器・鉄器 (S=1/2,1/3)	55
第12図 7号住居 (S=1/60)	14	第54図 28号住居出土土器 (S=1/3,1/4)	56
第13図 1~5・7号住居出土土器 (S=1/4)	15	第55図 28号住居出土土器 (S=1/2,1/3,1/4)	57
第14図 1・2・3・5号住居出土土器 (S=1/2,1/3,1/4)	16	第56図 29号住居 (S=1/40)	59
第15図 8号住居 (S=1/40)	17	第57図 30号住居 (S=1/40)	60・61
第16図 9号住居 (S=1/40)	17	第58図 30号住居出土土器① (S=1/4)	62
第17図 10号住居 (S=1/60)	18	第59図 30号住居出土土器② (S=1/4)	63
第18図 7・8・10・9号住居出土土製品・石器 (S=1/2,1/3)	19	第60図 26・28・29・30・31号住居出土土製品・石器・鉄器 (S=1/1,1/2,1/3)	64
第19図 11号住居 (S=1/40)	19	第61図 31号住居 (S=1/60)	65
第20図 10・11号住居出土土器 (S=1/4)	20	第62図 32号住居 (S=1/60)	66
第21図 12号住居 (S=1/60)	21	第63図 32号住居出土土器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4)	67
第22図 13号住居 (S=1/40)	22	第64図 32号住居出土土器① (S=1/4)	68
第23図 12・13号住居出土土器 (S=1/4)	23	第65図 32号住居出土土器② (S=1/4)	69
第24図 1~5号土坑 (S=1/40,1/60)	26	第66図 33号住居 (S=1/60)	70
第25図 6~9・12号土坑 (S=1/40)	27	第67図 34号住居 (S=1/60)	71
第26図 II区遺構配置図 (S=1/150)	28	第68図 31・33・34号住居出土土器 (S=1/4)	72
第27図 14号住居 (S=1/40)	30	第69図 35号住居 (S=1/40)	73
第28図 14号住居出土土器① (S=1/4)	31	第70図 35号住居出土土器① (S=1/4)	74
第29図 14号住居出土土器② (S=1/4,1/5)	32	第71図 35号住居出土土器② (S=1/4)	75
第30図 15号住居 (S=1/40)	33	第72図 35号住居出土土器③ (S=1/4)	76
第31図 16号住居 (S=1/40)	33	第73図 34・35号住居出土土器 (S=1/2,1/3)	77
第32図 17号住居 (S=1/60)	35	第74図 36号住居 (S=1/40)	79
第33図 14・15・17号住居出土土器 (S=1/4)	36	第75図 37号住居 (S=1/40)	80
第34図 13・14・17号住居出土土製品・石器 (S=1/2,1/3,1/4)	37	第76図 38号住居 (S=1/60)	81
第35図 17・20・22号住居出土土器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4,1/8)	38	第77図 39号住居 (S=1/40)	82
第36図 18号住居 (S=1/40)	39	第78図 36・37・38・39号住居出土土製品・石器 (S=1/2,1/3,1/4)	82
第37図 20号住居 (S=1/60)	39	第79図 20・22・38・39号住居出土土器 (S=1/4)	83
第38図 20・22号住居出土土器 (S=1/4,1/5)	40	第80図 40号住居 (S=1/60)	84
第39図 20号住居出土土器 (S=1/4,1/5,1/8)	41	第81図 40号住居出土土器 (S=1/3)	85
第40図 23号住居 (S=1/40)	42	第82図 40・42・43号出土土器 (S=1/4)	86
第41図 24号住居 (S=1/40)	43	第83図 41号住居 (S=1/60)	87
第42図 20・23・24号住居出土土器 (S=1/4)	44		



第84図	41号住居出土土器 (S=1/4) ……………	88	第120図	61号住居 (S=1/40) ……………	120
第85図	42号住居 (S=1/60) ……………	89	第121図	62号住居 (S=1/60) ……………	122
第86図	43号住居 (S=1/40) ……………	90	第122図	62号住居出土土器 (S=1/4) ……………	123
第87図	41・42・43号住居出土石器 (S=1/3) ……	90	第123図	63・64号住居出土土器 (S=1/4) ……………	124
第88図	44号住居 (S=1/60) ……………	91	第124図	63号住居 (S=1/40) ……………	124
第89図	44号住居出土土器① (S=1/4) ……………	92	第125図	64号住居 (S=1/40) ……………	125
第90図	44号住居出土土器② (S=1/4,1/5) ……	93	第126図	65号住居 (S=1/60) ……………	126
第91図	44号住居出土土器③ (S=1/4) ……………	94	第127図	60・61・62・65号住居出土石器 (S=1/2,1/3,1/4) ……………	127
第92図	44号住居出土土器④ (S=1/4,1/5,1/8) ……	95	第128図	66号住居 (S=1/40) ……………	128
第93図	44号住居出土土器⑤ (S=1/4) ……………	96	第129図	67号住居 (S=1/40) ……………	129
第94図	41・43・44号住居出土土製品・石器・鉄器 (S=1/2,1/3) ……………	97	第130図	68号住居 (S=1/60) ……………	130
第95図	44・45号住居出土土器 (S=1/4,1/5) ……	98	第131図	69号住居 (S=1/60) ……………	132
第96図	45号住居 (S=1/60) ……………	99	第132図	67・68・69号住居出土土器 (S=1/4) ……	133
第97図	46号住居 (S=1/60) ……………	99	第133図	70号住居 (S=1/60) ……………	134
第98図	47号住居 (S=1/60) ……………	101	第134図	71号住居 (S=1/60) ……………	135
第99図	48号住居 (S=1/60) ……………	102	第135図	66・68・69・71・76号住居出土土製品・石器・鉄器 (S=1/1,1/2,1/3,1/4) ……………	136
第100図	49号住居 (S=1/60) ……………	103	第136図	72号住居 (S=1/40) ……………	137
第101図	46・47・48・49・74号住居出土土器 (S=1/4,1/8) ……………	104	第137図	73号住居 (S=1/40) ……………	138
第102図	46・47・48・49号住居出土石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4) ……………	105	第138図	70・71・73号住居出土土器 (S=1/4,1/5) ……	138
第103図	50号住居 (S=1/60) ……………	106	第139図	74号住居 (S=1/60) ……………	139
第104図	50号住居出土土器 (S=1/4) ……………	107	第140図	75・76・77号住居 (S=1/40,60) ……	140
第105図	51号住居 (S=1/60) ……………	108	第141図	74・75・76号住居出土土器 (S=1/2,1/4) ……	141
第106図	52号住居 (S=1/60) ……………	109	第142図	78・79・80号住居 (S=1/40) ……………	143
第107図	50・51・52号住居出土石器・鉄器 (S=1/2) ……………	109	第143図	15～19号土坑 (S=1/40) ……………	144
第108図	53号住居 (S=1/60) ……………	110	第144図	20～25号土坑 (S=1/40) ……………	146
第109図	50・51・52・53号住居出土土器 (S=1/4) ……………	111	第145図	26～32号土坑 (S=1/40) ……………	148
第110図	54号住居 (S=1/40) ……………	112	第146図	土坑・土壇墓出土石器・石器 (S=1/3,1/4) ……	150
第111図	55号住居 (S=1/60) ……………	113	第147図	1号土壇墓・環濠土層 (S=1/40,1/60) ……	151
第112図	56号住居 (S=1/60) ……………	114	第148図	8号溝 (S=1/60) ……………	153
第113図	54・55・56号住居出土土器 (S=1/4) ……	115	第149図	10・11・12号溝 (S=1/60) ……………	155
第114図	57号住居 (S=1/60) ……………	116	第150図	環濠・溝状遺構出土土器・石器・鉄器 (S=1/2,1/3,1/4) ……………	156
第115図	58号住居 (S=1/40) ……………	116	第151図	ピット出土土器・土製品 (S=1/2,1/4) ……	157
第116図	57号住居出土土器 (S=1/4) ……………	117	第152図	環濠復元図 (S=1/600) ……………	158
第117図	54・55・56・57号住居出土石器 (S=1/1,1/2,1/3,1/4) ……………	118	第153図	集落変遷図 (1) (S=1/1000,300) ……	161
第118図	59号住居 (S=1/40) ……………	119	第154図	集落変遷図 (2) (S=1/1000,300) ……	162
第119図	60号住居 (S=1/40) ……………	120	第155図	三沢果原遺跡の住居分布と乙姫天通遺跡 の住居の変化 ……………	166
			第156図	出土土器変遷案① ……………	171
			第157図	出土土器変遷案② ……………	172



図版目次

図版1 三沢南崎遺跡2・3・4全景 (合成写真、写真上方が北)

図版2

- ①三沢南崎遺跡3 Ⅰ区全景 (写真上方が東)
②調査区及び周辺風景 (南西から)

図版3

- ①1号住居 遺物出土状況 (南西から)
②1・3号住居 完翻状況 (南西から)
③2号住居屋内土坑 遺物出土状況 (東から)
④4号住居 遺物出土状況 (南から)
④4号住居 貼床検出状況 (南から)
⑤5号住居 遺物出土状況 (西から)
⑦5号住居 完翻状況 (北から)
⑧6号住居 検出状況 (北から)

図版4

- ①7号住居 遺物出土状況 (南から)
②7号住居 完翻状況 (南から)
③8号住居 完翻状況 (東から)
④9号住居 貼床検出状況 (南から)
⑤10号住居 貼床検出状況 (北西から)
⑥11号住居 完翻状況 (南から)
⑦12号住居屋内土坑 遺物出土状況 (南から)
⑧12号住居 完翻状況 (南東から)

図版5

- ①13号住居 遺物出土・完翻状況 (北から)
②1号土坑 完翻状況 (東から)
③2号土坑 完翻状況 (北から)
④3号土坑 完翻状況 (南から)
④4号土坑 完翻状況 (北から)
⑤5号土坑 遺物出土・完翻状況 (南西から)

図版6

- ①6号土坑 完翻状況 (南から)
②7号土坑 完翻状況 (南から)
③8号土坑 完翻状況 (南東から)
④9号土坑 完翻状況 (南東から)
⑤三沢南崎遺跡3 Ⅱ区全景 (写真上方が東)

図版7

- ①15号住居 遺物出土・完翻状況 (南から)
②16号住居 土層・完翻状況 (南から)
③Ⅲ区17号住居 完翻状況 (南東から)
④Ⅲ区17号住居 貼床検出状況 (北東から)
⑤Ⅲ区20号住居 完翻状況 (南から)
⑥Ⅲ区20号住居 貼床検出状況 (北西から)
⑦Ⅲ区14号土坑 完翻状況 (北から)
⑧Ⅲ区14号住居 完翻状況 (南から)

図版8

- ①23号住居 遺物出土状況 (北西から)
②25号住居 遺物出土状況 (南西から)
③14・23・25号住居 完翻状況 (西から)
④24号住居 完翻状況 (南西から)
⑤26号住居 完翻状況 (南東から)
⑥10号土坑 土層断面 (南から)
⑦11号土坑 完翻状況 (北東から)
⑧Ⅲ区調査風景 (東から)

図版9 三沢南崎遺跡3 Ⅲ区全景 (写真上方が北)

図版10

- ①27号住居 完翻状況 (北西から)

②19号住居 完翻状況 (南から)

- ③28号住居 ベッド状遺構検出状況 (南から)
④28号住居屋内土坑 遺物出土状況 (北東から)
⑤28号住居 貼床検出状況 (南東から)
⑥29号住居 完翻状況 (北西から)
⑦30号住居 遺物出土状況 (南から)

図版11

- ①30号住居 焼土・炭化物検出状況 (南から)
②30号住居 完翻状況 (南から)
③31号住居 貼床検出状況 (東から)
④32号住居屋内土坑 遺物出土状況 (北から)
⑤32号住居 貼床検出状況 (東から)
⑥33号住居 完翻状況 (西から)
⑦34号住居 貼床検出状況 (北西から)
⑧35号住居 遺物出土状況 (南東から)

図版12

- ①35号住居 貼床検出状況 (北から)
②36号住居 完翻状況 (東から)
③37号住居 貼床検出状況 (南東から)
④38号住居 貼床検出状況 (北西から)
⑤39号住居 貼床検出状況 (南西から)
⑥40号住居 貼床検出状況 (東から)
⑦41号住居内ピット 遺物出土状況 (南から)
⑧41号住居 貼床検出状況 (南から)

図版13

- ①42号住居 貼床検出状況 (北から)
②43号住居 遺物出土状況 (西から)
③43号住居 完翻状況 (北西から)
④44号住居 遺物出土状況 (南西から)
⑤44号住居 貼床検出状況 (南から)
⑥45号住居 遺物出土状況 (南西から)
⑦45号住居 貼床検出状況 (北から)
⑧46号住居 遺物出土状況 (Ⅰ) (西から)

図版14

- ①46号住居 遺物出土状況 (Ⅱ) (東から)
②46号住居 完翻状況 (東から)
③47号住居 完翻状況 (東から)
④48号住居 遺物出土状況 (西から)
⑤48号住居 貼床検出状況 (東から)
⑥49号住居 完翻状況 (北西から)
⑦50号住居内ピット 遺物出土状況 (南から)
⑧50号住居 貼床検出状況 (南から)

図版15

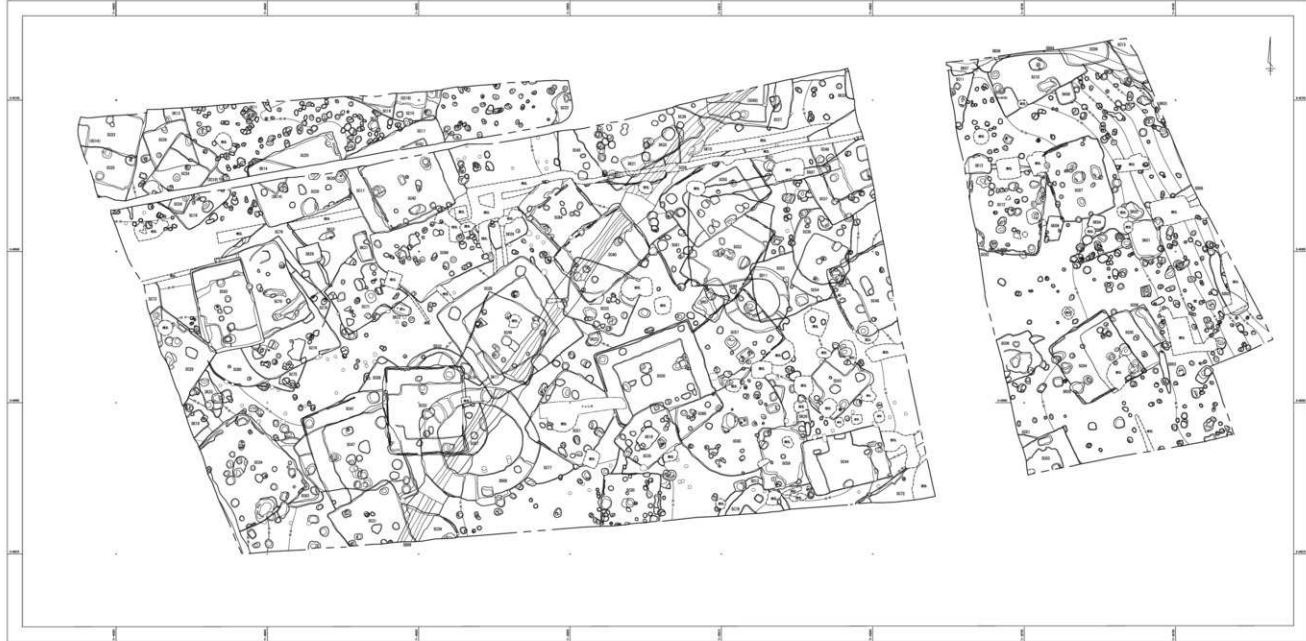
- ①51号住居 貼床検出状況 (北東から)
②52号住居 貼床検出状況 (北から)
③53号住居 貼床検出状況 (東から)
④54号住居 貼床検出状況 (東から)
⑤55号住居 貼床検出状況 (南から)
⑥56号住居 貼床検出状況 (北から)
⑦57号住居 遺物出土状況 (西から)
⑧57号住居 完翻状況 (西から)

図版16

- ①58号住居 完翻状況 (南東から)
②59号住居 完翻状況 (南から)
③60号住居 完翻状況 (北から)
④61号住居 貼床検出状況 (東から)
⑤62号住居 貼床検出状況 (西から)



⑥63号住居	完翻状況 (西から)	図版28	出土土器⑥
⑦64号住居	完翻状況 (北から)	図版29	出土土器⑦
⑧65号住居	完翻状況 (北西から)	図版30	出土土器⑧
図版17		図版31	出土土器⑨
①66号住居	完翻状況 (北から)	図版32	出土土器⑩
②67号住居	完翻状況 (北西から)	図版33	出土土器⑪
③68号住居	貼床検出状況 (北西から)	図版34	
④69号住居	貼床検出状況 (北から)	①出土土器 (ミニチュア1)	
⑤70号住居	完翻状況 (北から)	②出土土器 (ミニチュア2)	
⑥71号住居	完翻状況 (北から)	図版35	
⑦72号住居	完翻状況 (南から)	①出土土器	
⑧73号住居	完翻状況 (北から)	②出土土製品	
図版18		図版36	
①74号住居	遺物出土状況 (東から)	①出土鉄器 (鉄鏝)	
②74号住居	完翻状況 (北から)	②出土鉄器 (摘鎌)	
③75号住居	完翻状況 (北東から)	図版37	
④76号住居	完翻状況 (北から)	①出土鉄器 (ヤリガンナ1)	
⑤77号住居	完翻状況 (北から)	②出土鉄器 (ヤリガンナ2)	
⑥78号住居	完翻状況 (南から)	図版38	
⑦16号土坑	完翻状況 (西から)	①出土鉄器	
⑧17号土坑	完翻状況 (南西から)	②出土石器 (砥石1)	
図版19		図版39	
①18号土坑	完翻状況 (南から)	①出土石器 (砥石2)	
②19号土坑	完翻状況 (西から)	②出土石器 (砥石3)	
③20号土坑	遺物出土状況 (西から)	図版40	
④20号土坑	完翻状況 (北から)	①出土石器 (砥石4)	
⑤21号土坑	完翻状況 (北から)	②出土玉類	
⑥22号土坑	完翻状況 (南から)	③出土石器 (砥石・磨石)	
⑦23号土坑	完翻状況 (北東から)	図版41	
⑧24号土坑	完翻状況 (東から)	①出土石器 (スクレイパー)	
図版20		②出土石器 (打製)	
①25号土坑	完翻状況 (西から)	図版42	
②26号土坑	完翻状況 (西から)	①出土石器 (石鏝)	
③27号土坑	完翻状況 (南東から)	②出土石器 (石廬丁1)	
④28号土坑	完翻状況 (南から)	図版43	
⑤29号土坑	完翻状況 (南から)	①出土石器 (石廬丁2)	
⑥30号土坑	完翻状況 (東から)	②出土石器 (石廬丁3)	
⑦31号土坑	完翻状況 (東から)	図版44	
⑧32号土坑	完翻状況 (北から)	①出土石器 (石廬丁4)	
図版21		②出土石器・土製品	
①33号土坑	完翻状況 (北から)	図版45	
②15号土坑	完翻状況 (北西から)	①出土石器 (石斧等)	
③1区4号溝	土層・完翻状況 (南東から)	②出土石材	
④8号溝	完翻状況 (南西から)	図版46	出土石器
⑤10号溝	完翻状況 (南西から)		
⑥11号溝	完翻状況 (北西から)		
⑦12号溝	完翻状況 (北から)		
図版22			
①9号溝	土層断面 (1) (南から)		
②9号溝	土層断面 (2) (南から)		
③9号溝	土層断面 (3) (南西から)		
④9号溝	土層断面 (4) (南西から)		
⑤9号溝	完翻状況 (北東から)		
⑥1号土壇墓	土層断面 (南から)		
⑦1号土壇墓	完翻状況 (南から)		
図版23	出土土器①		
図版24	出土土器②		
図版25	出土土器③		
図版26	出土土器④		
図版27	出土土器⑤		



第4図 調査区全体図 (S=1/250)

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

本遺跡の調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地三沢南崎遺跡地内（小都市三沢字南崎2929、2945-1・3・4・5、2946-4他）が「都市計画道路本郷基山線」街路緊急地方道路整備事業の対象地となり、平成18年6月5日付で福岡県久留米土木事務所より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号06032）が提出されたことに始まる。

これを受けて、小都市教育委員会文化財課で同年6月12日に対象地で試掘調査を行った結果、弥生～古墳時代の竪穴住居群及び土器類が確認されたことから、対象地の一部について開発に先立って協議が必要である旨の回答を行った。その後、福岡県久留米土木事務所及び小都市都市建設部道路建設課との協議を行った結果、小都市教育委員会が発掘調査の委託を受け、平成19年度事業として開発対象地を3遺跡（三沢南崎遺跡2・3・4）に分割して発掘調査を実施し、平成20年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

本調査に関わる組織は以下の通りである。

<平成19年度>

【福岡県久留米土木事務所】	【小都市役所都市建設部】	【小都市教育委員会文化財課】
所 長 榎川知彦	部 長 高木良郎	教 育 長 清武 輝
副所長（技術） 吉岡慶介	道路建設課長 佐藤吉生	教 育 部 長 池田清己
副所長（事務） 溝口正信	道 路 3 係 長 丸山義勝	課 長 田滝千代太
都市施設整備課長 梶島淳二	小中謙一	係 長 重松正喜
副 長 大隈徹浩	東園清隆	企 画 主 査 片岡宏二
主任技師 稲富 剛		技 師 上田 恵
		嘱 託 技 師 神田正大
		(現宗像市教育委員会)

<平成20年度>

【福岡県久留米土木事務所】	【小都市役所都市建設部】	【小都市教育委員会文化財課】
所 長 木原宗道	部 長 池田清己	教 育 長 清武 輝
副所長（技術） 古澤輝吉	道路建設課長 佐藤吉生	教 育 部 長 赤川芳春
副所長（事務） 溝口正信	道 路 3 係 長 倉富義和	課 長 田滝千代太
都市施設整備課長 梶島淳二	津曲清隆	係 長 重松正喜
副 長 宮崎洋三	東園清隆	企 画 主 査 片岡宏二
主任技師 松尾真司		技 師 上田 恵

(3) 調査の経過

発掘調査は平成19年7月5日から平成20年2月15日にかけて実施した。廃土処理と現行道路・私有地侵入路維持のため調査地を3分割して作業を行なっている。以下調査日誌より抜粋した調査経過を記す。

平成19年7月5日重機によるⅠ・Ⅱ区表層土除去開始 17日Ⅰ区南半部より遺構検出開始。竪穴住居群・ピット群を確認。一部遺構掘削を開始 19日Ⅰ区全面の遺構検出完了（竪穴住居群13軒、溝状遺構6条、土坑・ピット群）、遺構配置略図作成。以後人力による遺構掘削と個別遺構・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施 8月20日発掘作業員増員 24日Ⅱ区遺構検出実施（竪穴住居

群10軒、土坑・ピット群)、遺構配置略図作成、I区の掘削と並行して人力による遺構掘削を開始 9月27日発掘作業員増員 28日I・II区全景写真撮影、個別遺構図・調査区全体図作成後、重機によるI・II区埋め戻し開始 10月6日III区全面の遺構検出完了、遺構配置略図作成、後世の擾乱部分から掘削開始 18日III区人力による遺構掘削開始、以後個別遺構図・土層断面図・遺物出土状況図等を作成、遺構写真撮影を実施 12月14日遺構掘削と平行し、調査区全体図作成開始 平成20年2月16日III区全景写真撮影、機材撤収 17日個別遺構図作成、環濠ヘルト掘削 20日埋め戻し作業開始 25日埋め戻し作業完了、道路建設課担当者立会いのもと現地引き渡し

II. 位置と環境

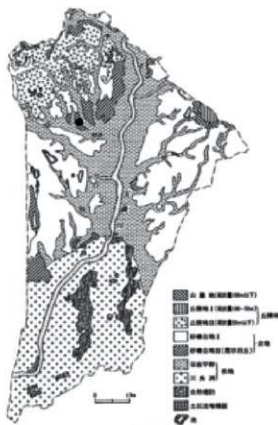
(1) 地理的環境

小都市域は北から南へ流れる宝満川によって二分され、右岸には北西部に背振山系から派生する丘陵（通称・三国丘陵）があり、これが南へ行くに従い緩やかに下って平坦な台地へ移行し、筑後平野へ連なっている。左岸は北東に所在する花立山（城山）を頂点として南へと下り、同じく筑後平野に至る台地が延びている。本書で報告する三沢南崎遺跡は、右岸の舌状に張り出す低位段丘の裾部に位置している。遺跡の東正面には左岸の花立山を、南東には力武区の水田地帯を、北西には弥生時代の遺跡の宝庫として著名な三国丘陵を臨む、非常に見晴らしの良い位置にある。

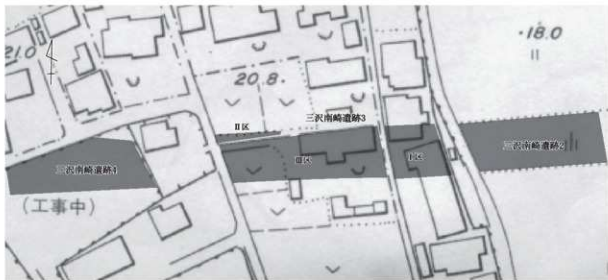
(2) 歴史的環境

小都市三沢は、中九州ニュータウン開発計画に伴って長期かつ大規模な発掘調査が実施された地区である。これまで弥生時代中期～古墳時代前期を中心とする多数の遺跡が確認されており、玄界灘を中心とする北部の文化と、有明海を中心とする南部の文化が融合した、独特の文化圏であったことが明らかにされてきた。

弥生時代前期は、初期農耕の技術面の問題から、湧水

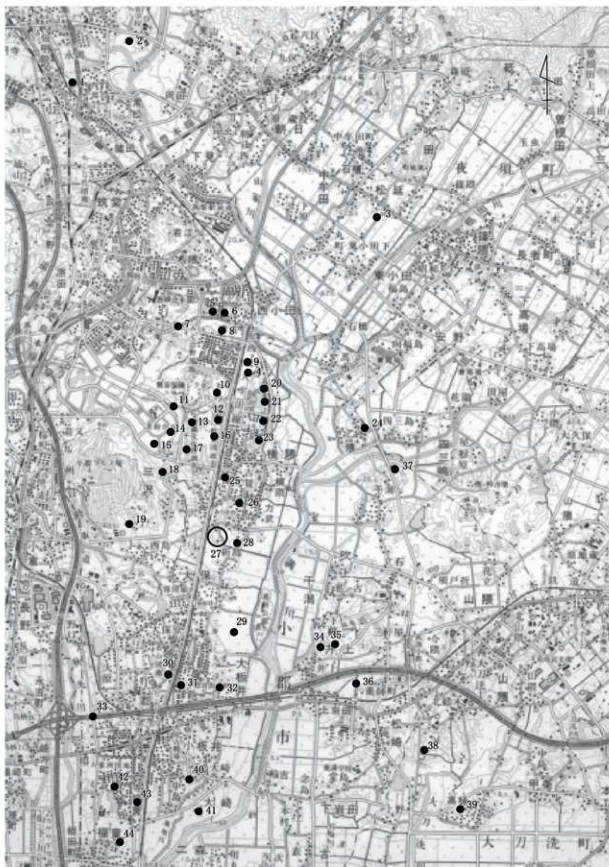


第1図 小都市地形図



第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

を伴う谷部の湿地帯と乾燥した丘陵が接する位置に集落が経営される。三国丘陵上ではその傾向が顕著に見られており、津古東台遺跡(8)のような津古遺跡群や三沢の諸遺跡の分布状況がそれを反映している。津古土壇遺跡(9)は弥生時代前期前葉の集落と墓域が並存する遺跡で、いわゆる松岡型土居を含む堅穴住居群と貯蔵穴群、豊棺墓・木棺墓からなる墓域が確認されている。津古内畑遺跡(6)では、前期後半の環濠を伴う貯蔵穴群が確認されている。この環濠は短期間しか使用されなかったようで、前期末には埋没し、その上更に豊棺墓・木棺墓からなる墓域が構築される。同じ様相を示す横隈北田遺跡(21)では、環濠と貯蔵穴群のみが関連し、住居がそれに伴わない。集落の存続を脅かす敵が外部から侵入するのを阻むためではなく、貯蔵穴群の食糧を守るための、前期特有の環濠像を提示したと言える。同様の様相は、三沢北中尾遺跡(16)、横隈山遺跡(25)や平成20年度に発掘調査を実施した大保横枕遺跡(29)でも確認されている。弥生時代前期の生産域としては、木杭列を伴う谷水田を検出した三沢公家環遺跡(13)や津古大林遺跡(7)、水田畔が確認されている方武内畑遺跡(28)がある。とりわけ方武内畑遺跡7は、集落域と共に水田と水利施設である井堰が併せて検出されており、当時の集落の在り方や水田経営の技術伝播を考える資料を提示した点で特筆に値する。また三沢蓬ヶ浦遺跡(12)では弥生時代前期の畑状遺構が確認されている。この遺跡からは、近接する集落遺跡との立地関係から、当時の農耕集落の拡大してゆく状況や生業の主体・それに適した環境の問題などが論じられている。墓域としては北半田遺跡(17)があり、前期から中期にかけての墓域が確認されている。ここでは南北方向に墓坑が並ぶ「列葬型」の配置が明瞭に見られる。三国の鼻遺跡(20)は前期の墓域と集落域からなる。墓地は土壇墓・木棺墓・豊棺墓から構成され、6号木棺墓からは多数の石鏃が、20号木棺墓からは管玉が出土している。出土した特殊遺物と墓坑の配置や構築条件などから、当時の階層制度についての検討がなされている。その他、近接する墓地遺跡としては、前期の堅穴住居・貯蔵穴群を伴う集落と、中期の豊棺墓群が検出された横隈狐塚遺跡(23)等が、同時期の大規模な墓域として寺福童遺跡5(42)がある。弥生時代中期に入ると、集落・墓域ともに前述の三国丘陵を中心とするグループと、小部・大板井を中心とするグループに二分されるようになる。小部遺跡(31)は現在の官術遺跡公園一帯に所在し、大型の円形住居や貯蔵穴群・環濠の可能性のある溝などが確認されている。同時期の集落遺跡においては珍しい大規模な住居が存在することから、この地域の拠点集落であった可能性が示唆されている。大板井遺跡(32)は豊棺墓群を主体とし、集落である小部遺跡と関連する墓域と想定される。この遺跡内の豊棺墓からは中細形銅支9本が出土したことがあり、これらの遺跡と近接する小部若山遺跡(30)では、平成5年に多鈕細文鏡が出土している。多鈕細文鏡からは、その希少性や埋没状況もさることながら、階層制や集落の統一課程といった当時の政治状況や文化を反映したものと見て注目される。平成16年度に中広形銅支9本を伴う埋納遺構が確認された寺福童遺跡4(43)についても、この集落と関連する可能性が考えられる。三国丘陵の弥生時代後期の集落は、これと比較すると小規模であると言える。三国の鼻遺跡(20)の後期集落は一部を環濠に圍繞されている。この環濠の構築については、丘陵の自然地形が十分に考慮されており、当時の政治的状況を考えるための資料として興味深い。横隈山遺跡(25)では、本遺跡で多数検出されたものと同じ、後期後半のベッド状遺構を伴う住居群が検出されており、中でも14号住居内からは仿栗の内行花文鏡が出土している。市内で始めて周溝状遺構が確認されたあまみくに保育所遺跡(26)は前期の貯蔵穴群と、後期中葉～後半の住居群からなる集落であり、住居内から方格規矩鏡が出土している。この周溝状遺構は、横隈山遺跡(25)・小部若山遺跡(30)等でも確認されており、本遺跡においても4例検出している。祭祀に伴う遺構と想定されているが、その用途については今後の検討課題として残る。三沢栗原遺跡(18)ではベッド状遺構を伴う後期の堅穴住居群が確認されているが、出土遺物は石器から鉄器への道具の変化を示す例として意義深い。その他、後期の集落としては、横隈鎌倉遺跡(22)、三国の鼻遺跡(20)、宝満川の左岸にある乙隈天道町遺跡(24)等が挙げられる。その後、三国丘陵では津古生掛古墳(4)をはじめとする前方後円墳の造成が始まり、津古古墳群、三国の鼻1号墳(三国の鼻遺跡・20)といった前期古墳が見られるようになる。本遺跡の主体は弥生時代後期であるが、出土遺物から集落そのものは前期段階から存在していたと考えられる。弥生時代全体を通して、様々な様相を示しながら人間生活が展開されていた三国丘陵、その南端にある本遺跡がこれらの歴史的経過の中でどのような役割を担っていたのかを検討することは、弥生時代末から古墳時代へと至る政治・社会の変遷をとらえる上で、貴重な資料になり得ると言える。



1本間 2永岡井元 3柳沢 4津古牛掛 5津古空堀 6津古内堀 7津古大林 8津古東台 9津古土取 10三沢 11三沢ハサコの宮 12三沢東ノ浦 13三沢
 公家隈 14一ノ口 15北松尾口 16三沢北中尾 17北半田 18三沢栗原 19西島 20三国の鼻 21横隈北田 22横隈鎌倉 23横隈狐塚 24元天道町
 25横隈山 26みくに保育所内 27三沢南崎 28力武内堀・船堀 29大保横杜 30小郡若山 31小郡 32大板井 33小郡三沢 34井上北内原・南内原
 35井上小松山 36上岩田 37千高 38鶴木横道 39高樋小道 40大崎小園 41大崎中ノ前 42寺福蔵 43寺福蔵 44福蔵町

第3図 周辺遺跡分布図(S=1/50000)



第5図 I区遺構配置図 (S=1/150)

Ⅲ. I 区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

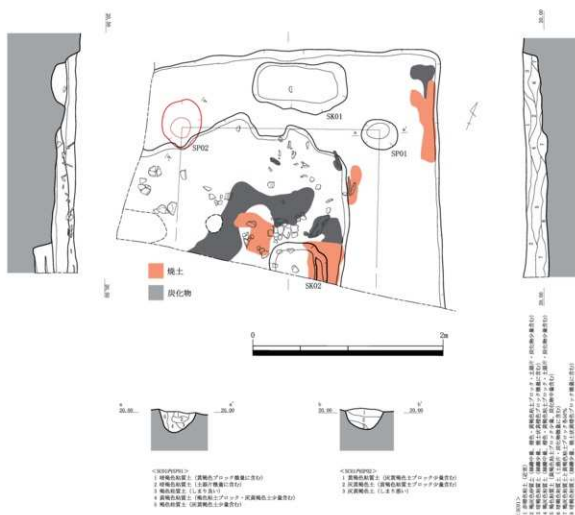
I 区は調査区の東端に当たり、本遺跡の東西にある谷部への地形の変換する際となる。遺構検出面の標高は19.50～20.25mで、東へ向かって緩やかに傾斜する。調査区内では竪穴住居13軒、土坑10基、溝4条を検出した。溝のうち、4号溝についてはⅢ区でも確認されている環壕（SD09）の一部であるため、V章にて別途報告する。表層土の厚みは調査区内の位置によって差があり、北東一帯は厚く、西は極めて薄い。そのため遺構の残存状況にも非常に差がある。また、遺構配置図で擾乱としてあげているものうち3ヶ所については、調査段階で太平洋戦争時の防空壕の可能性が高いことが判明しているが、調査期間の都合上、詳細な掘削はしていない。以下、個別遺構と出土遺物について述べる。

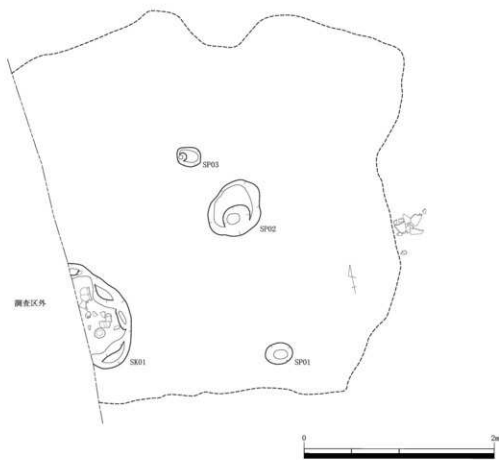
(2) 遺構と遺物

<竪穴住居>

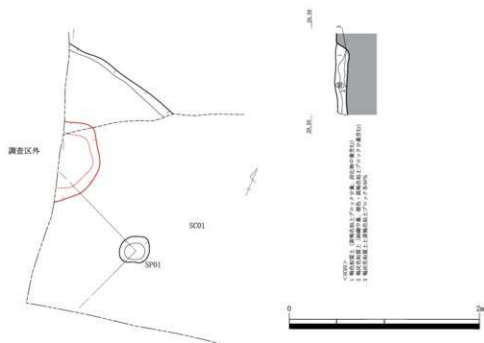
1号住居（第6図/図版3）

調査区南西隅に位置するが、大半は調査区外に延長し、北東の4分の1のみ検出している。3号住居を切





第7図 2号住居 (S=1/40)



第8図 3号住居 (S=1/40)



る。整理段階で主柱を検出し、4柱として復元しているが、SP02を北主柱とする2柱の可能性もある。主軸は南北方向で、残存長2.65m、残存幅3.4m、検出面からの深さは0.2m、北及び東に幅0.9m、高さ0.1mのベッド状遺構をめぐらす。ベッドの縁は不整なラインを描く。埋土からは、ベッド状遺構と同じ高さで炭化物・焼土を伴ってまとまった量の遺物が出土している。住居廃棄時を示すものと考えられる。また北東隅及びベッド状遺構の北東縁にも炭化物・焼土が分布し、特にベッド状遺構の縁辺は被熱して硬化した部分も見られることから、明瞭な痕跡はないものの、焼失した住居の可能性もある。

出土遺物 (第13・14図/図版2・42)

検出段階で3号住居との先後関係が不明瞭であったため、明確に後出するものを1号住居出土遺物として扱った。遺構図に示した遺物を中心に土器が出土している。土器は甕・鉢類を主体とする。外面に粗磨なタタキが目立ち、器壁の凹凸が激しい。いずれも小片で形状をとどめるものはわずかである。その他、黒曜石製の石鏃を含む、少量の石器が出土した。

2号住居 (第7図/図版3)

調査区中央西端に位置し、12号住居を切る。上面は後世の造成により大幅に削平されており、柱穴とSK01とした屋内土坑、貼床の一部がわずかに残存するのみである。SK01は住居の壁面沿いにあるタイプの土坑と考えられる。検出段階では1軒の住居としてのプランを確認出来なかったため、整理段階で復元を行った。南北方向を主軸とする2柱で、平面プランは長軸5.5×短軸5.0m程度と推測される。中央東寄りの床面直上でまとまった遺物が確認されている他、SK01内から一括した遺物が出土している。

出土遺物 (第13・14図/図版42・46)

黒曜石製石鏃を含む少量の石器と、SK01からまとまった量の土器が出土している。甕・鉢類が主体だが、いずれも小片である。比較的薄手で器面調整は工具ナデ・ハケによる。古墳時代の所産と考えられる。砥石は石英珉岩で、砥面はそれぞれ逆の向きから使用している。

3号住居 (第8図/図版3)

調査区南西隅に位置し、1号住居に切られる。大部分が調査区外へ延長している。4柱として復元しているが、貼床下層で検出したピットを北主柱とする2柱の可能性も考えられる。検出面からの深さは0.15m、その他の規模・構造とも不明である。

出土遺物 (第13・14図/図版42)

埋土より、甕・器台等少量の遺物が出土している。甕は口縁部がやや縮んだL字型となる。弥生時代中期末の所産である。その他、黒曜石製石鏃・頁岩質砂岩の石砲丁の小片を含む石器類が出土している。

4号住居 (第9図/図版3)

調査区中央南寄りに位置し、5号土坑に切られ、5号住居を切る。4柱で主軸は北西—南東、長軸5.0×短軸4.6m、検出面からの深さ0.1mを測り、南北の壁沿いに浅い細溝をめぐらす。柱間の壁沿いに土坑を持つ。SK01—SP01間にわずかに焼土の広がり認められたが、焼失住居あるいはカマド痕跡とは考えられない。柱穴は上部の擾乱に削平されているSP04を除いていずれも2段階掘り込みが認められ、しっかりとした造りとなっている。但し遺構上面が大幅に削平されており、残存状況は非常に悪い。

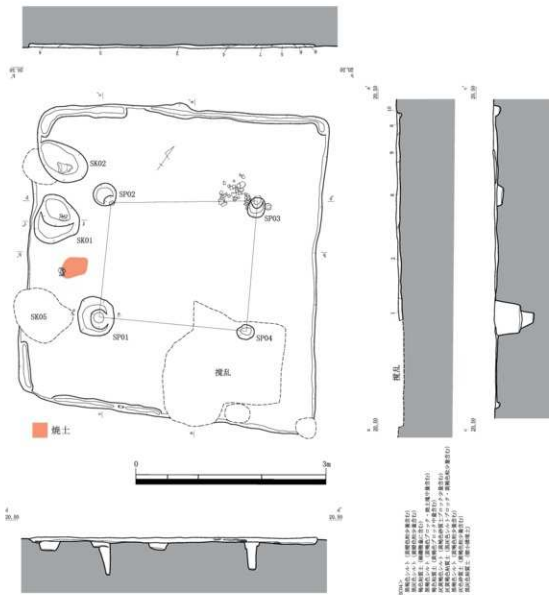
出土遺物 (第13図/図版23)

遺構図内に掲載したものを含め、甕・鉢を中心とした土器と少量の石器が出土している。甕は頸部がくの字型に屈曲するやや厚手のもの、外面ハケ・内面ケズリ調整。鉢類は内外面に指圧痕の目立つ、調整がやや粗雑なものが多い。小型壺は体部に1ヵ所穿孔を施し、外面は丁寧にミガキを施す。古墳時代前期の所産と考えられる。

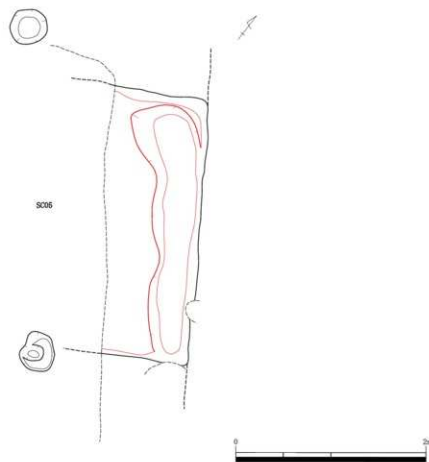
5号住居 (第10図/図版3)

西側3分の2を4号住居に切られる。2柱で主軸は北東—南西、長軸5.8×短軸6.0m、検出面からの深さ0.1mを測る。調査段階で西側に幅1.4mのベッド状遺構を伴うと判断した。東側へも同様の構造を有





第9図 4号住居 (S=1/60)



第11図 6号住居 (S=1/40)

していた可能性があるが、上部を大幅に削平されているため詳細は不明である。柱穴はいずれも片側2段掘りですっきりとした造りとなっている。住居中央部の土坑SK02は、埋土に炭化物・焼土の双方が認められないことから炉跡ではないと考えられる。南壁沿いのSK01は、埋土にわずかながら炭化物が認められるが、こちらも炉跡の可能性は極めて低い。

出土遺物 (第13・14図/図版41・42)

SK01内から土器と大型の砥石が、床面直上から土器・石器が出土している。土器は甕を主体とし、いずれも小片だが、弥生時代中期の所産と考えられる。砥石は大型で3面を使用。その他、2次加工を施した黒曜石片が出土している。

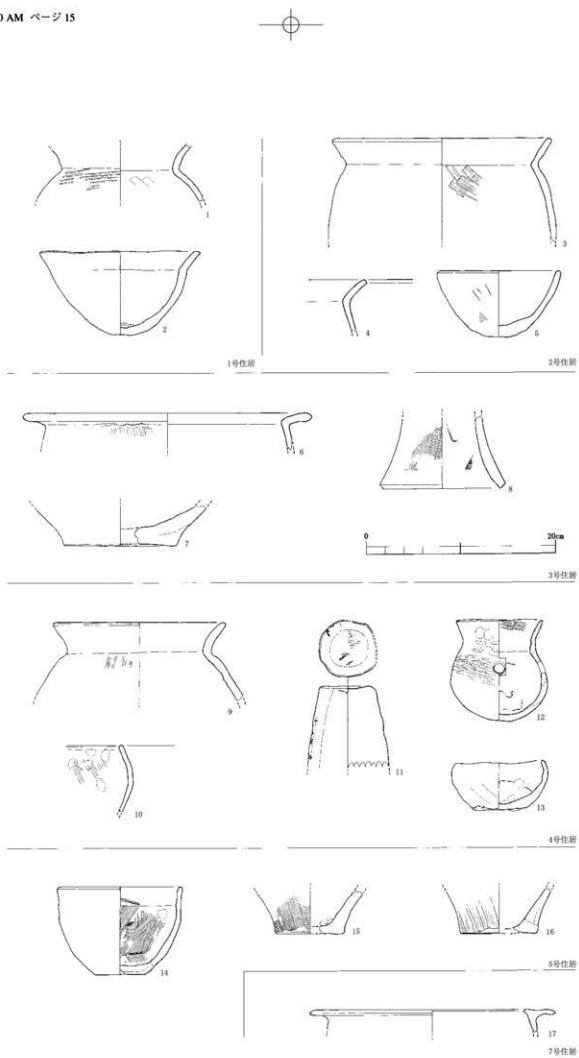
6号住居 (第11図/図版3)

西側の大半を5号住居に切られ、上面を大幅に削平されている。2柱で主軸は北西—南東、南・北両辺にベッド状遺構を伴うと判断したが、貼床痕跡の残存が中央部分のみであったため、詳細な構造・規模は不明である。東辺の貼床下に湿気抜きのためと思われる溝状の浅い掘り込みが見られる。その他、住居に伴う土坑・細溝等の存在も不明である。8号住居と同じ構造とも想定される。

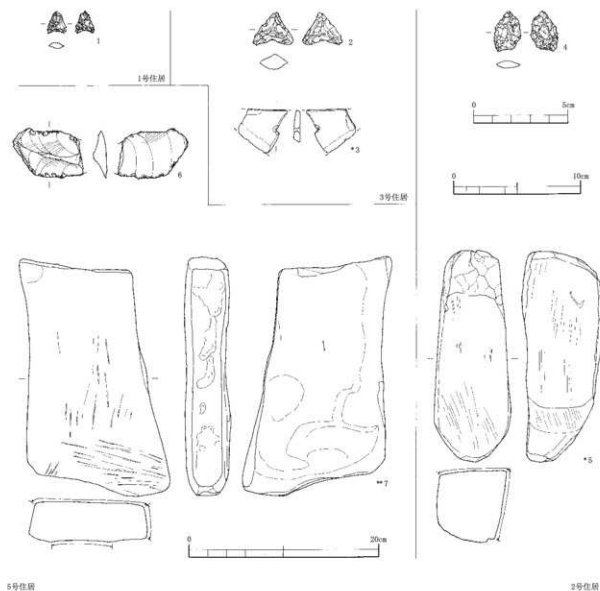
貼床粘質土内及び下層掘り込み内から少量の弥生土器片が出土しているが、細片のため図示は控えた。弥生時代中期の所産。

7号住居 (第12図/図版4)

調査区中央北寄りに位置し、12号住居を切る。検出段階では2軒の住居が主軸を同じくして切り合うと考えたが、主柱の位置関係から、平面プランが長方形の1軒の住居と判断した。2柱で主軸は南北方向、



第13図 1~5・7号住居出土土器 (S=1/4)



第14図 1・2・3・5号住居出土石器 (S=1/2、*付はS=1/3、**付はS=1/4)

長軸5.3×短軸3.8m。検出面からの深さ0.2mを測る。住期と東壁沿いにそれぞれ土坑を伴う。SK01の埋土には比較的焼土が含まれていることから、炉跡の可能性が高いと考えられる。北・東辺の一部に細溝を、北辺の陥床下に湿気抜き用と思われる浅い溝を掘り込んでいる。

出土遺物 (第13・18図/図版41・42)

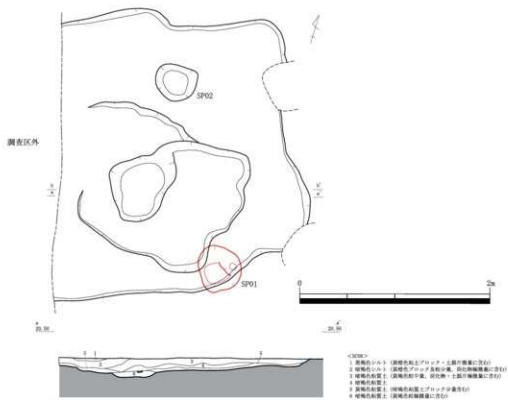
床面直上を中心に少量の土器・石器が出土している。土器は農具を中心とするが、いずれも小片で、やや崩れた鋤形口縁を持つ。弥生時代中期後葉の所産。スクレイパーは非常に小型の安山岩製。石庖丁は赤紫色泥岩製で、刃部全体にわずかに磨き直しが見られる完形品である。砥石は砂岩、2面を使用する。

8号住居 (第15図/図版4)

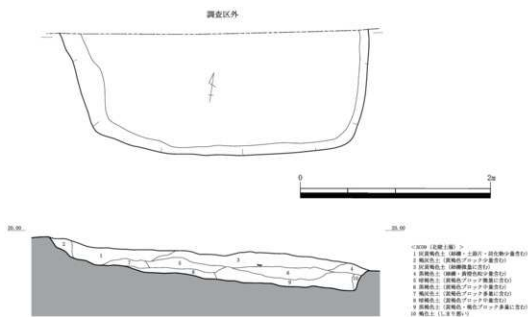
調査区西側南寄りに位置し、一部調査区外へ延長する。2柱で主軸は北西-南東、残存幅2.6mを測る。検出段階では不明遺構と想定したが、1区西側の遺構残存状況が極めて不良であること、不整形ながらも方形のプランが認められること、主柱と考えられるピットを伴うことなどから、住居と判断した。南・北辺にベッド状遺構を持つと想定されるが、上面の削平が激しいため推測に過ぎない。6号住居と同じ構造とも考えられる。住期に土坑を持つが、埋土に炭化物・焼土は含まれず、炉跡とは考えがたい。

出土遺物 (第18図/図版35)

埋土より極少量の土器が出土している。いずれも小片のため図示は控えたが、弥生時代中期の所産であ



第15図 8号住居 (S=1/40)



第16図 9号住居 (S=1/40)

るが、遺構に伴うかは不明。その他、甕の胴部片を転用した円盤状土製品が出土している。

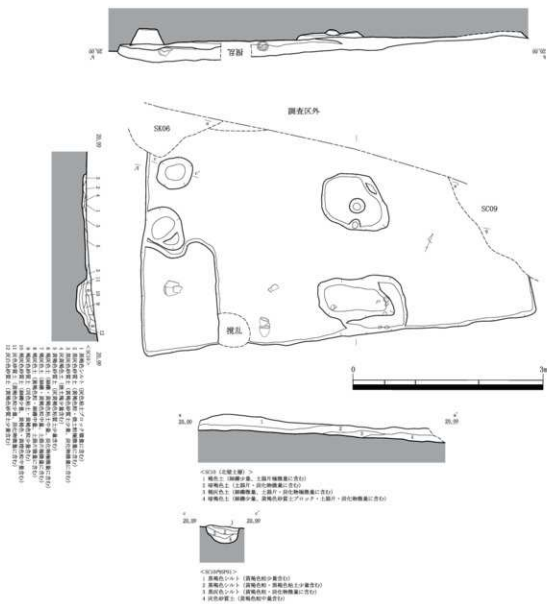
9号住居 (第16図/図版4)

調査区北東隅に位置し、4号溝・10号住居を切る。表土掘削時に誤って上部を削平しており、検出段階では黒色シルトを含む黄褐色粘質土の貼床痕跡が認められるのみであった。貼床痕跡の範囲と調査区壁面の土層図より、遺構の形状を復元している。遺構の大部分が調査区外に延びるため、主柱・規模共に不明である。平面プランは隅丸長方形あるいは楕円形を呈すると思われるが、こちらも詳細は不明である。

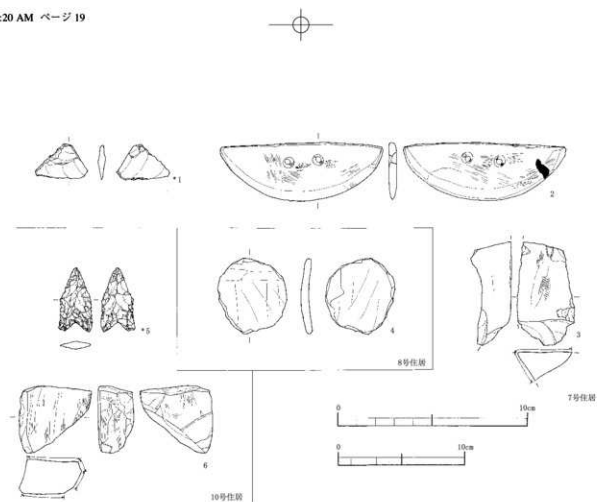
残存埋土・調査区北壁土層から少量の土器が出土しているが、いずれも小片のため図示は控えた。弥生時代後期の所産である。

10号住居 (第17図/図版4)

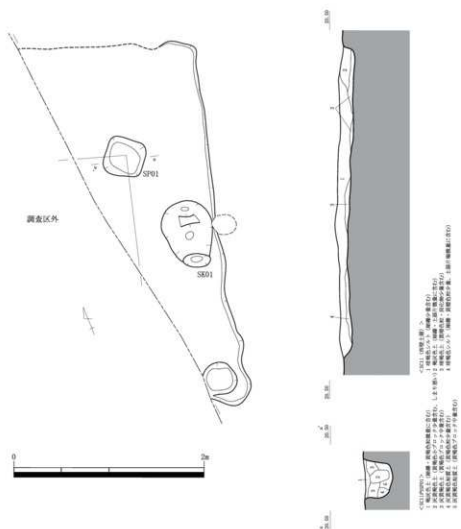
調査区北端中央に位置し、6号土坑・9号住居に切られ、4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長する。2柱で主軸は北東―南西、長軸6.1×短軸残存長3.6m、検出面からの深さ0.3m。柱間と南壁沿いに土坑



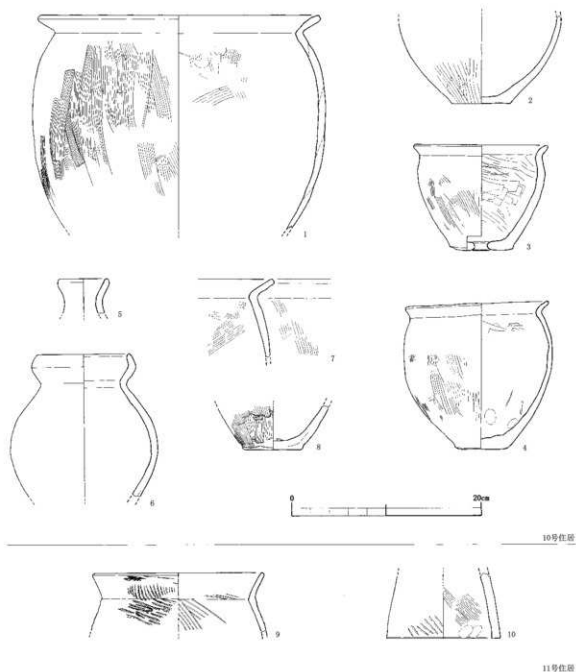
第17図 10号住居 (S=1/60)



第18図 7・8・10号住居出土土製品・石器 (S=1/3、*付はS=1/2)



第19図 11号住居 (S=1/40)



第20図 10・11号住居出土土器 (S=1/4)

を持つが、いずれも埋土には炭化物・焼土を含まず、炉跡ではない。南西隅に幅1.2m、高さ0.1m、住居掘削時にベッドとして段差を残し、その上にさらに粘土を貼った、堅固な造りのベッド状遺構を伴う。全体に貼床を施す。

出土遺物 (第18・20図/図版23・42)

南壁沿い土坑内と床面直上を中心に、比較的残りの良い土器が少量出土している。1はベッド状遺構の上から、3・4は遺構南辺の床面直上から出土しており、遺構の時期特定が可能である。大型甕は口縁部から頸部にかけての距離が短く、明瞭に屈曲する。内外面ともにハケ調整を施し、器壁は薄い。小型甕は底径が広く、頸部はくの字型に屈曲して胴部上方へ張る。器壁はやや厚く、外面はハケ、内面はハケ状痕跡を残す工具ナデを施す。壺は口縁端部が内側へ屈曲を始める時期のもので、屈曲の度合いはまだ緩い。弥生時代中期終末から後期初頭の所産である。その他、黒色緻密質安山岩の石鏝、石英斑岩の砥石をはじめとする、少量の石器が出土している。

11号住居 (第19図/図版4)

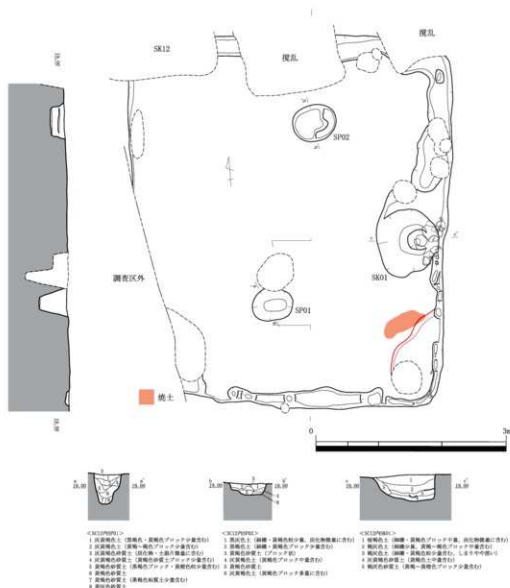
調査区北西隅に位置し、西側の大部分が調査区外へ延長する。7号住居に切られるため、北辺の掘り方は残存しておらず、貼床の状況から造構の範囲を確定した。4柱と想定しているが、SK01を東主柱とする2柱の可能性もある。主軸は南北方向と考えられる。長軸3.85×短軸残存長1.8m、検出面からの深さ0.55mを測る。東壁沿いに土坑を伴うが、形状・埋土は炉跡を示すものではない。

出土遺物 (第20図)

埋土・ピットから少量の土器が出土している。甕は頸部が緩く屈曲し、体部外面に平行タタキ調整の痕跡が目立つ。器壁は比較的薄い。器台も外面に平行タタキ痕、内面に指圧痕を残す粗かな造りで器壁は厚い。いずれも弥生時代後期の所産である。

12号住居 (第21図/図版4)

調査区中央西端に位置する。2・7号住居・12号土坑に切られる。主軸は南北方向で、2柱で天井部を支える構造を持つ。長軸5.8×短軸3.2mを測り、深さは全く不明である。主柱の深さに差があり、SP01-



第21図 12号住居 (S=1/60)

SP02の並びも悪いが、他に主柱と考えられるピットが存在しなかったため、SP02も主柱であると判断した。北・北東壁沿いにやや幅広い溝、南東壁沿いに細溝がめぐる。南東隅には一部焼土の広がりが見られたが、住居本体の焼失を示唆するほどのものではない。東辺沿いに楕円形の土器を伴い、内部からまとまった量の土器が出土している。

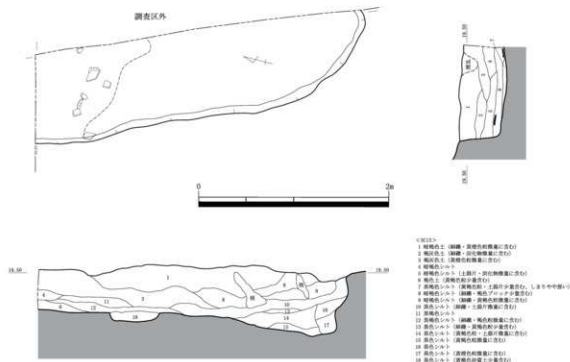
2号住居と切り合うが、前者は貼床のみ、本遺構は壁沿いの溝のみが現存する状況であった。本遺構と同一の1軒の住居と判断するには、2号住居の屋内土坑（SK01）の位置問題があること、そして本遺構のSK01から出土した遺物と2号住居出土遺物とは明確な時期差があることから、2軒の現存状況の不良な住居の切り合い関係であると判断している。なお、2・12号住居内では多数のピットが検出されたが、2軒以上の住居の存在を示すものは確認出来なかった。

出土遺物 (第23図)

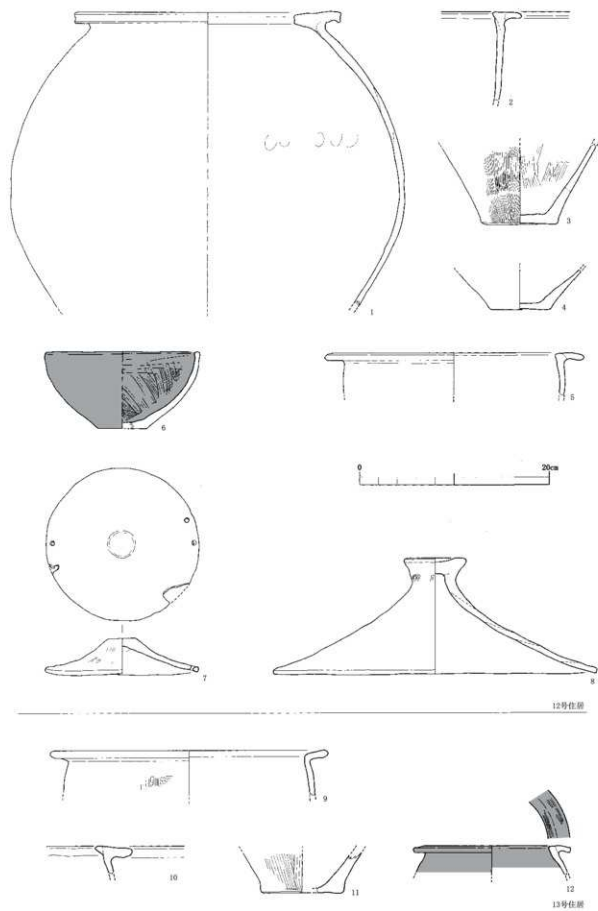
SK01からは一括資料が、その他壁沿いの溝埋土から少量の土器が出土している。幾類は口縁がしつかりとしたし字型を呈する、弥生時代中期の典型的な様相を示す。器壁は薄く、内外面共に丁寧な調整で平滑な面を持つ。6のような丹塗土器も含まれており、日用品とは考えがたい極めて小型の甕蓋なども見られる。全体に残りも良く、住居内で行なわれた祭祀的行為の存在を示す遺物であると思われる。

13号住居 (第22図/図版5)

調査区北東隅に位置し、遺構の大半は調査区外へ延びる。深さ0.6mを測り、1区で検出した遺構の中では最も残りが良い。3号土坑・4号溝を切る。9号住居との先後関係は、調査区里面の土層観察からは確認出来なかった。検出した部分のうち、北半分にのみ薄く黄褐色粘質土を使用した貼床状の痕跡が残る。平面プランは隅丸長方形もしくは楕円形を呈すると思われるが、構造・規模については一切不明である。主柱と考えられるピットや土坑は、床面上からは検出されなかった。但し、調査区東壁の土層から想定すれば、中央に土坑状のくぼみ、南端に柱穴を持つと考えられることも出来よう。



第22図 13号住居 (S=1/40)



第23図 12・13号住居出土土器 (S=1/4)



出土遺物 (第23・34図/図版42)

床面直上から少量ではあるが遺物が出土している。甕類を中心とした、いずれも小片である。口縁端部は崩れた鋸形とし字が混在しており、器壁は薄く丁寧な調整を施す。一部丹塗磨研のものも含まれる。中期末の所産である。石廻丁は刃部にわずかに磨ぎ直しを施す。頁岩質砂岩。その他、先端の破損した黒曜石製石鏃が出土している。

<溝>

1号溝 (第5図/図版2)

調査区中央東端に位置し、東西に流れる。検出段階では土坑と想定したが、立ち上がりか緩やかで埋土最下層に粗砂の堆積が認められたことから、溝と判断した。東は調査区外へ延長し、西は防空壕と見られる複乱に切られて消滅する。後世の造成による削平は考えられず、調査区内でのこれ以外の延長はないと思われる。幅0.9m、深さ0.6mを測り、断面は隅丸の台形を呈する。近接して関連が推測される遺構はなく、用途は不明である。区画施設の一部か。埋土から微量の土器が出土しているが、細片のため時期決定の根拠とはなり得ない。

2号溝 (第5図/図版2)

調査区中央東寄りに位置する。南北に流れるが、両端とも途中で断絶する。上部が造成による削平を受けており残存状況が不良であるため、双方向への延長も考えられる。南端は防空壕と見られる複乱に一部を削平されているが、東へ向かって緩やかに湾曲している。幅0.65m、深さ0.2m、全長4.5mを測り、断面は隅丸長方形を呈する。用途は不明だが、西側へのふくろみの状況から、調査区外の東へ関連遺構を有する可能性がある。弥生時代中期の器台片が1点出している他、目立った遺物は認められない。

3号溝 (第5図/図版2)

調査区中央南寄りに位置し、5号住居を切る。南北方向に流れるが、両端とも途中で断絶する。上部が造成により著しく削平されているため、双方向への延長も考えられる。幅0.4m、深さ0.1m、全長2.9mを測り、断面は隅丸長方形を呈する。ほぼ正方位を向くため、田畑あるいは居住地の区画溝の可能性も想定出来る。遺物は一切出していないため時期は不明である。

<土坑>

1号土坑 (第24図/図版5)

調査区中央東寄りに位置する。検出面の緩やかな傾斜が始まる箇所にあるが、主軸は等高線と平行となる。南北1.8×東西1.35m、深さ0.35mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。埋土は上層が自然埋没によると思われる暗褐色砂質土。下層が人為的廃棄と考えられる灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

出土遺物 (第146図/図版41・45)

埋土内に少量の遺物が認められた。土器は弥生時代中期の所産だが、いずれも細片のため図示していない。図示した黒色緻密質凝灰岩のスクレイパーの他、叩き石・砥石の破片等、微量の石器が出土している。

2号土坑 (第24図/図版5)

調査区中央に位置する。東西1.5×南北0.85m、深さ0.15mを測り、平面プランは不整長方形を呈する。埋土は単層で、上面は大きく削平を受けていると考えられる。廃棄土坑の一種か。埋土から微量の土器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。弥生時代後期の所産。

3号土坑 (第24図/図版5)

調査区北東に位置し、13号住居に切られる。東への傾斜部分にあり、主軸は等高線と平行になると思われる。南北2.15×東西残存幅0.4m、深さ0.2mを測る。平面プランは不整長方形を呈すると考えられる。



埋土は単層で、上面は大幅に削平されていると見られる。底面西端にピット状の掘り込みが認められるが、遺構に伴うものかは不明である。廃棄土坑の一種か。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

4号土坑 (第24図/図版5)

調査区中央に位置し、7号住居を切る。東西1.1×南北1.05m、深さ0.5mを測り、平面プランは不整形形を呈する。埋土は黒褐色シルトと黄褐色粘質土を主体とし、水平堆積の様相を示す。古墳時代の廃棄土坑の一種と思われる。埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。土器は古墳時代中期の所産、石器は砥石片等が確認されている。

5号土坑 (第24図/図版5)

調査区北西側に位置し、4号住居の埋土上面より掘り込んでいる状況を検出した。検出段階では大型のピットと想定していたが、埋土の堆積状況・底面の様子から土坑と判断した。東西0.9×南北0.75m、深さ0.25mを測り、平面プランは不整形形を呈する。埋土内には焼土粒・炭化物粒が含まれ、底面近くには焼土塊を確認している。遺構の縁辺部及び底面に被熱痕跡は見られなかったが、焼成遺構の可能性が考えられる。埋土層から少量の土器器が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。古墳時代中期の所産。

6号土坑 (第25図/図版6)

調査区北西端に位置し、7号土坑・10号住居・4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長する。上面は大幅に削平されている。西側へ段落ちを持ち、東西2.2×南北残存長最大0.95m、深さ最大0.2mを測る。平面プランは不整形形と思われる。ヘッド状遺構を伴う住居の可能性もあるが、底面に傾斜を持つこともあり、ここでは土坑として扱った。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

7号土坑 (第25図/図版6)

調査区北西側に位置し、6号土坑に切られ、11号住居・4号溝を切る。北半分は調査区外へ延長し、上面は造成により削平されている。東西残存長2.8×南北残存長1.0m、深さ0.2mを測る。平面プランは不整形形を呈する。残存状況の悪い住居の可能性もあるが、ここでは土坑として扱った。底面より、土師器高杯の小片・礫が出土しているが、細片のため図示はしていない。古墳時代中期の所産。

8号土坑 (第25図/図版6)

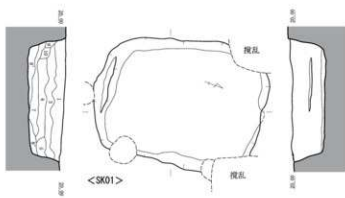
調査区北寄りに位置し、10号住居に切られる。南北残存長1.2×東西1.25m、深さ0.25mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。埋土は灰色砂質土を主体とし、水平堆積に近い様相を示す。廃棄土坑の一種か。埋土から、弥生時代中期の所産と思われる土器の小片が微量に出土している。

9号土坑 (第25図)

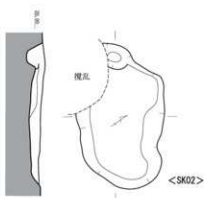
調査区中央西寄りに位置し、7号住居に切られる。平面プランは長方形を呈し、南北1.6×東西1.0m、深さ0.5mを測る。底面には径15cm程度の小ピットが4基確認されている。埋土はしまりの良い黒色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。形状からは貯蔵穴と考えられる。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。

12号土坑 (第25図)

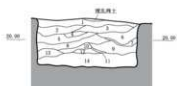
調査区北東寄りに位置し、12号住居を切る。東西1.8×南北1.3m、深さ0.35mを測る。平面プランは縁辺部の崩落した隅丸長方形と判断した。埋土は褐色粘質土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種と考えられる。埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。



- <SK01>
- 1 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 2 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 3 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 4 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 5 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 6 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 7 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 8 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 9 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 10 埋戻し土 (埋戻し土)



<SK02>
1 埋戻し土 (埋戻し土)



- <SK04>
- 1 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 2 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 3 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 4 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 5 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 6 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 7 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 8 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 9 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 10 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 11 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 12 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 13 埋戻し土 (埋戻し土)
 - 14 埋戻し土 (埋戻し土)

第24図 1~5号土坑 (S=1/40, SK01は1/60)

第24図 Ⅱ区発掘跡平面図 (S=1/150)



IV. II区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

II区は東西長32m、南北幅5.2mの狭域であり、北に隣接する民家への公道からの進入路確保のため設定した。遺構検出面は標高20.80～21.00mのほぼ平坦な褐色ローム層である。III区とはブロック塀を隔てて連続しており、塹穴住居跡5軒が同一の遺構であることが調査開始段階から明らかであったため、共通の遺構番号を付けている。II・III区双方にまたがる遺構については、17・20・24号住居の4軒と14号土坑は本章で、19・42・22～45号住居についてはV章で報告する。

(2) 遺構と遺物

<塹穴住居>

14号住居 (第27図/図版8)

調査区西端部に位置し、北西・南西両隅が調査区外へ延長する。23・25号住居に切られる。検出段階では、23・25号住居それぞれに伴うベッド状遺構の段落ちであると考えていたが、上記2軒の住居と共有する東辺に向かって南・北辺が湾曲して接し、西辺にもベッド状遺構と思われる段落ちが確認されたことから、切り合う2軒の住居に破壊された下層の別住居と判断した。

主軸は南北方向で長軸7.35×短軸残存長6.5m、検出面からの深さ最大0.5mを測り、正方形を呈すると思われる。貼床は施されているが、東辺沿いの一部分のみである。2柱で遺構中央に浅い屋内土坑が認められる。埋土には炭化物と焼土粒を含むことから、炉的な役割を果たしていたと思われる。南西隅から西辺沿いに、段掘りで構築したベッド状遺構を、東辺と北辺には貼床下に溝状の掘り込みを持つ。住居内の北半部床面直上から、まとまった量の土器が出土している。

出土遺物 (第28・29・33・34図/図版23)

調査段階では、23・25号住居の床面直上でまとまって出土した遺物があり、分離が困難と思われたため、明らかに14号住居に伴うと判断できるレベルで出土した遺物のみをこの住居の出土遺物として扱った。床面直上からまとまって出土しており、住居廃棄時を示すと考えられる。器種は甕類を中心とし、大型かつ形状を残すものが多い。甕は頸部のくの字状の屈曲が比較的明瞭なものと、非常に緩いものが混在している。胴部外面は平行タタキを施した後タテハケで消しているが、タタキ痕跡は残存している。底部はタテハケの後ケズリを施す。鉢は口縁部が反外して広がるものと、直立して小型壺的な様相を示すものが混在する。弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産と思われる。その他、用途不明のつまみ付土製品が1点出土している。出土遺物内には微量の投擲を含むのみで、石器はほとんど見られない。

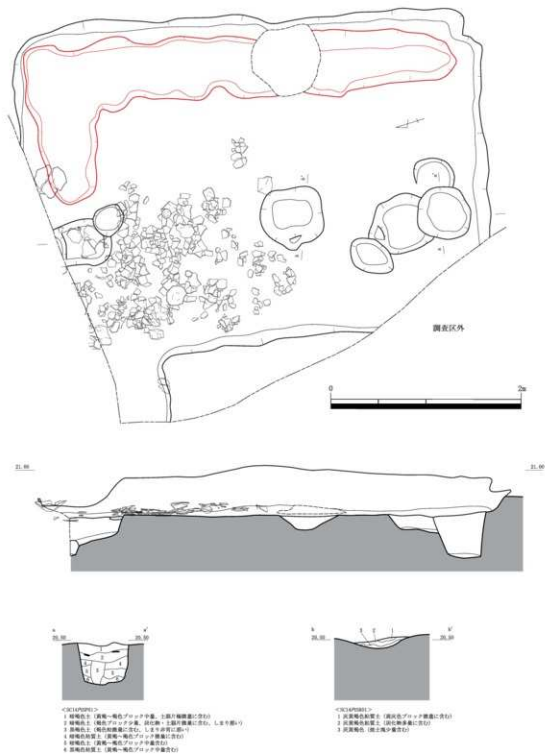
15号住居 (第30図/図版7)

調査区北端東寄りに位置し、北半部が調査区外へ延長する。検出段階では2軒の住居が切り合うと想定していたが、掘削時に底面の段差が認められ、埋土の状況にも差異が確認出来たことから、3軒の遺構であると判断した。16・17・18号住居を切る。

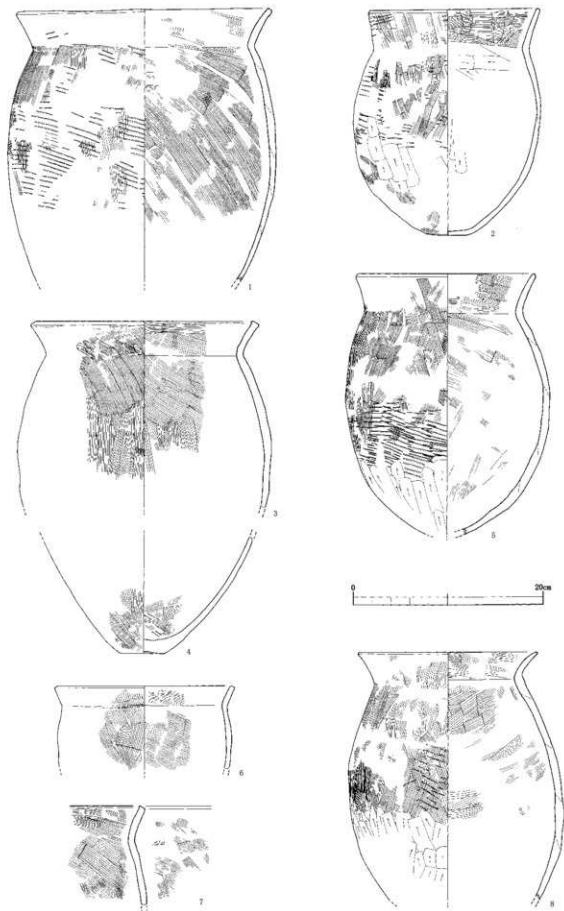
主軸は北東―南西方向、4柱で一辺約2.8mの正方形を呈すると思われる。検出面からの深さ0.45m。東辺中央部にテラスを、南東隅に段掘りで構築したベッド状遺構を持つ。貼床状の痕跡は遺構床面からも土層断面からも認められなかった。

出土遺物 (第33・34図/図版23・24)

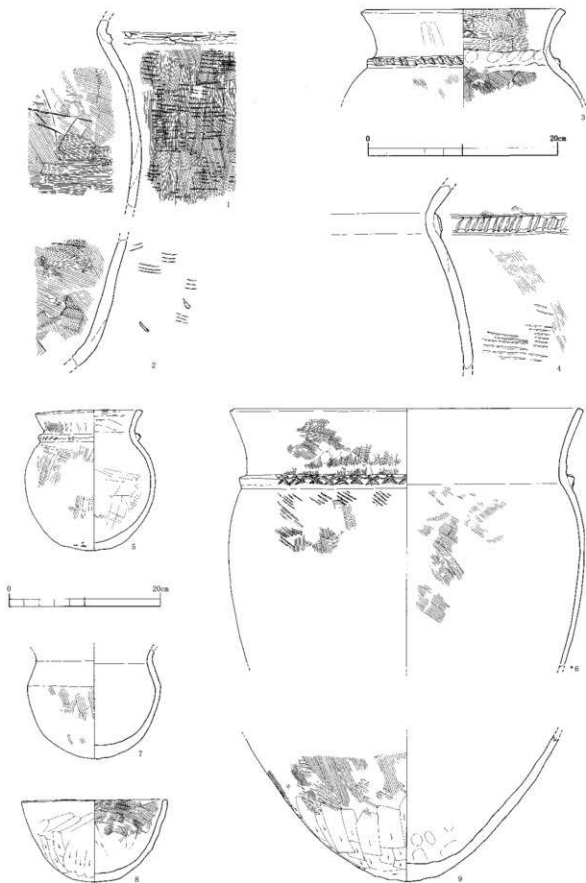
埋土上層を中心に土器類が出土している。甕・甕類の小片が多く、形状を留めるものはわずかであった。甕は口縁部が内側に屈曲するもの、甕は頸部の屈曲が緩やかで外面に平行タタキの痕跡を残すものと、頸部が反外して内外面にハケ調整を施すものが混在している。弥生時代後期の所産。その他、安山岩割片等、極微量の石器が出土している。



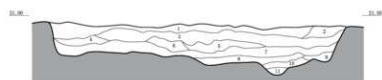
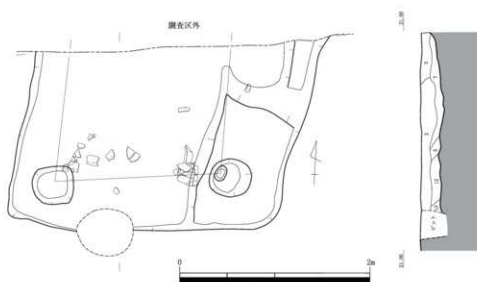
第27図 14号住居 (S=1/40)



第28図 14号住居出土土器① (S-1/4)

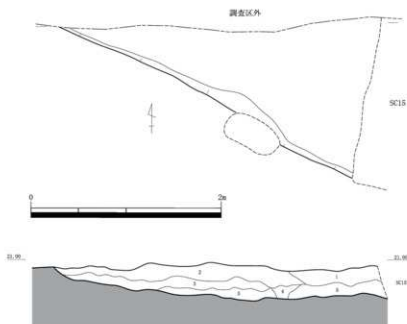


第29図 14号住居出土土器② (S=1/4、●付はS=1/5)



- <凡例>
- 1 調査区外 (調査区外)
 - 2 調査区外 (1) (調査区外)
 - 3 調査区外 (2) (調査区外)
 - 4 調査区外 (3) (調査区外)
 - 5 調査区外 (4) (調査区外)
 - 6 調査区外 (5) (調査区外)
 - 7 調査区外 (6) (調査区外)
 - 8 調査区外 (7) (調査区外)
 - 9 調査区外 (8) (調査区外)
 - 10 調査区外 (9) (調査区外)
 - 11 調査区外 (10) (調査区外)
 - 12 調査区外 (11) (調査区外)
 - 13 調査区外 (12) (調査区外)

第30図 15号住居 (S=1/40)



- <凡例>
- 1 調査区外 (調査区外)
 - 2 調査区外 (1) (調査区外)
 - 3 調査区外 (2) (調査区外)
 - 4 調査区外 (3) (調査区外)
 - 5 調査区外 (4) (調査区外)

第31図 16号住居 (S=1/40)



16号住居 (第31図/図版7)

調査区北端中央部に位置し、大部分が調査区外へ延長する。15号住居に切られ18号住居を切る。掘り込みの立ち上がりは不明瞭である。検出面からの深さ0.3m。主軸方向、主柱数、平面プランとも不明である。調査区内に含まれる部分では、遺構に伴うピット・土坑、ベッド状遺構等の施設は確認されていない。また貼床も認められない。

埋土から微量の遺物が出土しているが、細片のため図示していない。

17号住居 (第32図/図版7)

調査区南端中央部に位置し、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる。20・42・69号住居、30号土坑を切り、15号住居に切られる。平面プランは長方形、主軸は東西方向で長軸7.0×短軸3.2m、検出面からの深さ0.5mを測る。掘り方は明瞭な立ち上がりを見せ、残存状況は良好である。遺構全体の中でも比較的大規模な住居である。Ⅱ区での調査段階ではベッド状遺構を有する住居と想定していたが、Ⅲ区の調査時に遺構の南辺の42号住居との切り合いの状況から、2軒の住居が存在すると判断した。

床面には全体に薄く黄褐色粘質土の貼床を施す。北辺に湿気抜きのためと見られる貼床下の溝状の掘り込みが認められる。2柱と想定されるが、明瞭な柱痕跡は確認出来なかった。その他、土坑状の掘り込みも認められない。

出土遺物 (第33・34・35図/図版24・37・39・41・42・44)

埋土及び貼床内から遺物が出土している。鉢・甕類の小片で、鉢は小型のもののみが確認されている。底部は手持ちケズリ、外面に平行タキの痕跡を残し、内面はココハケ調整を施す。甕は細片で全体の形状は留めない。弥生時代後期末の所産。石器類は石砲石の小片、黒色緻密質安山岩のスクレイパーの他、磨製の石剣の鈎部分が出土している。石剣は表面の風化が激しく、刃部の状況は不明瞭である。その他、砥石2点、鉄製刀子を確認している。

18号住居 (第36図)

調査区北端東寄りに位置し、北側の大部分は調査区外へ延長する。15・16号住居に切られ、上部は大幅に削平されている。遺構の立ち上がりは不明瞭で、特に東辺では非常に緩やかな傾斜となる。調査区内ではピット・土坑等の屋内施設の有無は確認出来ず、主軸方向、主柱数とも不明である。南辺の中央で不整なラインを描くが、平面プランは方形と推測される。東西4.2×南北残存長1.2mを測る。貼床及び床下の掘り込み等は認められない。

遺物は埋土内より極少量出している。口縁がV字型を呈する、弥生時代中期後葉の甕類を主体とする。

20号住居 (第37図/図版7)

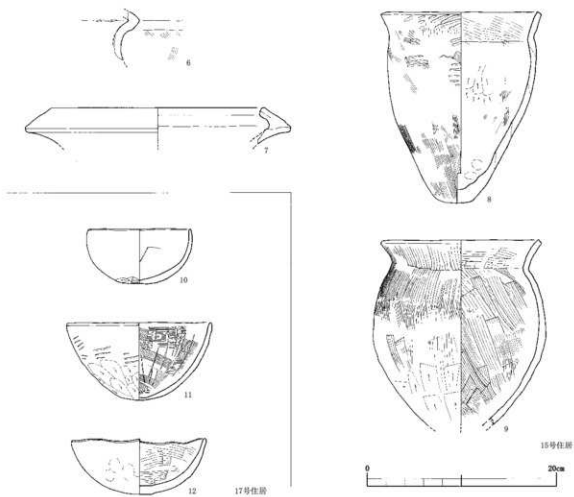
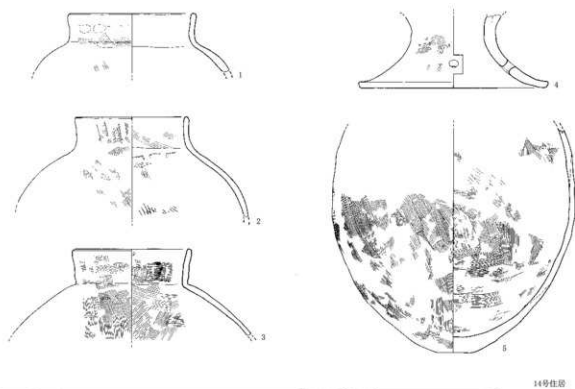
調査区南端中央に位置し、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる。17号住居・14号土坑に切られ、30号土坑を切る。検出段階では2軒の住居が切り合うと想定したが、北辺のラインが真っ直ぐに通じ、埋土の差異が認められなかったことから、1軒の住居と判断した。遺構の残存状況は非常に良好である。主軸は東西方向で、長軸6.2m×短軸5.0m、検出面からの深さ0.5mを測る。

平面プランは長方形で2柱、柱間と南辺に土坑を持つ。柱穴は深くしっかりと掘りこまれているが、段掘りではない。土坑はいずれも埋土に焼土・炭化物を含み、灰跡ではないと考えられる。北東隅に狭いテラスを持ち、南東隅の一部にのみ細溝が残る。全体に黄褐色粘質土の貼床を施し、貼床下には壁沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが全周する。構築時に粗く掘り込み、貼床を厚く広く貼り込むことで形状を整えたと思われる。

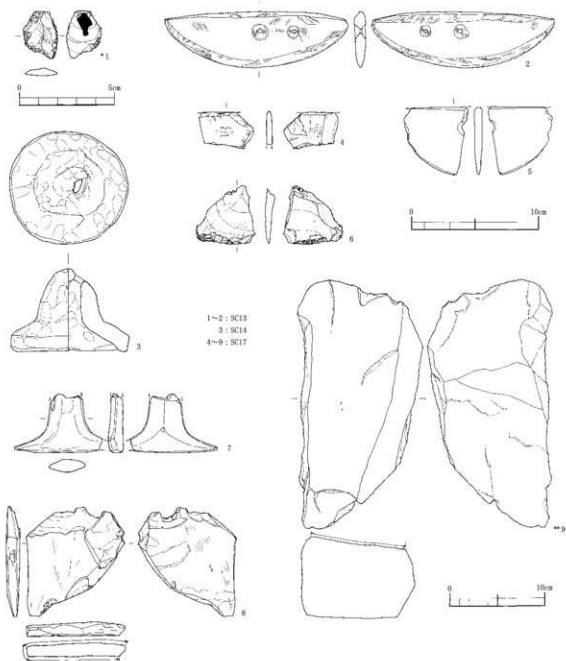
出土遺物 (第35・38・39・42図/図版24・43・45・46)

埋土上層を中心に多量の土器が出土している。同時期のまとまりを持った遺物であることから、住居構築時を示すものと考えられる。甕類を主体とし、比較的大型で形状を残すものが多い。甕の口縁部はL字型を呈し、内外面は磨滅が激しいが、痕跡が見られ、器壁は薄く丁寧な作りである。弥生時代中期後葉の典型的な形状を示すものと、肩部に突帯をめぐらす大型のもの、やや内傾したもの等が混在している。

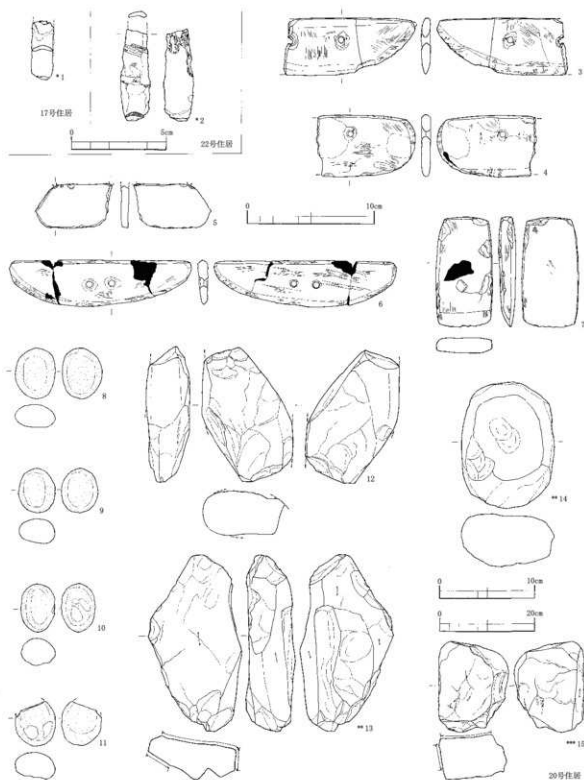




第33図 14・15・17号住居出土土器 (S=1/4)

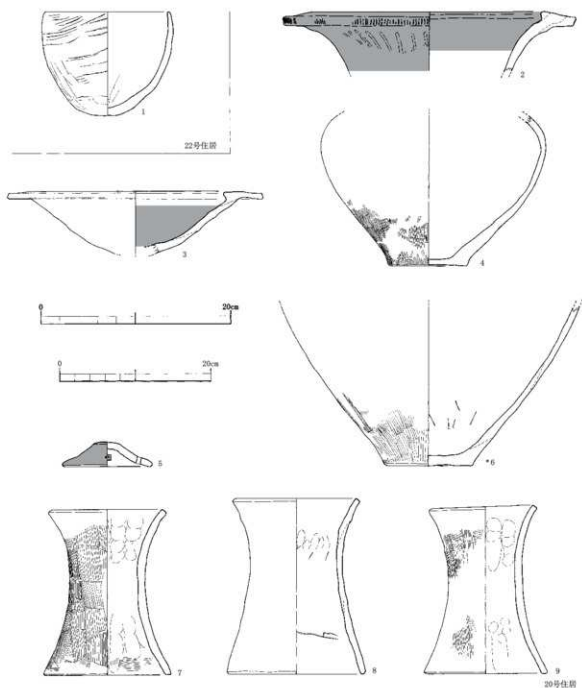


第34図 13・14・17号住居出土土製品・石器 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4)



第35図 17・20・22号住居出土石器・鉄器
 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4、***付はS=1/8)

器台は鼓形で内面は指ナデ、外面はタテハケ調整、粘土帯の接合痕は残さない。この他に、壺口縁部片・高杯環部・小型蓋が出土しており、いずれも表面に丹塗り痕跡を残す。器種はバリエーションを持ち、埋土の中でも高い位置から出土しているため、住居放棄の際、何らかの祭祀的行為を行なった跡とも想定される。石器類は石砲丁4点、石斧、台石、砥石等多岐にわたる。石砲丁はいずれも刃部の研ぎ直しが認められる。石斧は玄武岩製の蛤刃石斧と蛇紋岩製の扁平片刃石斧。



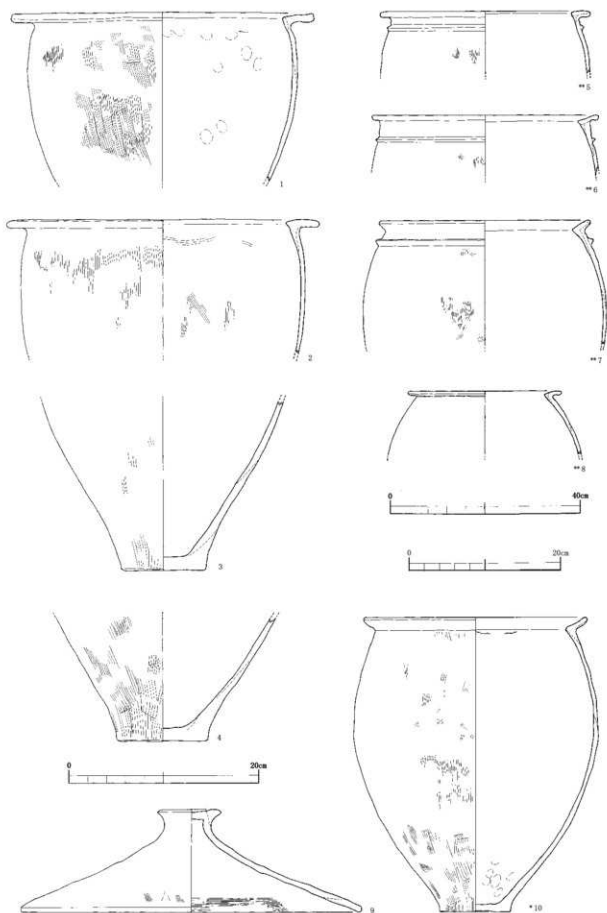
第36図 20・22号住居出土土器 (S=1/4, *付は1/5)

21号住居

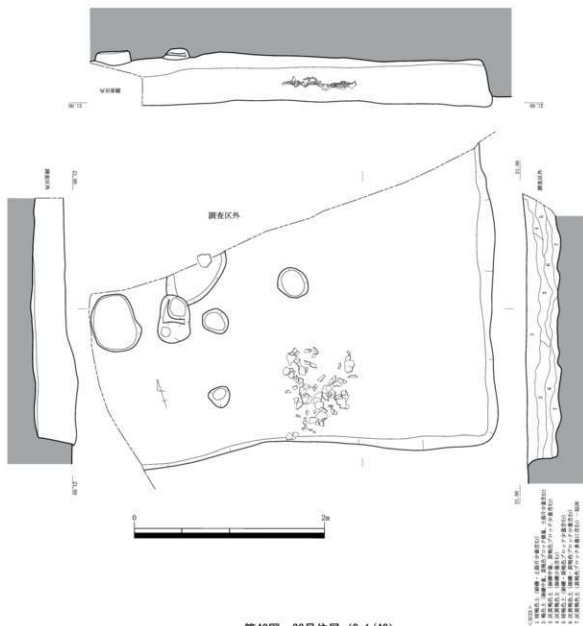
II区での検出段階ではIII区での拡幅を想定して住居としたが、III区調査時に遺構の広がりから土坑と判断し、14号土坑とした。そのため21号住居は欠番となっている。

23号住居 (第40図/図版8)

調査区北西隅に位置し、北辺・西辺が調査区外へ延長する。14・25号住居を切る。住居に伴うと考えられるピットは確認出来ず、主軸方向、主柱数とも不明。北西隅の土坑状の掘り込みが、西辺沿いに設置されたものと想定出来るのみである。平面プランは方形と考えられる。上面の削平はそれほど及んでおらず、残存状況は比較的良好である。東西残存長4.25×南北残存長3.2m、検出面からの深さは0.38mを測る。ベッド状遺構・細溝等の痕跡は認められない。また貼床は施されておらず、埋土掘削が完了した段階で下層の14号住居プランが明瞭に認められた。南辺中央部でまとまった量の土器が出土しているが、遺構



第39図 20号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/5、**付はS=1/8)



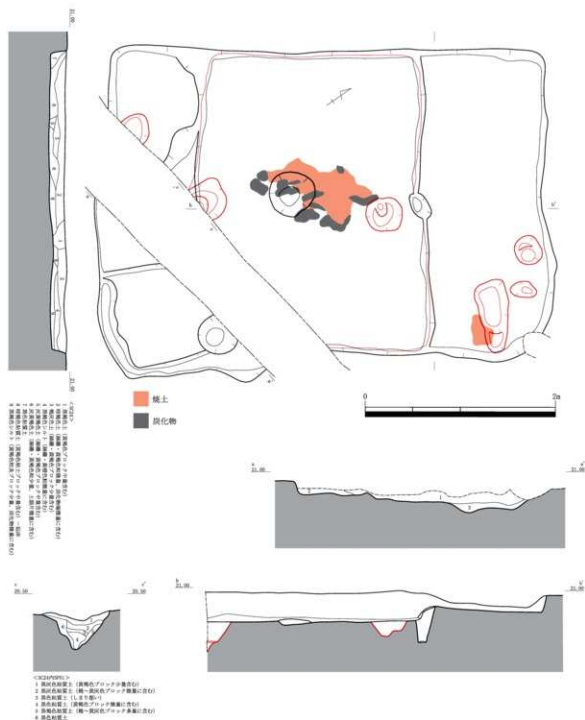
の使用時期を決定出来るものではない。

出土遺物 (第42・53図/図版43)

遺構図内に示したものを中心に、埋土からまとまった量の遺物が出土している。いずれも小片であり、形状を留めるものは少ない。小型の甕・鉢類を主体とする。甕は頸部の屈曲が非常に緩やかな時期のもので、外面に平行タタキの痕跡を明瞭に残す。内面はハケ調整。鉢は体部が内湾する中型のもの、口縁が直立して小型壺の形状を示すものとが混在する。古墳時代初期の所産と考えられる。その他、石燈丁1点を含む、極微量の石器が出土している。鉄製品は認められない。

24号住居 (第41図/図版8)

調査区南西寄りに位置し、II・III区にまたがる。19・26号住居に切られる。検出段階では北辺にのみベッド状遺構を有すると想定していたが、支柱の位置関係から南北にベッド状遺構を持つ、平面プランが長方形の住居と判断した。主軸は北東-南西で2柱、長軸4.7×短軸3.2m、検出面からの深さ最大0.3m

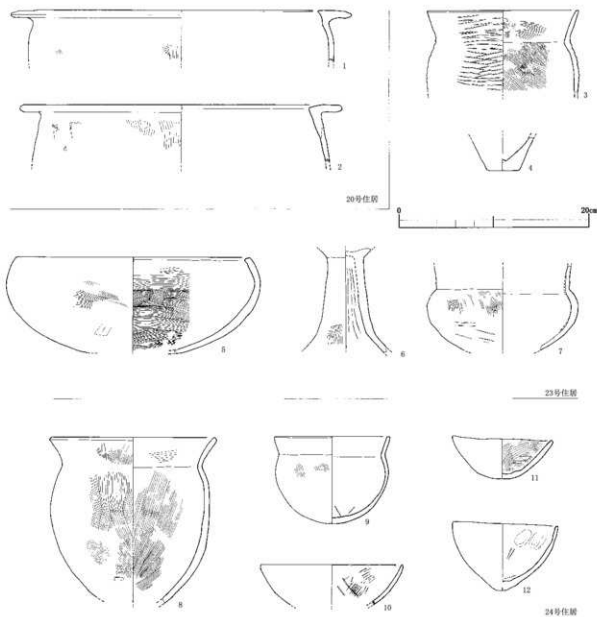


第41図 24号住居 (S=1/40)

を測る。支柱はベッド状遺構の段差部分に掘り込まれたピットであると思われる。南北双方に幅1.2m、高さ0.1mの段掘りのベッド状遺構を持つ。南東隅にのみ、壁沿いに細溝を掘り込む。ベッド状遺構の上面を含め、全体に黄褐色粘質土の貼床を施す。柱間に卵と思われる小型の浅い土坑を1基検出しており、その上面に焼土・炭化物が集中して分布している。炭化材の一部は木材の形状を留めているが、焼失住居の根拠となり得るほどのまとまりではなかった。

出土遺物 (第42・53図/図版24・25・43)

埋土から少量の遺物が出土している。小型の甕・鉢類を主体とする。甕は頭部がくの字形に屈曲し、内外面に丁寧なハケ調整を施す、薄手のもの。鉢類は体部が斜めに立ち上がるもの。平行タタキは見られない。その他、石廬丁1点を含む微量の石器と鉄製ヤリガンナが出土している。



第42図 20・23・24号住居出土土器 (S=1/4)

25号住居 (第43図/図版8)

調査区南西隅に位置し、南辺・西辺が調査区外へ延長する。23号住居に切られ、14号住居を切る。南北残存長3.2×東西残存長0.36m、検出面からの深さ0.28mを測る。4主柱と想定したが、北東隅のピットは検出出来なかった。平面プランは正方形を呈すると思われ、南側を中心に黄褐色粘質土で薄く貼床を施す。貼床下は南東隅に不整形の土坑状掘り込みが認められる。北半部がやや高まるがしつかりとした立ち上がりは認められず、下層の14号住居埋土を誤って掘削している可能性もあるため、ベッド状遺構とは判断していない。その他、が跡と考えられる土坑状の掘り込み等、住居に伴う遺構は認められない。

出土遺物 (第45・51図/図版24)

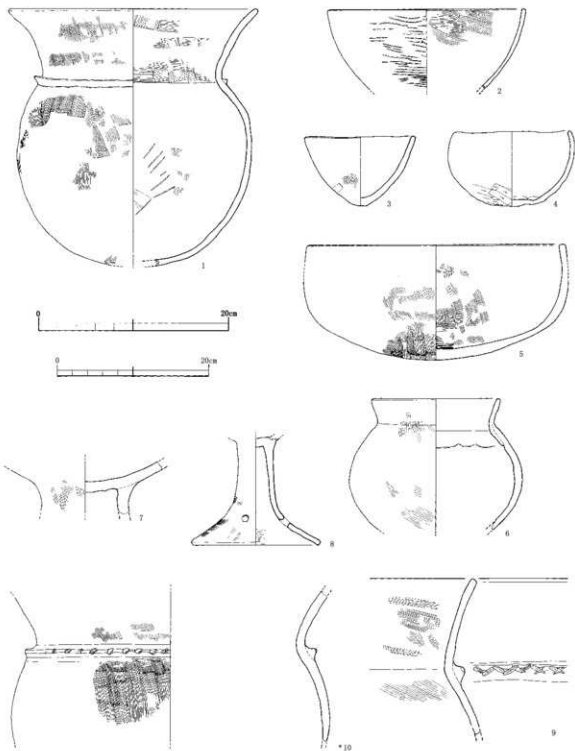
埋土からは層位を問わず多量の花崗岩礫・土器片が出土している。甕類は大型のものを含み、頸部外面にキザミを施した突帯をめぐらせる。内外面ともハケ調整で、平行タタキの痕跡は認められない。鉢は中型で体部が内湾するものと、小型で斜めに立ち上がるものが混在している。小型鉢には外面に平行タタキが見られる。その他、省形支脚がまとまって出土している。支脚上面が円形の平坦面を持つものと、砲弾形の形状を採るものがある。いずれも外面の調整は粗略で、平坦面を持つものには平行タタキの痕跡が顕著に残る。

26号住居 (第44図/図版8)

調査区南端西寄りに位置し、24号住居を切る。19号住居との先後関係は不明である。上部が後世の造成により大幅に削平されており、南辺の立ち上がりは残存していない。主軸は北西-南東方向で長軸残存長2.95×短軸3.1mを測り、2主柱と考えられる。極めて薄いか全体に褐色粘質土の貼床を施す。中央東寄りの床面に炭化物が認められたが少量であり、明確に炉跡と判断できる掘り込みは認められない。

出土遺物 (第60図/図版40)

埋土から極微量だが、土器・石器類が出土している。土器類はいずれも小片で図示していないが、古墳



第45図 25号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/5)

時代前期の所産。その他、グリーンタフの管玉が1点出土している。

<土坑>

10号土坑 (第46図/図版8)

調査区中央に位置し、南北0.7×東西0.75m、深さ0.5mを測る。切り合い関係のない単独の遺構で、平面プランは不整形を呈する。埋土は黒褐色シルトを主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種と考えられる。

埋土からは微量の土器・石器が出土しているが、細片のため図示は控えた。いずれも古墳時代前期の所産である。

11号土坑 (第46図/図版8)

調査区北辺沿いの西寄りに位置する。長軸1.0×短軸0.75m、深さ0.5mを測り、平面プランは不整形を呈する。埋土の堆積状況からは大型の柱穴とも考えられるが、これと関連する他のピットは確認出来ていないため、ここでは土坑として扱った。調査区外へ延長する掘立柱建物の一角を構成している可能性も考えられる。

出土遺物 (第146図)

埋土から少量の土器が出土しているが、いずれも小片のため1点のみ図示している。口縁部が孔字型を呈する甕の口縁〜体部片で、弥生時代中期後葉の所産。

13号土坑 (第46図)

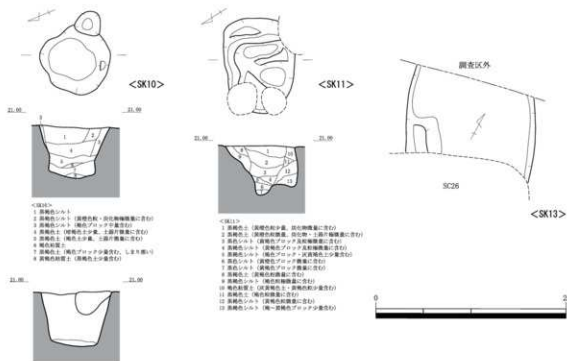
調査区北西に位置し、北半分は調査区外へ延長する。東西1.35×南北残存長0.85m、深さ0.15mを測り、26号住居に切られる。平面プランは長方形と思われる。上部は後世の造成によって削平されており、残存状態は悪い。廃棄土坑の一種か。

埋土から極微量の土器片・石器類が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。土器は古墳時代の所産。

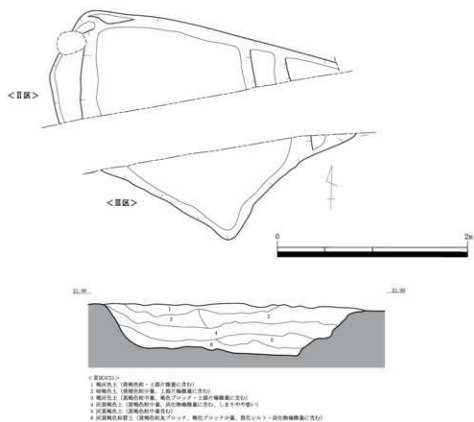
14号土坑 (第47図/図版7)

調査区南端中央部に位置し、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる。20号住居の上面で検出したが、Ⅲ区では明確な平面プランを確認出来ず、一部を調査区壁面の土層断面の状況から復元している。Ⅱ区における検出段階では、Ⅲ区に大部分を持つ竪穴住居と想定していたが、延長部は極めて狭域であったため土坑と判断した。東西2.7×南北1.9m、深さ0.45mを測り、平面プランは不整形長方形を呈する。東西双方に浅いテラス状の段を持つ。その他、遺構に伴うピット等は確認されていない。埋土は褐灰～灰黄褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

上層からまとまった量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは認められなかった。いずれも弥生時代後期の所産で、この時期の廃棄土坑の一種と考えられる。



第46図 10・11・13号土坑 (S=1/40)



第47図 21号住居 (S=1/40)



第48図 III区遺構配置図 (S-1/250)

V. Ⅲ区の遺構・遺物

(1) 調査の概要

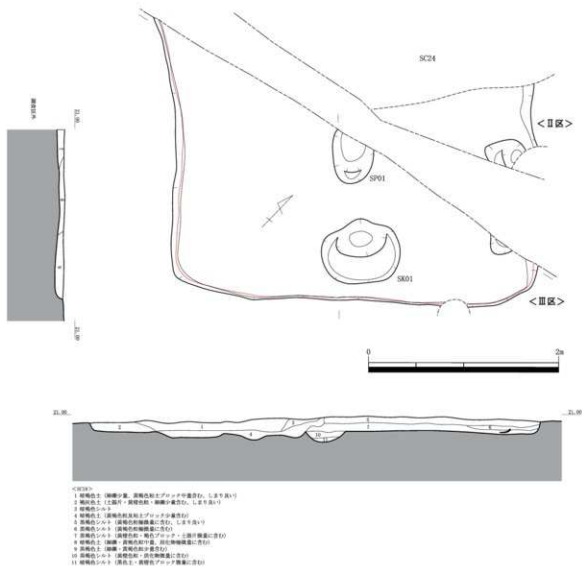
Ⅲ区は本遺跡の主体となる部分である。遺構検出面は20.35～20.75mの褐色ローム層で、ほぼ平坦な地形となっている。遺構密度は非常に高く、同一箇所での住居同士の切り合いが極めて多いため、出土遺物については一部遺構の先後関係を優先して所属遺構を決定した。Ⅱ区とはブロック塀を隔てて連続しており、双方にまたがる遺構については検出段階で同一であることが明瞭なものに関しては、共通の遺構番号を付した。これらのうち、19・42・22-45号住居については本章で報告する。

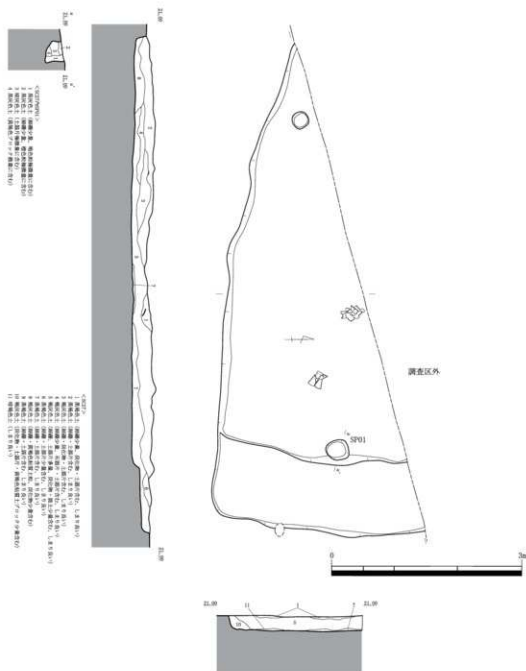
(2) 遺構と遺物

<竪穴住居>

19号住居 (第49図/図版10)

調査区北西に位置し、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる。24号住居を切る。Ⅱ区での検出段階では明瞭な平面プラン





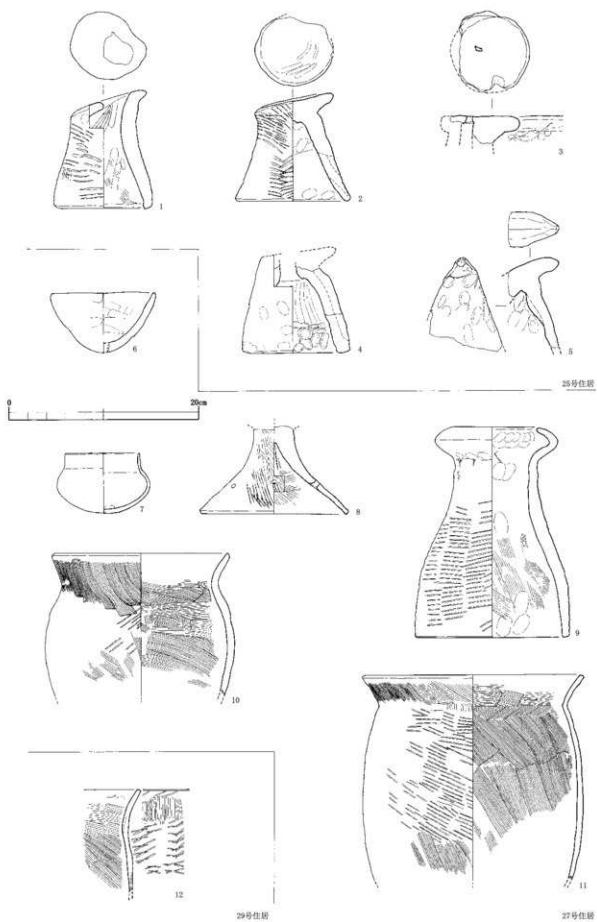
第50図 27号住居 (S=1/60)

を確認することが出来ず、先後関係を無視して24号住居を先行して掘削している。Ⅲ区では平面プラン及び北壁面の土層観察から、24号住居が古い遺構であることを確認出来た。南北最大残存長2.8×東西4.0m、深さ0.1mを測り、主軸を北西—南東とする2柱の長方形住居と考えられる。但し、Ⅲ区において主柱と想定されるピットを検出しているものの、これと対になるものは確認出来ていない。南辺沿いに土坑状の掘り込みが認められるが、埋土内に炭化物・焼土等は含まず、炉跡ではないと思われる。

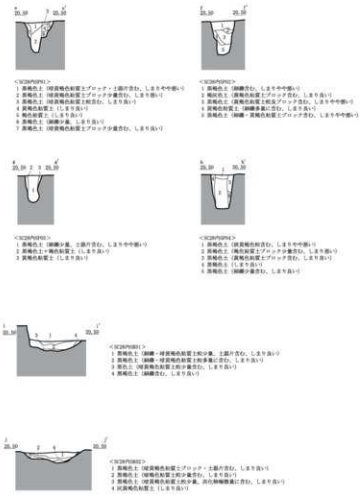
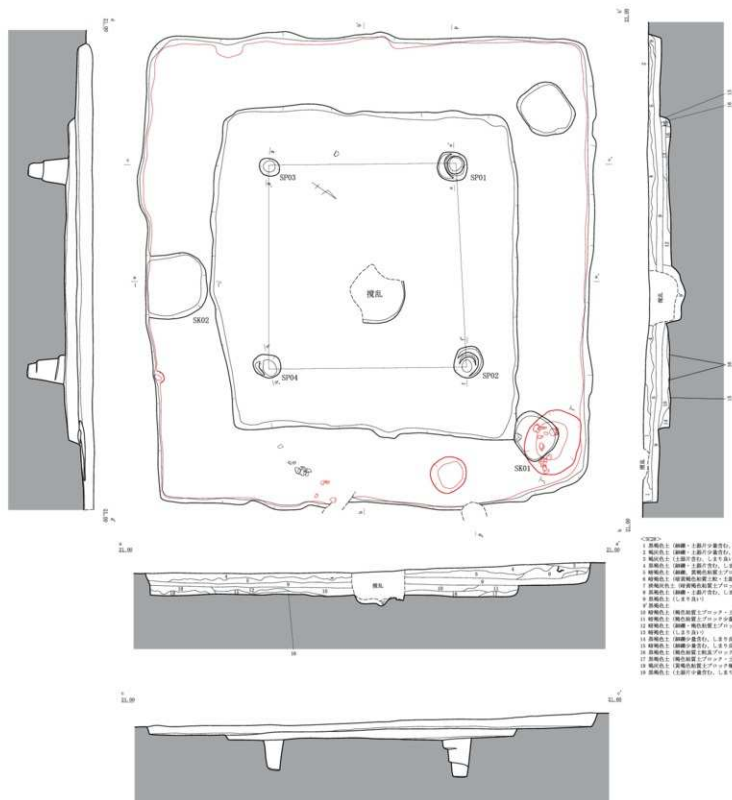
埋土から少量の遺物が出土しているが、細片のため図化は控えた。

27号住居 (第50図/図版10)

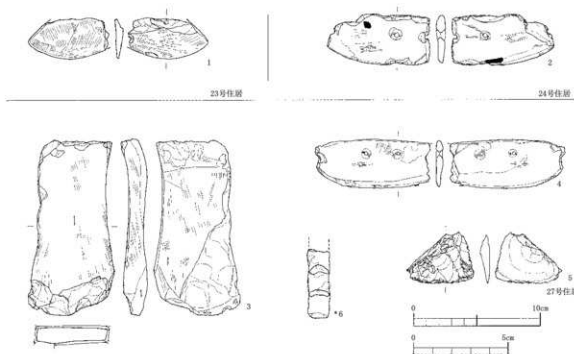
調査区北端東寄りに位置し、38・66号住居、9号溝を切る。北半部が調査区外へ延長する。上部は後



第51図 25・27・29号住居出土土器 (S=1/4)



第52図 28号住居 (S=1/60)



第53図 23・24・27号住居出土石器・鉄器 (S=1/3, *付はS=1/2)

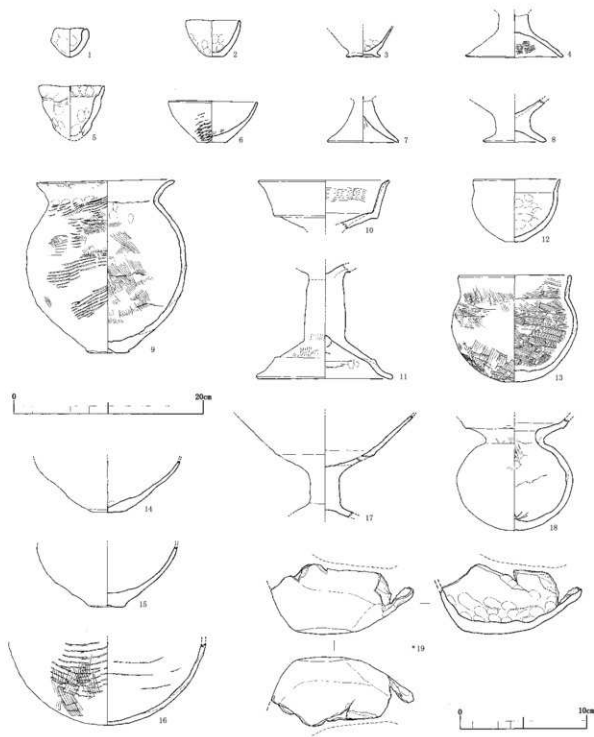
世の造成によって削平されており、残存状況は悪い。主軸は北西—南東方向で長軸残存長7.6×短軸残存長3.3m、検出面からの深さは0.25mを測る。平面プランは長方形を呈すると考えられる。西側は不明であるが主柱と見られ、東辺に幅1.0m、高さ0.15mのベッド状遺構を伴う。ベッド状遺構は段掘りで構築されている。住居全体にわたって貼床の痕跡は認められない。

出土遺物 (第51・53図/図版25・37・39・41・43)

埋土から少量の遺物が出土している。うち数点は遺構内に図示したように床面直上からの出で、遺構の時期を示すと考えられる。甕は頸部が比較的明瞭に屈曲し、外面に平行タタキが残るものの、内外面ともハケ調整が目立つ時期のもの。器壁は薄くなりつつある。鉢には平行タタキが認められない。口縁部が直立し、内外面の調整によって器壁が非常に薄い小型壺が含まれている。高杯は脚部4カ所に穿孔を施し、外面はミガキ調整を施す。盥台は上部が内側に屈曲し、外面には平行タタキが残る。古墳時代前期の早い段階のものと考えられる。その他、ミニチュア土器1点と、石冠丁・スクレイパー、扁平な砥石等、少量の石器類と鉄製ヤリガンナが出土している。

28号住居 (第52図/図版10)

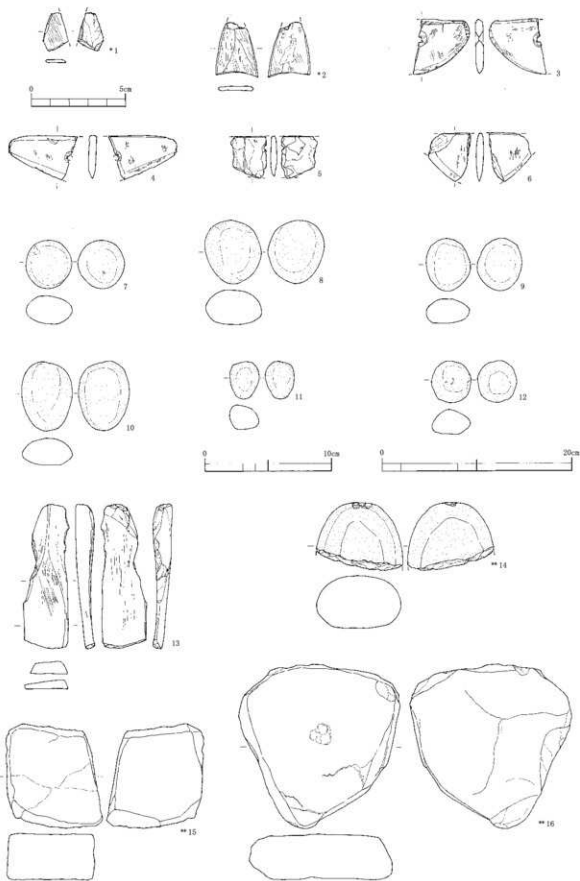
調査区中央に位置し、33号住居に切られ、49号住居、16・17号土坑、9・10号溝を切る。本遺跡の中では最も規模の大きい住居である。立地と規模、後述する出土遺物の様相などから、一般的な住居ではなく、集落内の中心的な役割を果たしたものと考えられる。主軸は北東—南西方向で、4柱の構造を採る。長軸7.4×短軸7.1m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。柱穴は小規模だが深く掘り込んでおり、土層断面から柱痕跡が確認されている。平面プランは差異の少ない長方形で、四周に幅1.2m、高さ0.15mのベッド状遺構が巡る。ベッド状遺構は東西及び北辺は浅い段掘りに厚く粘土を貼り付けており、南辺は住居掘削時に出土と見られる塵土を盛り上げて構築している。ベッド状遺構の検出段階では、主軸と同じくする住居との切り合い関係も想定したが、南辺のベッド状遺構にトレンチを入れたところ、土盛りによる構造が見て取れ、ベッド状遺構内面から切り合い住居の存在を示すビット等の掘り込みが認められなかったことから、1軒の住居と判断した。床面にはベッド状遺構上面を中心に、部分的に黄褐色粘質土による貼床を施す。中央に浅い土坑を持つが、覆土により大部分は破壊されていた。残存する埋土には炭化物・焼土等が含まれないことから、炉跡の可能性は低いと思われる。ベッド上にも、西・北隅と南東中央部に土坑状の掘り込みが認められるが、それぞれの用途は不明である。



第54図 28号住居出土土器 (S=1/4, *付はS=1/3)

出土遺物 (第54・55・60図/図版25・34・35・37・38・40・43・44・46)

埋土及び土盛りによって構築されたベッド状遺構内からまとまった量の遺物が出土している。甕・高杯を主体とするが、形状を留めるものは少ない。甕は外面に平行タタキを残すものの、外形は頸部をくの字形に屈曲させ、胴部に張りを持つ古墳時代前期の外来系要素を持つ。その一方で小型甕は口縁部の直立がやや開き気味で、胴部の張りも緩い。出土遺物にはミニチュア土器が多く含まれ、その形状も甕・鉢・高杯と多岐にわたる。小型の二重口縁甕は焼成不良だが、胎土は極めて精良である。その他、鳥形と考えられる土製品の体部が1点出土している。胎土は砂粒を多量に含み、内面に黒斑の目立つ粗略な造りだが、



第55図 28号住居出土石器 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4)



設置を意識した平坦面が底面にあり、尾と認識出来る形状を持つため、鳥形と判断した。市内では津吉生掛古墳において鳥形土製品と二重口緑壺が出土しており、同様の組み合わせに注目出来よう。石器類は、花崗岩の白石、磨石、磨製石鏃、石冠丁の他、金属製品の研磨に使用したと考えられる砥石が出土している。まとまった量の投弾も出土しているが、図示は一部に留めた。

29号住居 (第56図/図版10)

調査区西端に位置し、南西部は調査区外へ延長する。62・73・80号住居、25号土坑を切る。上面は後世の造成によって大きく削平されており、残存状況は非常に悪い。主軸は北東—南西方向で長軸残存長4.25×短軸4.9mを測る。平面プランは南西に長い長方形で、2主柱と考えられる。SP01の埋土上層には多量の土器を含んでおり、住居廃棄の際、柱を抜き取って廃物を埋め込んだと思われる。柱間に土坑状の掘り込みを持つが、形状は不整であり竈跡とは考えがたい。北東に足場状の2段のテラスが見られるが、用途は不明である。低い方のテラスは黄褐色粘質土を盛り上げて構築されている。全体に薄く貼床を施し、南東側の貼床下には、湿気抜きのためと見られる溝状の掘り込みがある。貼床下から小型のピットを検出しているが、住居に伴うものかは不明である。

出土遺物 (第51・60図/図版40)

埋土及び住居内ピットより少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは極わずかである。甕は頸部の屈曲が極めて緩く、体部に平行タタキの痕跡を明瞭に残す時間のもの。弥生時代後期の所産。その他、微量の石器・鉄器、焼土塊と碧玉製の管玉が1点出土している。

30号住居 (第57図/図版10・11)

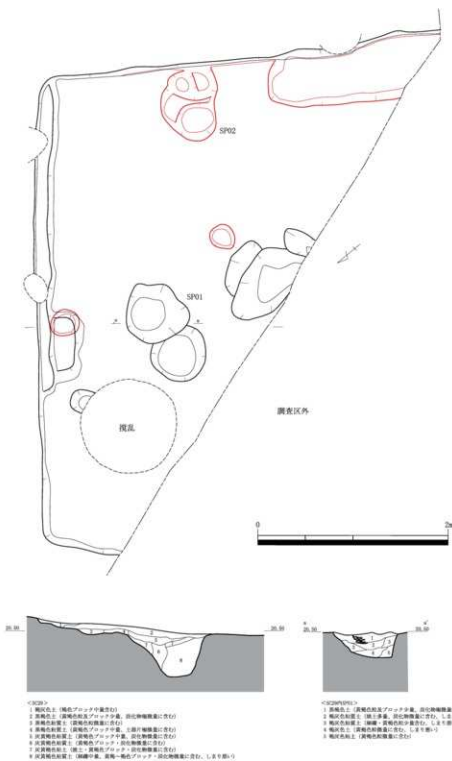
調査区南端中央部に位置し、南辺は調査区外へ延長する。主軸は南北方向で南北残存長3.6×東西3.8m、検出面からの深さは0.35mを測る。平面プランは正方形と考えられる。4主柱で南東部分は調査区外に所在すると想定したが、柱穴は極めて浅く、遺構縁辺のピットを柱穴とする、別の構造を採る可能性もある。西辺および北辺中央部に細溝が掘り込まれているが、形状にはそれぞれ差異がある。中央に炬状の浅い土坑を、西辺沿いにも用途は不明であるが同じ形状の土坑を確認している。床面は全体に褐色粘質土で極薄く貼床を施す。

埋土には遺物の他、花崗岩礫・炭化物・焼土が多量に含まれていた。土器類は竈跡上にまとまりが見られ、埋土の中層に位置する。原型を留めるものが多く、土器上に花崗岩礫が乗っている状況が認められる。意図的に礫で土器を破壊したと考えることも出来る。炭化物・焼土については、遺構検出段階からその存在が確認出来、埋土上層～下層までほぼまんべんなく含まれる。面的な広がりでは下層～床面直上で認められ、竈跡と考えられるSKO2上を中心として、遺構のほぼ全面にいたっている。特に中央部と北端には硬く焼き締まったブロック状の焼土の盛り上がりを確認している。炭化物は焼土を取り巻くような位置で検出しており、材の形状を留めるものが多く見られた。その他、構築材としての単位をとらえることは出来なかったが、葦状のまとまりを持つ炭化物も見られた。貼床には、被熱の痕跡である硬化や劣化した部分は認められなかったものの、焼失住居である可能性が高いと言えよう。土器類は焼失後の埋め戻しに伴うものと考えられ、何らかの祭祀的な行為の実施も想定される。

出土遺物 (第58・59・60図/図版25・26・35・39・44)

遺物は遺構内に示したものが大半を占める。器種は甕・小型壺・高杯等多岐にわたり、土製品・鉄製品も含まれる。甕は口縁部が直立に近く立ち上がり、胴部は長大化、頸部が屈曲しているもの。但し胴部には、ハケで消されているものの平行タタキの痕跡が認められる。高杯は杯部内面に段を持ち、緩いS字型を採る。内外面ともハケ調整ののち、これと直行する放射状暗文を施す。小型壺は口縁部が胴部から一連となって立ち上がるものから、外面に平行タタキを残し、口縁部が反して立ち上がる鉢的な形状のもの、口縁部が直立して胴部が膨る、古墳時代前期の典型的な形状を示すもの等、複数の様相が混在している。台付鉢は外面がケズリを伴うハケ、内面が工具ナデによる調整を施す。その他、底部がハ字形にすぼまり、へ字の把手を持つ甕が出土している。出土状況から、住居が焼失し、その完全な廃棄に伴って意図的に配置され、破壊された一括資料と考えられる。古墳時代初期の所産。



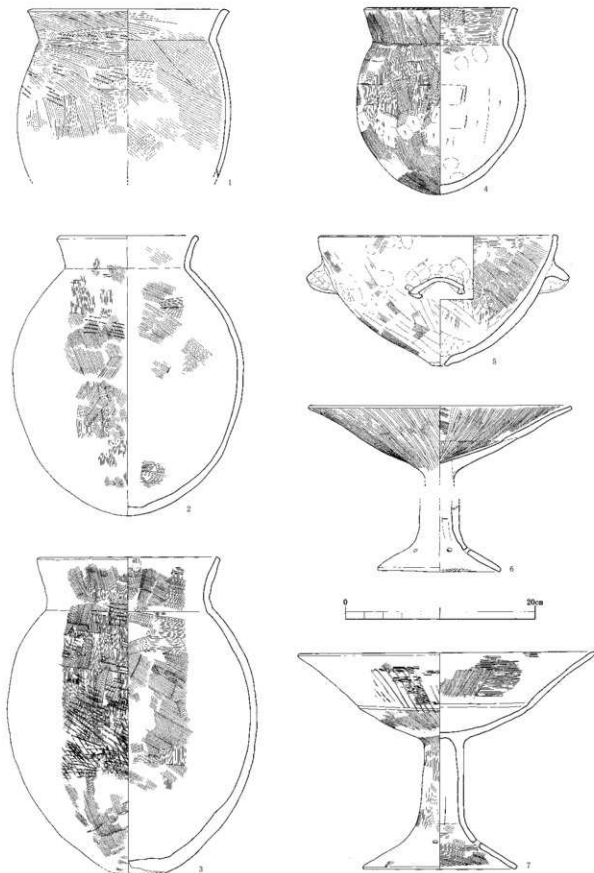


第56図 29号住居 (S=1/40)

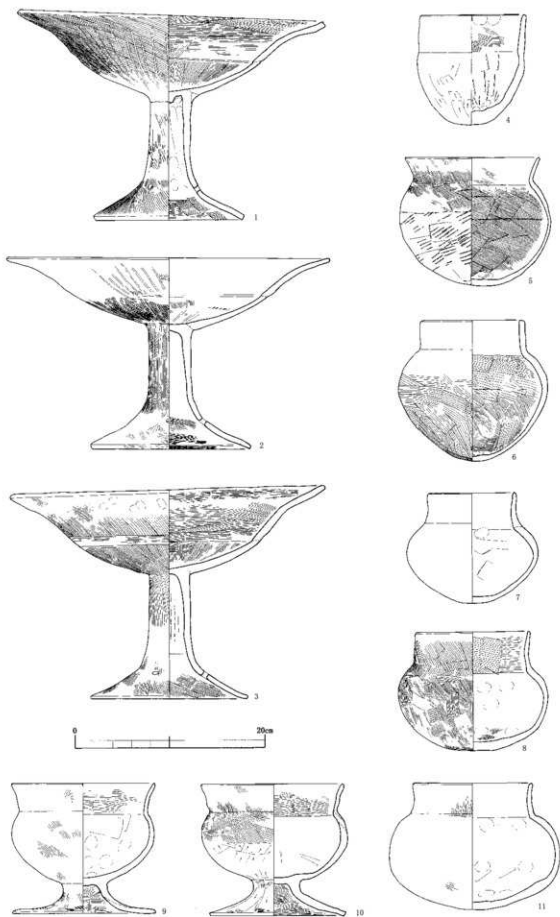
石器類は金属製品の研削に使用したと思われる砥石が1点認められたのみである。但し、本遺構から鉄製品の出土は確認されていない。土製品は凹形で外面に刺突紋を施した凹形の紡錘車、アーモンド形の投弾が出土している。



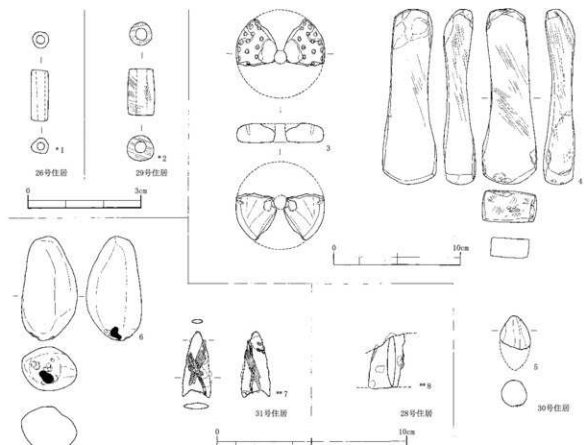




第58図 30号住居出土土器① (S=1/4)



第59図 30号住居出土土器② (S=1/4)



第60図 26・28・29・30・31号住居出土土製品・石器・鉄器 (S=1/4, *付はS=1/1, **付はS=1/2)

31号住居 (第61図/図版11)

調査区南端西寄りに位置し、39・41・47号住居、9号溝を切る。表土掘削時に上部を若干削平している。南辺は調査区外へ延長する。主軸は北西—南東方向で長軸残存長4.4×短軸4.7m、検出面からの深さは0.45mを測る。平面プランはややひずみがあるもの長方形と考えられる。2主柱で柱間に浅い土坑を、東辺中央にビットを伴う土坑を持つ。全面に黄褐色粘質土の貼土を施している。ベッド状遺構や床下の掘り込み等は認められない。

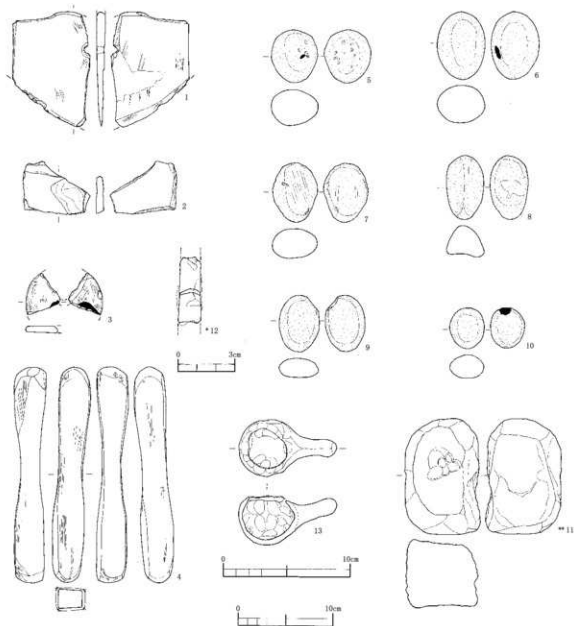
出土物 (第60・68図/図版36・45)

埋土から少量の土器・石器・鉄製品が出土している。糞は体部が長期化し、頸部の屈曲がやや緩くなった時期のもの。内面タテハケ、外面は体部がタテハケ、底部はケズリ調整を施す。傘は長頸傘が2点出土しているが、口縁部が直立するタテハケ調整で、頸部に二重の貼付突帯を持つ。胴部は肩から張りを持つ。弥生時代末の所産。

石器類は磨石・叩石、投弾等が出土している。その他、X字型に植物繊維の痕跡が残る鉄器が1点確認されている。

32号住居 (第62図/図版11)

調査区中央部南西寄りに位置し、41・47・58・67号住居、16号土坑、8・9・10号溝を切る。主軸は南北方向で長軸5.8×短軸5.4m、検出面からの深さは最大0.53mを測る。残存状況は良好である。平面プランは長方形で、2主柱の構造をとる。主柱と近接して別ビットがそれぞれ掘り込まれており、補助的な役割を果たした可能性が考えられる。北・南辺から西辺へそれぞれL字状に延びる、幅0.9m、高さ0.1mのベッド状遺構を持つ。ベッド状遺構は段掘りの上、薄く黄褐色粘質土を貼り付けて構築している。ベッド状遺構は西辺中央のみ意図的な空白設定が見られることから、この部分が入口であったと考えられる。この部分に2基のビットを検出しているが、入口に関連する施設の痕跡か。柱間の中央に浅い土坑を、ベッド状遺構の北東隅に深い土坑を持つ。中央の土坑は微量だが埋土に炭化物を含み、上面にも炭化



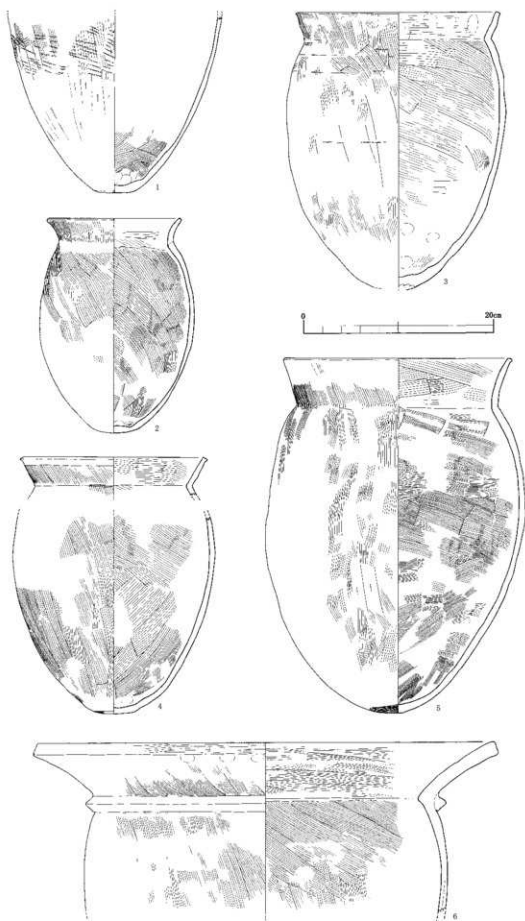
第63図 32号住居出土石器・鉄器 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4)

がある。鉢類は体部が内湾し、底面にケズリ調整を施す。口縁部が屈曲して外反し、短い脚部を持つ台付鉢は、大小の2点が出土している。器台は鼓形の上部が広く外反したものと背形が混在する。高杯は杯部内面に段差を持ち、緩いS字形を呈する。その他、柄杓型土製品、ミニチュア土器が出土している。

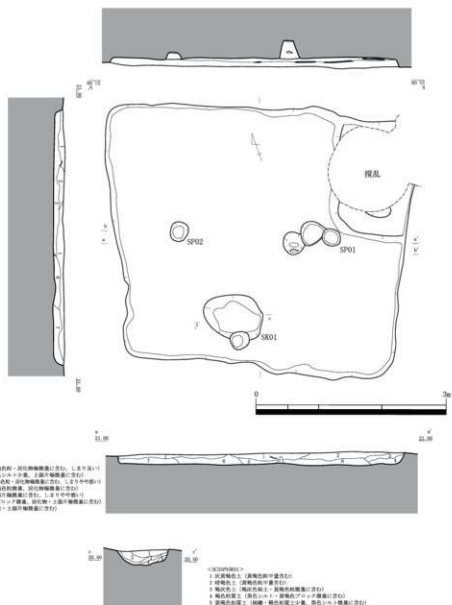
石器は未成品を含む石廬丁、砥石、台石、紡錘車等が出土している。砥石はSK01からの出土だが、金属製品の研磨に使用するものと考えられる。出土遺物に鉄製ヤリガンナが含まれているが、関連するものか。投弾は6点のみ図示しているが、それ以外にも多数の出土が認められる。

33号住居 (第66図/図版11)

調査区中央部東寄りに位置し、28・40号住居、9号溝を切る。主軸は北西—南東方向で長軸4.6×短軸4.0m、検出面からの深さは0.18mを測る。平面プランはひずみのある長方形で、主柱は2本の構造を採る。北東隅に段掘りで構築した幅1.1m、高さ0.1mのベッド状遺構を持つが、近代の井戸によって大半が破壊されている。南辺中央にピットを伴う土坑を確認している。埋土内に炭化物・焼土は全く含まれないことから、炉跡とは判断しがたい。床面には貼床を施した痕跡は認められない。遺構底面は平坦で凹凸も



第64図 32号住居出土土器① (S=1/4)



第66図 33号住居 (S=1/60)

とぼしく、構築時より丁寧な掘削が行なわれている。

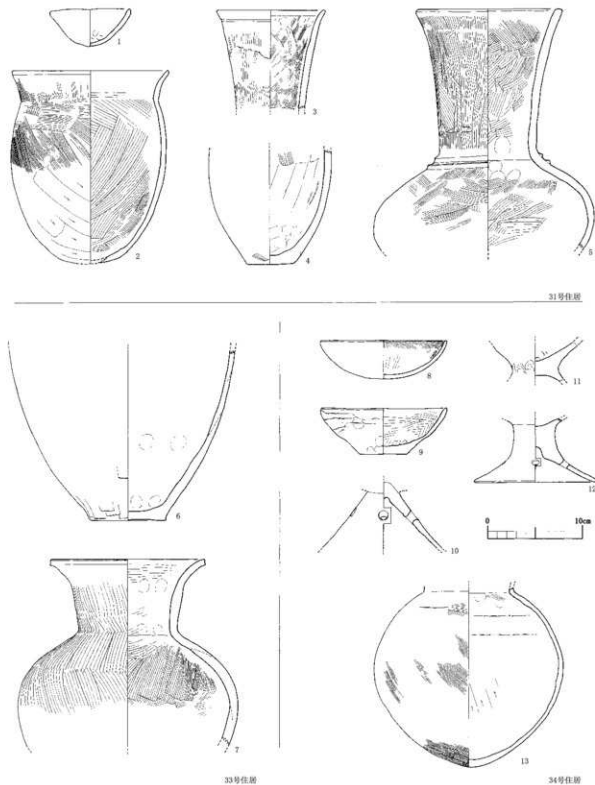
出土遺物 (第68図)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものはない。甕は外面を工具ナデで調整した平底のもの。甕は外反する長頸のもので、胴部に張りを持つ。内外面とも幅の広いハケ調整が施される。

その他、図示は控えたが投弾・石斧片等、微量の石器類が出土している。

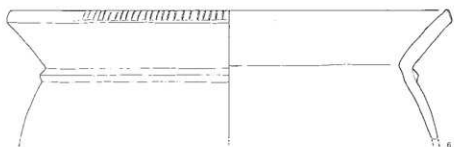
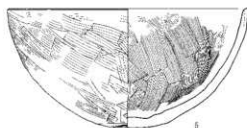
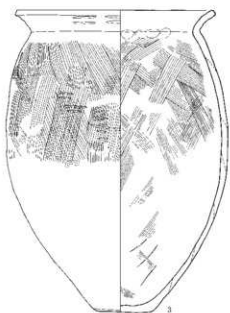
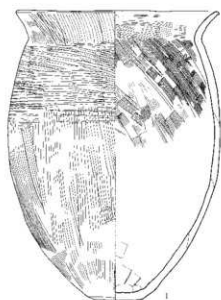
34号住居 (第67図/図版11)

調査区南西隅に位置し、63号住居を切る。南西部約3分の1が調査区外へ延長する。後世の造成により上部が削平されており、残存状況は悪い。特に南西寄りが顕著である。主軸は北西—南東方向で東西6.8×南北残存長5.6m、検出面からの深さは最大0.46mを測る。平面プランは正方形を呈すると考えられる。4柱で中央にピットを伴う土坑を持つ。土坑脇に少量の焼土が認められ、埋土に炭化物を含むことから、炉跡と考えられる。柱穴はいずれも段掘りで深さを持ち、しっかりとした構造を採る。中央土坑の他、

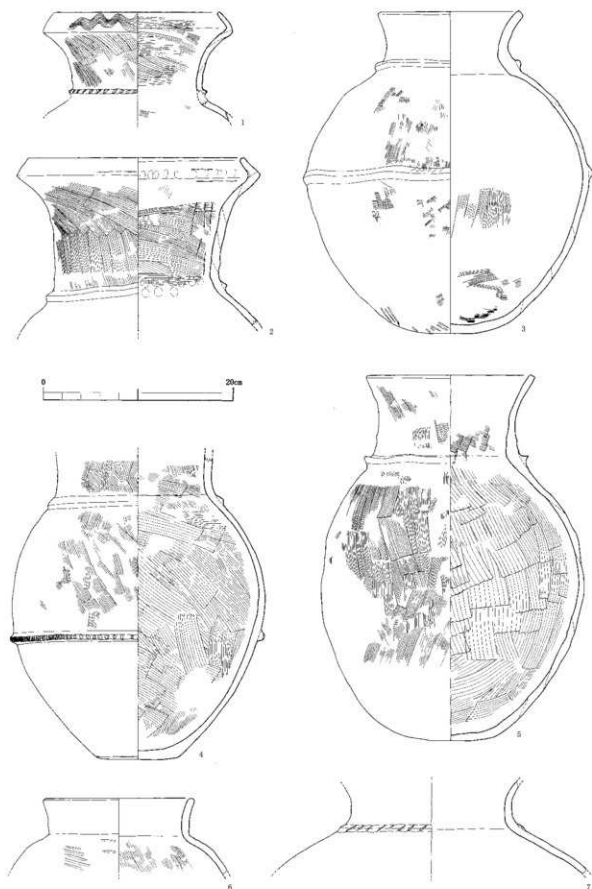


第68図 31・33・34号住居出土土器 (S=1/4)

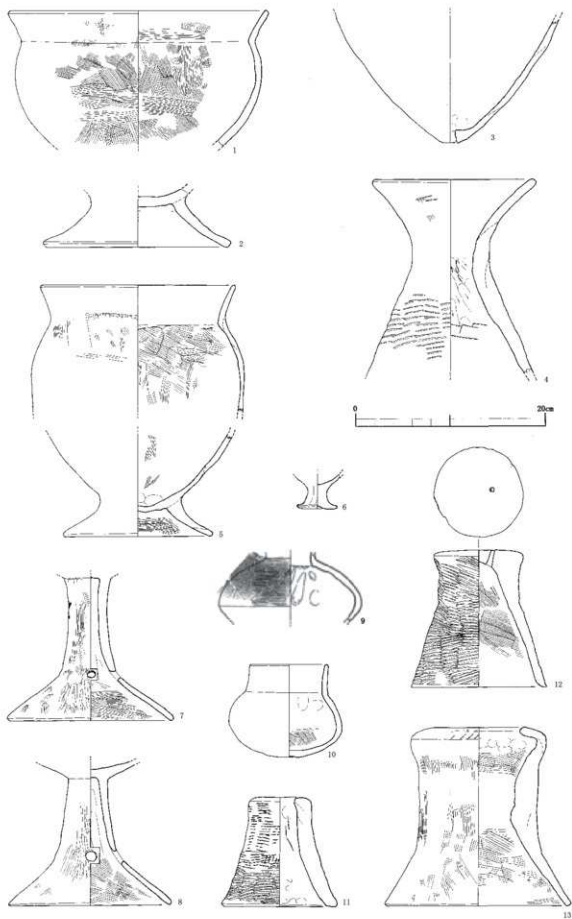
東辺中央、北西隅にも土坑を持つが、それぞれの用途は不明である。四周に断続的に細溝を掘り込んでい
る。貼床は黄褐色粘質土を使用して部分的に施し、貼床下には北辺にのみ湿気抜きのためと見られる溝状
の掘り込みが、北東・北西には不整形の土坑状の掘り込みが認められる。北西・南辺に一部高まりが確認
出来るが、遺構構築時の掘り残し等と考えられ、ベッド状遺構ではないと判断している。



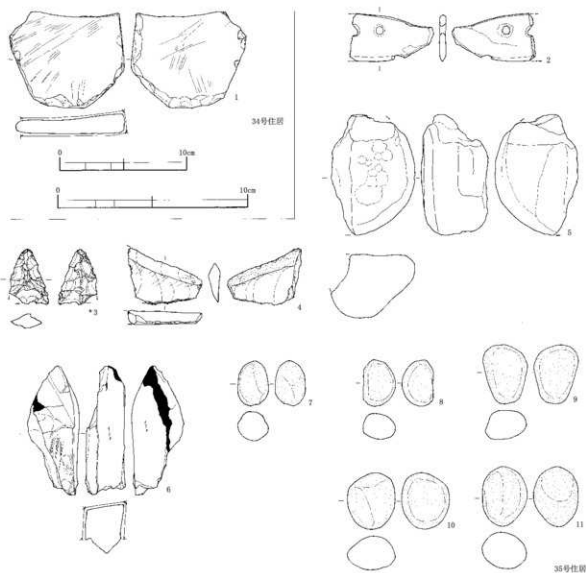
第70図 35号住居出土土器① (S=1/4)



第71図 35号住居出土土器② (S-1/4)



第72図 35号住居出土土器③ (S=1/4)



第73図 34・35号住居出土石器 (S=1/3, *付はS=1/2)

込みは、ピットが2基認められるのみで、炉跡状の痕跡は見られない。ピットは主柱に近接しており、補助的な役割を果たしたとも考えられる。東西方向の土層断面図ではベッド状遺構を持つように見えるが、実際の遺構底面は明瞭な段差を持たず、緩やかな傾斜が確認出来るのみである。褐色粘質土の土床を施すが、遺構中央部を中心とし、全面に広がるわけではない。

出土遺物 (第70・71・73図/図版27・28・38・41・42・43)

理土上～中層を中心に、廃棄時に混入したと思われるまとまった量の土器・花崗岩礫が出土している。甕・壺類を主体とし、比較的原型を留めるものが多い。甕は頸部がくの字形に屈曲し、胴部の長大化が認められるが、体部外面の平行タタキが明瞭に認められる時期のもの。頸部に貼付突起を持つ大型のものも1点出土している。また、底部に断面ハの字の脚部が付くものも見られる。壺は口縁部が内側に屈曲する古手のものと、口縁部に向かって外反するものとのが混在している。形状は壺であるが、多くは外面に被熱痕跡と煤の付着が認められ、甕的な使用方法が採られていたと思われる。鉢は体部が内湾しながら立ち上がるもののみがあり、小型壺は口縁部が直立するものと、外反する甕的な様相を残すものとのが混在する。器台は上部が屈曲するが、外面に平行タタキは認められない。支脚は円形の平坦面を持つ、外面が平行タタキ調整を施すもの。弥生時代後期末の所産。

石器類は石砲丁・スクレイパー・石鏃等の他、金属製品の研磨に使用したと思われる砥石が出土している。但し鉄製品の出土はない。また図示したものを含め、多数の投弾が出土している。

36号住居 (第74図/図版11・12)

調査区西端中央に位置し、37号住居に切られ48・53・54号住居、24号土坑を切る。南北5.1×東西3.8m、検出面からの深さは0.29mを測る。北・西の立ち上がりは不明瞭である。平面プランはひずみのある楕円形を呈する。主柱は調査時点で明確に認識出来ていなかったが、遺構床面に明確にそれと認められる掘り込みがなく、住居掘り込みとの位置関係・深さが適切であったことから、遺構の外に位置する東西2本と想定した。北東部分に浅い円形の土坑があり、上面に焼土の広がりか認められたことから、炉跡と判断した。北側にもピットを伴う土坑を検出しているが、用途は不明である。貼床は認められない。

出土遺物 (第78・79図/図版35・46)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で形状を留めるものはない。図示したものの他、甕・壺が散見されるが、頸部に貼付突起を持つ、弥生時代後期末の所産。

その他、砥石・土玉等と黒曜石・安山岩の剥片が出土している。鉄製品の出土は認められない。

37号住居 (第75図/図版12)

調査区北西隅に位置し、7号溝に切られ36・46号住居を切る。北東部分の一部が調査区外へ延長する。上面は後世の造成によって削平されており、特に北東側で顕著である。主軸は北東—南西方向で長軸残存長4.75×短軸3.85m、検出面からの深さは0.2mを測る。平面プランは長方形と考えられる。柱穴状のピットは散見されるものの、下層の46号住居で検出されたピットも含め、主柱を構成する組み合わせは認められなかった。但し、埋土の状況からSP02・03は37・46号住居いずれかの主柱であると思われる。南東辺中央に段掘りによって構築された、幅1.25m、高さ0.1m未満のベッド状遺構が見られるが、他遺構のように明確な段差とはならない。床面では浅い土坑状の掘り込みが3基検出されたが、いずれも埋土・掘り込みの形状から炉跡ではないと思われる。遺構底面には全体に薄くはるが黄褐色粘質土の貼床を施し、南辺のベッド状遺構上に溝状の掘り込みがある。

出土遺物 (第78図)

微量の遺物が出土しているが、土器類はいずれも細片のため図示していない。甕の口縁部の形状から、古墳時代前期の所産と思われる。

その他、図示した扁平で小型の砥石、投弾が少量出土している。鉄製品の出土は認められない。

38号住居 (第76図/図版12)

調査区北端東寄りに位置し、27号住居に切られ45・56号住居、20・21号土坑、9号溝を切る。北半部は調査区外へ延長するが、II区にはかからない。主軸は北東—南西方向で長軸7.35×短軸残存長4.9m、検出面からの深さ0.2mを測る。平面プランは方形、主柱は2本と考えられる。遺構床面には浅い土坑が複数認められるが、炉跡と判断するには至らない。また貼床も認められない。

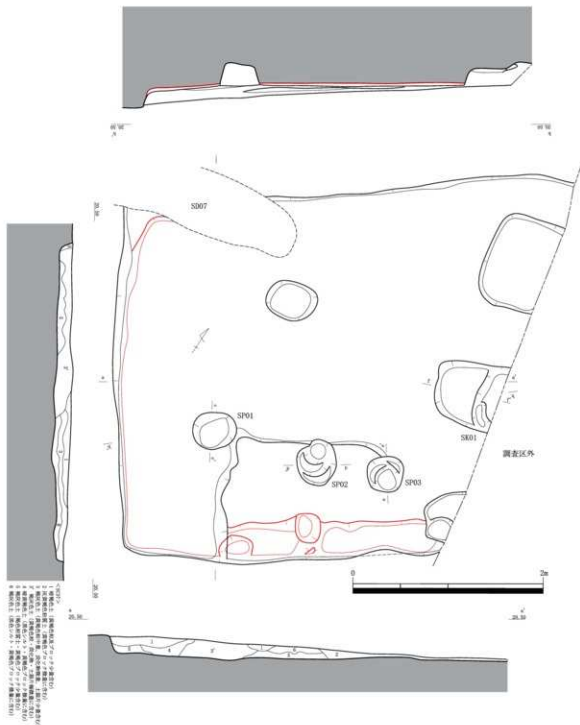
出土遺物 (第78・79図/図版28・43)

遺構内に示したものを含め、床面直上と埋土内から少量の遺物が出土している。住居の廃棄時を示すものと思われる。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、胴部が長胴化した時期のもの。外面に平行タタキはなく、ハケのみの調整を施している。但し、頸部に貼付突起を持ち、外面に平行タタキの痕跡を持つものも残る。小型甕は底部が平坦で内面ヨコハケ、外面タテハケ調整。脊形支脚は外面に若干平行タタキを残すが、調整はハケが優位である。高杯は杯部内面に段を持ち、S字形に湾曲する。内外面にハケ調整のち放射状暗文を施す、胎土・調整とも良品。杯類は指ナデの調整が残る、粗略なつくりのもの。

その他、石砲丁の破片が1点と投弾、用途不明の鉄製品が出土している。

39号住居 (第77図/図版12)

調査区南端西寄りに位置し、31号住居に切られ9号溝を切る。41号住居との先後関係は検出状況からは不明である。南半部が調査区外へ延長する他、31号住居に大断に削平されているため、遺構の全容は不明な点が多い。平面プランは楕円形を呈する。北東隅で検出したピットを主柱と想定し、2主柱と考えているが、これと対応する柱穴は31号住居の底面では確認出来ていない。南西隅にテラス状の段差があるが、

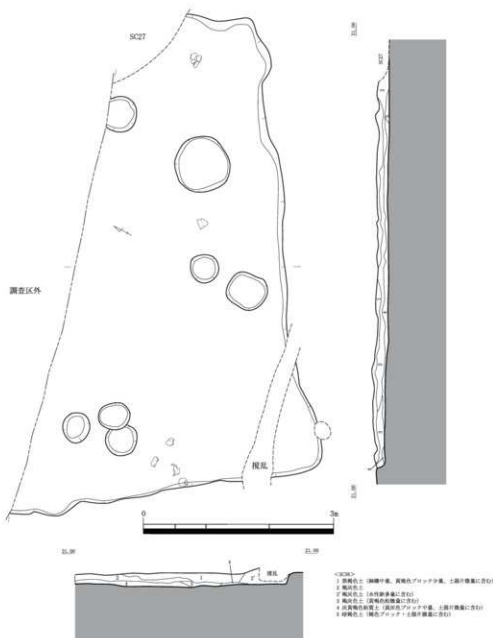


(1) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造時期を推定する。
 (2) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造場所を推定する。
 (3) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造方法を推定する。
 (4) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造材料を推定する。
 (5) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造技術を推定する。
 (6) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造環境を推定する。
 (7) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造者の推定。
 (8) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造者の推定。
 (9) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造者の推定。
 (10) 土器の形状・大きさ・文様・色澤などから、その製造者の推定。



- ① SP01の断面図**
 1. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 2. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 3. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 4. 土器片 (土器片の断面図に示す)
- ② SP02の断面図**
 1. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 2. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 3. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 4. 土器片 (土器片の断面図に示す)
- ③ SP03の断面図**
 1. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 2. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 3. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 4. 土器片 (土器片の断面図に示す)
- ④ SK01の断面図**
 1. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 2. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 3. 土器片 (土器片の断面図に示す)
 4. 土器片 (土器片の断面図に示す)

第75図 37号住居 (S=1/40)



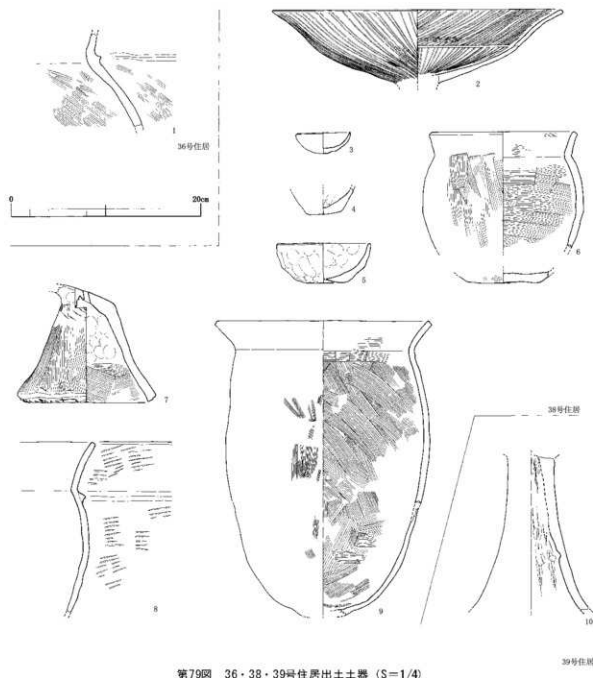
第76図 38号住居 (S=1/60)

住居に関する施設かどうかは不明である。北辺部に一部細溝が掘り込まれている他は、遺構に伴う施設は認められない。また、遺構床面全体に貼床は施されていない。

出土遺物 (第78・79図/図版44・45)

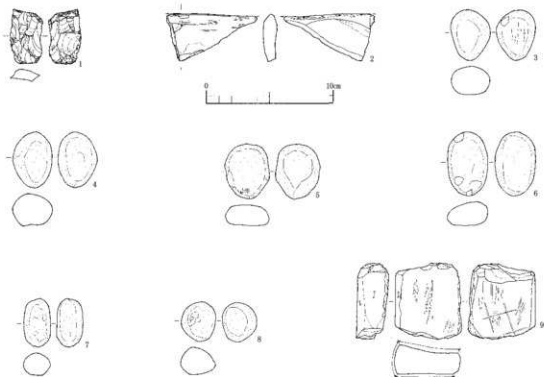
埋土内から極微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。図示した高杯脚部のみがある程度の形状を残していた。内面の絞り痕跡以外は摩滅により調整が不明である。但し、外面に微量の赤色顔料が付着しており、丹塗土器であると思われる。弥生時代中期の所産。

その他、図示した石廬丁、ハンマー状石器、安山岩の剥片等、若干の石器類が出土している。



40号住居 (第80図/図版12)

調査区中央北東寄りに位置し、33号住居に切れ、64号住居、9号溝を切る。主軸は北東—南西方向で長軸5.7×短軸4.35m、検出面からの深さ0.41mを測る。平面プランは長方形で2主柱の構造を採る。柱穴は二段掘り込みだが浅い。東西両隅と南隅に幅1.1m、高さ0.1mのベッド状遺構が認められる。東隅のものは段掘りで地山を残す方法で構築されているが、西・南隅のものは遺構の床面を平坦に掘り込んだのち、厚く粘土を盛り上げて造成している。この造成土は黄褐色粘質土に黒色シルトが混入した比較的汚れた土を使用しており、南隅のベッド状遺構については調査時に遺構埋土と誤認して一部を掘削してしまっている。遺構の測図はその残存状況を示しており、本来は西隅と同じ程度のベッド状遺構が存在し、中央に出入口として空白部分を設けていたと思われる。四周に断続的に細溝が掘り込まれ、北西には小規模なテラス状の段差を持つ。貼床は床面全体とベッド状遺構上面に施すが、黒色土混じりの汚れた黄褐色粘質土を使用している。貼床下には中央に炉跡と思われる浅い土坑が確認されている。その他、不整形の土坑状の掘り込み、溝状の掘り込みが確認されている。



第81図 40号住居出土石器 (S=1/3)

41号住居 (第83図/図版12)

調査区南西寄りに位置し、31・32号住居に切られ、47・58号住居、9号溝を切る。主軸は南北方向で長軸7.5×短軸5.8m。検出面からの深さ最大0.48mを測る。平面プランは長方形で2主柱の構造を採る。但しSP02が主柱で、対になるピットが32号住居内にあると判断したが、主柱としては掘り込みが浅い。南隅に位置するSP03も、主柱の補助的な役割を果たしていた可能性がある。主柱間からは若干北へずれるが、中央に浅い不整形の土坑が認められる。埋土内に焼土粒・炭化物を含み、灰跡と考えられる。なおSP05はSP03と共に主柱となるような位置に掘り込まれているが、後述するように出土遺物の時期に明瞭な差異があるため、住居に伴うピットではないと判断した。

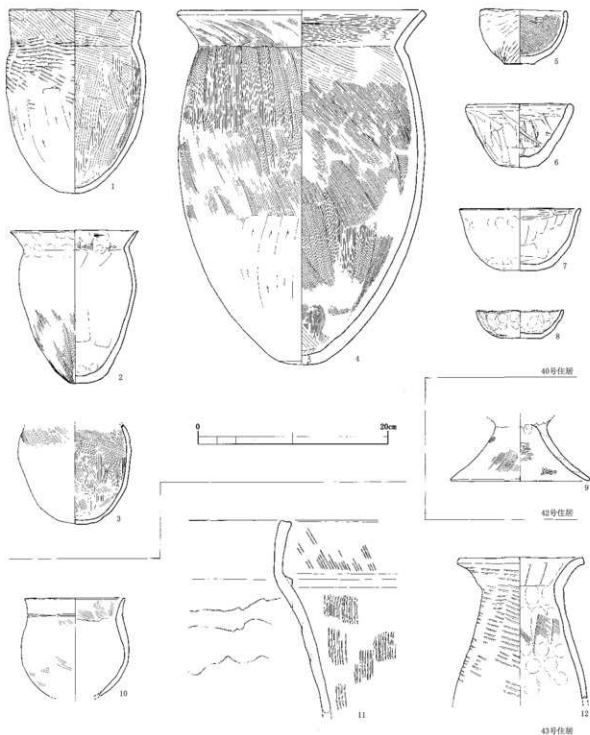
北・西辺に幅1.0m、高さ0.1mの段掘りで構築されたベッド状遺構を、北辺にはその上部にさらに幅の狭いテラス状の構造を持つ。南東隅にもテラス状の構造が見られるが、大部分は31号住居によって破壊されているため、詳細は不明である。北東・北西隅に深いピットが掘り込まれており、内部では遺物を確認している。また南東隅にもピットの掘り込みが認められることから、上部構造を支えるための役割を果たしていた可能性も考えられる。北辺を中心に部分的に細溝を掘削している。貼床は遺構全面に黄褐色粘質土で薄く施されており、その下層には一部分のみ掘り込みが確認されている。

出土遺物 (第84・87・94図/図版29・44)

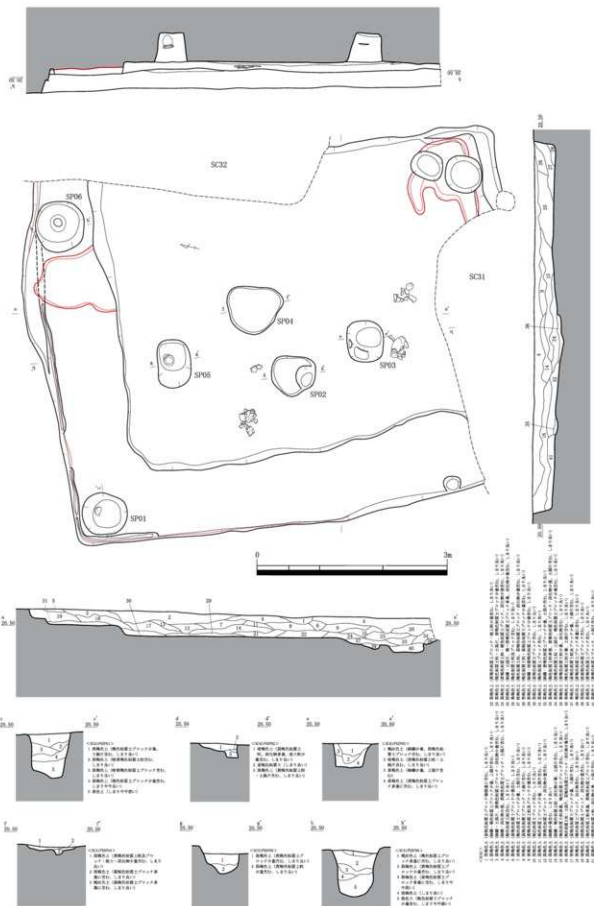
遺構図に示したピット内及び床面直上を中心に遺物が出土している。甕・鉢類を主体とし、石器と鉄製品が共に一定量確認されている。甕は口縁部が外反して真直ぐに立ち上がり、体部はやや上で張りを持ちとがった底部へ繋がる形状のものが多い。弥生時代後期末の所産。

第84図一1はSP05内から出土した遺物であるが、これのみ弥生時代中期の所産である。このピットは41号住居に伴うものではないが、掘立柱建物や土間を持つ遺構に近接して検出出来なかったことから、やむを得ずこの項で報告する。口縁部に計4カ所の穿孔を施し、外面は丹塗の上ミカギを行なう、小型の甕。内面は丹塗りの垂れ落ちた痕跡が残る。

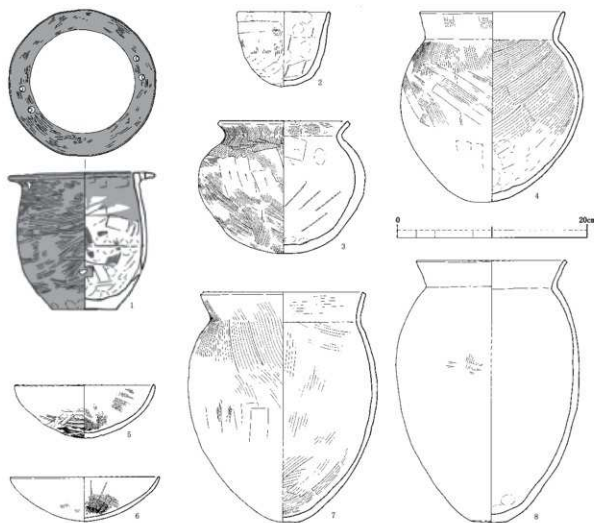
石器は図示した石冠丁・紡錘車他、多数の投射が出土している。鉄製品は摘鎌が2点とキリガンナ1点を確認している。



第62図 40・42・43号住居出土土器 (S=1/4)



第83図 41号住居 (S=1/60)



第84図 41号住居出土土器 (S=1/4)

42号住居 (第85図/図版13)

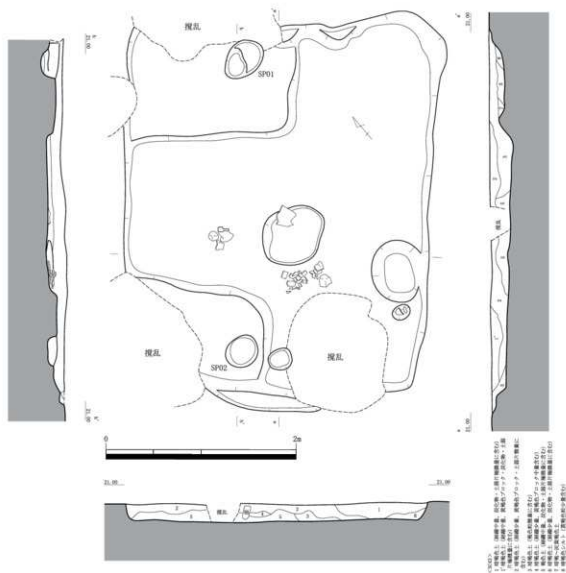
調査区北端西寄りに位置し、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる。17号住居に切られ、69号住居を切る。主軸は北東—南西方向で長軸5.0×短軸4.7m、検出面からの深さ0.25mを測る。平面プランは長方形で2支柱の構造を採る。柱穴は比較的浅く、住居施絶後に柱抜き取りが行なわれたと考えられる。柱間に隅丸長方形の浅い土坑が、南辺中央部に不整形円形の土坑が掘り込まれている。位置と形状からはSKO1が埴跡と思われたが、SKO2は上面に焼土の広がり確認されており、縁辺部が被熱により赤化している箇所が認められたことから、こちらを埴跡と判断した。西辺を中心に細溝が掘り込まれている。貼床は全面にしっかりと施されており、貼床下面には極一部に土坑状の浅い掘り込みが認められる。

出土遺物 (第82・87図)

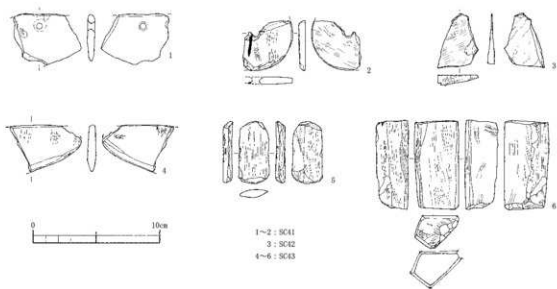
遺構図に図示しているように、床面直上から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものはない。図示した高杯脚部とその他の甕・壺片から、弥生時代終末期の所産と考えられる。石器は薄い小型の砥石片1点のみが出土しており、鉄製品は出土は認められない。

43号住居 (第86図/図版13)

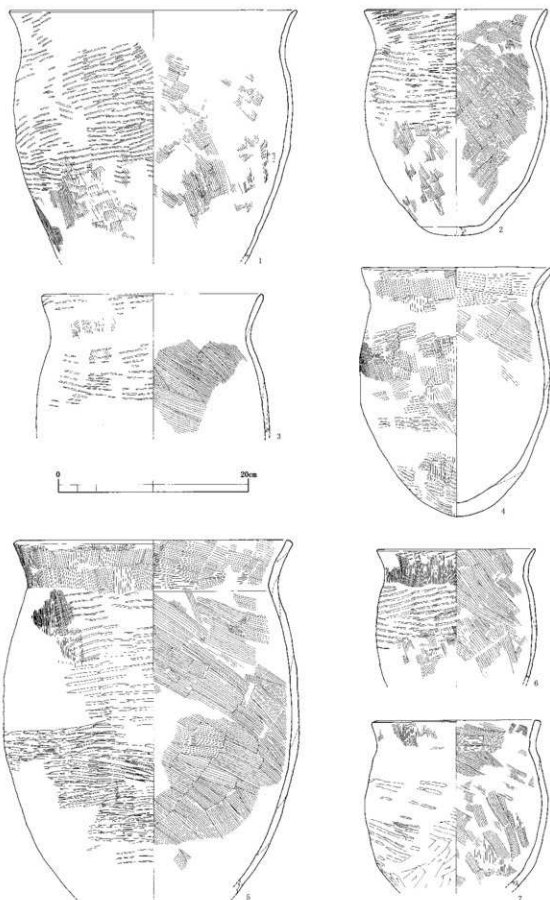
調査区南東寄りに位置する、切り合い関係のない単独の遺構。但し上面に攪乱が集中しているため、遺構本体の残りは良くない。主軸は北東—南西方向で、長軸4.1×短軸3.2m、検出面からの深さ0.2mを測る。平面プランは長方形で、2支柱の構造を採る。支柱は遺構の中軸からやや北西にずれるが、他に適切



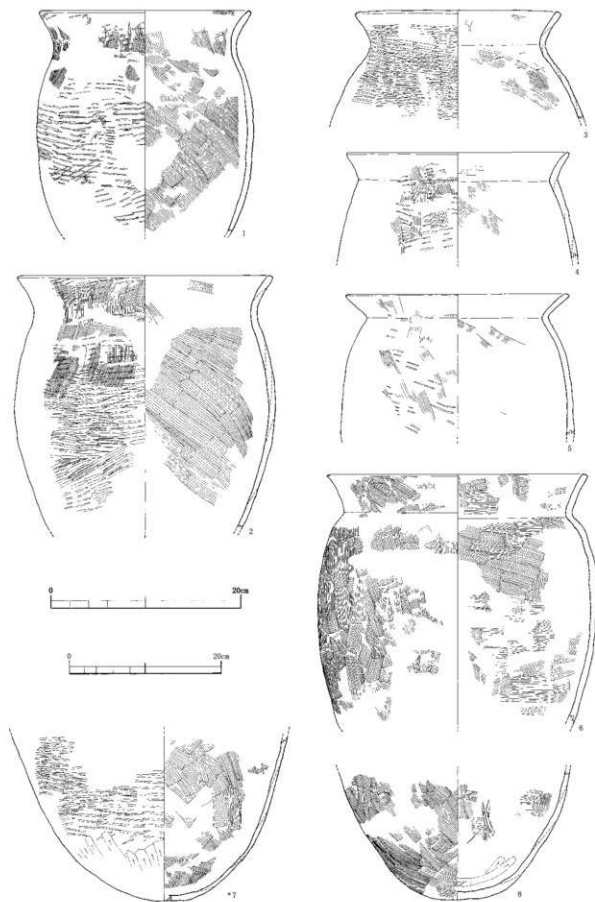
第86図 43号住居 (S=1/40)



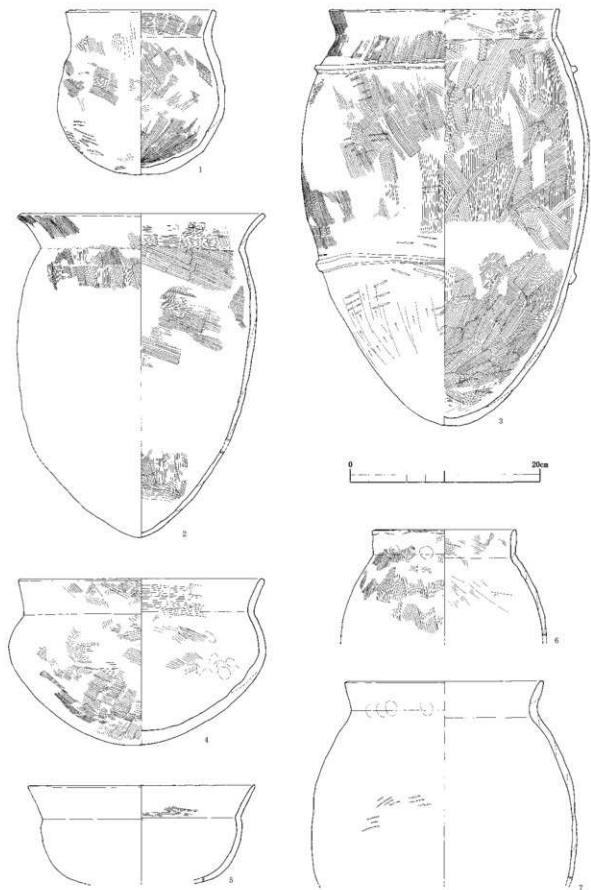
第87図 41・42・43号住居出土石器 (S=1/3)



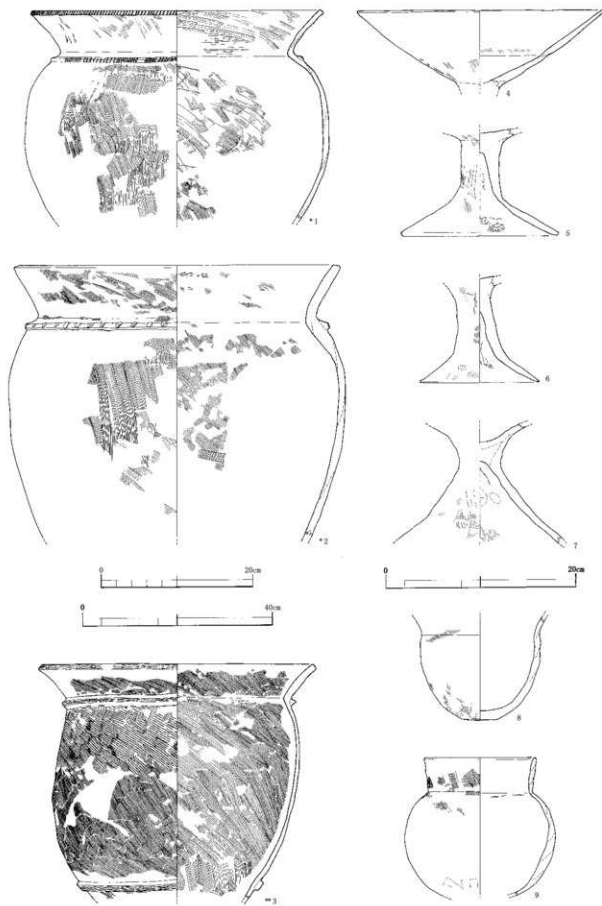
第89図 44号住居出土土器① (S=1/4)



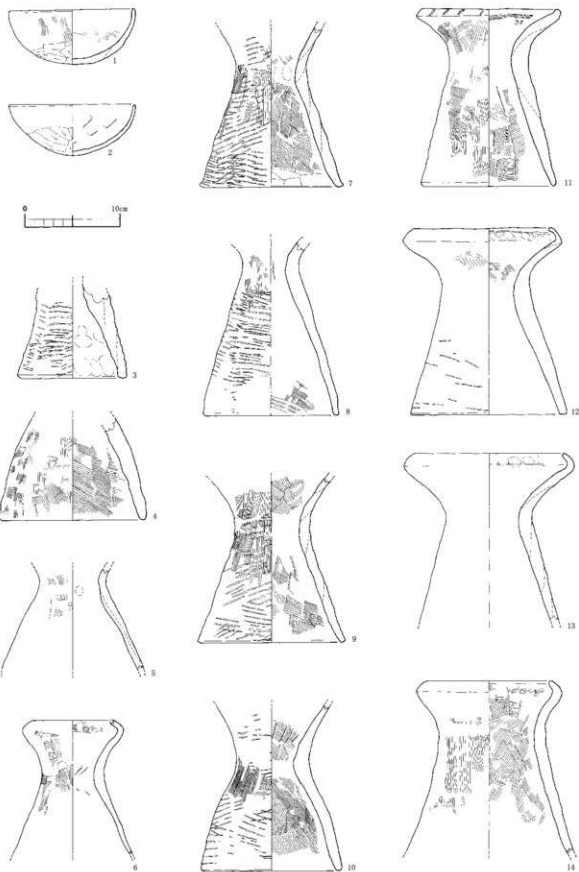
第90図 44号住居出土土器② (S=1/4、*付はS=1/5)



第91図 44号住居出土土器③ (S=1/4)



第92図 44号住居出土土器④ (S=1/4, *付はS=1/5, **付はS=1/8)



第93図 44号住居出土土器⑤ (S=1/4)

出土遺物 (第89~95号/図版29・30・33・35・36・37)

遺構図に示したとおり、ベッド状遺構内部を中心に多量の土器が出土している。土層断面と遺物の出土レベルから、住居を廃棄する際の初段階に一括廃棄されたものと考えられる。完形もしくはそれに近い形状まで復元出来るものも多く、住居廃棄の際の祭祀的行為に伴う可能性もある。器種は甕類の大型品を主体とするが、鉢・高杯・器台と多岐にわたり、微量ながら石器・鉄製品も含まれている。

甕は頸部の屈曲が緩く、底面が尖り気味の形状を示すもの。但し外面調整については、口縁部まで平行タタキを残すものと、口縁部はタテハケで胴部のみ平行タタキを残すものが混在している。外面にタテハケは施されているものの、タタキが優勢な時期のものである。微量ではあるが口縁部が明瞭に屈曲し、ハケが優勢なものも含まれている。また、頸部に貼付突帯を持ち、突帯にも平行タタキを施す大型のものが3点確認されている。うち1点は喪棺として使用された可能性もあるが、出土状況からはそれを裏付けることは出来なかった。

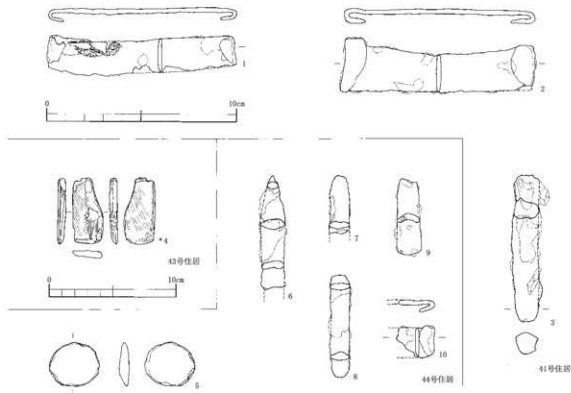
甕は口縁部が内側に屈曲し、肩部に凹盤を貼り付けるもの、短頸のものがあり、その他に肩部と胴部下方に貼付突帯を持つ、長胴化したものが確認されている。第91図-3は、外面に煤が付着しており、喪的な使用がなされていたと考えられる。

鉢のうち、頸部が屈曲するものは、口縁部が外反して伸び、底部が丸底の古い様相を示すものと、口縁部が直立に向かいつつあるものが混在している。但し、いわゆる小型丸底甕と称される形状・調整のものは確認されていない。内湾して立ち上がるものは器高が低く底部にケズリを施すものと、小型の杯の様な様相を示すものが混在する。

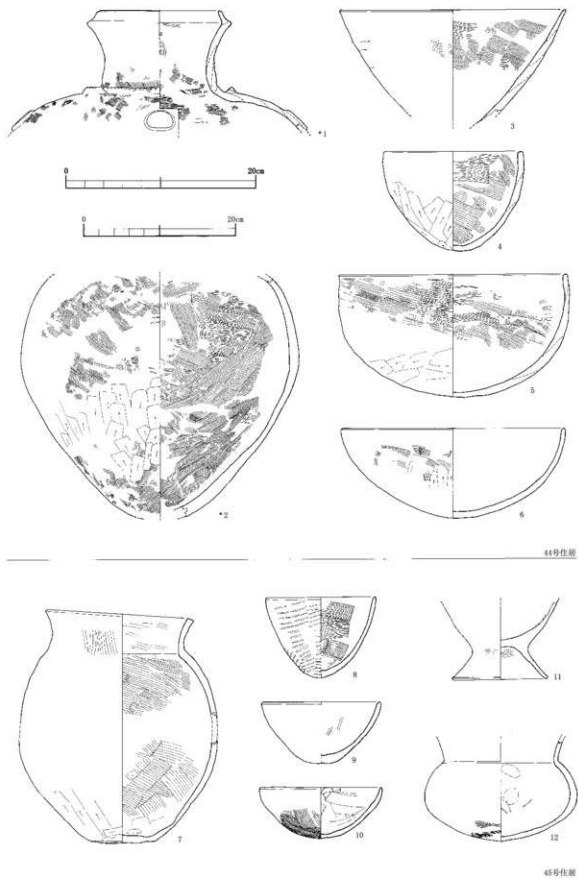
高杯は少量の出土であるが、杯部内面に段を持つが外反して真直ぐに立ち上がる時期のもの。

器台は鼓形の系統で、上部が内側へ屈曲するものと、斜め上方に真直ぐ立ち上がるもののが混在している。但し調整は外面平行タタキ、内面ハケを基本とし、外面のタタキ痕跡のハケ消しの度合いに若干の差異が認められる。

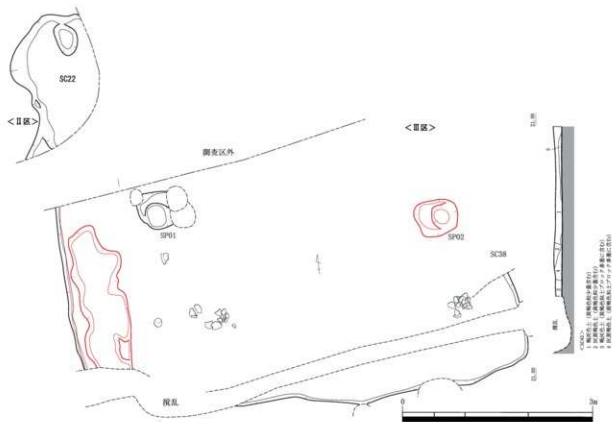
その他、土製凹盤、鉄製ヤリガンナ、鉄製摘鎌が出土している。



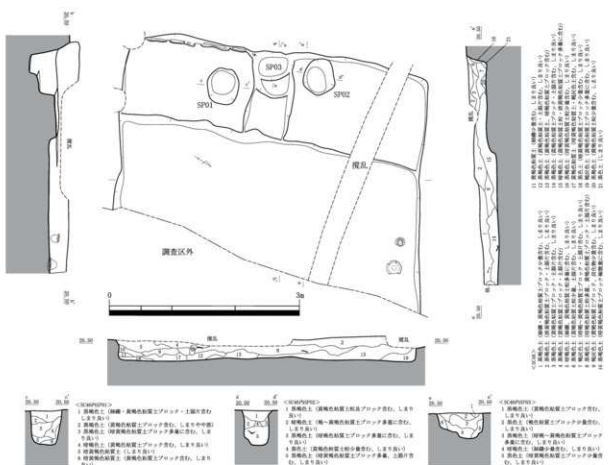
第94図 41・43・44号住居出土土製品・石器・鉄器 (S=1/2、*付はS=1/3)



第95図 44・45号住居出土土器 (S=1/4, *付はS=1/5)



第96図 45号住居 (S=1/60)



第97図 46号住居 (S=1/60)



22・45号住居 (第96図/図版13)

調査区北端中央寄りに位置し、38号住居に切られ、64号住居、9号溝を切る。北東部分は調査区外へ延長し、北西隅はⅡ区にまたがる。Ⅱ区での検出段階では22号住居として単独遺構の扱いをしていたが、Ⅲ区の調査完了段階で同一の遺構であると判断されたため、2つの番号を付している。遺構の大部分はⅢ区内で検出しているが、38号住居及び掘乱に削平されているため残存状況は非常に悪い。主軸は東西方向で平面プランは方形を呈し、2柱の構造を採ると思われる。東西6.8×南北6.5m、Ⅱ区での検出面からの深さは0.35mを測る。主柱は南北方向にぶれがあるが、この2基のピット以外に柱穴と考えられる掘り込みは認められなかったため、主柱と判断した。床面全体に褐色粘質土で薄く貼床を施しており、西辺に湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが認められる。

出土遺物 (第38・95・102図/図版30・38)

床面直上と埋土内から少量の遺物が出土している。甕は内外面ともハケ調整、外面にケズリ調整を施した平坦な底部を持つもの。小型の鉢類には外面に平行タタキの痕跡が認められる。頸部が屈曲するタイプの鉢は、口縁部が直立する傾向が認められるもの、小型丸底甕の形状を採るにはいたらない時期のもの。その他、台付鉢の脚部が1点出土している。

石器類は投弾が1点のみ、鉄製品は鋸先が1点出土している。砥石等は確認されていない。

46号住居 (第97図/図版13・14)

調査区北東側に位置し、37号住居・7号溝に切られる。東側約3分の1は調査区外へ延長するが、Ⅰ区へはいたらない。2柱の構造を採り、主軸は東西方向、平面プランは方形を呈すると思われる。東西残存3.7×南北4.8m、検出面からの深さは0.28mを測る。西辺に幅1.5m、高さ0.15mの段縁りによって構築されたベッド状遺構を持つ。東辺にも同様の施設を備えていると思われる。西辺のベッド状遺構上に3基のピットを検出しているが、主軸方向と位置関係からSP03が主柱となり、両脇のSP01・02は規模・深さともほぼ共通することから、2基で主柱の補助的な役割を果たしたものと判断した。南西の壁沿いに部分的に細溝を掘り込んでいる。竈跡と考えられる土坑状の掘り込み、焼土・炭化物の広がり等は見られない。貼床は認められなかったが、遺構の床面は全体的に平坦で凹凸にとほしい。

出土遺物 (第101図/図版30・31)

遺構内に示した床面直上の遺物の他、埋土から微量の土器・石器が出土しているが、原型を留めるものは床面直上から出たもののみであった。甕は口縁部が屈曲して外反する平底のもの、肉厚で内外面ともハケ的な痕跡を残す工具ナデ調整を施す。第101図-1・2は正位置で入れ子状になって出している。その他、図示したコップ状の鉢、数点の投弾が出土している。

47号住居 (第98図/図版14)

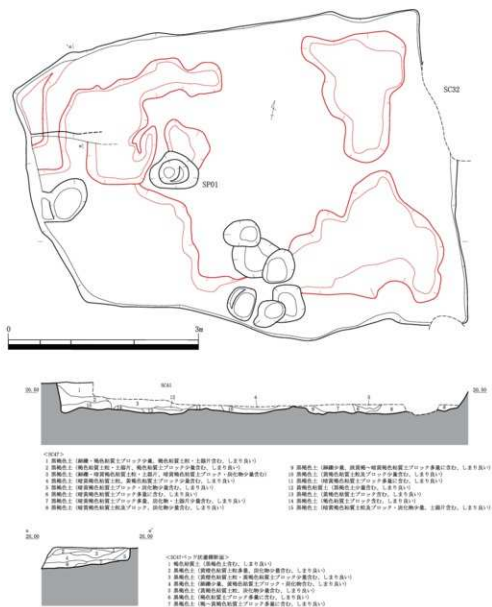
調査区南西寄りに位置し、31・32・41号住居に切られ、58・63号住居を切る。西辺を除く遺構の大半が上面遺構に削平されており、残存状況は非常に悪い。平面プランは南西隅の形状が不良ではあるが、長方形を呈すると思われる。主軸は東西方向、長軸6.8×短軸0.5m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。北辺に庵土を盛り上げて構築した、幅1.3m、高さ0.35mのベッド状遺構を持つ。本来は北辺に沿って全体に構築されていたと思われるが、41号住居に破壊されており、詳細は不明である。2柱の構造を採ると考えられるが、主柱と判断出来るのはSP01のみで、これと対応するピットは確認出来なかった。また、竈跡状の掘り込みも、残存する遺構の範囲内では未確認の状態である。底面には褐色粘質土で薄く貼床を施しており、貼床下には広い範囲で不整形の掘り込みが認められた。

出土遺物 (第101・102図/図版33・40・41・46)

埋土内より少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものは認められない。甕は口縁部が屈曲して立ち上がり、内外面はハケ調整で平坦な底部を持つもの。甕は体部に貼付突起をめぐらす。いずれも弥生時代後期の所産。

その他、黒色緻密質凝灰岩の模状製品、砥石、投弾等、少量の石器が出土している。





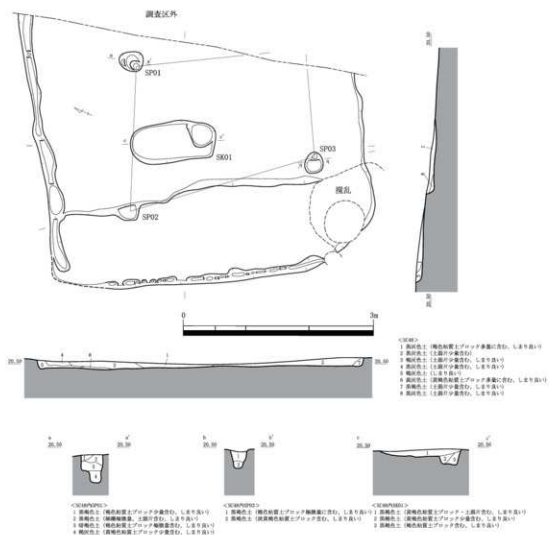
第98図 47号住居 (S=1/60)

48号住居 (第99図/図版14)

調査区東端中央に位置し、36号住居に切れ、53・54号住居を切る。遺構の東約3分の1は調査区外へ延長する。後世の造成により大幅に削平を受けており、特に東側は顕著である。平面プランは方形を呈すると思われる。主柱は4本で南東隅は調査区外へいたると想定した。柱穴はSP02を除いて段掘りの形状を示す。主軸は東西方向で、東西残存長4.3×南北5.1m、深き最大0.15mを測る。西辺に幅1.4m、高さ0.18mの段掘りで構築したベッド状遺構を持つ。東側の上部は削平されているが、同様の構造であった可能性がある。北側の2柱間に不整楕円形のピットを伴う土坑を検出しているが、埋土に焼土・炭化物は含まれず、刃跡である可能性は低い。北・西辺に沿って細溝を断続的に掘り込んでいる。貼床は遺構全体に認められず、削平を受けた訳ではないようである。

出土遺物 (第101・102図/図版44)

遺構埋土内より出土した遺物は極めて微量で、いずれも細片である。甕類は口縁部が屈曲して外反する弥生時代後期の所産。図示した小型の鉢の底部は指ナデ痕跡が明瞭に残る粗略なつくり。その他、石砲丁の小片、投弾が数点出土している。



第99図 48号住居 (S=1/60)

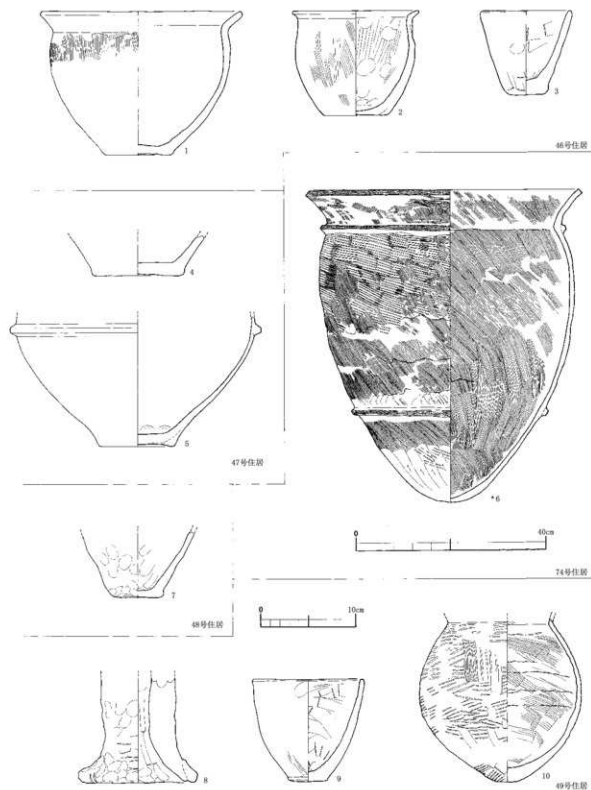
49号住居 (第100図/図版14)

調査区中央に位置し、28号住居、16・17号土坑に切れ、9号溝を切る。主軸は南北方向で、長軸4.75×短軸4.65m、検出面からの高さは最大0.15mを測る。遺構上面の大部分を28号住居に削平されているため、残存状況は非常に悪い。平面プランはややひずみのある正方形を呈し、2柱の構造を持つ。主柱は主軸から西へずれるが、柱穴と考えられるピットが他に検出されなかったこと、ピット同士の間隔関係と深さに問題がなかったことから、主柱と判断した。いずれも2段掘りで充分な深さを持つ。柱間に楕円形の土坑、北東隅に不整形の土坑を検出しているが、SKO1が炉跡であると思われる。南東と西辺沿いに断続的に細溝を掘り込んでいる。貼床は遺構の全面で確認出来なかった。

出土遺物 (第101・102図/図版31・38・44・45)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものではない。甕は頭部が屈曲し口縁部が外反して立ち上がり、胴部が吸いを持って尖り気味の底部へ繋がる。古墳時代初頭の形状。但し外面には平行タタキ痕跡が明瞭に残り、タテハゲによるナデ消しは粗略に行なわれている。鉢はコップ状のものが1点見られるのみ。支脚は指ナデ痕跡の残る鼓形の系統で、平行タタキは認められないもの、粗いつくりとなっている。

その他、図示した石瓦丁、スクレイパーの未成品の他、投擲数点と鉄製品1点が出土している。



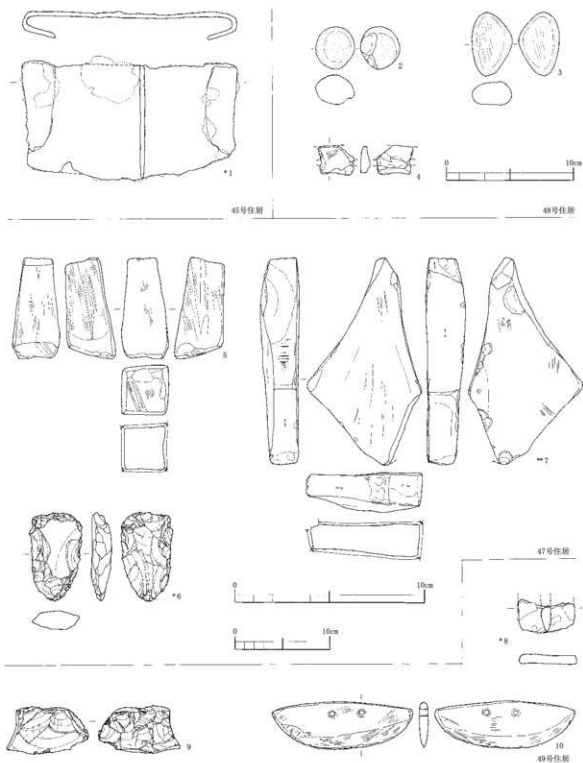
第101図 46・47・48・49・74号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/8)

掘り込みが確認されている。なお、南辺中央に長方形で中央にピットを伴う下層土坑を検出している。形状から、単独の土坑の可能性もあるが、残存状況が不良で、貼床下層溝を切って検出されていることから、ここでは住居内土坑のSK02として扱う。

北・西辺に沿って細溝を掘り込んでいるが、南辺のどこまで延長するかは不明である。

出土遺物 (第104・107・109図/図版31・41)

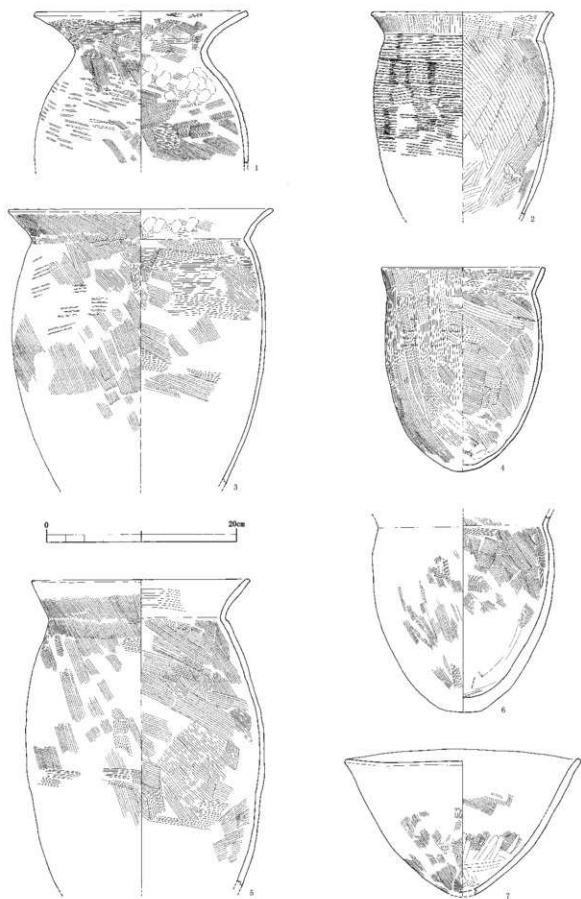
埋土から比較的まとまった量の遺物が出土している。但し形状を留めるものはほとんど量ではない。甍



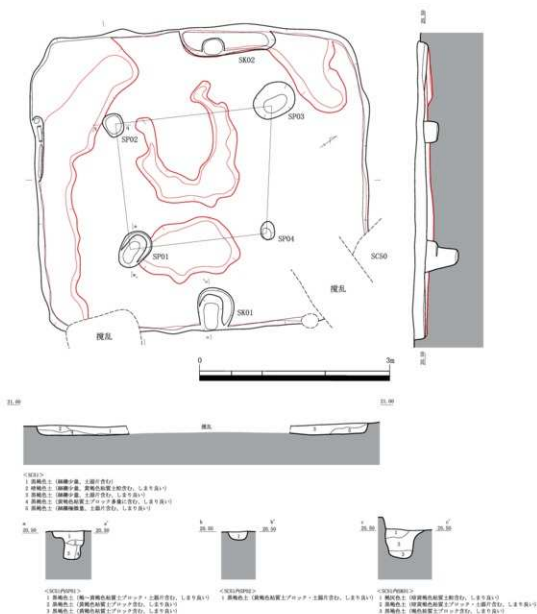
第102図 46・47・48・49号住居出土石器・鉄器 (S=1/3, *付はS=1/2, **付はS=1/4)

類を主体とし、少量の壺・鉢等を伴う。壺は頭部が屈曲し、口縁部が外反して延びるもので、体部外面に明瞭に平行タタキの痕跡を残すものと、タテハケによるナデ消しが優位なものとが混在している。胴部は長胴化しており、同じ形状・調整のものでも大小の差がある。但し全面に平行タタキが残るのではなく、口縁部は外面もタテハケを施している。器壁は比較的薄い。

鉢は体部が斜めに真直ぐ立ち上がるもの。口縁部が屈曲して立ち上がるタイプのものは、屈曲が削れながらも残っているものと、口縁部が直立した小型丸底壺の形状を示すものとが混在している。支脚は杢形の系統で、外面に指ナデ痕を残す、粗略なつくりのもの。器台は脚部に穿孔を施し、受部が小型のもの。



第104図 50号住居出土土器 (S=1/4)



第105図 51号住居 (S=1/60)

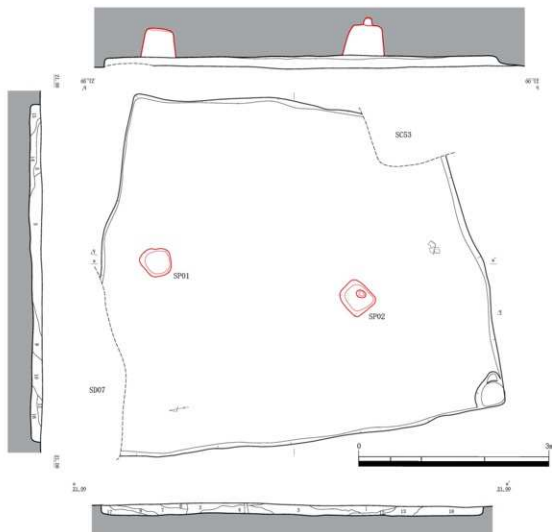
その他、図示した黒色緻密質凝灰岩製の石鎌、砥石・台石・投弾といった少量の石器類と、用途不明の鉄製品1点が出土している。

51号住居 (第105図/図版15)

調査区中央南寄りに位置し、50号住居に切られ、77号住居・8号溝を切る。遺構の中央を覆乱が割平しているため、埋土の状況は不明瞭である。但し覆乱は遺構底面に及んでいないことから、遺構の形状・規模は明らかとなっている。主軸は北東―南西方向で、4柱の構造を採る。長軸5.3×短軸4.8m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。平面プランは隅丸方形を呈し、南辺中央の一部に細溝を掘り込んでいる。柱間に土坑は認められないが、東辺にはテラスを伴う不整形凹形、西辺にはピットを伴う楕円形の土坑がそれぞれ掘り込まれている。形状から、SK02が戸跡であると考えられる。底面にはほぼ全体に黄褐色粘質土で貼床が施されており、貼床下には南辺沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが、中央と北西隅には不整形の掘り込みが認められる。

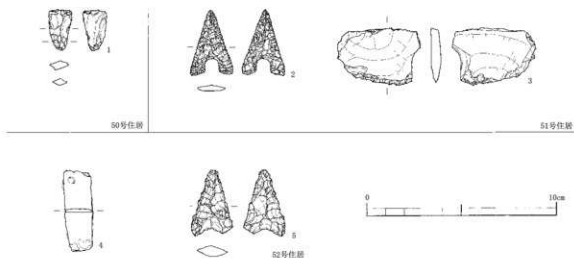
出土遺物 (第107・109図/図版34・42)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、いずれも小片で形状を留めるものはない。甕は口縁部が屈曲

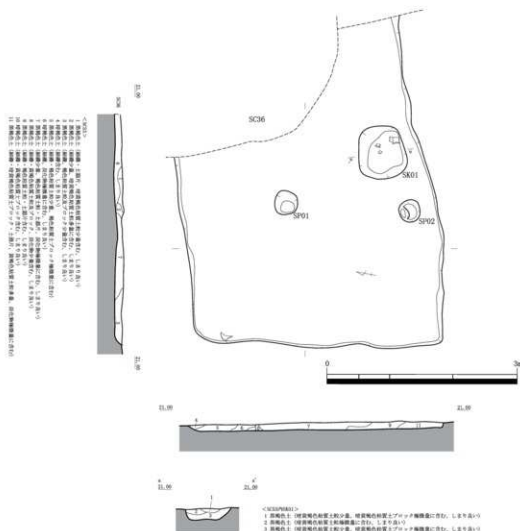


- ＜説明＞
- 1 築城土：築城土層と紅土ブロック少量、土層が厚く、しまり高い
 - 2 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 3 築城土：築城土層と紅土・土層、築城土層とブロック少量、土層が厚く、しまり高い
 - 4 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 5 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 6 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 7 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 8 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 9 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 10 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 11 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 12 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 13 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 14 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 15 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 16 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 17 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 18 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 19 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い
 - 20 築城土：築城土層と紅土・土層少量、築城土層とブロック少量、しまり高い

第106図 52号住居 (S=1/60)



第107図 50・51・52号住居出土石器・鉄器 (S=1/2)



第108図 53号住居 (S=1/60)

して外反するもの。弥生時代後期の所産。図示した完形のミニチュア甕は埋土内から出土している。石器類は黒曜石の石鏃と黒色緻密質安山岩のスクレイパーの他、投擲数点が出土している。

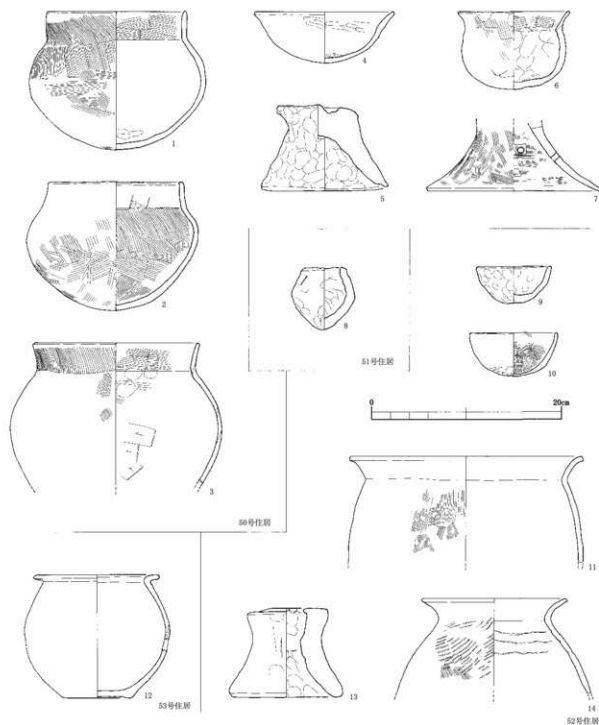
52号住居 (第106図/図版15)

調査区北東寄りに位置し、53号住居・7号溝に切られ、55・61・68号住居、11号溝、1号土壇墓を切る。遺構の大半は切り合い関係がないが、上面を削平されており、残存状況は不良である。主軸は南北方向で、平面プランは不整な方形を呈する。長軸6.1×短軸5.5m、検出面からの深さは最大0.15mを測る。掘り込みの立ち上がりは比較的明瞭に残る。検出、掘削段階では柱穴を検出出来なかったが、下層住居の掘削終了後に相互の掘り込みを確認し、SP01・02がこの遺構の主柱となると判断した。その他、遺構に伴う掘り込みは南西隅で検出したピットのみで、土坑・細溝等は確認されていない。

出土遺物 (第107・109図/図版31・37・42)

埋土から極微量の遺物が出土しているが、小片が多く原型を留めるものはない。甕は体部外面に平行タタキを残すものと、タテハケのみで調整するものとが混在する。鉢類は丸底の底部から立ち上がる小型のもののみが出土している。こちらは平行タタキを施さない。支脚は杵形の系統で上面は平坦な円形となり、指ナデ痕跡を残す粗略なつくりのもの。

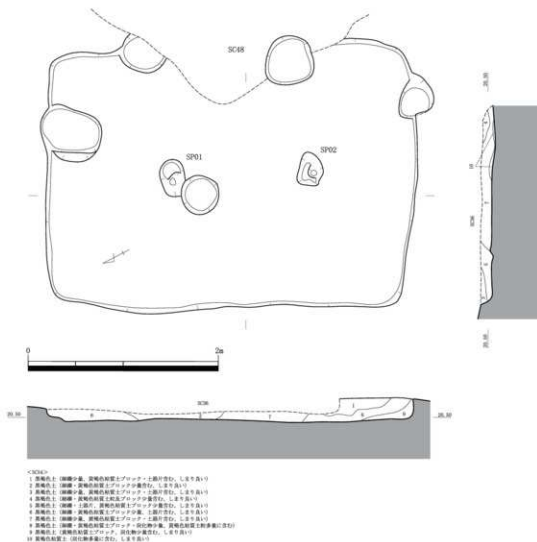
その他、黒色緻密質安山岩の石鏃と鉄製ヤリガンナの小片が出土している。



第108図 50・51・52・53号住居出土土器 (S=1/4)

53号住居 (第108図/図版15)

調査区東端中央に位置し、36・48・52号住居に切られ、54・57・68号住居、11号溝を切る。遺構の東辺は36号住居に破壊されて残存しない。また上面は後世の造成により削平を受けており、遺構の残りは非常に悪い。主軸は東西方向と思われる。東西残存長5.15×南北3.9m。検出面からの深さは最大0.1mを測る。遺構の立ち上がりは緩やかな傾斜となっている。2柱の構造を採ると思われるが、調査段階で主柱となるピットは検出出来ていない。調査完了後、現地状況や切り合う他遺構の図面から主柱の復元を試みたが、西側の柱をSP01と判断したものの、対応するピットは見つけられなかった。南辺沿いのSK01は遺構の縁辺中央部に位置する土坑と思われる。その他、細溝・炉跡といった住居に伴う構造物は確認出来ていない。貼床は遺構全面で認められなかった。



第110図 54号住居 (S-1/40)

出土遺物 (第109図)

埋土・屋内土坑内から微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。甕の形状は口縁が緩んだL字形を呈し、底部が平底となる弥生時代後期初頭のもの。その他、鼓形器台の細片、投弾等が出土している。

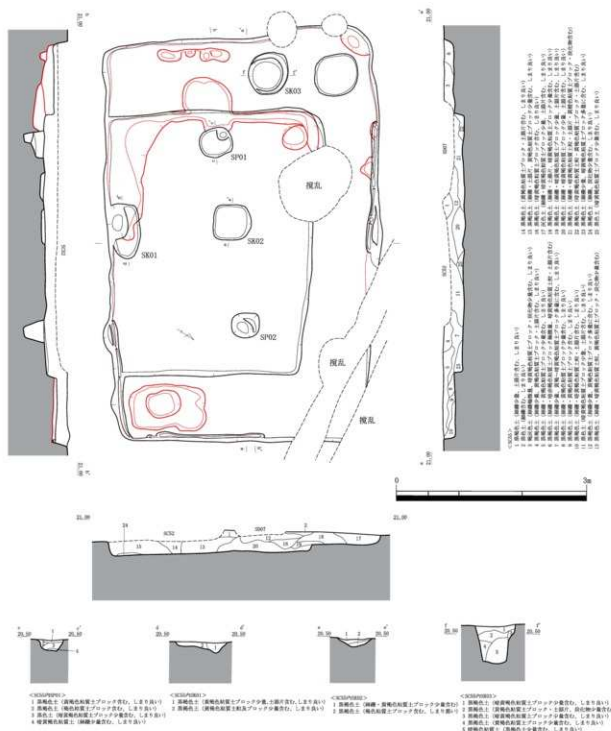
54号住居 (第110図/図版15)

調査区東端中央に位置し、36・48・53号住居に切られ、24号土坑を切る。48号住居に破壊されているため、東辺の詳細は不明である。主軸は北東―南西方向で、平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸5.8×短軸4.2m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。2柱の構造を採ると思われるが、主柱に相当するピットは小型で不整形である。その他、土坑状の掘り込みは遺構縁辺部に4基が認められるが、この遺構に伴うと考えられるものはない。

出土遺物 (第113・117図/図版46)

埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。甕は口縁部が緩いL字形を呈し、底面はやや広い平底となるもの。高杯は胴形口縁で丹塗り痕跡が認められる。弥生時代中期後葉の所産。

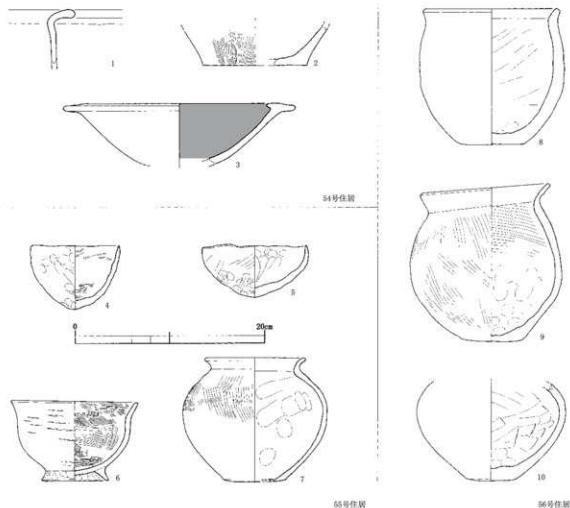
その他、台石、投弾等、石器類が出土している。



第111図 55号住居 (S=1/60)

55号住居 (第111図/図版15)

調査区北東に位置し、52号住居・7号溝に切られ、61・68号住居を切る。主軸は北東-南西方向で、平面プランは長方形を呈する。北東隅が覆乱によって傾平されているが、比較的残存状況は良い。2柱の構造を採り、長軸6.4×短軸4.3m。検出面からの深さは最大0.3mを測る。主柱は主軸から若干ずれるものの、2段掘りで十分な深さがあり、しっかりとした構造となっている。南辺を除く3辺に、幅1.0m、高さ0.1mのベッド状遺構をめぐる。ベッド状遺構は地山の一部を残す段掘りを基本とし、その上面に貼床と同種の粘質土を貼り付けているが、西辺のみはベッド状遺構内部とほぼ同じ高さまで掘り込みを行なったのち、黄褐色粘質土を盛り上げている。柱間には隅丸方形の土坑、南辺沿いの中央にはビットを伴う楕円形の土坑が、西辺のベッド状遺構上には深い掘り込みの円形土坑が確認されている。形状と位置から



第113図 54・55・56号住居出土土器 (S=1/4)

し、胴部に張りを持って平底の底部に繋がる時期のもの。調整は内外面ともハケもしくは工具ナデで、平行タタキの痕跡は認められない。

その他、安山岩・黒曜石の剥片と、図示したガラス小玉1点が出土している。

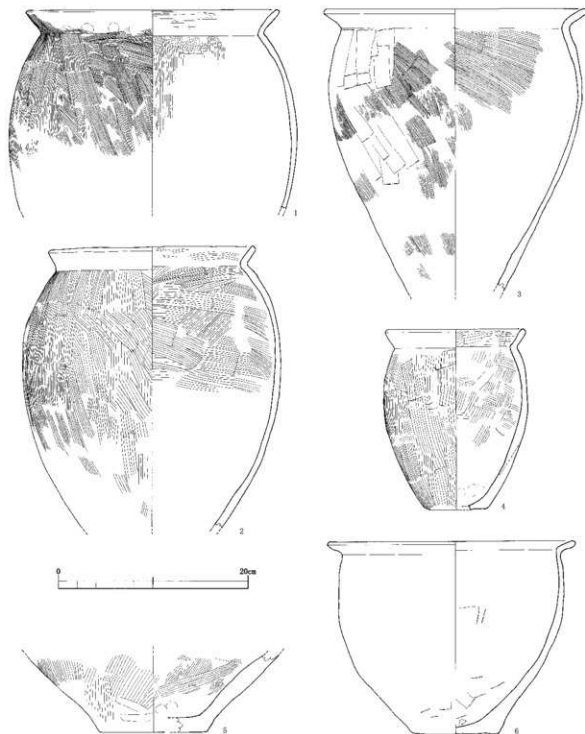
57号住居 (第114図/図版15)

調査区中央東寄り位置し、50・53号住居に切られ、60・65・68号住居、11号溝、1号土壇墓を切る。主軸は北東—南西方向で、4柱の構造を持つ。北隅に段掘りと粘質土貼付を併用したベッド状遺構を検出しているが、下層の11号溝との差異が明瞭に確認出来ず、北西辺との接点は不明となっている。柱間に隅丸方形と長方形の2基の土坑を掘り込んでいる。SK01は東西両脇に小型のビットを伴っており、住居の上部構造もしくはSK01の補助的な役割を果たしたものと思われる。SK02は埋土下層に少量ではあるが焼土を含み、こちらが埴跡であると考えられる。壁治いには部分的かつ断続的に細溝が認められる。貼床は遺構のどこからも確認されていない。

出土遺物 (第116・117図/図版32・38・41・42・45)

床面直上及びSK01内を中心に少量の遺物が出土している。甕・壺を主体とする大型のものが多いが、完形に復元出来るものはわずかである。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、肩部で張りを持つもの。壺は底部のみの出土であるが、平底から上部へ大きく広がるもの。弥生時代後期前葉の所産。

石器類は黒色緻密質安山岩の石鏃、石錐、半加工品その他、金属製品の研磨に使用したと思われる砥石が出土している。砥石は遺物の中ではやや異質であり、上面遺構埋土からの混入品である可能性もある。

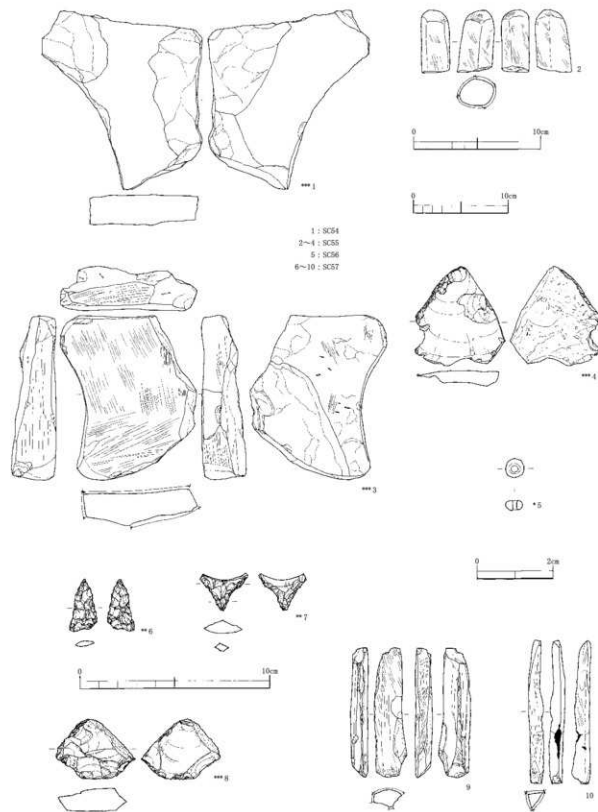


第116図 57号住居出土土器 (S=1/4)

58号住居 (第115図/図版16)

調査区中央南西寄りに位置し、32・41・47号住居に切られる。検出状況からは8・10号溝との先後関係は不明である。遺構の大半は上面遺構に削平されており、北西隅の一角が残存のみとなっている。遺構の規模、支柱数、内部構造等は全て不明、北西隅にピットを1基だけ確認している。平面プランは方形あるいは長方形を呈すると思われる。

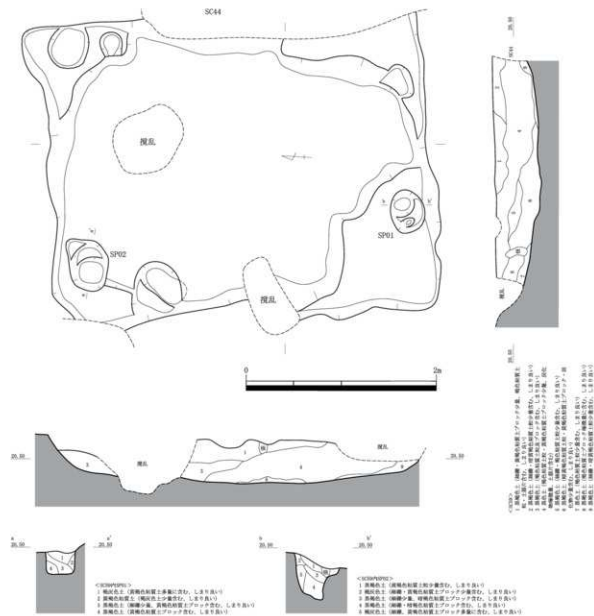
出土遺物は極めて微量であり、いずれも細片のため時期を示すものではない。



第117図 54・55・56・57号住居出土石器 (S=1/3, *付はS=1/1, **付はS=1/2, ***付はS=1/4)

59号住居 (第118図/図版16)

調査区南東隅に位置し、44号住居に切られ、65号住居、12号溝、26号土坑を切る。主軸は南北方向で、長軸4.0×短軸3.2m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。上面からの削平はわずかであるものの、遺構そのものの形状が不明瞭であり、壁面の立ち上がりも緩やかな傾斜となっている。主柱になるピットは

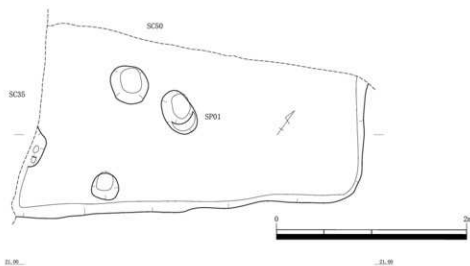


第118図 59号住居 (S=1/40)

調査段階では確認出来ない。東辺沿いでは柱穴が認められないが、おそらくSP01・02とともに4柱の構造を探ると思われる。平面プランは長方形であるが、縁部は崩落のためか不整なラインを描く。遺構の4隅にはテラス状の段差が見られる。大きさはまちまちで形状も不整だが、段掘りで構築されていることから、ベッド状造構的な役割を果たしたと考えられる。その他、炉跡等の住居に伴う施設は確認していない。

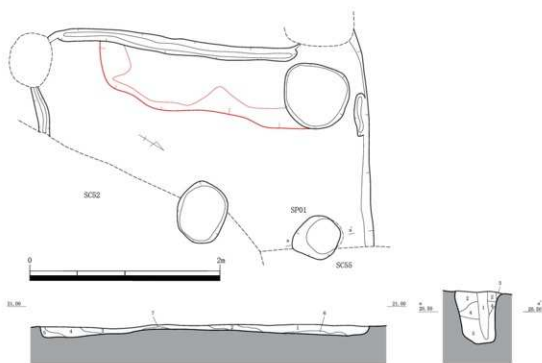
出土遺物

埋土から土器・石器の出土があるが、遺構の残存状況と比較すると非常に少量である。またいずれも小片のため、図示は控えた。甕類は口縁部が外に短く屈曲し、端部にキザミを持つものと、口縁部から肩部へ至る箇所にて接合による段差を持つものが見られる。弥生時代前期前葉の所産だが、混入品か。その他、石斧小片、投擲等の微量の石器が出土している。



- <SC30>
- 1 築造土 (築造層、自己採り中量、褐色灰層と粘埃層、土層中厚約)
 - 2 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 3 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 4 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 5 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 6 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 7 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)

第119図 60号住居 (S=1/40)



- <SC32>
- 1 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 2 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 3 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 4 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 5 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 6 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 7 築造土 (粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)

- <SC35/SP01>
- 1 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 2 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 3 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 4 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 5 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 6 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)
 - 7 築造土 (築造層、粘埃層、粘埃層とアトツク少量、土層中厚約、シズキ土)

第120図 61号住居 (S=1/40)



60号住居 (第119図/国版16)

調査区中央南東寄りに位置し、35・50・57号住居に切られ、65号住居を切る。上面遺構の削平より南東隅を残すのみだが、35号住居との切り合い部分でわずかに西側の立ち上がりか認められることから、主軸は北西―南東方向、方形もしくは長方形の平面プランを持つ、2柱の構造であると思われる。東西3.8×南北残存長2.1m、検出面からの深さは0.35mを測る。東・西壁面からの位置を根拠にSP01を主柱と判断した。これと対になるピットは、上面遺構調査時に検出したものも含めて検討したが、確認出来ない。遺構の残存する範囲では、屋内土坑、壁細溝等の住居に伴う施設は認められなかった。床面に貼床は施されていない。

出土遺物 (第127図/国版40)

埋土から極微量の土器片と、砥石・投彈等が出土しているが、細片のため一部の図示に留めている。土器は口縁部がくの字形に屈曲する甕を含み、弥生時代後期前葉の所産と思われる。

61号住居 (第120図/国版16)

調査区中央北東寄りに位置し、52・55・68号住居に切られる。上面遺構に削平され、東半分は残存していない。主軸は北東―南西方向、平面プランは長方形を呈すると思われる。南北3.5×東西残存長2.2m、検出面からの深さは最大0.15mを測る。西壁沿いと南北両辺に断続的に細溝の掘り込みが認められる。埋土の状況からSP01を主柱と想定したが、上面遺構で検出したものを含め、対になるものは確認出来なかった。位置からは2柱とも4柱とも考えられる。52号住居と切り合う部分及び北西隅に浅い土坑状の掘り込みを確認している。底面には黄褐色粘質土で薄く貼床を施し、西辺沿いに湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが見られる。

出土遺物 (第127図/国版45)

遺物の出土は極めて微量であった。時期を示すものは、弥生時代後期の甕片、柱状片刃石片の薄片の2点のみである。

62号住居 (第121図/国版16)

調査区北西寄りに位置し、29号住居に切られ、70・74・76・80号住居を切る。主軸は南北方向で、長軸5.8×短軸3.9m、検出面からの深さは0.6mを測る。遺構の残存状況は良好である。2柱で平面プランは長方形を呈し、柱間に不整形の小型の土坑を持つ。北辺を中心に、東西部の中央部分にかけて壁沿いに細溝を掘り込んでいる。北辺全体と南東・南西部分に幅0.8~1.3m、高さ0.15mの段掘りで構築したベッド状遺構を検出している。南辺中央部に空白があるが、ここには主柱の補助と思われるピットが掘り込まれているため、出入口ではないと考えられる。南西隅のベッド状遺構上にはもう一段テラス状の高まりがあり、この部分が出入口に相当すると思われる。床面全体に黄褐色粘質土で貼床を施し、貼床下には床面全体がテラス状を呈する段差を持つ。

出土遺物 (第122・127図/国版32・34・41)

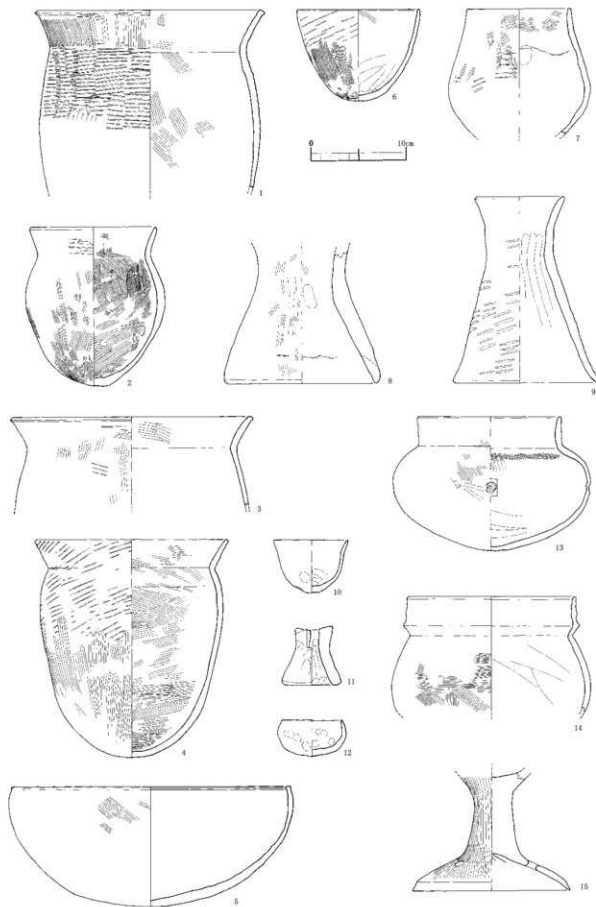
床面直上を中心に、埋土からまとまった量の遺物が出土している。器種は甕・鉢・器台の他、ミニチュア土器も含む。甕は頸部の屈曲が緩いものからくの字形へ変化し、外面の平行タタキ履勢からタテハケ履勢へ転換する時期のもの。鉢は外面に平行タタキ痕跡を残すもの。甕は鉢の変形過程で口縁部の直立が緩いものと、胴部がしっかりと張った丸底を呈するものとが混在している。器台は鼓形の系統で外面に平行タタキの痕跡が見られる。その他、口縁部が屈曲して直立する広口壺が1点出土している。

石器の出土はスクレイパー・台石の他、微量の投彈のみである。鉄製品は認められない。

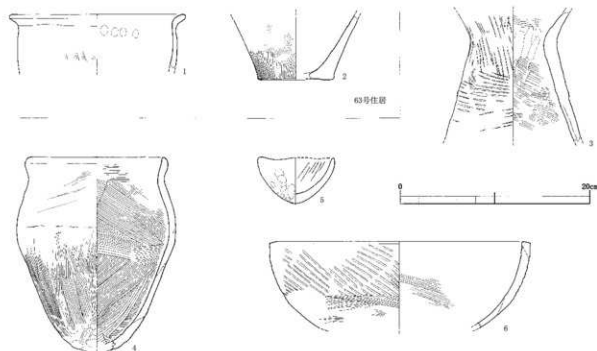
63号住居 (第124図/国版16)

調査区南西隅に位置し、34・47号住居に切られる。遺構のほとんどが削平されているが、残存するピットから、主軸は東西方向と判断した。南北4.6×東西残存長最大2.3m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは長方形と想定され、2柱で東側にテラス状の段差を持つがベッド状遺構と判断出来るほどの幅はない。屋内土坑と思われる遺構も床面からは確認されていない。



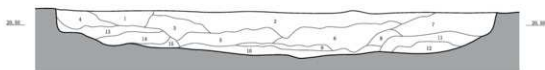
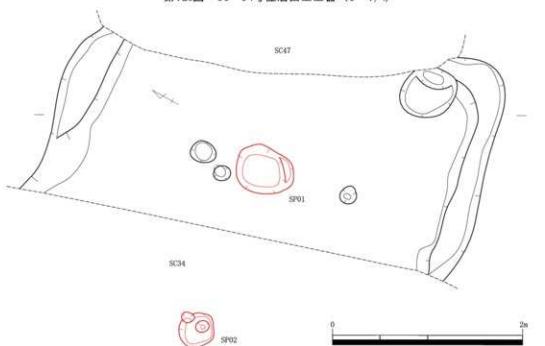


第122図 62号住居出土土器 (S=1/4)



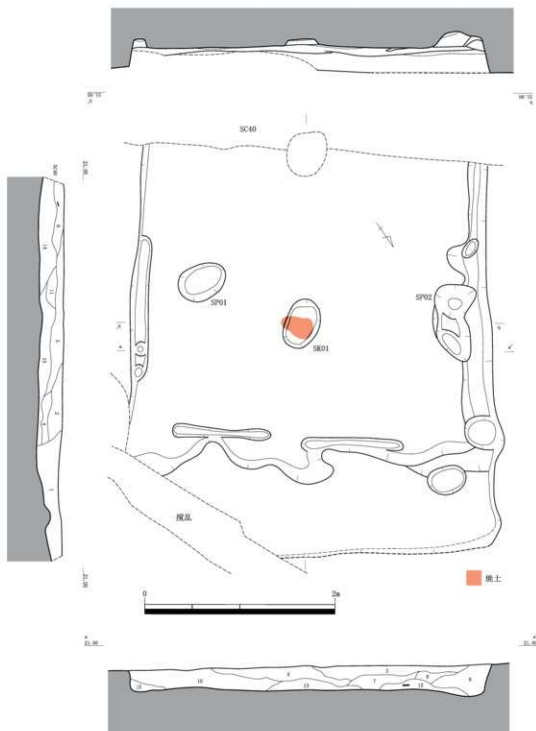
第123図 63・64号住居出土土器 (S=1/4)

64号住居



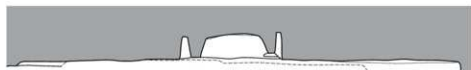
- <説明>
- 1 築地土 1層壁・柱礎部埋戻土(アーク)・築地土層の遺存。土中埋没。
 - 2 築地土 1層壁・柱礎部埋戻土(土間)・埋戻土層のアーク部遺存。土中埋没。
 - 3 築地土 埋戻土層(アーク)・柱礎部遺存。土中埋没。
 - 4 築地土 埋戻土層(アーク)・柱礎部遺存。土中埋没。
 - 5 築地土 1層壁・埋戻土層(アーク)層・埋戻土層(柱礎部)の遺存。土中埋没。
 - 6 築地土 1層壁・埋戻土層(アーク)層・埋戻土層(柱礎部)の遺存。土中埋没。
 - 7 築地土 1層壁・埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 8 築地土 1層壁・埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 9 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 10 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 11 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 12 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 13 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。
 - 14 築地土 埋戻土層(アーク)層の遺存。土中埋没。

第124図 63号住居 (S=1/40)



- 【説明】
- 1 雑草・腐植土・砂礫層、灰白粘板層（ブロッコ）が露出している箇所
 - 2 黒褐色土（埋藏物埋没層）の1層、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 3 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 4 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 5 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 6 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 7 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 8 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 9 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 10 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 11 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 12 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 13 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 14 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 15 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 16 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 17 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 18 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 19 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く
 - 20 黒褐色土（埋藏物埋没層）、埋藏物埋没層（ブロッコ）層、埋没層内、土を厚く

第125図 64号住居 (S=1/40)



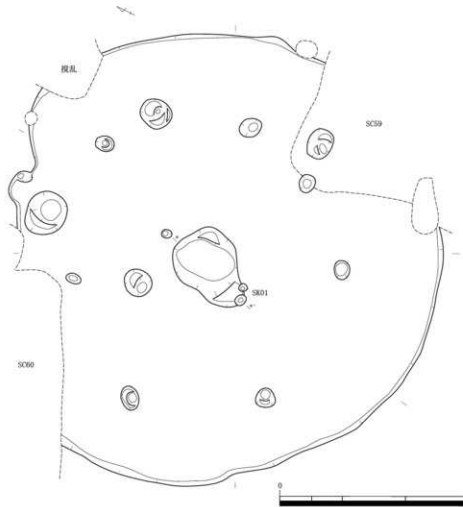
北西

北東

西



南



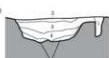
北西

北東



北西

北東

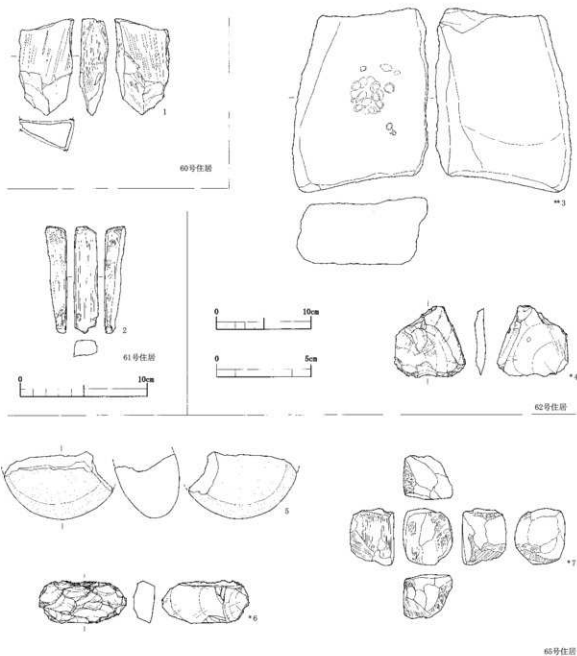


- <穴壁内埋設品>
- 1 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
 - 2 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
 - 3 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
 - 4 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
 - 5 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
 - 6 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m

- 7 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 8 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 9 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 10 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 11 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 12 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 13 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 14 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 15 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 16 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 17 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 18 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 19 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 20 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 21 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 22 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 23 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 24 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 25 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 26 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 27 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 28 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 29 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 30 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 31 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 32 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 33 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 34 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 35 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 36 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 37 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 38 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 39 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 40 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 41 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 42 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 43 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 44 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 45 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 46 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 47 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 48 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 49 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 50 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 51 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 52 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 53 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 54 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 55 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 56 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 57 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 58 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 59 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 60 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 61 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 62 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 63 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 64 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 65 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 66 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 67 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 68 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 69 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 70 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 71 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 72 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 73 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 74 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 75 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 76 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 77 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 78 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 79 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 80 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 81 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 82 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 83 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 84 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 85 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 86 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 87 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 88 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 89 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 90 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 91 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 92 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 93 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 94 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 95 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 96 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 97 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 98 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 99 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m
- 100 板敷土 1.00m×0.50m×0.10m

第126図 65号住居 (S-1/60)





第127図 60・61・62・65号住居出土石器 (S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/4)

出土遺物 (第123図)

遺構そのものの残存状況が不良なため、遺物の出土も極わずかである。時期を示すものとしては、弥生時代後期初頭の巖片数点が認められるのみである。

64号住居 (第125図/図版16)

調査区中央北寄りに位置し、40号住居に切られる。北辺は後世の遺成により削平されており、立ち上がりは残存していない。主軸は東西方向で2柱の構造を採る。東西3.8×南北残存長4.2m、検出面からの深さ0.3mを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間に楕円形の浅い土坑を検出しており、上面に焼土の広がり認められることから炉跡と判断した。北辺には幅1.0m、高さ0.1mの段掘りによって構築されたベッド状遺構が見られる。東西辺及びベッド状遺構の下端に沿って細溝を検出している。ベッド状遺構の端部は不整なラインを描いており、本来なら壁沿いに掘削される細溝がベッド状遺構の段差の際に見られることから、この不整なラインの部分までが1軒の住居となる可能性もある。

出土遺物 (第123図/図版34)

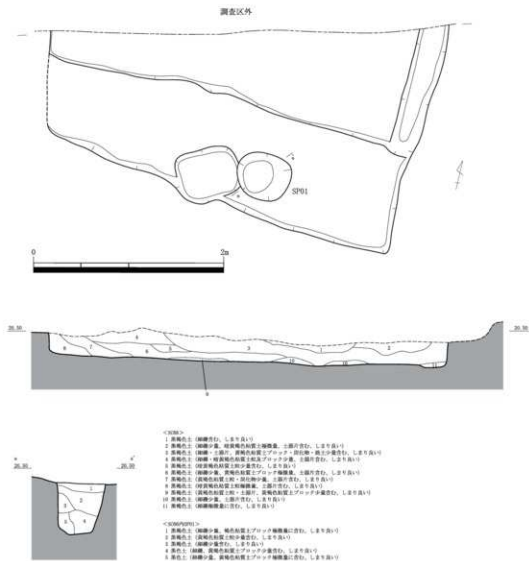
遺物の出土は極めて少量で、原型を留めるものはほとんどない。甕は頸部に明瞭な屈曲を見せない、内外面ともハケ調整のもの。器台は鼓形の系統で外面に平行タキの痕跡を残す。弥生時代後期末の所産。

65号住居 (第126図/図版16)

調査区南東寄りに位置し、59・60号住居に切られる。平面プランは北端が若干不整な形状であるものの、ほぼ正円形を呈する。直径7.3m、検出面からの深さ0.3mを測る。中央にビット2基を伴う土坑を持ち、その周縁に6基の柱穴がめぐり、いわゆる松菊里型と呼ばれる形状をとる。この他にも遺構の床面では複数のビットが検出されているが、柱穴としては不整な形状であったり、他の柱穴との位置から遺構に伴わないものと判断している。

出土遺物 (第127図/図版40・41・45)

埋土から遺物の出土は認められるものの、極少量である。土器類はいずれも細片で弥生時代前期後葉の所産と思われる。石器類は図示したスクレイパー・磨石と、石材は不明だが研磨痕跡のある半加工材、投



第128図 66号住居 (S=1/40)

弾が出土している。

66号住居 (第128図/図版17)

調査区北東隅に位置し、27号住居に切れ9号溝を切る。北半分は調査区外へ延長するため、詳細な規模は不明である。また、南西隅は後世の削平により遺構の立ち上がりが残存していない。床面で検出したピットの状況から南北を主軸にし、南北両辺にベッド状遺構を作うと考えられる。南北残存長1.95×東西残存長南辺で検出したベッド状遺構は幅1.1m、高さ0.15m、段掘りで構築されている。東辺に細溝の掘り込みがある他は、屋内土坑等の住居に伴う施設は見られない。また貼床も認められない。

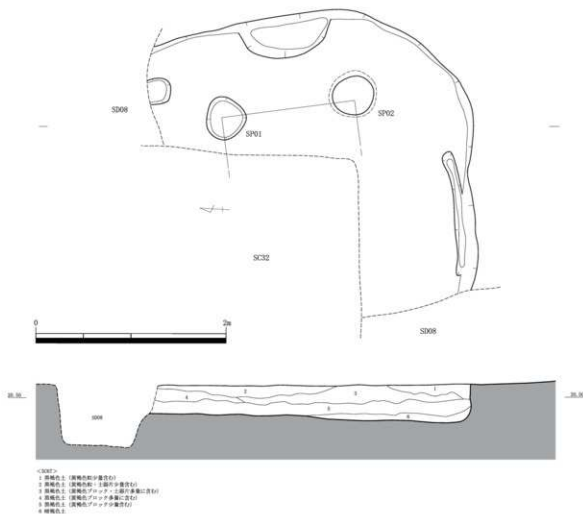
出土遺物 (第135図/図版36・38)

埋土から遺物の出土は認められるが、極めて少量で細片のため図示は控えた。土器は口縁部がくの字形に屈曲して平底の底部へ延びる、弥生時代後期の所産。

その他、鉄製の横鎌片、鎌状の鉄製品が出土している。石器の出土は認められない。

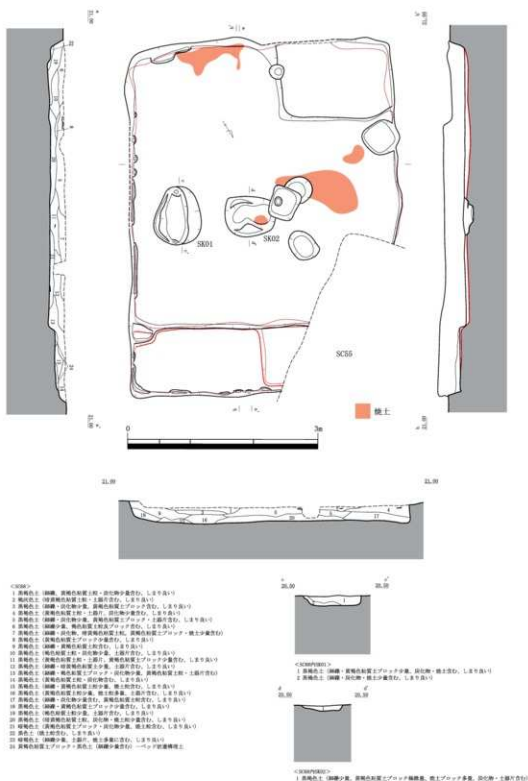
67号住居 (第129図/図版17)

調査区中央南西寄りに位置し、32号住居、8号溝に切られる。残存する掘り方・ピットの状況から、4



第129図 67号住居 (S=1/40)

柱で平面プランは隅丸方形と想定される。主軸は東西方向と思われる。南北残存長3.25×東西3.3m、検出面からの深さは最大0.4mを測る。東辺沿いに半円形のテラス状の高まりを持つ。柱間に相当する位置であることから、この部分が出入口であったと考えられる。南辺沿いの一部分に細溝が掘り込まれている。他は、住居に伴う施設と想定される掘り込み等は認められない。また、床面に貼床と見られる痕跡は確認されていない。



第130図 68号住居 (S=1/60)



出土遺物 (第132回)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で原型は留めていない。甕はやや緩んだL字形を呈し、肩部に断面三角の貼付突帯を持つ、大型のもの。同時期の甕蓋、口縁部に穿孔を施した小型甕も出土している。弥生時代中期後葉の所産。

その他、石砲丁の小片、投弾等、微量の石器が出土している。

68号住居 (第130回/国版17)

調査区北東寄りに位置し、52・53・55・57号住居に切られ61号住居、11号溝、1号土壇墓を切る。主軸は北東—南西方向で、長軸5.7×短軸4.3m、検出面からの深さ0.27mを測る。平面プランは長方形で2柱と考えられるが、調査段階で主柱は検出できていない。整理作業時に切り合い遺構で検出されたビット群を含め、主柱の検討を行なったが、該当すると判断出来るものは見られなかった。南西隅と北辺に、幅1.1m、高さ0.15mの段掘りで構築されたベッド状遺構を持つ。遺構の東半部を中心に断続的な壁溝が認められる。床面中央には不整形の浅い土坑があり、土坑内及び周辺に焼土の広がりが見られることから歩跡と判断した。ベッド状遺構上も含め、全体に黄褐色粘質土でしっかりとした貼床を施す。

出土遺物 (第132・135回/国版32・35・40・41・45)

埋土より一定量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めない。甕類は頸部が明瞭に屈曲し、器壁が肉厚になる時期のもの。一部頸部に貼付突帯を持つもの含まれる。支脚は杵形の系統で外面に平行タキ痕跡を残す。弥生時代後期の所産。

石器類は図示した黒色緻密質安山岩のスクレイパー・加工途中の原石、金属製品の研磨に使用したと思われる砥石類、ガラス小玉の他、投弾が少量出土している。

69号住居 (第4回/国版17)

調査区中央北寄りに位置し、42号住居に切られ71号住居を切る。平面プランは不整形な形状であるが、主軸は東西方向、2柱の構造を探ると思われる。長軸7.5×短軸残存長4.9m、検出面からの深さ0.25mを測る。主柱は主軸から若干ずれているが、掘り込みの深さ、位置関係からSP01・02と判断した。柱間に不整形の浅いビットが確認されており、微量ではあるが焼土の広がりも見られることから、歩跡の可能性が考えられる。床面には黄褐色粘質土で薄く貼床が施され、貼床下には北東—南西方向の溝状の掘り込みが認められる。その他、遺構に伴う施設は認められない。

出土遺物 (第132・135回/国版32・36・37・40・46)

埋土から遺物の出土は認められるものの、極めて少量でいずれも細片である。甕類は口縁部の屈曲が認められず、体部外面に平行タキの痕跡を明瞭に残す時期のもの。鉢は口縁部が直立する傾向があるが、胴部に張りがなく古手の形状を示す。器台は鼓形の系統で外面に平行タキの痕跡を残す。

石器類は台石・磨石と投弾のみが出土している。これに対して完形に近い鉄製ヤリガンナ、摘鎌が出土しており、金属製品が優位となっている。

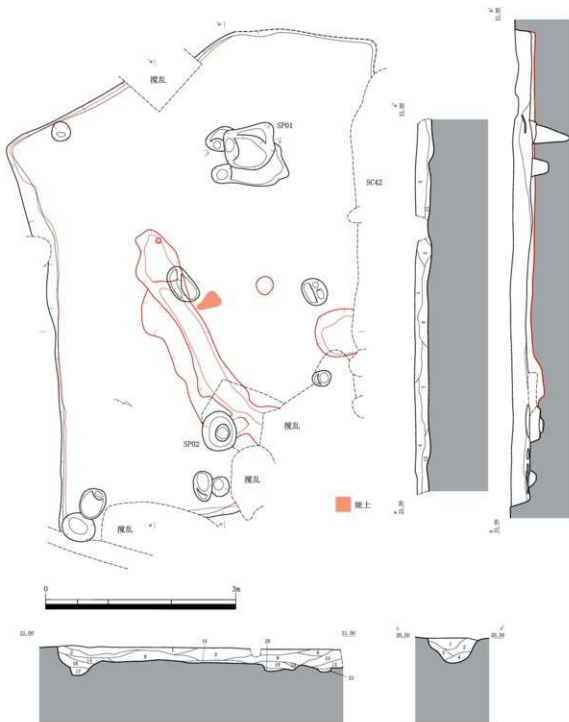
70号住居 (第133回/国版17)

調査区北西隅に位置し、62号住居に切られ、74・75・76・79・80号住居を切る。西辺を62号住居に削平されているが、北辺で東西方向の規模が判明している。主軸は南北方向を思われ、長軸5.8×短軸4.45m、検出面からの深さ0.5mを測る。2柱の構造を探ると思われるが、62号住居で検出されたものを含めて検討した結果、主柱と判断出来る柱穴は認められなかった。東辺沿いの小型ビットを伴う4柱の可能性もある。床面には地山と同色の粘質土を用いた貼床は認められなかったが、溝状の掘り込みが確認されていることから、最下層の黄褐色粘質土ブロックを含んだ黒褐色土が貼床であった可能性が考えられる。南辺の中央部には段掘りで構築されたテラス状の高まりがあり、この部分が出入口であったと想定される。

出土遺物 (第138回)

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は困難であった。甕は頸部に平行タキ痕跡を残す貼付突帯を持ち、胴部下方にも同様の突帯をめぐらすと思われる、大型のもの。器台は鼓





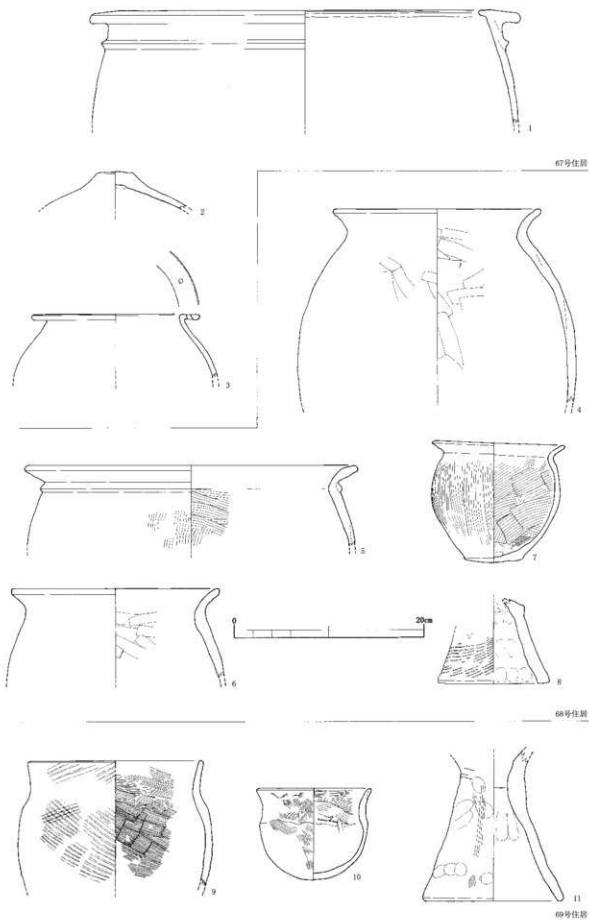
<SP01>

- 1 基礎土 1 礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 2 基礎土 2 基礎土が覆った中層土層、土層が浅く、土層が深い。
- 3 基礎土 3 基礎土 1と同じく、基礎土が覆った中層土層に存在し、土層が深い。
- 4 基礎土 4 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 5 基礎土 5 基礎土 1と同じく、基礎土が覆った中層土層に存在し、土層が深い。
- 6 基礎土 6 基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層、土層が浅く、土層が深い。
- 7 基礎土 7 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 8 基礎土 8 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 9 基礎土 9 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 10 基礎土 10 基礎土が覆った土層に存在し、土層が深い。
- 11 基礎土 11 基礎土、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層、土層が浅く、土層が深い。
- 12 基礎土 12 基礎土、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 13 基礎土 13 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、土層が深い。
- 14 基礎土 14 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 15 基礎土 15 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 16 基礎土 16 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 17 基礎土 17 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 18 基礎土 18 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 19 基礎土 19 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 20 基礎土 20 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 21 基礎土 21 基礎土、礎石、基礎土が覆った土層、土層が浅く、礎石、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。

<穴SP01>

- 1 穴 1 穴 1 穴、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 2 穴 2 穴 2 穴、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 3 穴 3 穴 3 穴、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。
- 4 穴 4 穴 4 穴、基礎土が覆ったフクロノミヤコ土層に存在し、土層が深い。

第131図 69号住居 (S=1/60)



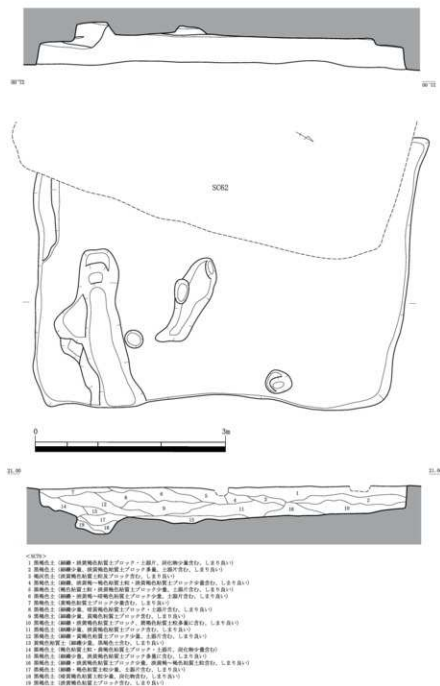
第132図 67・68・69号住居出土土器 (S=1/4)

形の系譜で、上部が内側へ屈曲するもの。調整に平行タタキは認められない。鉢は口縁部の直立と胴部の張りが比較的目立つもの。弥生時代後期末の所産。

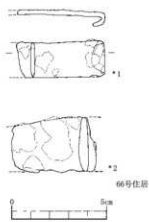
石器・鉄器類は皆無に近く、わずかに投弾1点が確認されているのみである。

71号住居 (第134図/図版17)

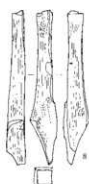
調査区北西に位置し、69号住居・31号土坑に切られ、22号土坑を切る。東辺を除く遺構の3辺は上面遺構の削平を受けておらず、原型を保っているはずだが、平面プランは極めてひずみのある方形である。検出・調査段階では埋土の状況から1軒の住居と判断したが、小型の方形住居と切り合う、あるいは北東側にベッド状遺構を持っていた可能性もある。主軸は南北方向で、長軸最大4.6×短軸4.7m。検出面からの深さは0.3mを測る。2柱の構造を採り、ピットの規模・形状からSP01・02を主柱と判断したが、南側はSK01に伴うピットが主柱となる可能性もある。柱間にテラスを持つ楕円形の浅い土坑が、南辺中央に



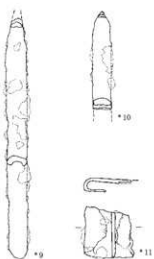
第133図 70号住居 (S=1/60)



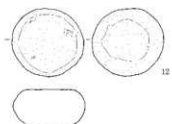
66号住居



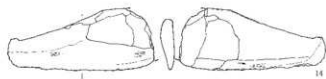
68号住居



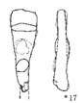
69号住居



69号住居



71号住居



76号住居

第135図 66・68・69・71・76号住居出土土製品・石器・鉄器
(S=1/3、*付はS=1/2、**付はS=1/1、***付はS=1/4)



72号住居 (第136図/図版17)

調査区南東隅に位置し、遺構の大部分が調査区外へ延長する。東辺は擾乱によって破壊されており、遺構の規模・構造の詳細は不明である。北辺の状況から、主軸は北東—南西方向と考えられる。東西残存長4.2×南北残存長1.9m、検出面からの深さは最大0.45mを測る。東辺に段掘りによって構築された、高さ0.18mのベッド状遺構を持つ。北辺から東辺にかけて壁沿いに細溝を掘り込んでいる。検出した範囲内では主柱は認められないが、調査区内で確認している他遺構と比較して判断すると、2柱の構造を採ると思われる。炉跡及び貼床の痕跡は認められない。

埋土から極微量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は不可能だった。

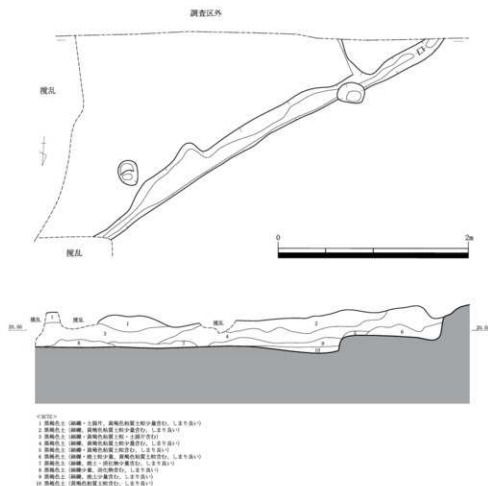
73号住居 (第137図/図版17)

調査区西端中央に位置し、29号住居に切られる。遺構の大部分は調査区外へ延長する。北辺は擾乱に削平されており、立ち上がりは残存していない。主軸は東西方向と思われ、南北4.3×東西残存長0.95m、検出面からの深さ最大0.45mを測る。南東隅にピットを伴う他は、検出した範囲内で遺構に伴う施設は確認されていない。また貼床の痕跡も認められない。

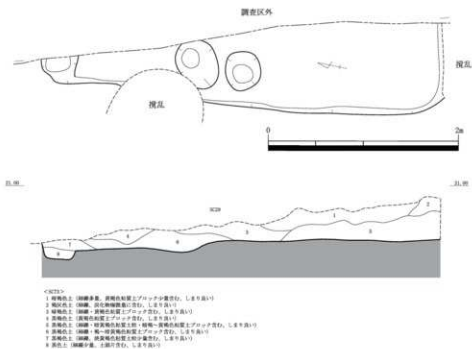
大型の土坑の可能性もあるが、他の検出住居と規模が類似することから、ここでは住居として扱っている。

出土遺物 (第138図)

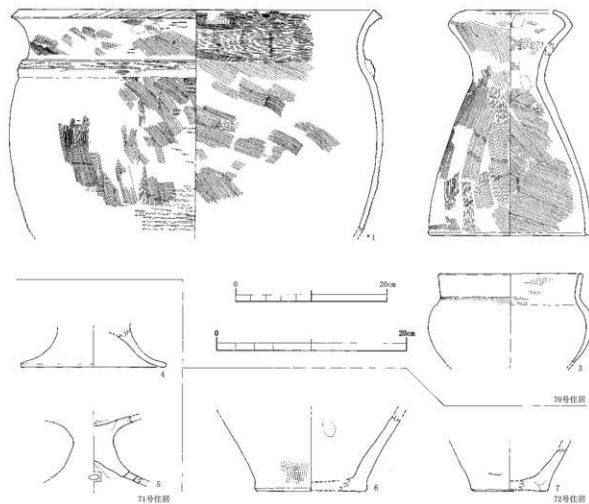
遺物は土器の細片が微量に出土するのみである。図示した甕の底部は弥生時代中期末の所産。石器・鉄製品等の出土は皆無であった。



第136図 72号住居 (S=1/40)



第137図 73号住居 (S=1/40)

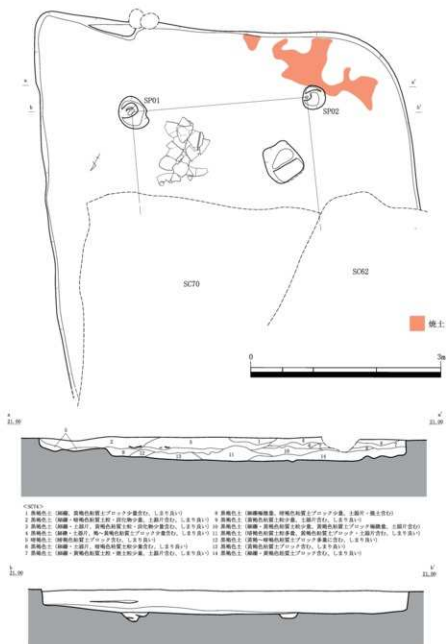


第138図 70・71・73号住居出土土器 (S=1/4、●付はS=1/5)

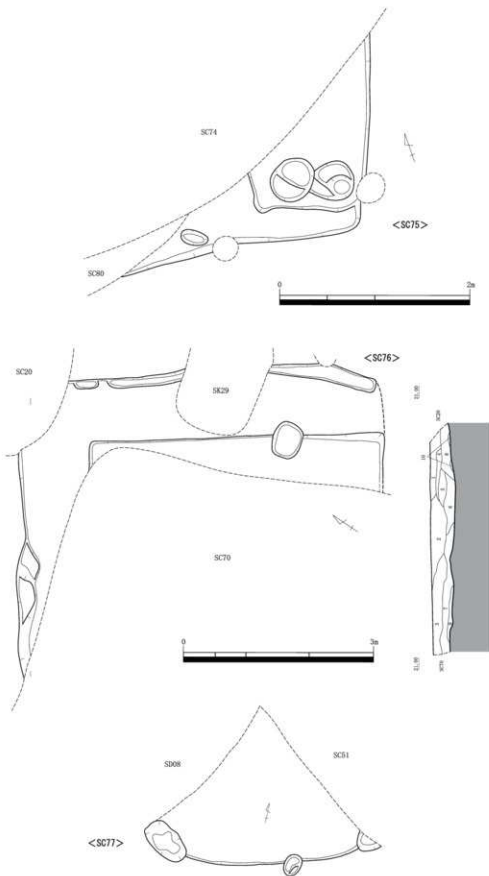
74号住居 (第139図/図版18)

調査区西端に位置し、62・70号住居に切られ、75・76・79・80号住居を切る。北辺は62・70号住居に大幅に削平されているため詳細は不明である。主軸は北西—南東方向で、南北残存長6.2×東西5.8m、検出面からの深さ最大0.35mを測る。4柱の構造を採ると考えられるが、柱穴と判断したピットは比較的浅く、東西方向の2柱である可能性もある。北側の2柱については62・70号住居内で検出されたピット群を検討したものの、対応するものが確認出来なかった。SP02の北西に不整形の浅い土坑を検出しているが、用途は不明である。また遺構床面の南西隅では境土の広がりが見られたが、痕跡の掘り込みは確認されていない。南東隅は住居の床面と比較するとやや高い傾向があるが、ベッド状遺構と判断出来るほどの明瞭な段差ではなかった。

遺構図にも示しているが、床面から大型の土が出土している。接合の結果、ほぼ完形となったが、遺構の検出段階では墓坑のラインは確認されておらず、また遺構掘削後も覆棺墓の存在を示唆する痕跡が認められなかったため、住居に伴う遺物と判断している。

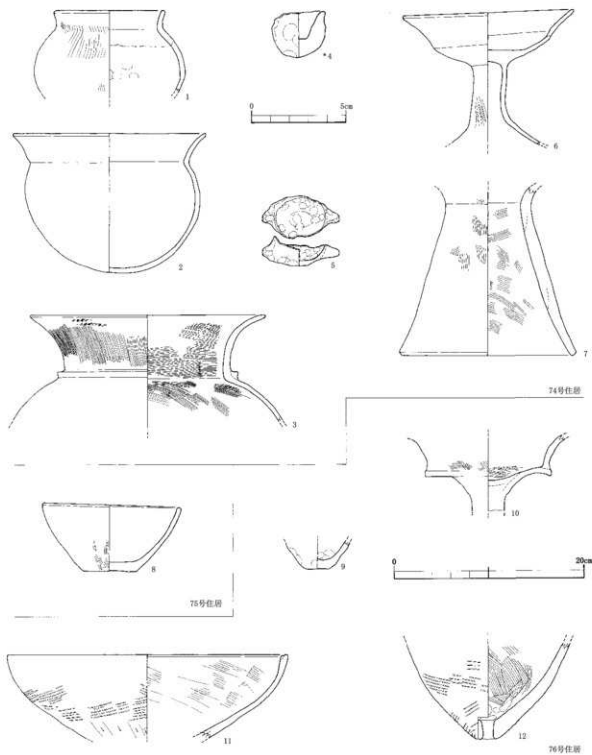


第139図 74号住居 (S=1/60)



1. 本図は、SC74・SC76・SC77の各坑の平面図、断面図を示す。SC74・SC76・SC77の各坑は、いずれも、北東-南西に開口する。SC74・SC76・SC77の各坑は、いずれも、北東-南西に開口する。SC74・SC76・SC77の各坑は、いずれも、北東-南西に開口する。

第140図 75・76・77号住居 (75・S=1/40, 76・77・S=1/60)



第141図 74・75・76号住居出土土器 (S=1/4、*付はS=1/2)

出土遺物 (第101・141図/図版32・33・34)

埋土から少量の遺物が出土しているが、形状を留めるものは極わずかである。甕は頸部が屈曲して外反する口縁部を持つ丸型ものと、頸部に断面三角の胎付突帯を持つもの、床面直上で出土した大甕で体部に2条の突帯をめぐらすものが見られる。器台は鼓形の系統だが、外面に平行タタキは認められない。高杯は杯部内面にわずかに段を持つもの。ミニチュア土器は粗悪な甕と把手付鉢か。弥生時代後期後葉の所産。その他、図示していないが、投擲少量と用途不明の鉄製品が出土している。

75号住居 (第140図/図版18)

調査区西端中央部に位置し、74・80号住居に切られる。近接する79号住居との先後関係は検出状況からは不明である。遺構検出時には79号住居と同一で1軒の住居を構成すると想定していたが、74号住居に切られた東辺が長大になること、北辺・南辺それぞれの方向が揃わないことから、2軒の住居であると判断した。遺構の大半は上面遺構に削平されており、主軸・規模・構造等は全て不明である。南北残存長2.1×東西残存長2.5m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。貼床は認められない。

出土遺物 (第141図/図版32)

埋土から極少量の遺物が出土しているが、時期を示すものは図示した1点のみである。弥生時代中期末の所産。その他、投擲数点が出土している。

76号住居 (第140図/図版18)

調査区西端中央部に位置し、20・62・70・74号住居、29号土坑に切られる。但し74号住居とは先後関係が不明瞭であった。西辺は上面遺構に大幅に削平されており、詳細は不明である。残存部から、主軸は東西方向、2柱の構造を採ると思われる。南北5.8×東西残存長4.8m、検出面からの深さ0.45mを測る。東・北辺に幅1.1m、高さ0.1mの段掘りによって構築されたベッド状遺構を持つ。北辺の中央に相当すると思われる部分に狭いテラス状の痕跡があり、この位置が出入口であったと想定される。主柱は切り合い遺構内で検出されたピットも含めて検討したが、該当するものは確認出来なかった。

出土遺物 (第135・141図/図版36)

埋土内から少量の遺物が出土している。鉢は真直ぐに延びた体部が口縁部で内湾するもの。高杯は杯部が明瞭な屈曲を持ち、口縁部に向かって外反するもの。甕は底部が突り尖味で穿孔が1箇所のみ施されている。鉢・甕には外面に平行タタキの痕跡が残る。

77号住居 (第140図/図版18)

51号住居・8号溝に切られる。直径6.5m前後の円形住居と思われる。規模・形状から円形住居の一部と判断したが、8号溝の内部及び51号住居の北西部分には遺構の延長は認められない。造成時の削平により消滅したか。また、埋土内に遺物は一切確認されていない。

78号住居 (第142図/図版18)

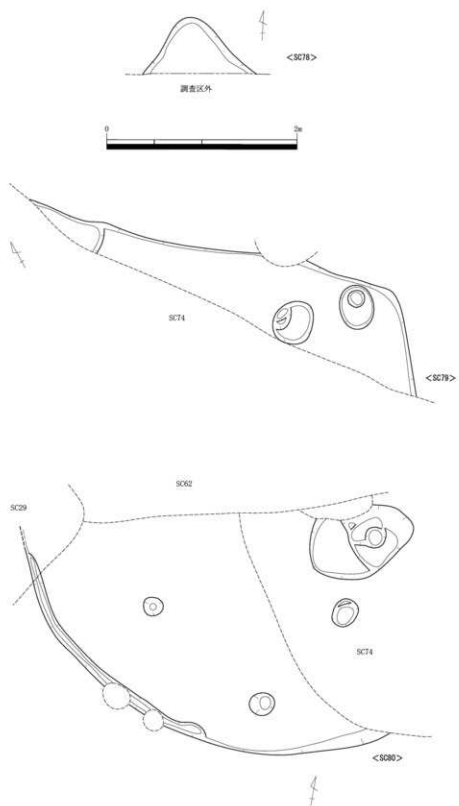
調査区南辺東寄りに位置し、遺構の北東隅のみ検出している。土坑の可能性も高いが、掘り込みに明瞭な方形の角が認められることから、ここでは住居と判断した。遺構の形状・規模は一切不明である。検出面からの深さは0.35mを測る。遺物の出土は皆無であった。

79号住居 (第142図)

調査区西端中央部に位置し、70・74・76号住居に切られる。遺構の大半は上面の住居に削平されており、形状・規模は不明である。東西残存長4.0×南北残存長1.0m、検出面からの深さは0.35mを測る。確認された範囲の状況からは、北辺中央に土坑を持つ、4柱の構造とも考えられる。遺物の出土は認められない。

80号住居 (第142図)

調査区西端中央部に位置し、29・62・74号住居に切られ、75号住居を切る。直径5.0m前後の円形住居と思われる。検出部分で確認したピットの状況から、松葉型を採る可能性もあるが、詳細は不明である。壁沿いの一部に細溝を掘り込んでいる。74号住居で検出した不整形の土坑は、位置・深さ等からこの遺構に伴うものと判断した。遺物は全く出土していない。



第142図 78・79・80号住居 (S=1/40)



<土坑>

15号土坑 (第143図/図版21)

調査区北辺東寄りに位置する。9号溝掘削時に検出したが、一括して掘削してしまったため先後関係は確認出来ていない。15号土坑が9号溝を切ると思われる。東西残存長1.85×南北残存長0.6m、検出面からの深さ最大0.55mを測る。平面プランは楕円形を呈すると思われる。西端にビット状の1段深い掘り込みを伴う。廃棄土坑の一種か。

埋土から甕蓋天井部の小片が出土している。弥生時代中期の所産。

16号土坑 (第143図/図版18)

調査区中央部に位置し、28・32号住居に切られ、49号住居、17号土坑、8号溝を切る。主軸は北西—南東方向で、平面プランは不整形を呈する。長軸2.2×短軸最大1.8m、検出面からの深さ0.35mを測る。遺構底面に不整形の土坑状の掘り込みを持つ。埋土は褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

埋土からは投弾と土器の細片が出土しているが、遺構の時期・用途は不明である。

17号土坑 (第143図/図版18)

調査区中央部に位置し、28号住居・16号土坑に切られ、49号住居、9号溝を切る。主軸は北西—南東方向で、平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸2.5×短軸0.95m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。遺構底面はやや傾斜を持つが掘り方の立ち上がりは比較的明瞭で、平面プランの形状から、土壌層の可能性も考えられる。

埋土からは、投弾と安山岩割片、微量の炭化物と土器片が少量出土しているが、いずれも細片で時期を示す資料は認められなかった。

18号土坑 (第143図/図版19)

調査区南東寄りに位置し、35号住居に切られる。主軸は北東—南西方向で、平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸1.55×短軸1.0m、検出面からの深さは0.35mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積に近い様相を示す。遺構底面の縁に5基の小型のビットを、南辺中央に段掘りの大型ビットを伴う。埋土は遺構の廃棄後に一部崩落した状況を示している。貯蔵穴として使用されたと思われる。

出土遺物 (第146図)

埋土からは甕・甕の小片、石斧の細片と投弾が出土している。弥生時代前期後葉の所産と考えられる。

19号土坑 (第143図/図版19)

調査区西辺中央に位置し、西半分は調査区外へ延長する。主軸は北東—南西方向で、平面プランは長方形を呈する。東西残存長1.3×南北1.35m、検出面からの深さは0.3mを測る。北辺中央部にビット状の掘り込みを持つ。貯蔵穴か。

埋土からは微量の土器が出土しているが、いずれも細片で時期を示すものはない。

20号土坑 (第144図/図版19)

調査区北東寄りに位置し、38・45・56号住居に切られ、21号土坑、9号溝を切る。主軸は北東—南西方向で、不整形の平面プランを検出しているが、本来は隅丸長方形であったと思われる。主軸の延長線上に幅0.2m程度のテラス状の段差を持つ。長軸3.4×短軸1.3m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。底面の西側が低くなるが、明瞭に段差を認められるほどではない。

出土遺物 (第146図/図版32)

遺構内に示した甕の他、少量の土器、投弾が出土している。弥生時代後期末の所産か。





21号土坑 (第144回/国版19)

調査区北東寄りに位置し、38・45・56号住居、20号土坑に切られ、9号溝を切る。東側は20号土坑に削平されており、遺構の全容は定かではない。主軸は北東—南西方向で、平面プランは不整形形として検出しているが、本来は長方形を呈したと思われる。長軸残存長1.3×短軸最大1.5m、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土の状況から、縁辺部が崩落したのち徐々に埋没したと考えられる。残存状況は不良であるが、貯蔵穴か。

埋土から微量の土器が出土しているが、いずれも細片で時期は不明である。

22号土坑 (第144回/国版19)

調査区北西寄りに位置し、71号住居に切られる。主軸は東西方向で、平面プランは長方形を呈する。長軸1.3×短軸0.8m、検出面からの深さは1.0mを測る。埋土は黒色土を主体とし、全体に均質である。底面には浅いピットと杭痕跡と思われる小型ピット2基を検出している。落とし穴として使用したと考えられる。

遺構内からの遺物の出土は皆無であった。

23号土坑 (第144回/国版19)

調査区中央の28・50号住居間に位置する。他遺構との切り合い関係を持たない。主軸は北東—南西方向で、平面プランは不整形形を呈する。東西両端に小型のテラス状の段差を持つ。長軸1.2×短軸0.9m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は黒色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土から微量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は出来なかった。

24号土坑 (第144回/国版19)

調査区東辺中央に位置し、36・48・54号住居に切られる。主軸は南北方向で、長軸1.2×短軸0.6m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。平面プランは2基のピット状を呈するが、埋土の状況からは1基の土坑であると判断出来る。埋土は黒褐色土を主体とし、堆積状況は短期の使用を示す。

出土遺物 (第146回/国版46)

埋土からは、図示した砥石と微量の土器が出土しているが、いずれも細片であった。

25号土坑 (第144回/国版20)

調査区西端中央に位置し、29号住居とピット1基に切られる。主軸は南北方向で、検出時の平面プランは不整形形であったが、本来は長方形を呈すると思われる。長軸残存長2.7×短軸1.05m、検出面からの深さは最大0.4mを測る。北端にテラス状の段差を、遺構底面に不整形形のピット2基を持つ。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で遺構の時期決定は出来なかった。

26号土坑 (第145回/国版20)

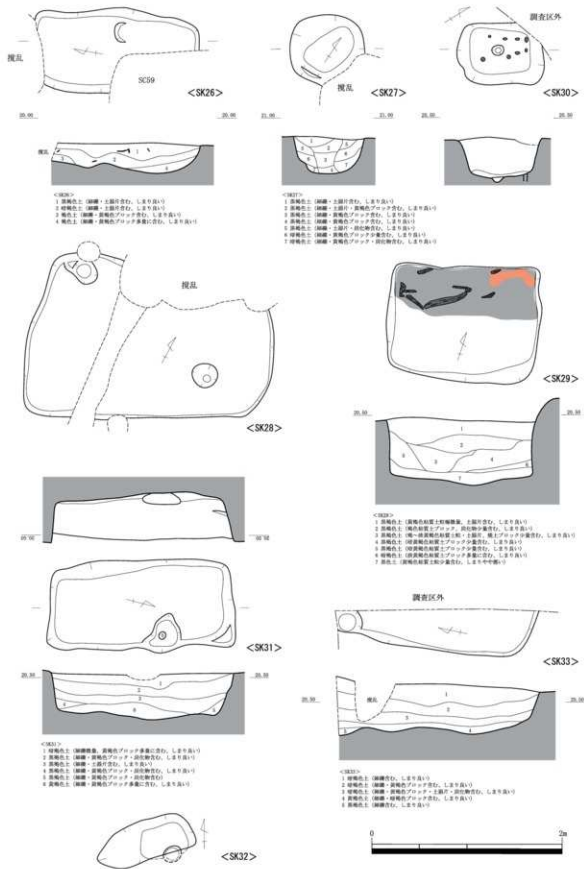
調査区南東側に位置し、59号住居と攪乱に切られる。主軸は南北方向で平面プランは長方形を呈する。長軸1.8×短軸0.9m、検出面からの深さは0.35mを測る。底面に馬蹄形状の掘り込みが認められるが、遺構に伴うピットもしくは土坑が一部残存したのか。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。形状から、土壌層の可能性もある。

埋土からは糞の口縁部等、少量の土器が出土しているが、細片のため図示は控えた。弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

27号土坑 (第145回/国版20)

調査区北東側に位置する。55・37号住居の間にあり、他遺構との切り合い関係を持たない。主軸は南北方向で、長軸0.85×短軸残存長0.7m、検出面からの深さは0.4mを測る。平面プランは不整形形を呈す





第145図 26~32号土坑 (S=1/40)

る。埋土の状況からは柱穴ピットとも考えられるが、この遺構とともに掘立柱建物を構成すると想定される他遺構の存在が認められなかったことから、ここでは土坑として扱った。

埋土から少量の遺物が出土しているが、時期特定が困難な細片のみである。

28号土坑 (第145図/図版20)

調査区中央北寄り、64・69号住居の間に位置する。他遺構との切り合い関係を持たない、単独の遺構である。主軸は東西方向で、長軸2.6×短軸1.7m、検出面からの深さは最大0.3mを測る。平面プランは不整形長方形を呈し、遺構底面に2基のピットを持つ。埋土は黒褐色土の単層で、上面が大幅に削平されていると思われる。貯蔵穴か。

埋土からは遺物の出土は一切認められていない。

29号土坑 (第145図/図版20)

調査区北西寄りに位置し、76号住居を切る。主軸は東西方向で、長軸1.65×短軸1.2m、検出面からの深さは0.65mを測る。平面プランは長方形を呈し、壁面の崩落もなく残存状況は良好である。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。遺構底面の北側からは、形状を残す炭化材及び炭化物粒が面的に広がる状況が確認され、北東隅には焼土も含まれていた。但し、床面に赤化あるいは硬化したような被熱痕跡は認められない。廃棄土坑の一種と思われる。

出土遺物 (第146図/図版33)

埋土からまとまった量の土器が出土している。甕は口縁部がくの字形に屈曲し、外反するもの。胴部に対し口縁部の広がり狭く、外面に平行タタキの痕跡を残す。高杯は脚部に穿孔を施し、杯部内面に段を持つもの。器台は鼓形の系統で内外面ともハケ調整を行なうものと、外来系の小型のものが混在している。いずれも古墳時代前期の所産。

30号土坑 (第145図/図版20)

調査区北西寄りに位置し、17・20号住居に切られる。主軸は北東—南西方向で、長軸0.9×短軸0.6m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈する。遺構床面中央には小型のピットが検出されている他、杭痕と思われる8基のピットが列状に並んでいるのが確認されている。小型の落とし穴。

埋土からの遺物の出土は全く認められない。

31号土坑 (第145図/図版20)

調査区北西寄りに位置し、71号住居を切る。主軸は南北方向で、長軸1.95×短軸0.95m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは長方形で、東辺中央部に不整形のピットを伴う。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。形状から、土壌墓の可能性もある。

埋土から少量の土器が出土しているが、細片のため図示は控えた。甕口縁部の形状から、古墳時代中期の所産と思われる。

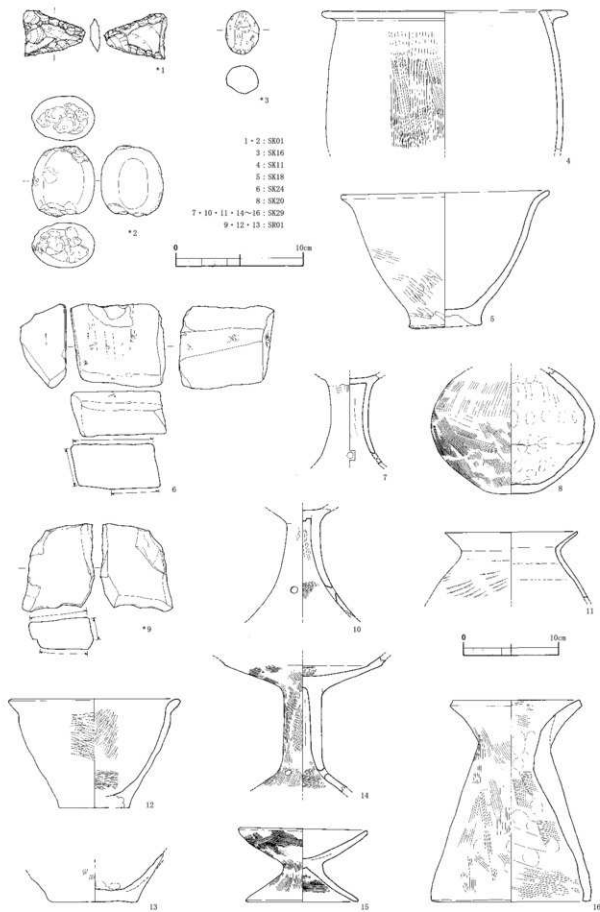
32号土坑 (第145図/図版20)

調査区北西寄り、17・76号住居の間に位置する。他遺構との切り合いがない、単独の遺構である。主軸は東西方向で、長軸1.05×短軸0.4m、検出面からの深さは0.25mを測る。平面プランは不整形形を呈すると思われる。上部が大幅に削平されており、遺構の状況は不明瞭である。底面に円形ピットを1基検出しており、落とし穴の可能性が考えられる。

埋土からは少量の土器が出土しており、甕口縁部の破片から弥生時代中期の所産と見られる。

33号土坑 (第145図/図版21)

調査区北東隅に位置し、遺構の大部分は調査区外へと延長する。I・III区間の道路部分に大半が所在する住居跡の可能性もあるが、ここでは土坑として扱った。主軸は南北方向で、南北残存長1.95×東西残存



第146図 土坑・土塚墓出土土器・石器 (S=1/4, *付はS=1/3)

長0.5m、検出面からの深さ0.45mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。西辺に凹形のビツを伴う。埋土は暗褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。廃棄土坑の一種か。

埋土からは少量の土器が出土しているが、細片のみで時期を特定するにはいたらなかった。

<土壌器>

1号土壌器 (第147図/図版22)

調査区中央部北東寄りに位置し、52・57・68号住居、11号溝に切られる。不整形の浅い掘り込みを施したのち、不整形の墓坑の掘り込みを行なっている。墓坑本体の主軸は北西—南東方向で、長軸1.85×短軸0.8m、深さ0.8mを測る。2段掘り込みの形状から、本来は石蓋を伴っていた可能性もある。

出土遺物 (第146図/図版32)

埋土から石器を含む少量の遺物が出土しているが、残存状況は悪い。鉢は口縁部が緩く屈曲し、体部が外反して広がるもので、内外面ともミガキ調整を施している。弥生時代前期後葉の所産。

<環濠・溝>

三沢南崎遺跡3の全調査区において、計12条の溝を検出している。うち3条は1区での検出遺構としてⅢ章で報告済である。4号溝はⅢ区9号溝と同一の遺構であることから、ここで報告する。なお、5・6号溝はⅢ区で検出し、溝状遺構として掘削したが、出土遺物及び遺構の状況から現代の造成痕跡と判断した。そのため5・6号溝は欠番となっている。

Ⅰ区4号溝 (第5・147図/図版21)

調査区北辺で南岸を中心に検出している。切り合い遺構である。9・10・13号住居、3・6・7号土坑の全てに切られる。遺構の大部分は調査区外へ延びる。北に向かつてふくらみをもって湾曲し、西はⅢ区へと繋がっている。東は1区東端で調査区外へ延びるが、南への延長は調査区内へは及ばない。北東隅ではわずかに掘り方の両岸が認められる。検出面での規模は上面幅2.2m、底面幅0.9m、深さ0.3mを測る。断面は長方形を呈する。埋土は上層がレンズ状堆積、下層が水平堆積の様相を示す。黒褐色土を主体とするが、下層にはマンガング粒を含む砂質土の堆積が認められ、底面直上の層は細礫を多量に含む。遺構底面に溝と平行する凹凸が見られることから、水流を伴っていた可能性もある。但し遺構底面からの湧水は認められない。また、溝に伴うと見られる底面ビツ、溝岸のビツ等は検出されていない。

出土遺物 (第150図/図版45)

埋土から土器・石器が出土しているが、少量でいずれも細片である。土器類は明確に時期を示すものが見られないため、図示していない。石器は黒色緻密質安山岩のスクレイパー、少量の投擲を確認している。

Ⅲ区9号溝 (第48・147図/図版22)

調査区北東から南西へ、調査区を縦断する形で検出している。計13軒の住居と3基の土坑、1条の溝に切られる。北端は1区からの連続性を示し、わずかに北へふくらみを持つが、その他の部分はほぼ直線を描いて南側の調査区外へと延長する。検出面での規模は上面幅1.9m、底面幅0.3m、深さ1.05mを測る。断面は三角形を呈する。埋土は一部を除いて水平堆積の様相を示す。黒褐色土を主体とし、上層から下層までは均質である。上面にテラス状の痕跡、土手状の盛土などは認められない。埋土の堆積状況から、検出面から約0.9mのあたりまで、1回以上の掘り直しを行なっていることが見て取れる。遺構底面からの湧水はなく、埋土に水性鉄も確認出来ないことから、素掘りでの使用が想定される。遺構底面及び溝岸にビツ状の掘り込みは検出されていない。

出土遺物 (第150図/図版33・44)

埋土からまとまった量の遺物が出土しているが、いずれも小片で原型を留めるものは少ない。甕は口縁部が緩く屈曲し、平底の底部へ繋がるもの。器蓋は肉厚で、内外面はハケあるいは板状工具による粗磨な調整を施している。弥生時代前期末から中期初頭の所産。

その他、微量ではあるが石器類が出土している。

8号溝 (第148図/図版22)

調査区南辺西寄りに位置し、28・32・51号住居に切られ、67・77号住居、9号溝を切る。ほぼ正円形を呈する、周溝状遺構である。内径5.0m、外径7.6m、溝幅1.4m、深さ0.6mを測る。断面は長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込んだ形状が残存している。遺構床面にはテラス状の段落ちと、土坑状のくぼみ部分が複数認められる。周溝状遺構の内部には、土坑・墓坑といった一連の遺構を構成すると思われる掘り込みは認められず、溝のみの単独遺構であると判断した。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

出土遺物 (第150図/図版33・37・44)

埋土内よりまとまった量の遺物が出土しているが、小片が多く、原型を留めるものは少ない。甕は屈曲した頸部から外反して広がるもので、内外面ともハケ調整を施す。鉢は体部が丸みを持って立ち上がるものと、平底から直立して立ち上がるものが混在している。弥生時代後期初頭の所産。

その他、紡錘車の未成品、石庖丁の小片、砥石といった石器類と、鉄製ヤリガンナの小片が出土している。

10号溝 (第149図/図版22)

調査区中央西寄りに位置し、32号住居、16号土坑に切られる。但し16号土坑と8号溝の間に延長部分は認められない。内径3.5m、外径4.1m程度の正円形を呈すると思われる。周溝状遺構である。溝幅0.45m、深さ0.15mを測る。上面は削平を受けており、遺構の残存状況は不良である。断面は台形を呈する。遺構底面はほぼ平坦となる。切り合う遺構の内部を含め、周溝状遺構の内部には、溝と一連の遺構を構成すると思われる土坑・墓坑状の痕跡は認められない。埋土は黒褐色土を主体とし、水平堆積の様相を示す。

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片で時期を示すものではない。

11号溝 (第149図/図版22)

調査区中央東寄りに位置し、52・53・57・68号住居に切られ、1号土壇墓を切る。内径2.65m、外径4.3m、溝幅0.9m、深さ0.25mを測る。溝の断面は台形、平面プランは正円形を呈する、周溝状遺構である。溝の内部には一連の遺構を構成すると見られる土坑・墓坑状の痕跡は認められず、単独の遺構と考えられる。遺構底面にはテラス状の段落ちと土坑状のくぼみ部分が確認されている。埋土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積の様相を示す。

出土遺物 (第150図)

埋土より少量の遺物が出土しているが、いずれも細片である。甕は口縁部が傾んだJ字形を呈し、底部は平底でミカキに似たナテ調整を施す。弥生時代中期末の所産。

12号溝 (第149図/図版22)

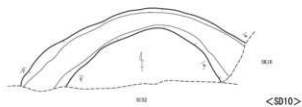
調査区南辺東寄りに位置し、59号住居に切られる。遺構の南半分は調査区外へ延長する。内径3.0m程度の隅丸方形を呈すると思われる。溝幅0.5m、深さ0.15mを測る。溝の断面は台形を呈する。78号住居とした方形の掘り込みと一連の遺構を構成する可能性もあるが、位置的な問題からここでは単独の周溝状遺構と判断した。遺構の底面はほぼ平坦となる。

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

<ビット群> (第151図/図版33・35)

本遺跡では、I・II区は検出した遺構全てを完掘している。しかし、III区については調査期間の都合上、検出段階で柱穴の可能性が高いと判断したビットのみを掘削し、掘乱・根痕の可能性が想定されるビットについては未掘のまま調査を終了している。開発に伴う発掘調査のためやむなく採った措置であるが、調査完了後は即座に道路改良工事が実施され、遺跡は破壊されており、調査担当者として猛省することである。

ビット群については全調査区において、検出段階で全ての平板測量を実施し、掘立柱建物構成するか



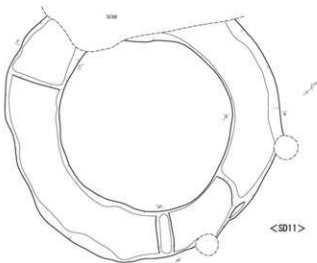
<SD10>



① N10: 土
② 敷砂土 (掘削プロット敷設前)
③ 埋戻砂土 (掘削後)



① N11: 土
② 敷砂土 (掘削プロット敷設前)
③ 埋戻砂土 (掘削プロット敷設後)



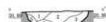
<SD11>



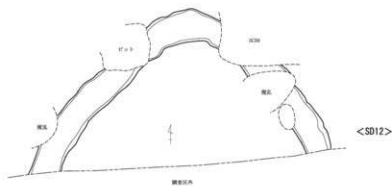
① N14: 土
② 敷砂土 (掘削プロット敷設前)
③ 埋戻砂土 (掘削後)



① N15: 土
② 敷砂土 (掘削プロット敷設前)
③ 埋戻砂土 (掘削後)

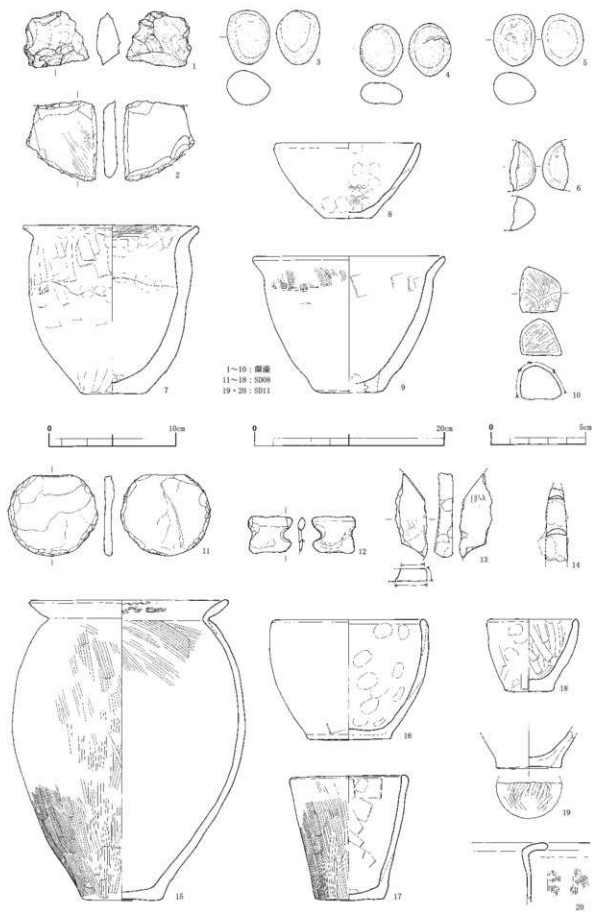


① N16: 土
② 敷砂土 (掘削プロット敷設前)
③ 埋戻砂土 (掘削後)

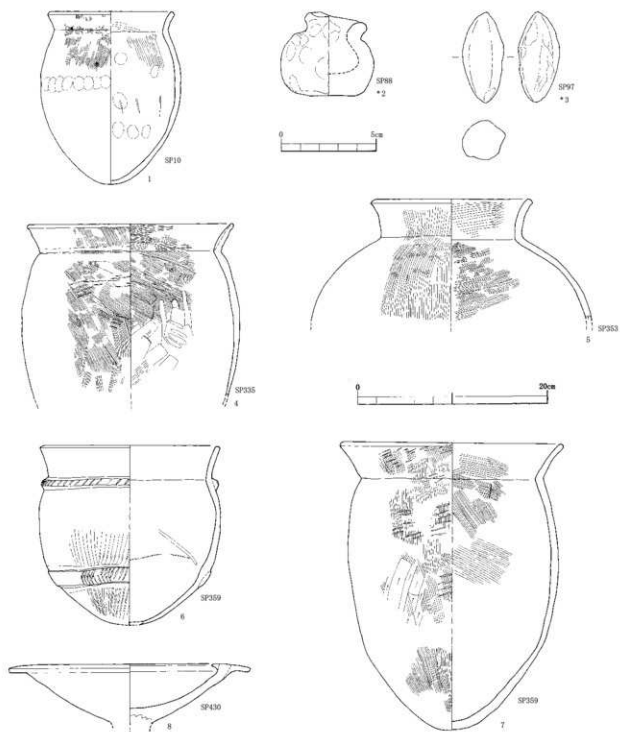


<SD12>

第149図 10・11・12号溝 (S=1/60)

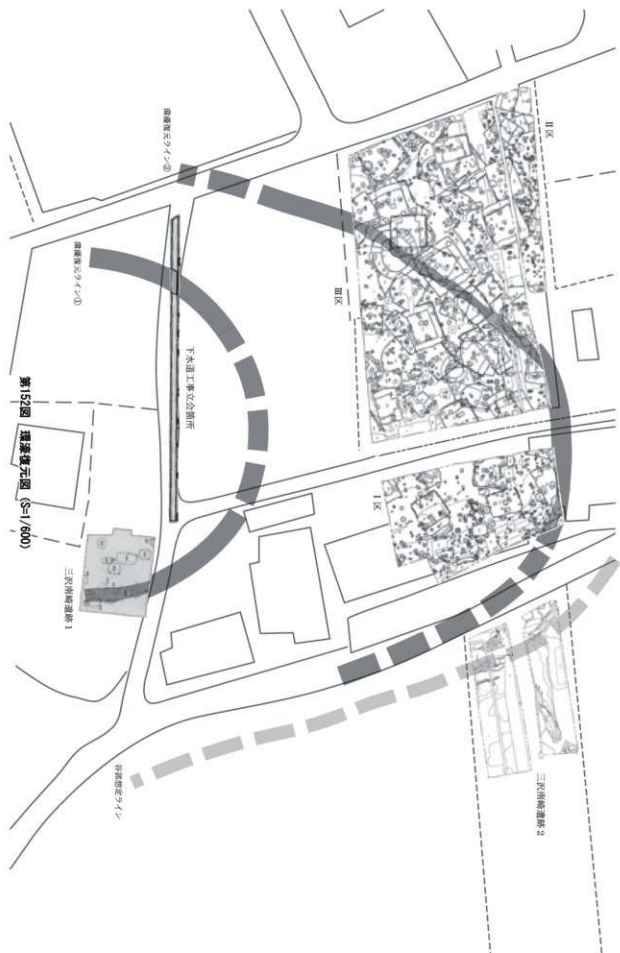


第150図 環濠・溝状遺構出土土器・石器・鉄器 (S=1/4、石器はS=1/3、鉄器はS=1/2)



第151図 ビット出土遺物 (S=1/4, *付はS=1/2)

否かの検討を行ない、遺物・遺構図面の整理段階で再度掘立柱建物の存在を検討している。しかし、全調査区において、掘立柱建物を構成すると考えられるビット群のまともりは認められなかった。そのため、ここではビット出土遺物のうち、比較的形状を留める遺物を掲載するに留める。完形に復元出来るものも見られたが、土器埋納ビットと想定される状況は確認されていない。出土遺物の時期についても、調査区内で確認されている住居・土坑とはほぼ同時期であると思われる。



VI. 調査成果のまとめと検討

本遺跡の調査においては、78軒の竪穴住居、33基の土坑、10条の溝状遺構、そして環濠を確認している。特筆すべきは住居の密度であり、この段丘上に営まれた集落の中心部分であったと考えられる。ここでは、住居群・環濠・住居からの出土土器の3点に着目し、遺跡の概要とその特色を述べる。

(1) 三沢南崎遺跡における集落の変遷と住居の形状

<遺跡の立地>

三沢南崎遺跡は、この地域に発掘調査の手が及んだ平成17年度から、その立地条件が目玉されてきた。本遺跡は小郡市北西部の丘陵地帯（通称・三国丘陵）から延びる舌状段丘の先端に位置し、東西に谷部を挟んでいる。谷部には段丘端部を示すような自然流路を伴い、水田耕作に適した地形となっている。

同様の条件は、本遺跡から谷を隔てて東隣の段丘上に所在する、力武前期・内畑遺跡（以下、力武遺跡群と記す）にも備わっている。力武遺跡群は弥生時代前期から近世までの複合遺跡であるが、主体となるのは弥生時代前期の集落・生産遺跡である。集落は北から南へ延びる段丘上に、大型円形住居を含む竪穴住居群と掘立柱建物で構成され、集落域の北端は断面V字形の環濠によって区切られる。集落の東側には段丘さみに貯蔵穴群を掘削し、南に下った谷部の湿地には水田を営む。水田耕作には自然流路を利用し、矢板・柱列で構築した井堰を用いて計画的な水資源活用を行っていた。しかし中期以降は、段丘東部に竪穴住居が散見される程度の規模に縮小し、再び活発な集落形成を確認するには古墳時代後期を待たねばならない。

以下、今回調査を実施した範囲を中心に、三沢南崎遺跡の集落の変遷を述べる。この変遷を示したのが第153・154図である。遺構の時期については出土遺物のうち遺構に伴うと判断したものを根拠とし、遺物による明確な時期決定が出来なかったものについては切り合い関係も考慮している。遺物の時期名称については「小郡市史」第1巻に準じている。なお、1次調査区的位置については概念図であり、実際の距離と方位はこれとは異なることをここでお断りしておく。

<遺跡の概要>

本遺跡で検出した遺構は、弥生時代前期中葉～古墳時代中期に及ぶが、集落の主体は弥生時代中期後半～後期となる。また平成19年度に東西の谷部においても発掘調査を実施しており（三沢南崎遺跡2・4、平成20年度報告書刊行）、南崎2では自然流路と水田痕跡が、南崎4では自然流路と祭祀遺構が確認されているが、その時期は本遺跡の集落とはぼリンクすることか明らかとなっている。

平成17年度調査地では、本遺跡と同時期の竪穴住居が11軒確認されており、同一集落の一部を構成することが判明したが、ここでは同時に弥生時代前期の環濠と貯蔵穴群も検出しており、力武遺跡群と同時期の集落の存在を証明している。但し集落のピークは異なっており、互いに類似する立地環境にありながら、集落としては別の変遷と展開を迎えたと考えられる。

<弥生時代前期の状況>

三沢南崎遺跡の集落は、1次調査で確認された弥生時代前期前半の環濠と貯蔵穴群の組み合わせからスタートする。この環濠は出土遺物から前期中葉頃まで機能しており、その後段階を経て埋没したとされる。本遺跡内でも前期の土盟を伴う長方形竪穴住居（SC59）を検出しているが、遺構の切り合い関係からはこの時期の住居とは認められず、遺物は混入品と判断している。

1次調査環濠の埋没と併行するように、前期中葉には北側に新たな環濠が掘削される。環濠内部には、松葉型を含む円形住居や貯蔵穴、土壇が営まれる。調査区内の遺構密度は比較的低く、集落の中心部ではなかったと思われる。しかし1次調査区には貯蔵穴のまとまりが見られることから、力武遺跡群の例にならうなら、1次調査区及び今回の調査区は集落の東縁辺部の貯蔵穴集積所であり、これに伴う環濠を（掘り直しも含めて）維持しながら集落の一部を構成しており、集落本体の住居群はこれより南もしくは



は北に所在すると想像することも出来るだろう。なお、環濠以前の遺構として落し穴状遺構を3基検出しているが、これらは段丘上の平坦部に構築されるタイプのもので、北に向かって湾曲したラインで並んでいる。いずれも遺物の出土は認められず、詳細な時期は不明である。

この時期は三国丘陵上全体で集落が散見され始める時期で、中でも南端に位置する力武遺跡群の先行した隆盛は注目に値する。本遺跡は規模こそ異なるが、これに後続し、以北の遺跡群へと繋がるものであると言える。

<弥生時代中期の状況>

中期前葉～中葉に関しては、若干の住居・土坑が認められるのみである。但し後期の遺構の理土には中期前～中葉の土器片も一定量含まれており、集落の衰退期というよりは、後期の遺構と位置が重複しており、破壊されていると考え方が自然なようである。出土遺物には丹塗磨研の祭祀用土器や甕棺と思われる大型のものもあり、墓域を伴う集落の存在が示唆される。

中期後葉に入ると長方形・方形住居の数が増加し、集落の規模は拡大する。今回の調査区は、この時期から本格的な集落としての様相を示す。住居は調査区はほぼ全域に分布し、形状は平面プランが長方形の2柱で、柱間に竪状の土坑を伴うものが主体となる。壁沿いに細溝をめぐるものが多く、竪溝とは別に壁面近くに不整形の土坑状の掘り込みを持つものも見られる。SC20が長軸6.5×短軸5.0mとやや大ぶりである他は、長軸5.0×短軸3.0mの範囲におさまる大きさのようである。SC13・36のような楕円形、SC80のような円形住居も少量ではあるが現存している。主軸方向からは、須玖Ⅱ式（古段階）と須玖Ⅲ式（新段階）のまとまりが見られる。同位置での住居の立替は稀で、近接した場所に新たな住居を構築している状況がうかがえる。

墓坑や祭祀土坑は全く確認されていない。但し周溝状遺構のうちSD11・12の2条はこの時期のものであり、これまでの市内遺跡での検出状況から祭祀的な役割を果たしている可能性が示されていることから、これらが祭祀土坑の代用として使用されていたとも想像出来る。また墓域については、三国丘陵上の弥生時代中期の遺跡では近接する別丘陵に集落と墓域を構築する例が多く見られることから、周辺の調査を待ってこの集落との関連を考える必要があると思われる。この時期の住居は1次調査区内でも確認されているが、住居の構造や想定規模は今回調査区とさほど細麗のない状況である。

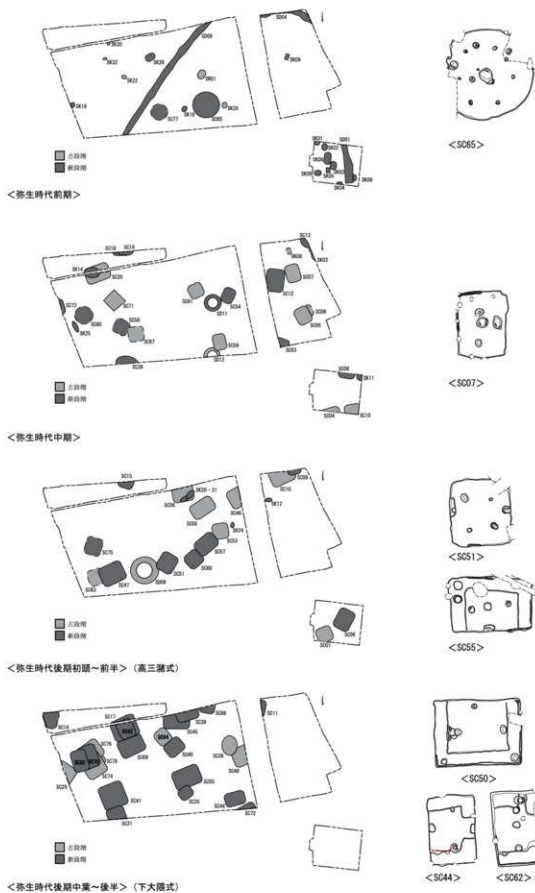
1次調査環濠はこの段階まで窪地状に残っていたと判断されているが、本遺跡ではこの時期の住居が環濠上で確認されているためほぼ完全に埋没していたと思われる。但し微量ではあるが中期の遺物の出土も認められることから、部分的な窪みが残存していた可能性は考えられる。

弥生時代中期は三国丘陵上での活動のピークであると言える。北部の丘陵地帯を中心に大規模な集落・墓域が経営されており、これに伴う生産遺跡の存在も確認されている。また、市中央部に位置する小部・大板井遺跡でも、大規模な円形住居と甕棺葬群を伴って中期にピークを迎える。これに対して、中間に位置する三国丘陵南端部においては、集落及び出土遺物の質・量ともに小規模であり、勢力的にも劣る感が否めない。

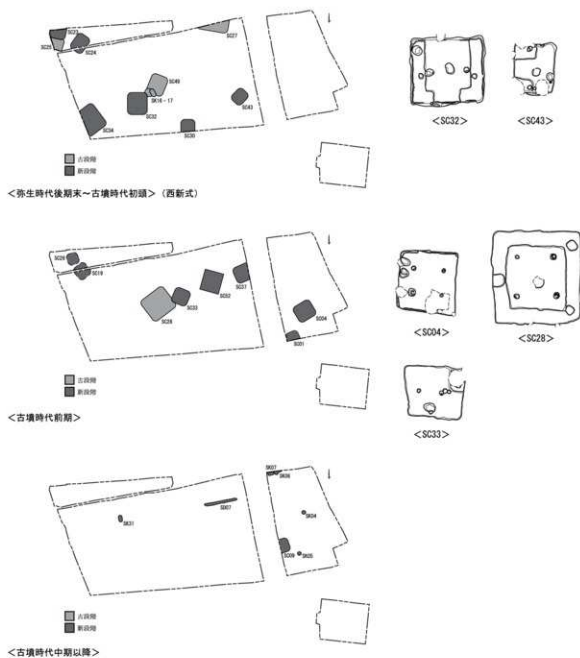
<弥生時代後期初期～前半の状況>

後期初葉も、前段階から引き続き同規模の集落が継続する。しかし住居の分布には若干の変化があり、東側の段丘端では遺構密度が低くなる傾向が見られる。住居の形状は、前段階の平面プランが長方形で2柱、中央に竪状の土坑を伴うものと、隅丸方形で4柱のものが見られるようになる。今回調査区では、軒数としては隅丸方形のものがやや優勢であると言える。2柱のものにはベッド状遺構を伴うものも含まれており、壁沿いの土坑に加えてベッド状遺構の上面に正円形に近く、深い掘り込みの別土坑を持つものが登場する。この土坑は住居の角部分に設置されることが多く、中に遺物を伴う例が散見されることから、住居廃棄時の祭祀的行為に関連する可能性も考えられる。この時期の住居の規模は平面プランによって変化するようで、長方形のものは長軸6.0×短軸4.0m前後、方形のものは4.0m四方の範囲におさまる。目立って大型の住居は確認されていない。時期による主軸の通りは認められず、形状によって方位が左右される状況でもない。立替については、前段階と同様に同位置には行っていないものの、比較的近接した





第153図 集落変遷図(1) (S=1/1000, 住居はS=1/300)



第154図 集落変遷図(2) (S=1/1000, 住居はS=1/300)

位置に新たに構築している様子が見られる。

1次調査区で検出されているSC01はこの時期の遺構であるが、焼失により廃棄されている。住居内からはソーダガラスの小玉が出土しており、廃棄に伴う何らかの行為を示すものと考えられる。

周溝状遺構は後期初頭まで残存するが、これ以降は認められなくなる。大板井遺跡においては、この時期の隅丸長方形周溝状遺構が他遺構とは隔離された状態で検出されており、祭祀遺構としての性格を証明するものと考えられている。本遺跡では集落内で住居と共存する形で確認されており、形状の差異もさることながら、遺構の性格そのものもしくは祭祀の方法にも相違があると想像される。

現在の西鉄三国が丘駅周辺でこれまで確認されてきた、三国丘陵上の弥生時代の集落群は、この時期から徐々に消滅あるいは小規模化していく傾向がある。これ以降も継続するのは、三沢原遺跡や三国の鼻

遺跡等のわずかな例にとどまる。丘陵の南端で弥生時代前期以降運河と続いた三沢南崎遺跡が、他集落の縮小と同時に集落としてのピークを迎えるのは、時代の徒花であるのか、それとも三国丘陵の集落遷移の中で重要な意味を持つのか、今後詳細な検討が必要であろう。

＜弥生時代後期中葉～後半の状況＞

この時期に三沢南崎遺跡は集落としてのピークを迎える。遺構密度は全時期を通じて最も高く、出土遺物の量も多い。遺構の分布は西に寄り、段丘の崖に近い1次調査区及び今回調査区の東には全く遺構が見られなくなる。意図的にこの範囲を避けた理由は不明であるが、三沢南崎遺跡は東西に谷を持つ舌状段丘上に所在することから、集落全体が（西ではなく）北側へ拡張しながら移動したとも考えられる。

住居のプランは長方形が主体となり、前段階に主流であった隅丸方形のものは逆に少数派となる。1軒のみ楕円形住居（SC36）が確認されているが、出土遺物の内容や遺構の切り合い関係からこの時期のものと同断した。通常の住居とは異なる使用も想定される。主中は完全に2柱のタイプになり、柱間の形状の崩り込みがないものも出現する。代わりに板状の痕跡は壁沿いの土坑へと移っていく。また、壁沿いにベッド状遺構を持つものがほとんどとなる。ベッド状遺構は住居の大きさによって設置辺の数が異なるが、2～3辺に付くものが多く、前段階に出現したベッド状遺構上面の土坑も継続して掘削される。住居本体の規模は、長方形が長軸7.0×短軸5.0m前後の比較的大型のものと長軸5.0×短軸4.0mのこれまでの住居と差がないものへと二分される。方形のものは前段階と同様で4.0m四方前後のものが多い。大型の住居は複数が同時に存在していたと思われ、集落内での階層差やその人数比率の問題を考えるに当たって興味深い。住居の主軸は北西―南東方向となり、ほぼ全体で一致する。立柱は同一箇所あるいは極めて隣接した位置で短期間に頻繁に実施されることが多く、ベッド状遺構の構築に前段階の住居の廃土を使用する例も見られる。

この段階の住居は、埋土に多量の土器を含むものが多い。遺構の残存状況にもよるが、SC14・35・44といった住居廃絶時に土器の一括廃棄を行なったと見られる住居はこの時期に集中している。これらは埋土の上部に近い位置で出土しており、特にSC44では顕著であるが、複数の時期にわたる遺物がまとまりをもって廃棄されている。住居廃絶に関する祭祀的な意味合いを持つのか、住居を単なる廃棄場所として転用したのかは不明であるが、同時期のこのような事例の追加が待たれるところである。

弥生時代後期は、水田耕作による生産性の向上と農業社会の進展に伴う集落間紛争が本格的になる時代であり、この時期の集落には柵列や環濠といった防衛施設を備えたものが多く見られる。三沢南崎遺跡が所在する三国丘陵においても、三国の鼻遺跡のように、急傾斜を持ついわば天然の要害状の丘陵上に集落を営み、傾斜の緩い部分についてはその周辺に環濠を掘削して防衛施設とする例が確認されている。しかし1次調査区及び今回調査区においては、集落を防御するための施設と考えられる痕跡は一切確認されていない。これは集落が所在する段丘脇の谷部であり、同年度に調査を行なった三沢南崎遺跡2・4においても同様である。この点を考慮した上で、三沢南崎遺跡の集落域が当時の社会情勢の中でどのように位置づけられるのかを検討する必要があるだろう。

＜弥生時代後期末～古墳時代初期の状況＞

弥生時代後期末から、三沢南崎遺跡の集落としての規模は縮小していく。但し、調査においてこれ以降の遺構は残存状況が悪く、調査区内では複乱の埋土も含めてこれ以降の古墳時代後期～古代の遺物がほとんど確認されていない状況があることから、集落は継続したものの後世の造成により完全に破壊されたという可能性も考えられる。ここではあくまで、前段階との検出遺構の比較結果として「集落規模の縮小」と述べていく。

遺構密度は前段階に比べると非常に低くなるが、東側の段丘崖よりを避ける傾向は引き続き認められる。住居の平面プランはほぼ方形のみとなり、主柱については2柱が優勢であるものの、4柱が新たに登場して並存している。壁沿いのベッド状遺構は一部の住居に限ってこの段階にも見られるが、設置辺は減少しておりSC43のように1辺のみの設置も見られる。ベッド状遺構上面の掘り込みはSC32で認められるが、これが最終段階となる。住居の規模は前段階よりやや小型となり、6.0m四方のものと4.0m四方

のものに二分化される。検出した住居の主軸からは、「大型1軒に小型2～3軒」という組み合わせが想定される。この組み合わせを前提とすると2～3回の立替が考えられるが、下層遺構を無視してその上面に新たに構築する例と、これまで未使用であった場所を意図的に選択して構築する例とが見られる。今回の調査区は非常に遺構の切り合いが多く、単独で検出した住居は4例（うち2例はSC72・78で遺構の全体像が不明）のみであるが、うち2例はこの時期の遺構である。

この時期の遺構で特筆すべきはSC30である。この住居は床面に多量の焼土と炭化材が残存する焼失住居であり、埋土に含まれる状況は下層から焼土→炭化材→土器の順となっていた。何らかの原因によって屋内で失火し、住居内部は焼け、その上から炭になった構築材が焼け落ち、最後に土器類を崩壊して、その上にさらに大型の礫を乗せている。出土状況からは、礫を用いて土器類を意図的に破壊した可能性が高いと考えられる。土器そのものは日用品の器種で、祭祀的な遺物は含まれていない。1次調査区においても、前述のとおり焼失住居を確認しているが、これとは時期も土器の出土状況も異なっている。この遺構の上層で見られた土器破壊の行為がどのような意味を持つのか、今後詳細な検討を必要とする。

弥生時代から古墳時代への転換期は、今さら述べるまでもないが社会構造の大きな変革期であり、墓制や階級構造、地域間交流に変化が認められる時期である。当然のことながら集落にもその変化は反映されている。三沢南崎遺跡については、集落範囲の極一部の調査であるため、その全容を把握するにはまだいたっていないが、今後集落域の調査の進展に伴ってこの変革をいかに受容したか明らかになっていくと思われる。

＜古墳時代前期の状況＞

古墳時代に入ると検出遺構の数は激減する。集落変遷期に挙げた住居も多くは前期の早い段階のものであり、この時期で住居群は認められなくなる。

住居の分布は、前段階まで避けられてきた東側の段丘崖沿いに再び構築がなされるようになり、集落域の再構築の可能性がうかがえる。住居の平面プランは完全に方形となり、主柱は2柱のものも若干残るものの、4柱が主体となる。ベッド状遺構はこの時期でも残存しているが、1辺に沿って取り付くのではなく部分的な構築となる。住居本体の規模は均一化され、5.0m四方のもので統一されてくる。

今回の調査区で確認された住居のうち、最大規模であるSC28はこの時期の早い段階の所産である。ひずみのない正方形で8.0m四方、ベッド状遺構が4周するが主柱は4本で、古い段階の形状と新しい要素が混在している。一般的な堅穴住居としてではなく、集落の中心として共有スペース的に使用された可能性が考えられる遺構である。

堅穴住居の構造変化については、外的要素の流入あるいは導入が契機となると想定されている。本遺跡では、弥生時代後期初頭と古墳時代前期にこの変化が顕著に現れているが、集落全体が変化するのではなく、それ以前の古い要素も常に並存している状況にある。新しいタイプの住居と古い系譜を引く住居の並立や、SC28のように1軒の住居内に複数の要素を含む例も多い。このような外的要素の受け入れ状況が、防御施設を持たず、戦略的に優位な立地でもない後期集落である、三沢南崎遺跡の特色を示している可能性も考えられる。

＜古墳時代中期以降の状況＞

古墳時代中期以降の遺構は土坑・溝が散見されるのみである。なおSC09は出土遺物から時期特定が困難で他遺構との切り合い関係からの時期決定も不可能であるため、この段階に含めている。本家はこれよりも古い時期の所産である可能性が高い。

本遺跡内の出土遺物には、須恵器は細片1点が擾乱土内から出土しているのみで、それ以降の遺物は1区防空埋土内の近代遺物までの間、空白となる。古墳時代中期以降の遺構の所在については完全に不明であるが、もしこれが存在していたとしても、比較的早い時代に土地造成が行われ、削平されていると考えられる。

古代～中世にかけては、本遺跡の東側に谷部を隔てて所在する力武遺跡群で、わずかながら遺構・遺物が確認されている。また、東の段丘崖下に位置する三沢南崎遺跡2においても微量ではあるが中世の土師

图片の出土が認められることから、この時期についても集落域の一部を構成していた可能性が考えられる。

<他集落との類似性>

弥生時代後期に全盛期を迎える集落としては、前述の三沢栗原遺跡・三国の鼻遺跡の他に、宝満川右岸に位置する乙隈天道町遺跡が挙げられる。弥生時代後期が主体となる集落は、当時の時代背景から軍事的な要素を持つ例が多く、三国の鼻遺跡については規模こそ小さいものの、北部にある福岡平野から二日市地域峠を抜けて筑紫平野へ入る入口部分を見渡せるという立地状況から、筑紫平野北部の監視的な役割を担っていたとの想定がなされている。しかし本遺跡については、東に花立山（城山）を臨む見晴らしの良い位置にあるものの、軍事的利点はあまりなく、防御施設と考えられる痕跡も確認されていない。ここでは集落としての性格を、本遺跡と類似する例を挙げ、比較検討してみたい。

力武遺跡群との関連

本章の冒頭に記したとおり、三沢南崎遺跡は東隣の段丘上に位置する力武遺跡群と地理的環境が類似している。集落としての発展段階と全盛となる時期は異なるものの、かなりの期間にわたって対峙して存在しており、生産域である谷部の水田についてはどこかで境界を持って共有していたと考えられる。この境界としては口無川から北へ延びる支流が想定されるが、おそらく水利権や水田そのものをめぐる争いもあったものと思像出来る。三沢南崎遺跡の住居からは、図示したものとそわずかであるが、多量の土器が出土しており、石剣の存在も認められる。但し、現在確認されている双方の遺構・遺物の状況からは、交流の可能性が考えられるのは弥生時代中期までである。本遺跡が全盛となる後期には力武遺跡群の主体は段丘の東端へと移っており、三沢南崎遺跡との関連は希薄であったと思われる。

三沢栗原遺跡との関連

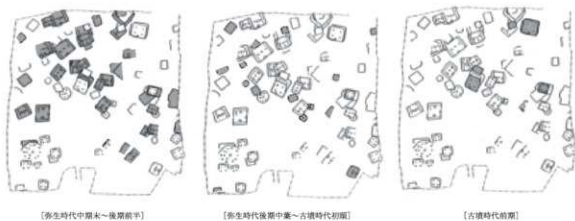
これは別に、直接的な交流は想定しづらいが、極めて似通った地理的環境にあるのが同じ三国丘陵上に所在する三沢栗原遺跡である。昭和56年から4次にわたる発掘調査が実施されたこの遺跡は、三国丘陵から南へ延びる丘陵上に位置し、北・東の2面で谷部に面する。北の谷部には現在の土田町堤から、東の谷部には一ノ口堤から発生する小河川が流れ、これが合流して口無川となって三沢南崎遺跡の南を經由して宝満川へと注ぐ。谷部に面する方向こそ異なるが、立地条件は本遺跡と酷似している。

この遺跡では弥生時代前期前半から小規模な集落が始まり、これが連続して、中期末から古墳時代初頭にかけてピークを迎える。中でも弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺構密度は高く、出土遺物も多岐となる。特筆すべきは鉄製品の豊富さで、その種類は農・工具から武器にまで及び、鉄鏝や素材と思われる板状鉄塊も出土している。集落内での鉄器製造の可能性も提示されており、渡来人との関連も示唆される集落である。出土遺物には中国製の鏡片があり、有力集団の居住する集落であったと判断されている。

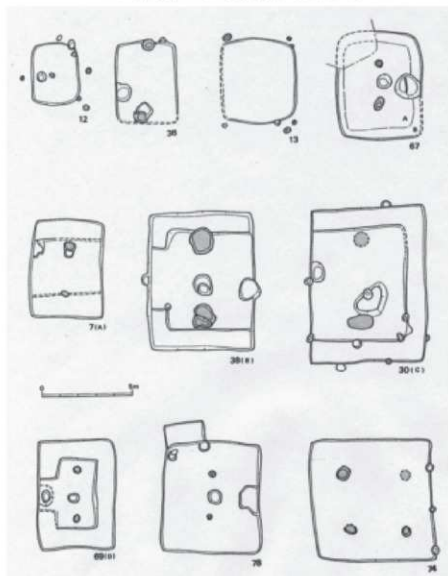
竪穴住居については、弥生時代中期末からベッド状遺構を持つ住居が登場して集落内の主体となり、古墳時代初頭までこの傾向が継続している。平面プランは長方形で2柱、柱間に柱を、側壁中央に屋内土坑を持つのが一般的なスタイルとなっている。ベッド状遺構に関しては、中期末～後期初頭は軸に沿った2辺のみベッド状遺構を伴っているが、後期後半にはコの字型に3辺に設置される、あるいは4辺にめぐらして一部に出入口状の空白部分を持つようになる、というベッド状遺構の拡大的な変化のとりえ方をされている。その後、出土土器の様式で言うと布留式以降は4柱の方形住居に転換し、古墳時代のカマドを持つタイプの住居へと繋がることと解釈されている。集落内の住居の立替については、弥生時代中期末～後期前半には隣接地への立替が見られるものの、後期中葉～古墳時代前期には離れた位置に新規に設置するようであり、三沢南崎遺跡の状況とは異なる。但し三沢栗原遺跡の所在する丘陵は、三沢南崎遺跡のある段丘よりも幅広であり、地形的な制約によって選地の状況が変化することも考慮に入れる必要がある。

乙隈天道町遺跡との関連

宝満川を隔てて東に位置する乙隈天道町遺跡は、小都市乙隈と朝倉郡夜須町（現筑前町）四三島にまたがる遺跡で、昭和62年に発掘調査が実施されている。遺跡は宝満川支流の草場川北岸の低台地であり、西・南の方向で小規模な谷部に向かって傾斜している。台地は東を宝満川、南を草場川、北を曾根田川に囲まれており、周辺は起伏に乏しい地形となっている。三沢南崎遺跡とは若干立地状況が異なるが、河川



<三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ区の住居分布状況> (市報告書第23巻)



<乙類天沼町遺跡で検出された住居の変遷案> (市報告書第66巻)

第155図 三沢栗原遺跡の住居分布と乙類天沼町遺跡の住居の変化

に囲まれた微高地に集落が所在し、その周辺に水田耕作遺構が存在する点は、これまで挙げてきた力武・三沢栗原・三沢南崎と共通する。

三沢南崎遺跡と同様、軌道工事に伴う発掘調査であるため集落の全容はうかがえないが、弥生時代中期の祭祀土坑から集落としてスタートし、弥生時代後期末～古墳時代初頭にピークを迎える。その後も集落は奈良時代まで継続し、近接する干潟城山遺跡とともに宝満川右岸の中心集落となったようである。遺構密度は非常に高く、集落そのものの変遷は提示されていないが、出土遺物の内容から遺構はピーク時に集中しており、短期間に頻繁な住居の立替が行なわれていたと思われる。この頻度と遺構の切り合い密度は三沢南崎遺跡と共通する部分がある。

竪穴住居については、ベッド状遺構の構造を4期に区分し、その拡大の変化をとらえている。解釈は三沢栗原で行なわれている内容とはほぼ同じであり、この変化そのものが一般的に見られる展開であることを示している。各期の具体的な時期は示されていないが、住居の短辺2箇所にはベッド状遺構を併用始めるのは下大隈式の時期であり、この形状は他の形状と並存して西新式（新段階）まで継続している。この中で3辺にベッド状遺構の設置範囲が拡大し、やがてベッド状遺構そのものが作られなくなっていくが、複数の形状が並存しつつ、大筋としては三沢栗原遺跡の例から提示されている変遷となるのは、三沢南崎遺跡の状況と一致する。但し隈天道町遺跡のベッド状遺構は全て盛土で構成されており、地山の段掘りが主体である三沢栗原・三沢南崎遺跡の状況とは異なる。三沢南崎遺跡でも下層遺構が存在する場合は盛土のベッド状遺構を確認しており、構築方法の差異は地山の残存状況に規定されるだけなのかもしれない。

この遺跡の出土遺物にも鉄製品が多量に含まれており、その内容は多岐に渡る。その一方で石廬丁を始めとする石製品も比較的用い時期まで残っており、並存の状況は三沢南崎遺跡と類似している。三沢栗原遺跡のように威儀的な遺物は弥生時代後期には認められない点も、似ていると言えるだろう。調査範囲が狭域であるため、今後の調査によって新たな発見の可能性もあるが、有力集団の居住域ではないが防御施設を伴わず、軍事的利点も持たないのに後期に全盛となる集落、という点で、同時の社会では三沢南崎遺跡と同種類の集落であったと想像される。

(2) 三沢南崎遺跡の環濠

今回の調査区内では、遺跡の最古段階の遺構として、断面V字形の環濠を検出している。同様の形状を示す環濠は、調査区南東に位置する三沢南崎遺跡1でも確認されているが、それぞれは異なる弧を描いており、同一の環濠とは認められない。それぞれの位置関係を示したのが第152図である。

< 1次調査環濠の性格 >

三沢南崎遺跡1の環濠は検出全長約10m、検出面からの深さ1.7～1.8m、幅2.0～2.1mを測り、西側にやや内湾する。断面はV字型で、最低1回の掘り直しが確認されている。最下層の出土遺物から弥生時代前期中葉までに掘削されたと判断されている。これと同一の溝が隣接地の下水道工事の際に掘削されており、東西幅約50mの環濠となるようである。前項でも述べたが、1次調査区で検出された弥生時代前期の遺構は環濠と貯蔵穴のセット関係であり、この環濠は貯蔵穴を圍繞するものと判断されている。

弥生時代前期の環濠は、外敵からの貯蔵穴の防壁と、貯蔵穴内の湧水を誘導するための施設として掘削された例が多いようである。平成20年度に小部市大塚で発掘調査を実施した大塚横枕遺跡（平成22年度報告書刊行予定）においても、同様の機能を果たしたと思われる環濠と貯蔵穴の組み合わせが確認されている。1次調査で検出された環濠が、どの程度の規模の貯蔵穴群を圍繞していたかは、今後遺跡所在地の南部の調査によって確認されるであろうが、段丘の先端に近い部分に貯蔵穴群を構築し、段丘根元側を切るように環濠を掘削していることから、比較的小規模なものと想定される。

なお1次調査で確認された環濠は、その後多数の環濠を伴う集落が展開する三国丘陵上では最も早い段階のものとなる。環濠掘削には多数の人手と期間が必要であり、周辺集落との連携が必須である。初段階の環濠を持つ、弥生時代前期の三沢南崎遺跡が当時の社会状況においてどのような位置づけをされていたのかは重要な問題であり、今後の資料の増加が待たれるところである。

<今回調査区で検出した環濠の性格>

今回検出された環濠（SD04・09）については、Ⅰ区で検出された部分（以下SD04と記す）は全長約13m、南西側に内湾し、幅2.2m、深さ0.3mで断面は台形となる。Ⅲ区で検出された部分（以下SD09と記す）は全長約39m、東側にわずかに内湾し、幅1.9～2.0m、深さ1.0m前後で断面はV字型となる。土層観察から、1次調査区で検出された環濠（以下SD01と記す）と同じく、1回以上の掘り直しを行なったと判断している。全体は東西幅70m前後の規模となると想定される。

溝としての形状はⅠ・Ⅲ区でそれぞれ異なるが、SD04は段丘崖から段丘上へと環濠が伸びる屈曲部を検出している。地形的な制約によりV字型掘削が困難であったとも考えられるし、段丘崖という自然地形を利用することで環濠の掘削は最小限にとどめたと想像することも出来る。検出した環濠の湾曲具合から南東側の継続ラインを推定すると、ちょうど現行の農道上に環濠が走ることになる。この農道部分も県道開発対象地であり、今回調査範囲に含まれていたが、交通路確保のため調査不可としている。今回の調査区と東側の農道とは3m前後の高低差があり、過去に造成による削平も受けている。これでも三国丘陵で確認されている環濠の中には、急傾斜の斜面や丘陵端部の崖面など、自然地形を利用して防壁施設あるいは区画の境界とし、その部分には環濠を掘削しないという傾向が認められる。三沢南崎遺跡の場合はどのような措置を講じていたのか、実際の遺構から確認出来る可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

SD09はSD04から北西へと延長した環濠が北端部分で湾曲し、南へと戻るラインを検出している。段丘上の平坦部に構築されていることから、深さは全体に均一で、湧水もなく形状も良好に維持されている。調査区外へ延長する南西端から継続ラインを推定すると、1次調査区よりやや南で段丘西側の崖面にぶつかることになる。この崖下には南北方向に流れる自然流路が存在することが、三沢南崎遺跡4（平成20年度報告書同時期）の調査成果から明らかになっており、流路埋土内には環濠と同時期の遺物も含まれている。おそらく段丘上の集落に居住した人びとの生活痕跡の一部であろう。またそれより南側は舌状段丘が低地へといたる傾斜部分となる。今回検出した範囲内では、環濠の岸部には橋状の構造物を設置した痕跡は認められていない。環濠外にある流路への出入が確認されていることから、SD04-09の未調査区画、あるいは南への延長部分に構造物痕跡もしくは陸橋が残存している可能性が考えられる。

またSD04・09は、SD01の埋没直後に新たに掘削したものと判断している。調査段階では二重にめぐる環濠の可能性も想定していたが、最深度の形状がSD01と09では異なっており、出土遺物の時期にも差があること、今回調査区では貯蔵穴がほとんど認められず空濠であること、SD01の北端が今回の調査区では確認されておらず、環濠間が30m以上開くこと等から、別時期に用途を異として構築された遺構であると考えた。

三沢南崎遺跡は舌状段丘の南端部に近い位置から遺構の分布がはじまり、前期後葉にはSD01の想定北限ラインよりも北側で、円形住居を含む集落が本格的に展開する。SD04・09は描くラインこそSD01と類似するが、この時期に発生する集落域より北を取り巻くように掘削されており、これより外側には集落を構成する遺構は確認されていない。これらの状況を踏まえると、SD04・09は集落域を区画するための環濠であり、段丘南端で発生した集落が北に拡大すると同時に構築されたと判断出来る。この状況は冒頭に記した力武遺跡群の集落北端の様相と酷似しており、この時期の集落構造や立地条件による集落施設の在り方、近接する集落間の近似性を考える上で興味深い事例であると言える。

(3) 出土遺物の様相

本遺跡で検出された住居内では、バンケースにして総数87箱の土器・石器類が出土している。このうち遺構に伴い、かつ残存状況が良好なもののみを本書に掲載している。主となるのは弥生時代後期の土器群であり、中期末から古墳時代初期にいたるまでの流れを追うことが可能な量の資料が確認されている。北部九州の弥生土器編年は森貞次郎を嚆矢に、長年多くの研究者によって検討・提案がなされており、細密な成果が蓄積されてきた分野である。本遺跡の所在する三国丘陵上で出土した弥生土器についても、内陸部特有の独自性を持った土器群として、これまでの調査成果を基に詳細な編年が組まれてきた。しかし後期の土器については、出土遺跡が極めて限定されるという条件ゆえに、前・中期と比較するとその精度に

はやや問題を残している。本遺跡では、これまで資料不足の感がいなめなかった後期の土器がまとまった出土をしており、今後の三国丘陵上の弥生土器研究に寄与出来るものと考えられる。ここでは、出土遺物の中から後期の特色を良く示していると思われる資料を取り上げ、三沢南崎遺跡内で見られる土器様相の変化を概観したい。但し、出土遺物については1遺構から出土したものであっても内容には時期幅があり、複数の型式にまたがるものが多く、調査段階の遺物取り上げの際に詳細に分割しなかったことから、ここではやむなく一括の遺物として取り扱っていることをお断りしておく。

＜出土土器の概要＞

前期～中期の土器は、これまでの調査において三国丘陵上の集落遺跡から出土したものとほぼ同じ形状を示す。素材となる粘土が花崗岩ハイラン土ではないため、全体に精良で精製な印象を受けるが、外形や調整、器構成にも共通性が認められる。

後期前葉までは中期の土器の要素が現存するため、やはり共通点が多い。しかし後期中葉以降になると様子は一転し、異質な状況となる。外面調整はタタキが明瞭に残るものが多く、ハケで丁寧に消している既出品とは全く異なっている。器型も三沢南崎遺跡出土のものとは肉厚で、一見粗雑な印象を受ける。何より、後期末になると他遺跡では多量に含まれてくる外来系の土器が（高杯など一部を除いて）ほとんど認められない状況である。出土遺物の多くは、既存の土器編年の上に掲載されることのない、いわゆる在地系の土器であり、これが遺構の時期決定を極めて困難なものにしている。

このような土器様相であるのは、三沢南崎遺跡の集落としての在り方にも要因があると思われる。前述のように同時期の集落である三国の鼻遺跡は、軍事上の監視地としての位置づけもされており、福四平野や広くは畿内も含む他地域からの影響を受けやすい状況にあったと推測される。また、三沢原遺跡についても外来鏡を有する有力層の居住があった以上、他地域との交流は存在したものと考えられる。このような環境にあった両集落においては、日常品である土器にもその影響が反映され、いわゆる外来系土器と呼ばれる製品が流入あるいは製作されたにいたったのだろう。これに対して、三沢南崎遺跡はいわば「田舎の一集落」であり、集落本体の発展も農耕社会における必然的展開の帰結であるとも思われる。このような中では日常品の形状も既存の技術・手法を踏襲していく中での変化にとどまり、その結果として在地系土器の使用へと繋がっていくと考えられる。

但し、同じような在地の集落であったと考えられる乙類天道町遺跡の土器と類似する傾向があるのは上記の理由から解釈が可能であるが、器構成・器面調整などについては甘木市（現朝倉市）平塚山の土遺跡・平塚川添遺跡で出土している遺物とも共通点が認められる。平塚川添遺跡は弥生時代後期の北筑後の拠点集落であり、集落を圍繞する三重の溝を持つ後期の環壕集落として知られている。この共通性については、日常品を規制する地域性という括りで解釈すべきであるのか、それ以外の何らかの要素が存在するのか、今後集落本体と出土遺物を併せて詳細な検討を行なう必要があるだろう。

＜弥生時代後期初葉～前葉の様相＞

既存の編年では高三瀬（古～新）式とされる時期のもの。甕類は中期末の流れを引く「くの字」型に屈曲した口縁部を持ち、底部は平底となる。外面調整はタテハケが主体である。鉢類は前段階の形状を踏襲するが、一部コップ状の形状を持つものも含まれる。器台は鼓形で前段階から大きな変化は認められない。壺は口縁部が内湾を始め、胴部が円形に近く張りを持つ。

本遺跡においては、SD08・SC46・56など住居6軒と溝1条が高三瀬式古段階、SC47・57など住居6軒が高三瀬式新段階の遺構となる。出土遺物は概ね既存の編年表に載る内容であるが、強いというなら甕類の出土が極めて少量であるところが特徴的である。

＜弥生時代後期中葉～後葉の様相＞

下大隈式と呼ばれる時期のもので、この時期が三沢南崎遺跡の集落の最盛期となる。甕類の底径が前段階より小さくなり、底部の厚みが若干増す。器台は上部に広がりを持ち、中央より上に屈曲部分が認められるようになる。甕類は胴部がソロバン玉状に張り出し、体部の尖突が前段階より低い位置へ移動する。

この段階の遺構としては、住居20余軒が確認されている。三沢南崎遺跡出土遺物では、甕の頸部より上にタタキが残存するか、ここに消去のためのタテハケが明確に施されるかと、体部下方にタタキを残すか、タテハケで消すか、の2点において2期に区分が可能である。古い段階では良好な一括遺物は出土していないため、小片を基準に判断している。SC44で出土している土器群がこの過渡期に当たり、双方の様相を示す土器が確認されている。なお、新しい段階では台付鉢・甕や口縁部が直立に近く、甕のように煮炊きに使用された甕が見られる。

下大塚式の新しい段階から、出土遺物に鉄製品が含まれるようになる。本遺跡からの出土品はヤリガンナが多く、農耕具は少量である。この段階は短期間に住居の頻繁な立替が認められる時期でもあり、大工道具であるヤリガンナが目立つ点は非常に興味深い。

＜弥生時代後期末～古墳時代初期の様相＞

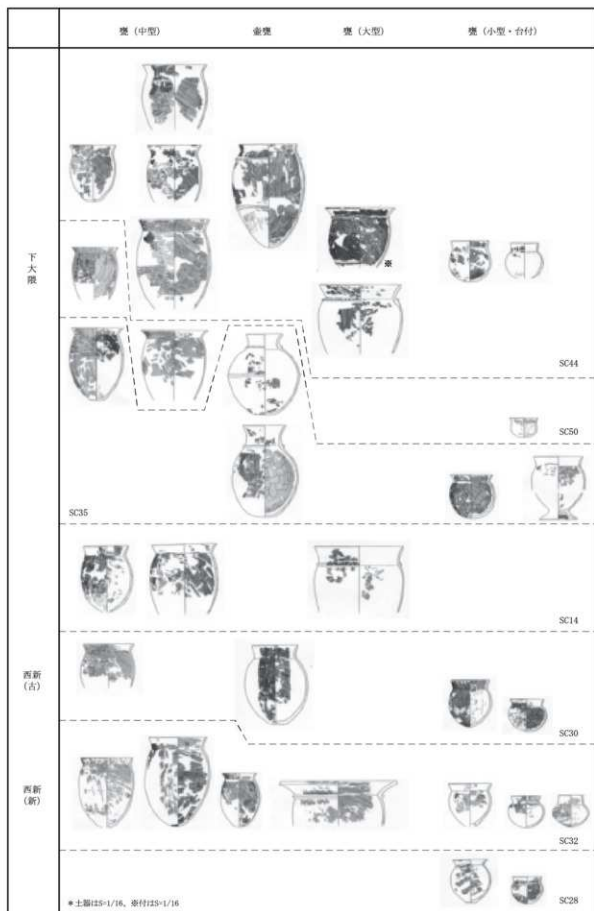
西新式と称され、弥生時代から古墳時代への過渡期となる時期のもの。外来系土器が出土する集落では布留甕が含まれる。在地系の器種には大きな変化は認められないが、甕・壺類の底部が丸底志向を示し始める。高杯の杯部が前段階よりも外反し、内面に暗文が見られるようになる。

三沢南崎遺跡の集落はやや規模が縮小する時期である。この時期の土器は、高杯にのみ外来系の細くS字に湾曲した杯部を持つものが認められる他は、ほとんどが在地系の土器で占められる。布留甕的な形状を示すものも一部には見られるが、体部外面に併行タタキを残すなど、在地色が強い。なお、甕類はこの時期から底部のケズリ調整が施されるようになる。

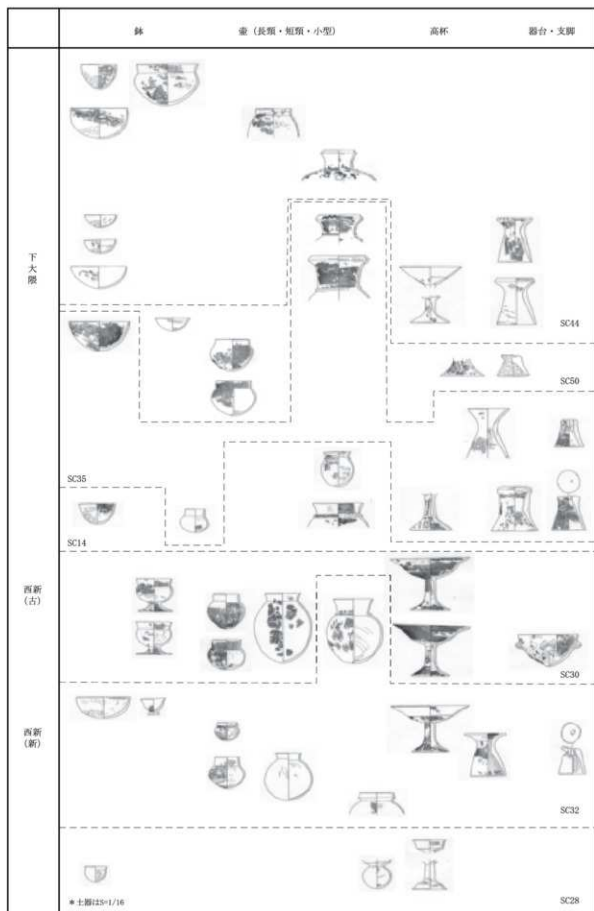
石苞丁をはじめとする石製品はこの段階まで継続して使用されていたようである。三沢栗原遺跡や乙辰天道町遺跡ではこれよりやや先行して鉄製品の使用が本格化しているのと比べると、何らかの要因が働いていると考えられる。

ここまでは、あくまで出土遺物のおおまかな変化を既存の編年軸に沿って並べただけであり、これを弥生時代後期の土器編年に昇華させるにはより詳細な資料分析や他遺跡・他地域との比較検討が必要である。今回は時間的制約もあり概観にとどめたが、外来系土器との共伴を必要としない在地系遺物の時間軸設定の確立は必須であり、今後の急務の課題としたい。

三沢南崎遺跡の発掘調査は、4車線の道路幅の中から80軒の住居を検出するという、非常に密度の高い遺跡内で実施された。面積だけ見れば小規模な遺跡であるが、その内容は実に多彩かつ広範囲にわたっており、調査報告のみでおさめられるものではない。ここでは詳細な検討を要すると思われる問題点を列記したのみであるが、これから弥生時代の社会構造論、集落構造論を論じる上で、多くの資料を提示する遺跡であることは間違いない。ここで挙げた諸問題の詳細な分析と検討については、今後の資料の増加を期待しつつ、調査担当者の課題とすることを許されたい。



第156図 出土土器変遷案(1)



第157図 出土土器変遷案(2)

遺物観察表



＜三沢南崎遺跡3 出土土器＞

発掘番号	図面番号	器形	位置 (発見)	色調	粘土	構成	成形・調整技法	備考	整理番号
第13001		甕	高: 11.0 高: 8.9 底厚: 0.9	外: 赤褐色 内: 黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	内: ハラケズリ 外: マダキ		8303-9
第13002	23	鉢	口: 11.0 高: 7.0 底厚: 0.9	外: 赤~黒灰色 内: 黒灰色~一部褐色	2~3mmの砂粒を含む	不良?	底内: 陶オキミ残ナゾ	著しく歪む。	8304-15
第13003		甕	口: 10.2 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好	内: 飯炊工具ナゾ		8302-1
第13004		甕	高: 15.4 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤褐色 内: 赤褐色~黒灰色	1~2mmの砂粒を含む	良好			8302-3
第13005		鉢	口: 11.0 高: 7.0 底厚: 1.1	外: 赤褐色 内: 黒灰色	1~2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	外: ハケ目のあとがわずかに残る	外面に黒痕。	8304-13
第13006		甕	口: 10.5 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 褐色 内: 明褐色	1mm以下の砂粒、角閃石を含む	良好	口外: ココナダ、ハケ目		8303-1
第13007		甕	高: 12.0 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 黄褐色 内: 黒灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	良	底内: ココナダ		8304-11
第13008		甕	口: 11.8 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 赤~黄褐色 内: 黄褐色	2~3mmの砂粒を含む	良好	内: ナゾ、ココナダ 外: ハケ目、ココナダ		8304-19
第13009		甕	口: 11.8 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 赤褐色	1~4mmの砂粒を含む	良好?	口外: ココナダ 内: 飯炊工具ナゾ 外: ハケ目		8304-1
第13010		鉢	高: 7.05 高: 6.0 底厚: 0.9	外: 赤~白~褐色 内: 明赤褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	内: ハケ目、滑オキミ	外面に黒痕、内面に赤色付着痕。	8304-14
第13011		支脚	上端: 6.0 高: 6.0	外: 黄褐色	1mm以下~2mm程度の砂粒を含む	良好			8304-18
第13012	23	甕	口: 9.1 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 灰黄褐色~赤褐色 内: 赤~黄褐色~灰黄褐色	微細~1mmの砂粒をやや多量に含む	普通	口内: ココナダ、ハケ目 口外: ココナダ、ハラケズリ、陶オキミ残ナゾ 底内: ナゾ 外: ハケ目、ナゾ	胴部に穿孔1個あり、外面に黒痕。	8304-6
第13013	23	甕	口: 9.0 高: 9.0 底厚: 0.7	外: 黒褐色	粗良	良好	口: 滑オキミ残ナゾ 内: ナゾ 外: 陶オキミ残ナゾ	手取痕。	8304-12
第13014		鉢?	口: 13.2 高: 9.3 底厚: 1.0	外: 明褐色~黒灰色 内: 黒灰色	1mm以下~2mmの砂粒、角閃石を多量に含む	良好	口: ココナダ 内: ハケ目 外: ナゾ		8304-11
第13015		甕	口: 11.0 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 赤褐色	大小の砂粒を含む	良好	底内: 陶オキミ残ナゾ 底外: ハケ目		8304-4
第13016		甕	高: 10.1	外: 赤褐色	大小の砂粒を含む	良好	底内: ハケ目 口: ナゾ		8303-3
第13017		甕	口: 10.5 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤~黄褐色 内: 黄褐色	1mm以下~2mmの砂粒を含む	良好	口: ココナダ		8304-1
第30001		甕	口: 10.0 高: 11.0 底厚: 0.7	外: 赤~白~褐色 内: 赤~黄褐色~赤褐色	1~3mmの白色砂粒をやや多量、1~2mmの金属片を少量、微細~2mmの角閃石をわずかに含む	普通	口外: ココナダ 内: ハケ目、滑オキミ残ナゾ 外: ハケ目	内外面に部分別に黒痕・スス。	8304-3
第30002		甕	高: 10.3 底厚: 0.7	外: 明赤褐色 内: 明赤褐色	大小の砂粒、角閃石を含む	良好	内: ナゾ 底内: 滑オキミ残ナゾ 底外: ハラケズリ、ナゾ	外面に黒痕。	8304-14
第30003	23	甕	口: 14.2 高: 11.1 底厚: 0.9	外: 赤~白~褐色 内: 赤~白~褐色~黒灰色	微細~3mmの砂粒を多量、微細~1.5mm程度の角閃石をわずかに含む	普通	内: 工具ナゾ、工具痕あり 外: ハケ目 底内: 穿孔による彫刻あり、ハラケズリ 底外: ナゾ、工具ナゾ	内面の口縁一部と口内下部に5~6、4、3層の部分を一貫するようなる彫刻。彫刻は構成内面から穿入。	8304-2
第30004	23	甕	口: 15.4 高: 11.4 底厚: 1.1	外: 赤~明褐色	微細~3mmの砂粒を多量、微細な金属片、微細~1.5mm程度の角閃石をわずかに含む	普通	内: 工具ナゾ、工具痕あり、滑オキミ残ナゾ 外: ハケ目、ナゾ	外面体部上位~体部1下部に5~6層の彫刻を有する。彫刻は構成内面から穿入。	8304-1
第30005		甕	口: 10.4 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤~黄褐色	大小の砂粒を含む	良好	中や不良		8304-13
第30006		甕	口: 10.4 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤~黒褐色	2~4mmの砂粒を含む	良好	内: ナゾ	外面に黒痕。	8304-12
第30007	23	甕	高: 10.2	外: 黄褐色 内: 黄褐色	3~4mmの砂粒を多量に含む	良好	ハケ目	外面に黒痕。	8304-3
第30008	23	甕	高: 14.0 高: 10.0 底厚: 0.9	外: 赤~白~黄褐色 内: 褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	底内: 飯炊工具ナゾ 底外: ハケ目	外面に黒痕。	8304-6
第30009		甕	口: 11.8 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤~白~褐色 内: 褐色	1~3mmの砂粒を含む	良好	口: ココナダ 口内: ハケ目		8304-1
第30010		甕	高: 10.0 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 黄褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	良好	内: ハケ目、滑オキミ残ナゾ 外: マダキ		8304-3
第30011		甕	口: 12.0 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 明赤褐色~赤色	微細~4mm程度の白色砂粒、微細~2mm以下の赤褐色片、微細な金属片、角閃石を少量含む	普通	口: ココナダ 内: 滑オキミ残ナゾ 外: ナゾ	内外面丹色。	8304-19
第30012		甕	高: 10.35	外: 黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	良好	口内: ココナダ 口外: ココナダ		8302-2
第30013		甕	高: 11.1 底厚: 0.9	外: 赤~白~黄褐色 内: 黒灰色	細砂粒を多量、2mm程度の砂粒、角閃石を含む	中や不良?	内: ハケ目 外: ハケ目 底内: 滑オキミ残ナゾ 底外: ナゾ		8304-4
第30014		甕	高: 14.25 高: 10.6 底厚: 0.9	外: 黄褐色~赤褐色 内: 褐色	1~2mmの砂粒、角閃石を含む	良好	底内: 陶オキミ		8304-11
第30015		甕	口: 12.0 高: 11.0 底厚: 0.9	外: 赤~白~黄褐色 内: 褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好			8302-4
第30016		鉢	口: 11.6 高: 7.1 底厚: 1.1	外: 赤~黒~緑灰色 内: 赤~褐色	微細~2mm程度の白色砂粒、微細な金属片、黒色粒を少量含む	良好	口: 工具ココナダ 内: 飯炊工具ナゾナゾ 外: 飯炊工具ナゾ	底面に外面に黒痕、内面外縁に黒痕。	8304-12
第30017		甕	口: 14.2 高: 9.9 底厚: 0.9	外: 赤~黒褐色	微細~3mm程度の白色砂粒、微細な角閃石、黒色粒を少量含む	普通	底内: 滑オキミ 内: ナゾ 外: ナゾ、ハケ目 底外: ナゾ	穿孔が直で斜め。内面に作りかけの彫刻あり。	8304-14
第30018		甕	高: 8.6 高: 12.2 天厚: 1.2	外: 赤~褐色	微細~3mmの砂粒を多量、金属片を少量含む	中や不良	底内: ナゾ 底外: 一部ハケ目が残る	胴部に4ヶ所着いた彫刻。	8304-15

線区番号	駅番号	駅名	線区(区画)	位置	軌上	構造	成形・建築方法	備考	駅番号
第34001		林	口:13.2 高: 31.0	外:灰黄緑~緑色 内:灰黄緑~濃い緑色	鐵線~2m程度の白色砂粒を多量に、黄緑色の雲母を少量、黄緑色1mm程度の角閃石を若干多く含む	良好	口:タタキ後ナゾ 内:外:工具ナゾ	外面に黒炭。	第3219
第34002		波	口:131.0 高:131.0	外:赤~濃い黄緑色 内:赤~黄緑色	鐵線~1m程度の砂粒を多量、黄緑色の雲母と角閃石を少量含む	普通		外面に片巻り石。	第3211
第34003		高杉	口:127.0 高:18.0	外:緑色	鐵線~2m程度の白色砂粒、鐵線~1m程度の茶褐色粒を少量含む	良好	口:ヨコナダ 内:外:ナゾ	内面に片巻り石。	第3218
第34004		赤	高:(13.9) 高:(13.7) 底:8.35 底厚:0.7	外:黄緑褐色 内:濃い黄緑色	1~2m程度の砂粒、白色砂粒を多量に含む	普通	内:板状工具ナゾ 外:ハケ目 底内:ヨコナダ 底外:ナゾ	外面の一部をナゾに片巻り石。	第3212
第34005	24	菟	口:18.0 高:7.6	外:黄緑褐色~赤褐色 内:黄緑褐色	鐵線~2m程度の砂粒を多量、黄緑色の雲母をわずかに含む	普通	内:指オオエ、ナゾ 外:ナゾ	外面に片巻り石、底部下に穿石はなし。	第3218
第34006		狸	高:(11.1) 底厚:1.4	褐色	鐵線~2m程度の白色砂粒を多量、黄緑色の雲母、角閃石の角閃石、赤褐色粒をわずかに含む	普通	内:工具ナゾ 外:板状工具ナゾ 内:ハケ目 底外:ナゾ		第3213
第34007		踏台	土層:12.5 高:(11.9)	濃い黄緑~緑色	1~2m程度の砂粒、白色砂粒、黄緑色の雲母を多量に含む	普通	口:ヨコナダ 内:指オオエ、ナゾ 外:ハケ目 底内:ハケ目、指オオエ、ナゾ 底外:ヨコナダ		第3220
第34008	24	踏台	土層:(13.0) 高:18.6 底厚:14.6	外:黄緑褐色 内:黄緑褐色~濃い黄緑色	鐵線~3m程度の白色砂粒、鐵線~2m程度の茶褐色粒を少量含む	良好	内:工具、板、ナゾ、指オオエ、工具ナゾ		第3223
第34009	24	踏台	土層:11.45 高:17.9 底厚:9.9	濃い黄緑~緑色	1~2m程度の砂粒、白色砂粒を多量に含む	普通	口:ヨコナダ 内:指オオエ、ナゾ 外:ハケ目 底:ヨコナダ		第3231
第34010	24	壁	口:(12.0) 高:(18.0)	緑~黄褐色	鐵線~2m程度の砂粒を多量、黄緑色~1mm程度の雲母をわずかに含む	普通	口:ヨコナダ 内:ナゾ、指オオエ、赤~ハケ目	口線に黒炭、口線には白炭。	第3203
第34012		狸	口:(13.0) 高:(14.2)	濃い黄緑色	鐵線~1m程度の砂粒を多量、黄緑色~0.5mm程度の雲母を少量含む	普通	内:板状工具ナゾ 口:ヨコナダ 内:ナゾ~ハケ目、ナゾ底ハケ目 外:ハケ目	口線部分の一面のみは片巻り石。	第3202
第34013		壁	高:(11.9) 高:9.0 底厚:1.2	外:濃い黄緑~緑~赤褐色 内:黄緑褐色	鐵線~3m程度の砂粒を多量、黄緑色~0.5mm程度の雲母、角閃石を少量含む	普通	内:ナゾ 外:一部ハケ目 底外:ナゾ	外面全体に黒炭による赤化。	第3210
第34014		壁	高:(13.1) 高:9.5	外:濃い黄緑~緑色 内:濃い黄緑色	鐵線~2m程度の砂粒を多量、0.5~1mm程度の雲母を少量含む	普通	内:ナゾ 外:ナゾ後ハケ目 底:工具ナゾ	底面外面のみ赤化。	第3202
第34015		壁	口:(14.4) 高:(13.3)	外:黄緑褐色 内:灰黄褐色	鐵線~3m程度の砂粒を多量、黄緑色~0.5mm程度の雲母を少量含む	普通	口:ヨコナダ 内:指オオエ 内:ナゾ 外:ハケ目		第3204
第34016		壁	口:(14.0) 高:(13.9)	外:濃い黄緑~灰黄褐色 内:濃い黄緑色	鐵線~2m程度の砂粒を多量、黄緑色~0.5mm程度の雲母を少量含む	普通	口:工具ナゾ 内:ナゾ 外:ハケ目		第3206
第34017		壁	口:(14.7) 高:(13.6)	外:灰黄緑~黄緑~緑色 内:濃い黄緑色	鐵線~3m程度の砂粒を多量、黄緑色~1mm程度の雲母、角閃石をわずかに含む	普通	口:工具ナゾ 内:ナゾ 外:ハケ目		第3205
第34018		壁	口:12.5 高: (13.0)	外:黄緑褐色~濃い黄緑~緑色 内:黄緑褐色~黄褐色	鐵線~1m程度の砂粒を多量、黄緑色の雲母を少量含む	普通	口:工具ナゾ 内:ナゾ	口線部分外面にスス。	第3207
第34019	24	菟	口:128.0 高:19.9 底厚:9.4	外:黄緑褐色~濃い黄緑色 内:濃い黄緑色	鐵線~3m程度の白色砂粒を多量、黄緑色~2m程度の茶褐色粒、角閃石を含む	普通	壁:ヨコナダ 壁内:ハケ目 外:ハケ目 底外:ナゾ	断面に黒炭。	第3219
第340110	24	壁	口:128.0 高:19.9 底厚:9.4	外:黄緑褐色~暗灰色 内:黄緑褐色~暗褐色	鐵線~3m程度の砂粒を多量、黄緑色~0.5mm程度の雲母、1mm程度の茶褐色粒を少量含む	普通	口:ヨコナダ 内:外:ハケ目 底:ナゾ	底面に黒炭。	第3211
第42001		壁	口:(26.0) 高:(16.0)	濃い黄緑色	鐵線~3m程度の白色砂粒、鐵線~1m程度の茶褐色粒を少量含む	普通	口:ヨコナダ 内:ナゾ 外:ハケ目	内面にスス。	第3212
第42002		壁	口:(24.0) 高:(20.2)	外:濃い黄緑~濃い黄褐色 内:濃い黄褐色	鐵線~3m程度の白色砂粒、鐵線~2m程度の茶褐色粒を少量含む	良好	口:ヨコナダ 内:ナゾ 外:ハケ目		第3212
第42003		壁	口:(16.0) 高:(16.7)	濃い褐色	1mm程度の砂粒を多量、角閃石を含む	普通	内:ハケ目 外:タタキ	外面に黒炭。	第3213
第42004		壁	高:(13.0) 底:2.4 底厚:1.1	褐色	1~2mの砂粒を含む	良好	内:ナゾ		第3210
第42005		壁	口:(28.8) 高:(10.1)	外:濃い黄褐色 内:褐色	1~4mの砂粒を多量に含む	良好	口内:ヨコナダ 内:ハケ目 外:ハケ目、ハケ目(後方不明)		第3202
第42006		高杉	高:(11.0)	外:褐色 内:暗灰色	1mm程度の砂粒を含む	やや不良	内:シボリ底 外:ハケ目		第3204
第42007		赤	高:(16.95) 高:(16.0)	褐色	1~3m程度の砂粒を含む	良好	内:ナゾ 外:ヨコナダ、ハケ目、ハケ目(後方不明)	外面に黒炭。	第3200
第42008	25	壁	口:17.4 高: (17.45)	外:濃い黄緑色 内:濃い黄褐色	1~2mの砂粒を含む	良	口線:ヨコナダ 内:ハケ目 ヨコナダ 内:ハケ目 口外:外:ハケ目	口線部分外面一部を片巻り石にスス。	第3216
第42009		赤	高:9.2 高:(11.9) 底厚:0.8	黄褐色	1~2mの砂粒、角閃石を含む	軟質 [良]	口:ヨコナダ 内:底内:ナゾ、 底部分には工具、板、外:板、 ハケ目、層滅のため不明瞭		第3202
第42010		壁	口:(15.0) 高:(1.0)	外:黄褐色 内:濃い黄褐色	1~2mの砂粒を含む	やや不良 普通	内:ハケ目		第3203
第42011	24	壁	口:(16.5)~(11.0) 高:(4.9)~(1.5) 底厚:0.6	暗灰~灰黄褐色	1~2mの砂粒をわずかに含む	やや不良 普通	内:ハケ目 外:ナゾ	著しく歪む。	第3204
第42012		壁	口:(11.1) 高:7.7~6.9 底厚:0.95	灰黄色	1m以下の砂粒を含む	やや不良	内:指オオエナゾ 外:ナゾ	歪む。	第3202



線区番号	駅番号	駅名	位置(座標)	色調	施工	構造・調整方法	備考	備考	
第4381	24	盛	口: 28.4 高: 127.000 脚高: 24.9	外: 淡黄色 内: 浅黄緑~灰白色	1~2mmの砂粒・白色砂粒を少量含む	良	内: ハケ目 日外: ハケ目 内: 縦筋工具ナゲ 外: ハケ目	1) 縦筋面~縦筋面 下に黒塗。	8235-1
第4382	盛	口: 21.0 高: 121.500	外: 淡黄色 内: 灰白色	1mm程度の砂粒を含む	良	内: 上段はハケ目 外: タタキ	1) 縦筋面下に黒塗。	8235-19	
第4383	盛	口: 21.7 高: 121.9 脚高: 7.3 底厚: 0.8	外: 暗褐色 内: 暗褐色	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	外: 中位はハケ目	縦筋外面中位~縦筋 外面に黒塗。	8235-19	
第4384	盛	口: 22.3 高: 121.7 脚高: 7.9 底厚: 6.7	外: 淡黄褐色 内: 灰黄褐色	1~2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	不良	内: 中位~底位は指オキメナゲナゲ 外: 下段は縦筋はハケナゲ	1) 縦筋面~底位外 外: 下段~底位はハケナゲ	8235-9	
第4385	盛	口: 227.0 高: 121.8 底厚: 1.25	外: 暗~近い暗褐色 内: 暗褐色	1mm程度の砂粒をわずかに、角閃石を含む	良	内: 底内: ハケ目 外: 底外: ハケ目	縦筋外面下に黒塗	8235-19	
第4386	盛	口: 113.0 高: 121.6 脚高: 4.0	外: 近い淡黄色 内: 近い淡黄色	1mm以下の砂粒をわずかに、角閃石を含む	良	日外: 日外~外: ハケ目	縦筋外面下に黒塗	8235-2	
第4387	高杯ノ	高: 6.565	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	縦筋ノ 調整ノ ハケ目 基部内: ココナゲ		8235-20	
第4388	24	高杯ノ	高: 11.40 脚高: 13.6	暗褐色	微細な3.5mmの砂粒を多量、1~2mmの白色砂粒を少量含む	普通	内: ナゲ 外: 指オキメナゲ 内: ハケ目	縦筋外面下に黒塗 内: 縦筋面下に黒塗 内: 外側(外側~壁)	8235-20
第4389	盛	高: 116.40	淡黄褐色	1~2mmの砂粒を多量を含む	良好	日外: 日外/ハケ目 調整 黒目	縦筋外面~縦筋面 下に黒塗。	8235-3	
第4390	24	高杯ノ	高: 119.80 脚高: 14.0	外: 近い淡黄色 内: 近い淡黄色	2~4mmの砂粒を多量を含む	良	内: 調整はココナゲ、ほかはハケ目	縦筋外面~縦筋面 下に黒塗。	8235-19
第4391	24	高杯ノ	上層: 8.5 高: 12.5 脚高: 10.30	暗褐色	1~3mmの砂粒を多量を含む	良好	内: 上層はナゲ、下層はハケ目 ナゲ 外: 上層調整は指オキメナゲ、ほかはタタキ後ハケ目		8235-31
第4392	24	高杯ノ	上層: 8.5 高: 11.4 脚高: 11.20	外: 暗~灰黄褐色 内: 灰黄褐色	1mm以下~2mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	内: ナゲ 外: タタキ 縦内: ココナゲ	外面下層に黒塗	8235-30
第4393	支脚	高: 2.305	近い淡黄色	0.1~0.5mmの石膏・長石を少量含む。1mm程度をくわすかに含む	良好	上層: ナゲ 外: 指オキメ		8235-34	
第4394	24	支脚	高: 130.10 脚高: 111.30	外: 暗~黄褐色 内: 暗褐色	1mm程度の砂粒を多量を含む	良	内: ナゲ 外: 指オキメナゲ 内: ココナゲ	縦筋面が著しく歪む。	8235-33
第4395	支脚	高: 9.80	外: 暗褐色 内: 暗褐色	1~2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	不良	指オキメ		8235-33	
第4396	24	支脚	口: 110.90 高: 7.0	暗褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	内: 底内: 工具ナゲ 外: 底外: ナゲ	手直し	8237-6
第4397	25	盛	口: 27.90 高: 121.80 脚高: 9.8 底厚: 0.4	外: 近い淡~淡黄褐色 内: 淡黄褐色	微細な3mm程度の白色砂粒を少量含む。微細な石膏・白色砂粒を少量含む	普通		縦筋外面下段~底位 下に黒塗。	8237-4
第4398	25	高杯ノ	高: 9.80 脚高: 13.00	暗褐色	細砂粒を含む	良好	内: 上段はしぼり肌、中位~下位はハケ目 脚外: ハケ目後へツ(足音) 調整: ココナゲ	縦筋外面上段下に黒塗。脚部に穿孔(2x2)あり。	8237-8
第4399	25	盛台	上層: 8.30 高: 22.2 脚高: 16.3	暗褐色	微細な3mm程度の白色砂粒を多量、微細な石膏・角閃石を少量含む	普通	内: 上層はナゲ 指オキメ、3mmはハケ目後ナゲ 外: 上層はタタキ後ハケ目、中位~下位はタタキ		8237-7
第4399	25	盛台	口: 18.7 高: 15.1	外: 黒色 内: 暗黄褐色	微細な3mm程度の白色砂粒を少量含む。微細な石膏を少量含む	普通	日外: ココナゲ 日外: ハケ目 内: ハケ目 外: タタキ後ハケ目	縦筋外面中位に黒塗	8237-1
第4399	25	盛台	口: 22.30 高: 21.70	近い淡黄緑~暗褐色	微細な3mm程度の白色砂粒を多量、微細な石膏を少量含む	普通	日外: ハケ目後 ココナゲ 日外: ハケ目 内: ハケ目 調整: ハケ目後 ココナゲ 外: タタキ	縦筋外面中位に黒塗	8237-2
第4399	25	盛台	高: 10.80	淡黄褐色	0.5~1.0mmの石膏・長石を少量含む。1mm程度の石膏・角閃石をくわすかに含む	良好	内: ハケ目 日外: タタキ後ハケ目 内: ハケ目 外: タタキ	縦筋外面下に黒塗	8239-1
第4400	34-2	盛	口: 3.30 高: 3.9 脚高: 0.6	灰白~淡黄褐色	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	指オキメ		8239-31
第4400	34-2	盛	口: 5.80 高: 3.9 脚高: 0.40	外: 淡黄褐色 内: 淡黄褐色	1~2mmの砂粒を多量を含む	良好	指オキメナゲ	縦筋外面下段~底位 外面に黒塗。手直し。ミコチユア。	8239-18
第4400	34-2	盛	高: 2.90 底厚: 3.6 底厚: 0.4	黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	黄褐色	内: 底内: 指オキメナゲ	手直し。ミコチユア。	8239-20
第4400	34-2	高杯ノ	高: 4.7 脚高: 10.35	暗褐色	1~2mmの砂粒、角閃石を含む	良好	調整: ナゲ 縦内: 足音付は工具によるオキメ、ほかはナゲ、タタキ 調整外: ココナゲ	ミコチユア。	8239-17
第4400	34-2	盛	口: 7.0 高: 5.80	外: 灰黄緑~黒褐色 内: 暗褐色	細砂粒を含む	不良	指オキメナゲ	縦筋外面中位~底位 外面に黒塗。ミコチユア。	8239-19
第4400	34-2	盛	口: 9.85 高: 4.4 脚高: 3.15	淡黄褐色	0.5~1.0mmの石膏・長石を少量含む。1mm程度の石膏をくわすかに含む	良好	日: ナゲ 内: 底内: ハケ目ナゲ 外: タタキ後ナゲ 底外: 工具ナゲ	縦筋外面下段に黒塗。ミコチユア。	8239-10
第4400	34-2	高杯ノ	高: 4.4 脚高: 5.6	黄褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	基部内: 工具によるオキメ	ミコチユア。	8239-18
第4400	34-2	高杯ノ	高: 4.5 脚高: 6.7	外: 淡黄緑~近い暗褐色 内: 明黄緑~暗褐色 外: 明黄緑~暗褐色 内: 灰白~淡黄褐色 外: 明黄緑~暗褐色	微細な3.5mmの白色砂粒を多量、微細な石膏を少量含む 微細な3.5mmの白色砂粒を多量、微細な石膏を少量含む	不良	内: ココナゲ 日外: ハケ目後ナゲ 内: ココナゲ 中位~底位はハケ目後ナゲ 外: タタキ後ハケ目 底外: ナゲ	縦筋外面下段に黒塗。縦筋外面上層は縦筋による歪む。	8239-1



線形番号	架設場所	位置 (架設高)	色調	形状	構成・調整方法	備考	架設時期	
第54010	高床	口: (13.30) 高: (8.15)	内: 浅黄緑・黄緑・緑色 外: 浅黄緑・黄緑・緑色	楕円	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線~2mmの赤色粒を少量含む	普通	内: 下位後ラブリ目 (網織のたのき網織)。外: ラブリ目 (網織)	820-12
第54011	高床	高: (12.1) 脚: (14.4)	外: 浅黄緑・明黄緑・緑色 内: 浅黄・緑色	楕円	鉄線~6mmの白色砂粒を多量、鉄線~2mmの角閃石、1~3mmの赤色粒を少量含む	良好	脚間: ナブ・指オキテ 脚外: ナブ後ハタ目 (網織)	820-13
第54012	梁	口: (25.0) 高: 1.9 底厚: 1.5	内: 浅黄緑~黄褐色 内: 黄褐色	楕円	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線少量含む、1mmの赤色粒をわずかに含む	やや不良	口内: ナブ 内~底内: ナブ・指オキテ	820-8
第54013	25 梁	口: (15.0) 高: 11.3 底厚: 1.2	外: 緑・灰褐色 内: 緑色	楕円	鉄線~5mmの白色砂粒を中々多量、鉄線少量含む、1mmの角閃石をわずかに含む	普通	口脚: ナブ、ほかはハタ目	820-9
第54014	線?*	口: (6.4) 高: 4.9 底厚: 0.8	外: 緑~灰褐色 内: ぶい~黄~緑色	楕円	鉄線~2mmの白色砂粒を多量、鉄線少量含むをわずかに含む	やや不良	外: ナブ 底内: 指オキテ	820-4
第54015	線?*	口: (6.4) 高: 4.9 底厚: 1.3	緑色	楕円	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線少量含むをわずかに含む	不良	底内: 工具ナブ	820-3
第54016	梁	高: (8.0) 底厚: 1.4	外: 緑色 内: 緑色	楕円	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線少量含む、1mmの角閃石、1~3mmの赤色粒をわずかに含む	普通	外: 中位はタタキ、下位はタタキ後ハタ目 底外: ハタ目	820-6
第54017	高床	高: (10.25)	外: 浅黄緑・灰白・灰黄・明灰色 内: 灰白・浅黄褐色	楕円	鉄線~6mmの白色砂粒を多量、鉄線~1mmの黒色粒、鉄線~3mmの赤色粒を少量含む	普通	口内~脚内: 工具ナブ 口外: ナブ 口内: ハタ目 脚外: ハタ目 口上はタタキ1年程度、下位中部は工具ナブ 外: 上半はハタ目後半はナブ、下半は高はハタ目ナブ	820-13
第54018	25-1 口脚 梁	高: (11.9) 脚: (12.2)	黄褐色	楕円	0.1~0.3mmの砂粒をわずかに含む	良好	口内~脚内: 工具ナブ 口外: ナブ 口内: ハタ目 脚外: ハタ目 口上はタタキ1年程度、下位中部は工具ナブ 外: 上半はハタ目後半はナブ、下半は高はハタ目ナブ	820-7
第54019	造形土 製品	口: (6.0) 高: (11.2) 底厚: 1.0	外: 黄褐色 内: 黒灰色	楕円	中々粒、1~0.8mmの石片、長石を少量含む、1mmの角閃石をわずかに含む	良好	内: 指オキテ、ナブ、籠網付に製成し、除く部分には目付文字のない(丁寧なナブ?) 外: 丁寧なナブ	820-22
第54021	梁	口: 21.4 高 (15.8)	ぶい~黄褐色	楕円	1~3mmの白色砂粒を中々多量、鉄線少量含む、角閃石をわずかに含む	良好	口脚: ココナブ 口内~内: ハタ目 口外: ハタ目	820-4
第54022	梁	口: 20.5 高 (13.2)	底 浅黄緑~黄褐色	楕円	1~3mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口: ハタ目 内: 上位、下位はハタ目 外: タタキ後ハタ目	820-3
第54023	25 梁	口: 18.4 高 (13.2)	外: ぶい~黄褐色 内: ぶい~黄褐色	楕円	1mm以下の砂粒を含む	良好	口脚: ココナブ 口内: ハタ目 口内 上位~中位はハタ目、下位は指オキテ後ナブ 外: 上半はハタ目はタタキ後ハタ目、下位はハタ目	820-2
第54024	25 梁	口: (16.3) 高: 19.8	外: ぶい~黄緑~灰黄褐色 内: ぶい~黄緑~灰黄褐色	楕円	1~3mmの白色砂粒を中々多量、鉄線少量含む、角閃石を少量含む	良好	口: ハタ目 内: 上位は指オキテ後ハタ目後ハタ目、下位は指オキテ後ナブ 外: 中位はハタ目後ハタ目、ほかはハタ目	820-1
第54025	25 梁	口: (25.2) 高: 13.7 底: 1.6 底厚: 1.0	ぶい~黄褐色	楕円	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線少量含む、角閃石を少量含む	良好	内: 上位はハタ目、中位はハタ目後ハタ目、下位はココナブ 底内: 指オキテ 外: ハタ目後ハタ目	820-10
第54026	高床	口: 22.8 高 (7.7)	浅黄緑~灰色	楕円	鉄線~1mmの白色砂粒を少量、鉄線~1mmの角閃石をわずかに含む	普通	口脚: ココナブ 脚内: ハタ目 外: タタキ	820-18
第54027	高床	口: (7.1) 脚 脚: 13.0	灰黄~黄褐色	楕円	鉄線~3mm程度の白色砂粒を多量、鉄線少量含む、鉄線~2mmの角閃石を少量含む	普通	脚内: 工具ナブ ナブ 脚内: ハタ目	820-19
第54027	25 高床	口: 24.4 高 (16.2)	ぶい~黄褐色	楕円	鉄線~3mm程度の白色砂粒を中々多量を含む	良好	口内: ハタ目 口外: ハタ目後ハタ目 脚外: 脚外: ハタ目 脚内: 1年程度、ナブ ナブ (ハタ目) 脚外: ハタ目	820-17
第54028	25 高床	口: 32.6 高 脚: 18.0	緑色	楕円	鉄線~1mmの白色砂粒、角閃石を少量含む	良好	口脚: ココナブ ロ: ロハタ目後ハタ目 脚外: ハタ目 脚内: 指オキテ、ナブ 脚外: ハタ目 脚外: ハタ目 脚外: ハタ目 脚外: ハタ目	820-14
第54028	25 高床	口: (24.1) 高: 20.0-22.1 脚 脚: (16.9)	ぶい~黄緑~灰黄褐色	楕円	鉄線~2mmの白色砂粒、鉄線少量含む、角閃石を少量含む	普通	口外: ハタ目後ココナブ後ラブリ目、脚外: ハタ目後ココナブ、脚外: ハタ目後ココナブ、脚外: ハタ目後ココナブ、脚外: ハタ目後ココナブ	820-16
第54028	25 高床	口: 23.5 高 脚: 18.6	明黄緑~黄褐色	楕円	1~2mmの白色砂粒を中々多量を含む	良好	口脚: ココナブ ロ: ロハタ目 脚外: ハタ目 脚内: 1年程度、ナブ 脚外: ハタ目 脚外: ハタ目	820-15
第54024	25 梁	口: (11.2) 高: 11.6 底厚: 1.4	ぶい~黄褐色	楕円	鉄線~2mm程度の白色砂粒を多量、鉄線少量含む、鉄線~1mm程度の角閃石・赤色粒を少量含む	普通	口内: ハタ目、指オキテ 口外: ココナブ 内: 工具ナブ 外: 1年程度、ハタ目後ハタ目、脚外: 内: 指オキテ	820-9
第54025	25 梁	口: 14.3 高 脚: (15.9) 底厚: 0.6	灰黄~灰黄褐色	楕円	1~2mmの白色砂粒を少量含む	良好	口: ハタ目後ココナブ 脚内: ハタ目後ココナブ 内: 指オキテ、ナブ 外: 上半はハタ目、中位~下位はタタキ後工具ナブ	820-11
第54026	25 梁	口: 15.9 高 脚: (15.8) 底厚: 0.8	ぶい~黄褐色	楕円	鉄線~1mmの白色砂粒、鉄線少量含む	良好	口: ココナブ 内: ハタ目 外: 上半は工具ナブ、中位~下位はハタ目	820-5





種別番号	形状	形状	寸法 (最大値)	色調	鉱主	用途	採取・調整方法	備考	備考
第00007	26	底	口：19.3 高：31.6 胴：(13.8) 厚：0.7	青褐色	鉄屑→2mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、1mm程度の角閃石を少量含む	普通	内：工具ナブ		K30-9
第00008	26	底	口：12.2 高：12.6 胴：(5.8) 厚：0.9	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を少量、微細な雲母、角閃石をわずかに含む	良好	内：ヨコナブ 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染	K30-7
第00009	26	台付鉢	口：15.2 高：17.6 胴：(16.2) 底厚：0.9	淡赤褐色～淡黄色	1～3mmの白色砂粒を少量、微細な雲母、角閃石をわずかに含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	鋼製外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-11
第00010	26	台付鉢	口：15.1 高：14.0 胴：(14.4) 底厚：0.75	にぶい黄褐色～褐色	鉄屑→2mmの白色砂粒を少量含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	外面に黒染	K30-11
第00011	26	底	口：11.7 高：13.6 胴：(8.1) 厚：0.8	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石を少量含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-6
第00012	26	底	高：4.4 厚：0.8	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	鉄屑→1mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石をわずかに含む	良好	内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	鋼製外面に黒染	K30-9
第00013	26	底	口：14.2 高：22.6	にぶい黄褐色	鉄屑→3mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石、赤色粒を少量含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-1
第00013	26	底	口：21.7 高：(29.3)	外：にぶい黄褐色 内：淡黄～淡黄色	1～2mmの白色砂粒、微細な角閃石を少量含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	鋼製外面に黒染	K30-3
第00014	26	底	口：(19.8) 高：4.2 厚：0.6	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量に含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-9
第00015	26	底	口：22.3 高：(18.7) 厚：0.9	にぶい黄褐色～明褐色	鉄屑→4mmの白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石をわずかに含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-2
第00016	26	底	口：(49.2) 高：(116.0)	にぶい黄褐色	1～5mmの白色砂粒、微細な角閃石を少量含む	良好	内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-7
第00017	26	底	口：(18.2) 高：17.8	外：にぶい黄褐色～暗褐色 内：淡黄褐色～黄褐色	鉄屑→2mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、赤色粒、微細な角閃石を少量含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-4
第00018	27	底	口：8.8 高：7.0 厚：0.5	明黄褐色～淡黄褐色～暗褐色	鉄屑→1mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石を少量含む	普通	内：ヨコナブ 内：工具ナブ 外：ハナ目	鋼製外面→鋼製外面に黒染	K30-11
第00018	27	底	口：11.7 高：(8.7) 厚：(14.0)	外：暗褐色～黒褐色 内：暗褐色	1～2mmの砂粒、角閃石を含む	不良	内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ		K30-17
第00019	27	底	口：115.4 高：(8.7)	黄褐色	0.1～0.3mmの雲母、長石を少量含、0.1mmの雲母をわずかに含む	良好	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ		K30-16
第00020	27	底	口：(18.2) 高：13.5 厚：15.2	外：暗～にぶい黄褐色 内：褐色	1～2mmの白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石を少量含む	良好	内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面に黒染	K30-11
第00021	27	底	口：12.2 高：13.2 厚：0.6	黄褐色～暗褐色	鉄屑→2mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、赤色粒、鉄屑→2mmの角閃石を少量含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	1線部外面→鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-11
第00022	27	底	口：17.3 高：18.0 厚：14.9	明黄褐色～にぶい黄褐色	鉄屑→2mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石を多量含、赤色粒を少量含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	外面に黒染 外面に黒染 外面に黒染 外面に黒染 外面に黒染 外面に黒染	K30-29
第00023	27	支脚	上高：8.2 口：19.2 高：11.7 厚：0.4	外：黄～黄褐色 内：褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	内：上面に付着したヨコナブ、ほかにはヨコナブ、指オオス後ナブ、鉄屑のため不明		K30-29
第00024	27	支脚	口：5.7 高：10.3 厚：0.4	外：褐色 内：にぶい黄褐色～灰黄褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を含む	良	内：指オオス後ナブ	手拭紙	K30-31
第00025	27	台付鉢	口：(10.0) 高：(6.0)～7.1 胴厚：0.6	外：にぶい黄褐色 内：褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ	黒く変色	K30-25
第00026	27	台付鉢	口：(17.2) 高：(11.3)	淡黄褐色	鉄屑→2mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、角閃石、赤色粒をわずかに含む	普通	内：ヨコナブ 内：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ 外：ハナ目 内：指オオス後ナブ		K30-31
第00027	27	高杯	口：(14.3) 高：15.0	褐色	鉄屑→1mm程度の白色砂粒を多量含、微細な雲母、赤色粒を少量含む	普通	内：上面に付着したヨコナブ、ほかにはヨコナブ、指オオス後ナブ、鉄屑のため不明	鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染 鋼製外面に黒染	K30-27





線区番号	駅番号	駅名	位置 (度分秒)	色相	軸上	境況	成形・調整経路	備考	備考番号
第40013	26	並	日: (10.6) 高: 19.9 側: 20.3 底厚: 0.4	浅黄緑色～青色	微細～2mm程度の白色砂粒を多量。微細～1mm粒の雲母・角閃石・赤褐色を少量含む。	普通	内: 工具ナゲ 外: ハケ目? 工具ナゲ磨滅のため不調	側面外面中位・内面～底面内面に黒染。底面外面下位～底面外面は磨滅部。	SC20-12
第40014	27	高床	日: (10.6) 高: 18.3 側: 20.5	黄褐色	微細～1mm粒の白色砂粒を多量。微細～2mm粒の角閃石を少量含む。	良好	日: ハケ目 側内: ハケ目後ナゲナゲ 外: ハケ目 側内: ハケ目 側外: ハケ目 側内: ハケ目 側外: ハケ目	側面外面に黒染。側面外面に穿孔3か所。	SC20-08
第40015	26	並	日: (10.6) 高: 27.3 側: 20.5 底厚: 1.0	浅黄緑～橙～青色	微細～2mmの白色砂粒を中量多量。微細～1mm粒の雲母・角閃石をわずかに含む。	普通	日外: 側面側面はハケ目後コナダ。日外はコナダ 内: 工具ナゲナゲナゲ 外: 変換は側面、日外はコナダ	側面外面上位～下位に黒染。	SC20-14
第40016	16	株	日: 22.6 高: 9.1 底厚: 0.5	黄褐色	微細～2mmの白色砂粒を多量に含む。	良好	日内: ハケ目 内: 工具ナゲナゲ 外: 上位～中位はナゲ、下位はハケ目後ナゲナゲ	外面下位に黒染。	SC20-03
第40017	1	株	日: 8.9 高: 15.4	外: 黄灰～浅黄緑色 内: 黄灰色	3mm以下の砂粒を含む。	不良	内: 内～内面 側オケナゲナゲ 外: 底外: ナゲ	日線部は意外。	SC21-7
第40018	20	覆	日: (10.6) 高: 20.4	にぶい黄褐色	微細～2mm程度の白色砂粒を多量。微細～1mm粒の雲母・角閃石をわずかに含む。	普通	日線: コナダ? コナダ日線後コナダ? 内: ハケ目 外: 上位はハケ目、下位はハケナゲ	日線部内面・側面外面高位～底面外面に黒染。	SC21-1
第40019	10	並	日: (11.4) 高: (10.9) 側: 23.3	明黄褐色	微細な白色砂粒を多量。微細～1mm程度の雲母や中量多量に含む。	普通	日線: コナダ?。ほぼはハケ目	SC21-5	
第40024	2	覆	日: (10.5) 高: 5.0 側: 23.3 底厚: 1.0	外: 浅黄～暗灰黄色 内: 暗灰黄色	微細～3mm程度の白色砂粒を多量。微細～0.5mm粒の雲母をやや多量。微細な角閃石を少量含む。	普通	内: 上位はハケ目。中位は工具ナゲナゲナゲ。下位～底面は側オケナゲ～底外: 板状工具ナゲ	外面は黒染。	SC21-2
第40025	26	長橋	日: (10.6) 高: 18.0 側: 23.3 底厚: 0.9	にぶい黄緑～明赤褐色	微細～3mm程度の白色砂粒を多量。微細～1mm程度の雲母や中量多量に含む。	普通	黄灰色コナダ?。ほぼはハケ目	側面内面・日線部外面～側面上半は黒染。	SC21-4
第40026	2	覆	日: (10.6) 高: 4.9 側: 23.3 底厚: 0.9	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	1～4mmの白色砂粒を多量。微細な雲母・角閃石を少量含む。	良好	内: 内～内面 側オケナゲ 外: 工具ナゲ 底外: ナゲ	側面外面中位にスダ	SC23-4
第40027	2	並	日: (10.4) 高: (10.4)	にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量。微細な雲母を少量含む。	良好	日内: 上位はハケ目。中位～下位はハケ目後ナゲナゲ。日外: 上半はコナダ?。下半はハケ目。内: ハケ目 外: 上位はハケ目。中位はハケ目後ナゲ	側面外面中位に黒染。	SC23-6
第40028	1	株	日: (10.4) 高: 4.0 底厚: 0.4	褐色	微細～1mm粒の白色砂粒を多量に含む。	良好	内: ハケ目後ナゲ 外: 工具ナゲ	SC24-11	
第40029	1	株	日: (10.4) 高: 4.9 側: (0.0) 底厚: 0.90	浅黄褐色	微細～2mmの白色砂粒をわずかに含む。	普通	内: ハケ目 外: ナゲ後側オケナゲ	SC24-5	
第40030	1	付付	日: (10.4) 高: (0.90)	黄褐色	1～2mmの砂粒を含む。	良好		側面に穿孔4か所。	SC24-9
第40031	1	付付	日: (10.4) 高: (0.90)	にぶい橙～にぶい褐色	1mm以下の砂粒・角閃石を少量含む。	良好	側内: 工具ナゲ 底面外: 側オケナゲ	SC24-7	
第40032	1	並	日: (10.4) 高: (0.90)	褐色	微細～3mm程度の白色砂粒を多量に含む。	普通		穿孔4か所。	SC24-8
第40033	1	覆	日: (10.1) 高: 0.8	外: にぶい褐色 内: 明黄緑～灰黄色	1～3mmの白色砂粒を多量。微細な雲母・角閃石を少量含む。	良好	内: 上位はハケ目。中位～下位はハケナゲナゲ 外: ハケ目。磨滅の色不調	底面外面に黒染。	SC24-1
第70001	27	覆	日: 21.5 高: 30.7 側: 9.9 底厚: 0.4	外: 橙～にぶい褐色 内: 橙～にぶい黄褐色	微細～2mmの白色砂粒を多量。角閃石を少量含む。	良好	日線: ナゲ? コナダ? 内: 上位はハケ目。中位はハケ目後ナゲナゲ。下位はナゲ後側オケナゲ。外: 上半はハケ目。中位～下位はハケ目 側内: 側オケナゲ 底外: ナゲ	側面外面下位～底面内面・側面外面下位～側面外面中位にスダ	SC20-2
第70002	2	覆	日: (10.6) 高: 0.6 底厚: 1.1	外: 灰黄緑～赤褐色 内: にぶい黄緑～灰黄褐色	微細～3mmの白色砂粒を多量。角閃石を中量。1～2mmの赤褐色粒を少量含む。	中々不良	日: コナダ? 内: 上位はハケ目。中位は側オケナゲ後ナゲ。中位はコナダ? 外: 上半はハケ目。下位はハケ目	側面内面～底面内面・側面外面下位～側面外面に黒染。側面上位にスダ。	SC20-4
第70003	27	覆	日: 21.35 高: 32.0 側: 9.4	外: にぶい黄緑～灰褐色 内: 黄灰色	微細～2mmの白色砂粒を多量に含む。	中々不良	日外: タタキ 側内: コナダ? 内: 上位～中位はコナダ?。下位はハケ目後工具履 外: 上半はタタキ後ハケ目	側面外面中位に黒染。側面外面下位～側面外面に黒染。側面上位にスダ。	SC20-1
第70004	27	覆	日: (10.4) 高: 18.4 底厚: 1.1	外: にぶい黄褐色 内: 灰黄褐色	0.5～3mmの白色砂粒を多量。赤褐色粒を少量含む。	良好	日線: ナゲ? 日内: ハケ目 日外: ナゲ後ハケ目 日外: 側内: ハケ目 外: ナゲ後ハケ目 外: ハケ目後ナゲ	日線部内面・日線部外面～日線部外面に黒染。側面外面下位～側面外面に黒染。全体的に黒染。	SC20-3
第70005	27	株	日: 20.5 高: 12.9 側: 9.9	外: 橙～にぶい赤褐色 内: 褐色	微細～3mmの砂粒を多量。微細な雲母をわずかに。微細な角閃石を少量含む。	良好	日: ハケ目後コナダ? 内: 底外: 内: ナゲ後ハケ目 外: ハケ目 側内: ナゲ後ハケ目 外: ハケ目 側内: ナゲ後ナゲ	側面外面中位～底面外面に黒染。	SC20-40
第70006	2	覆	日: (10.6) 高: (10.6)	外: 浅黄緑～黄褐色 内: 浅黄褐色	1～2mmの砂粒を多量に含む。	良	日線: 側内 変換: コナダ?	側面外面に黒染。	SC20-6
第71001	1	並	日: (10.6) 高: (11.5)	褐色	微細～3mm程度の白色砂粒を多量。微細な雲母・赤褐色粒・褐色を少量含む。	普通	日: コナダ? 側内: コナダ? 内: ハケ目 (磨滅) 外: 変換は側面、日外はナゲナゲ (磨滅)	日線部外面に黒染?。	SC20-15
第71002	2	並	日: 22.8 高: (10.6)	にぶい褐色	0.5～3mmの白色砂粒を多量。1mm程度の赤褐色粒を少量含む。	普通	日: コナダ? 側内: コナダ? 内: ハケ目 外: 変換はコナダ?	日線部外面に黒染?。	SC20-23
第71003	28	覆	日: 18.3 高: 33.9 側: 10.40 底厚: 1.0	外: にぶい黄緑～にぶい褐色 内: 褐色 内: 褐色 内: にぶい黄褐色	微細～3mmの白色砂粒を多量に含む。	不良	日内: 下半はハケ目。外: 変換はコナダ?。上半はハケ目。下半はタタキ後ハケ目 側内: ハケ目 底外: タタキ後ハケ目	側面外面中位に黒染。側面外面にスダ	SC20-22

線区番号	列車番号	車種	車長 (乗込人数)	色調	軸土	構造	経路・調整方法	備考	備考欄
071004	27	普通	高: 3(2, 2) 脚: 26.7 底: 8.7 底厚: 0.96	外: 紺～赤黒 内: 明赤黒～白 黒色	黒線～2mm程度の白色粉粒を多量、微細な雲母・黒色粒を少量含む	普通	日: ハク目 内: ハク目 外: 黄白ヨコナデ、内: 赤黒縦目、上段はハク目、下段はナデのため不滑順 底内: ナデ 底外: ナデが微細のたれを有する	脚部内面・脚部外面 上段～中位に黒線、念珠的に赤く塗む。	0638-17
071005	28	普通	日: 17.0 高: 38.5 脚: 27.3 底厚: 0.6	外: 明赤黒～紺色 内: 紺～白 黒色	0.5～2mmの白色粉粒を多量、金雲母をごく少量含む	普通	白線: ナデ 日内: 上平はナデ、下平はハク目 日外: ハク目 内: 黄白ヨコナデ、内: 赤黒縦目、上段はハク目、下段はナデのため不滑順 底内: ナデ 底外: ナデが微細のたれを有する	日線部外面～脚部外面 上段～中位に黒線。	0639-11
071006	29	普通	日: 16.0 高: 37.93	白～黄緑色	1～2mmの粉粒を多量に含む	良好	日: 脚部のため不明 内: ハク目 外: 赤黒縦目、上段はハク目、下段はナデのため不滑順	脚部外面～脚部外面に黒線。	0639-24
071007	30	普通	高: 39.53	白～黄緑～浅黄褐色	2～3mmの粉粒を多量に含む	良好	外: 赤黒縦目、上段はハク目、下段はナデのため不滑順	脚部外面に黒線。	0639-26
071008	31	普通	高: 37.51 脚: 24.25	紺色	1～2mmの粉粒、角閃石を含む	良好	ハク目	脚部外面に黒線。	0639-48
071009	32	普通	高: 37.1 脚: 21.9	黄緑色	2～3mmの粉粒を多量、角閃石を含む	良好	脚部外: ヨコナデ	脚部外面に黒線。	0639-10
071010	33	普通	高: 31.3 脚: 19.4	外: 浅黄緑～紺色 内: 浅黄褐色	黒線～3mm程度の白色粉粒・赤黒色粒を多量、微細な金雲母、1～2mm程度の角閃石を少量含む	不良		外面に黒線、底面は他色で塗り。	0639-16
071014	34	普通	上端: 17.25 高: 320.40	外: 浅黄緑～紺色 内: 浅黄緑～明赤褐色	黒線～3mm程度の白色粉粒を多量、微細な雲母・角閃石・黒色粒を少量含む	普通	内: 上段はナデ、中段はしぼり目、下段はハク目 外: 上段はタタキ後ハク目、中段はナデ、下段はハク目	全体的に黒く。	0639-40
071015	35	普通	日: 20.0 脚: 15.8 底厚: 0.5	外: 白～白 内: 浅黄緑～浅褐色	0.5～6mmの石膏・長石を多量、0.5～2mmの角閃石・赤色粒を少量含む	普通	日外: ハク目 内: 上段はハク目、中段はナデ、下段はハク目 底内: ナデ 底外: ハク目	脚部外面に黒線。	0639-55
071016	36	普通	高: 35.65 脚: 24.2	明赤褐色	細砂粒をわずかに含むが精良	良好	脚外: ナデ 脚部外: 指オニエナデ	脚部外面に黒線。	0639-58
071017	37	普通	高: 35.23 脚: 21.7	紺～白 黒色	黒線～4mm程度の白色粉粒、微細な雲母・赤褐色粒・黒色粒を少量含む	普通	脚部内: 上平はナデ、下平はハク目、中段はハク目、下段はハク目	脚部外面に黒線、脚部の穿孔は2ヶ所(両面から内側へと穿入)。	0639-60
071018	38	普通	高: 35.15 脚: 21.2	紺～紺 黒色	黒線～4mm程度の白色粉粒、微細な雲母・黒色粒を含む	普通	脚部内: 上平はナデ、下平はハク目 外: ハク目	脚部外面に黒線、脚部の穿孔は3ヶ所(両面から内側へと穿入)。	0639-65
071019	39	普通	高: 36.9 脚: 21.5 底厚: 0.7	外: 紺色 内: 紺～白 黒色	わずかに粉粒を含むが精良	良	内: 指オニエナデ 外: ハク目	脚部外面下方に黒線状。	0639-94
071010	40	普通	日: 18.9 高: 9.8 脚: 11.9 底厚: 0.7	外: 黄緑色 内: 黄緑～紺褐色	黒線～4mm程度の白色粉粒を多量、微細な雲母・黒色粒を少量含む	普通	日: ナデ 内: 上平はナデ後指オニエ、下平はハク目 底内: ナデ目	脚部内面下部～脚部内面に黒線。	0639-10
071011	41	普通	上端: 16.9 高: 31.15 脚: 22.25	外: 浅黄緑 内: 灰白色、明黄褐色	黒線～3mm程度の白色粉粒を少量、微細な金雲母・角閃石・赤褐色粒を少量含む	普通	上端: ナデ 内: 上平はしぼり目、下平はナデ後指オニエ 外: タタキ 縦目: ナデ	脚部外面～縦目間に黒線、縦目は著しく黒む。	0639-42
071012	42	普通	上端: 9.4 高: 14.5 脚: 14.2	外: 浅黄緑～灰黄緑～紺褐色 内: 灰白色	黒線～3mm程度の白色粉粒を多量、微細な金雲母・赤褐色粒・黒色粒を少量含む	普通	上端内: ナデ後指オニエ 上端外: ナデ 内: ハク目 外: タタキ 縦目: ヨコナデ		0639-45
071013	43	普通	上端: 9.4 高: 18.8 脚: 18.4	白～黄緑～紺～紺褐色	黒線～2mm程度の石膏・白色粉粒・赤褐色粒を多量、微細な雲母・微細な3mm程度の角閃石を少量含む	普通	上端内: ナデ 指オニエ 上端外: ハク目、縦目 内: 上段はハク目、中段はナデ、下段はハク目(縦線狭い) 外: ハク目(縦線狭い) 縦目: ナデ	縦線は黒む。	0639-41
071001	44	普通	高: 39.8	白～白 黒色	1～3mmの粉粒を多量に含む	良好	日内: ナデ 日外: ヨコナデ 内: ハク目(ナデ) 外: 黄白ヨコナデ、上段はハク目、下段はナデのため不滑順	日線部内外面に黒線。	0639-3
071002	45	普通	日: 30.7 高: 7.9	紺～黒色	微細な白色粉粒を少量、微細な雲母・黒色粒を多量に含む	普通	白線: ヨコナデ 日内: ハク目後指オニエ、日外: ヨコナデ後ハク目、内: ハク目後ハク目、外: ハク目後ハク目	日線部内外面に黒線。	0639-11
071003	46	普通	日: 35.0 高: 3.2 脚厚: 0.82	紺灰～灰黄褐色	1～4mmの粉粒を多量、金雲母を含む	やや不良		ミニチュア。	0639-10
071004	47	普通	高: 32.7 脚: 3.6 底厚: 0.7	外: 黒色 内: 白～白 黒色	1mm程度の粉粒を含む	良	内: 底内 指オニエ後ナデ 外: ナデ 底外: 不明	外面～両面全面に黒線、ミニチュア。	0639-46
071005	48	普通	日: 42.0 高: 4.2 脚厚: 6.3	外: 白～白 内: 紺～白 黒色	1～2mmの白色粉粒を多量、微細な長石・角閃石をわずかに含む	良好	指オニエ後ナデ		0639-8
071006	49	普通	日: 15.0 高: 7.4 脚厚: 1.9	外: 紺～白 内: 紺色	1～3mmの白色粉粒を多量、微細な雲母・角閃石をわずかに含む	良好	日内: ハク目 日外: ナデ 外: 指オニエ後ハク目、外: 上平はハク目、下平はハク目、中段はナデ、下段はハク目 縦目: ナデ、縦目	日線部外面～脚部外面に黒線。	0639-2
071007	50	普通	日: 12.45 高: 14.6	外: 明黄緑～白 内: 白～白 黒色	1～2mmの白色粉粒を多量、微細な雲母・角閃石をわずかに含む	良好	上端: ナデ 内: 上平はナデ、下平はハク目、中段はハク目、下段はハク目 縦目: ナデ、縦目		0639-10
071008	51	普通	高: 37.95	明黄褐色	1～2mmの粉粒を含む	良	日内: ナデ ナデが微細のため不滑順 日外: タタキ 外: 黄白ヨコナデ、上段はハク目		0639-3



検体番号	採取場所	形状	質量(測定値)	色調	胎土	製造	成形・修整技法	備考	分類
第19099	28	甕	口: (22.9) 高: (31.1)	外: におい黄橙～におい褐色 内: 黄灰色	黒線～1mm程度の白色砂粒をやや多量、黒線な雲目、黒線～2mm程度の角閃石を少量含む	普通	口内: ハケ目日後ヨコナゲ 内: ハケ目	胴部外面上・下段に黒線、胴部外面上・下段にヌス。胴部外面下段は焼結による赤化・緑化不明	SC3-1
第19100	高杯	高: (36.15)	外: 褐色 内: 明黄褐色	黒線砂を含む	良好	内: 上段～中段はしぼり肌、下段は指オオキ後ナゲ	内: 外面は丹塗。	SC3-1	
第19101	28	甕	口: 13.9 高: 15.9 底: 7.0 厚: 0.6	外: 褐色 内: 黄灰色	黒線～3mmの白色砂粒を多量、黒線～2mmの角閃石をわずかに含む	良好	口蓋: ナゲ ヨコナゲ 口内: ハケ目 外: 上段はタタキ、中段～下段はタタキ後～ラクスラ 底: ナゲ、指オオキ 底外: タタキ後～ラクスラ	口蓋部外面～胴部外面中段に黒線。	SC3-2
第19102	28	甕	口: 13.5 高: 16.1 底: 8.1 厚: 0.6	外: におい黄褐色 内: 淡黄～暗灰黄色	1～3mm程度の白色砂粒、黒線な雲目・角閃石を少量含む	良好	口内: 指オオキ後ハケ目 口外: 指オオキ 内: 飯炊工具ナゲ 外: 上段はタタキ後～ラクスラ、中段～下段はタタキ後～ハケ目 底内: 指オオキ 底外: ナゲ	口蓋部外面～胴部外面上段～中段に黒線。	SC3-1
第19103	甕?	高: (18.8) 底: 0.4	褐色	黒線～1.5mm程度の白色砂粒を多量、黒線～1.5mm程度の角閃石を少量含む	良好	内: ハケ目 底内: ナゲ、指オオキ 外: 底ハケ目日後ナゲ	胴部外面下段～底面外面中段に黒線。	SC3-3	
第19104	28	甕	口: (26.4) 底: (3.0)	外: におい褐色 内: におい黄橙～淡黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、黒線な角閃石を少量含む	良好	口内: ハケ目 口外: ヨコナゲ 内: 底内: ハケ目 外: 上平ハケ目、下半はハケ目後～ラクスラ。底面付近は～ラクスラ 底外: ハケ目ナゲ	口蓋部外面～胴部外面上段に黒線。	SC3-4
第19105	28	鉢	口: 9.2 高: 5.9 底: 3.1 厚: 0.8	褐色	黒線～2mm程度の白色砂粒、黒線～2mm程度の角閃石を含む	良好	口蓋: ナゲ 内: 底内: ハケ目 外: 上平ハケ目ナゲ 底外: ナゲ	胴部外面～底面外面に黒線。	SC3-6
第19106	28	鉢	口: (11.4) 高: 6.7 底: 4.1 厚: 0.6	外: 灰黄～暗灰黄色 内: 灰黄～暗灰黄色	黒線～1mm程度の白色砂粒、黒線な雲目を多量に含む	良好	内: 内: 底内: 工具ナゲ 外: 工具ナゲ 底外: ナゲ	胴部外面中段～下段に黒線。	SC3-9
第19107	28	鉢	口: 12.8 高: 5.6 底: 4.9 厚: 0.75	におい黄褐色	黒線～1.5mm程度の白色砂粒を多量、黒線～2mm程度の角閃石を少量含む	良好	内: 内: 底内: 工具ナゲ 外: 指オオキ後ナゲ 底外: ナゲ	胴部外面中段に黒線。	SC3-8
第19108	29	鉢	口: 8.3～8.7 高: 3.9 底: 4.9 厚: 0.8	外: 黄灰色 内: におい黄橙～暗灰色	1mm以下の砂粒を多量、赤雲目・角閃石を含む	不良	指オオキ後ナゲ	手取鉢。	SC3-14
第19109	脚部	高: (6.0) 脚: (14.75)	外: におい黄橙～暗灰色 内: 黒褐色	黒線～3mmの砂粒を多量、3～8mmの黒雲を少量、雲目・角閃石を少量含む	中不良	ハケ目		黒線外面上平に黒線。	SC3-5
第19110	盆	口: (16.0) 高: (16.35) 脚: (11.4)	淡黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良	口内: ハケ目 内: 指オオキ後ナゲ 外: ハケ目後磨滅のため不明	胴部外面上平に黒線。	SC3-5	
第19111	甕	高: (20.35)	外: 明黄～褐色 内: 明褐色	1～3mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口外: 胴部付近はヨコナゲ、日本はタタキ 内: 指オオキ後ナゲ 外: 胴部はヨコナゲ後タタキナゲ	胴部外面上平に黒線。	SC3-3	
第19112	甕付	上層: 13.4 高: (18.0)	褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、黒線な雲目・角閃石を少量含む	良好	上層: ヨコナゲ 内: 上段は工具ナゲ、中段は工具ナゲ後ハケ目、しぼり肌、下段はナゲ、指オオキ後タタキ	内外面、丹塗り、口縁部は下側から上層にヌス。胴部付近に打ち欠き(内側から外面へと打ち欠き)	SC3-6	
第19113	29	甕	口: 15.5 高: 14.5 底: 8.8 厚: 1.1	褐色、丹塗り部分は赤褐色	黒線～2mm程度の白色砂粒、角閃石を多量に含む	良好	口内: ハケ目 外: 内: 上段は工具ナゲ、中段～下段はハケ目 外: ハケ目後ヨコナゲ 底: 工具ナゲ	内外面上段～中段に黒線、内面は下段から上層にヌス。胴部付近に打ち欠き(内側から外面へと打ち欠き)	SC3-1
第19114	29	甕?	口: (9.9) 高: 8.0 厚: 0.65	外: におい黄褐色。一部褐色 内: におい黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、黒線な雲目を少量含む	良好	内: 内: 底内: 指オオキ後工具ナゲ 外: 上段～中段はハケ目、下段はハケ目ナゲ	口蓋部外面～胴部外面中段に黒線。	SC3-11
第19115	29	甕	口: (14.0) 高: 14.0 脚: 12.6	外: 褐色。一部暗灰色 内: 褐色	1～5mmの白色砂粒をやや多量、黒線～1mmの雲目、角閃石をわずかに含む	良好	口蓋: ヨコナゲ 内: 底内: ハケ目 内: 指オオキ後ナゲ 外: 底外: 工具ナゲ	胴部外面上段、外～底外: 工具ナゲ、丹塗りナゲ	SC3-9
第19116	29	甕	口: (15.4) 高: 20.1 底: 8.8 厚: 0.8	外: 淡黄褐色～灰黄色 内: 黄灰色	1～3mm程度の白色砂粒を多量、黒線な角閃石をわずかに含む	普通	口内: ヨコナゲ 口外: ハケ目日後ヨコナゲ 内: 底内: 上平はハケ目、下半はハケ目、指オオキ後ナゲ 外: 上段はハケ目後ナゲ、中段はハケ目ナゲ、指オオキ後ナゲ	口蓋部外面～胴部外面中段に黒線。	SC3-3
第19117	29	鉢	口: 14.9 高: 5.6 底: 3.0	外: 明黄褐色 内: 褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、黒線な角閃石を少量含む	良好	内: 内: 底内: ハケ目 外: 上平ナゲ、下半は工具ナゲ 底外: 工具ナゲ	底面外面に黒線。	SC3-12
第19118	29	鉢	口: (15.8) 高: 4.7 底: 4.1 厚: 0.35	外: におい黄橙～暗灰色 内: におい黄橙～暗赤褐色	黒線砂をわずかに含むが顆粒良	中不良?	口: ヨコナゲ 内: 底内: ハケ目 内: 指オオキ後ナゲ 外: ハケ目 外: 上段はハケ目後ハケ目、下段は上平ナゲ内: ハケ目 底外: 工具ナゲ(磨滅のため不明)	口蓋部外面に黒線。内面は下段の化粧土が剥落。	SC3-13
第19119	29	甕	口: (17.0) 高: 23.1 底: 10.5	外: におい黄橙～灰黄褐色 内: におい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量に含む	-	口蓋: ヨコナゲ 口内: ハケ目 外: ハケ目日後ヨコナゲ 内: 上段～中段はハケ目後ナゲ、中段はハケ目 外: 上段はハケ目、中段はハケ目後工具ナゲ、下段は上平ナゲ内: ハケ目 底外: 工具ナゲ(磨滅のため不明)	胴部外面上平に黒線。	SC3-4
第19120	29	甕	口: 15.95 高: 27.7 底: 4.0 厚: 0.9	におい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量に含む	良好	内: ナゲが磨滅のため不明 外: 中段はタタキ後ハケ目(磨滅のため不明) 底内: 指オオキ後	胴部外面上～中段に黒線、口蓋部外面～胴部外面上段、胴部外面中段にヌス。	SC3-2





調査番号	図面番号	形状	位置 (東・北)	色調	出土	検出	説明・調査方法	備考
R09081	29	丸	口: 20.0, 高: 26.3	外: にぶい黄～にぶい褐色 内: にぶい黄～褐色	磁器～2mmの白色砂粒を多量含 磁器～2mmの肉内石を少量含む	普通	口周: ナブ 口内: 多ク 内: ハク目 外: 上段はタタキ, 中段はタタキ後ハク目, ハク目	胴部外面に黒。 R04-10
R09082	29	丸	口: 19.4, 高: 23.9, 底厚: 17.7	外: 灰白～黄褐色にぶい赤褐色 内: 灰白～黄褐色	磁器～2mm程度の白色砂粒、赤褐色色粒、磁器～2mm程度の肉内石、角閃石、磁器～2mm程度の赤褐色色粒、黒色色粒を少量含む	良好	口内: ココナデ 口内ハク目 口外: 多ク 内: ハク目 外: 上段はタタキ, 中段はタタキ後ハク目, ハク目 底内: ナブ	胴部外面～胴部内面に黒。全体的に赤。 R04-10
R09083	29	丸	口: 23.4, 高: 14.8	外: にぶい黄～灰黄褐色 内: 黄～黄褐色	磁器～2mmの砂粒を多量、雲母を少量含む	良好	口周: ココナデ 口内: ナブ 内: ハク目 口外: タタキ後ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-10
R09084	29	丸	口: 20.3, 高: 26.3, 底厚: 11.1	外: にぶい黄～赤褐色 内: にぶい黄～褐色	磁器～2mmの砂粒を多量、赤褐色色粒を少量含む	やや不良	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: 多ク 内: ハク目 外: 上段～中段はタタキ後ハク目, 下段～底周はタタキ	胴部外面上位～中段は黒、胴内面は黒。 R04-10
R09085	29	丸	口: 29.4, 高: 37.4	外: 黄褐色～褐色 内: 灰黄褐色	磁器～2mmの砂粒を多量、雲母、角閃石を少量含む	良好	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: タタキ後ハク目, 下段はタタキ	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-10
R09086	29	丸	口: 16.8, 高: 13.8	外: にぶい黄褐色～赤褐色 内: にぶい黄褐色	磁器～2mmの白色砂粒を少量、磁器～1mm程度の赤褐色色粒、角閃石、磁器～1mm程度の赤褐色色粒をわずかに含む	良好	口周: ナブ 口内～内: ハク目 口外: タタキ後ハク目 外: 上段はタタキ, 中段はタタキ後ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-11
R09087	29	丸	口: 17.8, 高: 17.7	外: にぶい黄褐色～黄褐色 内: にぶい黄褐色	磁器～2mmの砂粒を多量、角閃石を少量含む	良好	口周: ココナデ 口内: ハク目 口外: 上段はタタキ, 中段はタタキ後ハク目 外: 上段はタタキ, 中段はタタキ後ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。胴部内面は赤。 R04-10
R09088	29	丸	口: 22.0, 高: 22.5	黄赤褐色～褐色、にぶい黄褐色	磁器～1mm程度の白色砂粒を多量、磁器～1mm程度の肉内石、角閃石を少量含む	良好	口内～内: ナブ後ハク目 口外: 多ク 外: タタキ後ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。胴部内面～胴部外面に黒。 R04-10
R09089	29	丸	口: 27.0, 高: 32.9	外: 黄赤褐色～灰黄褐色 内: 黄褐色	磁器～1mm程度の白色砂粒、雲母を少量、磁器～1.5mm程度の肉内石、磁器～1mm程度の赤褐色色粒、角閃石を含む	良好	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: タタキ後ハク目 外: 上段はタタキ後ハク目, 中段～下段はハク目	胴部外面～胴部内面に黒。胴部内面は赤。 R04-10
R09090	29	丸	口: 21.8, 高: 11.3	外: にぶい黄褐色～灰褐色 内: 灰白～にぶい黄褐色	磁器～1mm程度の白色砂粒、雲母を少量、赤褐色色粒、磁器～2mm程度の肉内石、赤褐色色粒を含む	不良	口内: ココナデ (磨製) 口内: ハク目 (磨製) 外: タタキ	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-10
R09091	29	丸	口: 23.10, 高: 11.3	外: 灰白～赤褐色 内: 灰黄褐色～にぶい黄褐色	磁器～2.5mm程度の白色砂粒を少量、磁器～1mm程度の肉内石、磁器～1.5mm程度の肉内石を含む	良好	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: 外: タタキ後ハク目	胴部外面中に黒。 R04-10
R09095	29	丸	口: 22.6, 高: 116.0	外: 黄褐色～灰黄褐色～黒色 内: 黄褐色	磁器～1mm程度の白色砂粒を少量、磁器～1mm程度の肉内石、磁器～2mm程度の肉内石をわずかに含む	良好	内: ハク目 口外: 外: タタキ	胴部外面上位～中段は黒。 R04-10
R09096	29	丸	口: 27.6, 高: 26.43	外: 黄褐色。口縁部は一部褐色。内: 黄褐色	1～2mmの砂粒を多量を含む	普通	口内～内: ハク目 口外: ハク目後ココナデ 外: ハク目	胴部外面に黒。口縁部～胴部外面中に黒。 R04-9
R09097	29	丸	高: 21.8	外: 灰白～明赤褐色～黄褐色 内: 灰白～黄褐色	磁器～6mm程度の白色砂粒、赤褐色色粒、磁器～2mm程度の肉内石、角閃石、黒色色粒を少量含む	普通	内: ハク目 底内: ナブ後ハク目 外: 中段はタタキ, 下段～下段はハク目後ハク目	胴部外面中に下位に黒。胴部内面は赤。胴部内面～胴部外面に黒。 R04-10
R09098	29	丸	口: 23.5, 高: 17.4, 底厚: 0.9	外: 灰赤～灰白～黒色 内: 灰白	磁器～1mm程度の白色砂粒、磁器～2mm程度の赤褐色色粒を少量、磁器～2mm程度の肉内石、黒色色粒、磁器～2mm程度の肉内石を少量含む	普通	内: 中段はハク目, 下位は工ナブ。底周は工具ナブ後ハク目 外: 外: 灰赤、ハク目	胴部外面下～底部外面に黒。 R04-10
R09099	29	丸	口: 16.0, 高: 12.4, 底厚: 0.8	外: 橙～黄褐色 内: にぶい黄～灰黄褐色	磁器～2mmの白色砂粒を多量、角閃石、赤褐色色粒を少量含む	普通	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: ハク目 外: 上段はハク目, 中段はタタキ後ハク目, 下段～底周はタタキ	胴部外面下に黒。 R04-9
R09102	29	丸	口: 26.2, 高: 13.1, 底厚: 0.3	外: 灰黄褐色～黒色 内: 灰黄褐色	磁器～15mm程度の白色砂粒を少量、赤褐色色粒、磁器～2mm程度の肉内石を少量含む	普通	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: ハク目後ナブ 口外: 上段はハク目, 中段はタタキ後ハク目, 下段～底周はタタキ後ハク目後ナブ	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-7
R09103	29	直壁	口: 24.4, 高: 43.9	外: にぶい黄褐色～褐色 内: にぶい黄褐色	磁器～2mmの砂粒を多量を含む	良好	口周: ココナデ 口内～内: ハク目 口外: ハク目 外: 上段はココナデ, 上段～中段はタタキ後ハク目、底内～ハク目後ナブ 底外: ハク目後ナブ	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-2
R09104	29	鉢	口: 26.0, 高: 17.6, 底厚: 1.5	外: にぶい黄褐色～明黄褐色、褐色、黒褐色 内: 黄褐色、明赤褐色、褐色	磁器～4mmの白色砂粒を多量、磁器～2mmの肉内石、磁器～1mmの赤褐色色粒を少量含む	良好	口周: ナブ 口内: ハク目 内: 上段はココナデ, 上段～中段はタタキ後ハク目、中段～下段はタタキ後ハク目	胴部外面下に黒。 R04-10
R09105	29	鉢	口: 24.0, 高: 10.9	外: 橙～黄褐色 内: 明黄褐色～灰黄褐色	磁器～2mmの白色砂粒を少量、磁器～2mm程度の肉内石を少量含む	良好	口内: ハク目 内: 灰赤、工ナブ	胴部外面下に黒。 R04-7
R09106	29	丸	口: 18.2, 高: 11.4	外: 黄褐色～褐色 内: にぶい黄褐色	磁器～2mmの砂粒を多量、雲母、角閃石を少量含む	良好	口周: ナブ 口内～内: ハク目 口外: 外: ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-13
R09107	29	丸	口: 21.8, 高: 21.1	外: 黄褐色～褐色 内: 黄褐色	磁器～2mmの砂粒、1～2mmの茶色粒を多量含む	不良	内: 中段はタタキ	R04-10
R09108	29	丸	口: 28.6, 高: 27.8	外: 黄褐色～緑褐色 内: 黄褐色	磁器～2mm程度の白色砂粒、雲母、赤褐色色粒、磁器～2mm程度の肉内石を少量含む	普通	口周: 灰目 突縁は黒目, 13.02ハク目	胴部外面～胴部内面に黒。 R04-2



部室番号	形状	面積	形状	高さ	色調	塗料	構造・調整目録	備考	備考欄
第00006	30 鉄	口：(22.7) 高：9.6 底厚：0.6	外：にぶい黄緑～黒色 内：にぶい黄緑色			鉄線～3mm程の白色砂粒と、黒色粒を少量、鉄線～2mm程の角閃石を少量、鉄線～3mm程の赤褐色粒をわずかに含む	良好 口内：上部：磨滅のため不明、外：上段はハナ目、中段～下段はナダ、内：ナダ	口縁部外周～胴部上段に黒焼	第04-0
第00008	30 鉄	口：(11.7) 高：8.5	褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口縁：ナダ 内：ハナ目 外：ナダ	胴部外周下位～底部中段に黒焼	第04-1
第00009	30 鉄	口：(12.7) 高：6.6 底厚：0.8	褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 内：上半はハナ目 外：ハナ目	口縁部外周～胴部外中段に黒焼	第04-6
第00010	30 鉄	口：(13.0) 高：5.4 底厚：0.6	底：黒褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 口外：ココナダ 内：エエナダ 外～底外：ハナ目	口縁部外周～胴部外中段に黒焼	第04-7
第00011	白付鉄	高：(9.1) 底厚：0.9	黒～にぶい黄緑色			1～2mmの砂粒を含む	良好 口：ハナ目		第04-9
第00012	底	高：10.6 脚径：13.2	にぶい黄緑色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 内：指オオモエ工ナダ 外：下はハナ目	胴部外周中に黒焼	第04-5
第01001	30 焼	口：(21.3) 高：15.2 底厚：1.0	明赤褐色～にぶい暗褐色			鉄線～3mmの白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石をわずかに含む	良好 口：ココナダ 内：上半はナダ 外：上段はハナ目 底外：ナダ	口縁部内周、胴部外段に黒焼	第046-2
第01002	31 焼	口：13.4 高：11.1 底厚：1.6	褐色～浅黄褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 口：ココナダ 内：上段～中段はハナ目、中段～下段はナダ、外：上段はハナ目、中段～下段はハナ目、外はハナ目、内はハナ目、外はハナ目	胴部外周中に黒部外周に黒焼、胴部外下段に黒焼、胴部外表面黒焼	第046-1
第01003	31 鉄	口：9.7 高：8.9 底厚：1.6	浅黄緑～褐色			鉄線～4mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口外：ココナダ 内：ナダ、指オオモエ工ナダ 内：ナダ 外：指オオモエ工ナダ	胴部外周中に黒部内面に黒焼	第046-4
第01004	30 焼	高：(9.4) 底厚：1.2	外：明赤褐色 内：にぶい黄緑～黒褐色			1～2mmの砂粒を少量、黒色粒を含む	- 内：ナダ	胴部内面に黒焼	第04-6
第01005	底	高：(13.65) 底径：7.9	外：明赤褐色 内：にぶい黄緑色			1～2mmの砂粒を少量含む	良 内：ナダ 底内：指オオモエ工ナダ	胴部外周には丹焼	第04-7
第01006	33 焼	口：58.3 高：66.0 底厚：0.9	褐色			鉄線～4mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口縁：ココナダ 口内：ハナ目 内：ハナ目 外：突縁はココナダ、外はハナ目、内はハナ目、外はハナ目、内はハナ目、外はハナ目、内はハナ目、外はハナ目	胴部外周上位～下位に黒焼	第04-1
第01007	30 焼	高：(6.9) 底厚：4.3～5.0	褐色			1～2mmの砂粒、角閃石を少量含む	良好 口内：内周：指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ 外：底外：ナダ	胴部外周下位に黒焼	第048-1
第01008	31 支那石	高：(11.1) 脚径：(12.6)	明黄緑～黒褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 内：エエナダ 外：エエナダ、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	外周下段に黒焼	第049-4
第01009	31 鉄	口：21.8 高：10.9 底厚：1.4	外：浅黄緑～暗褐色 内：にぶい黄緑色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口内：ハナ目 口外：ナダ、指オオモエ工ナダ 内～底内：エエナダ、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	胴部外周下段～底部外周に黒焼	第049-3
第01010	31 焼	高：(17.3) 底厚：1.2	外：黒～黒褐色 内：褐色			鉄線～3mmの白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	良 内：ハナ目 外：上半は夕タタキ、下半は夕タタキ、エエナダ、指オオモエ工ナダ	胴部外周にエエナダ	第049-1
第01011	30 焼	口：(22.0) 高：(16.2)	黒～浅黄褐色			鉄線～1mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口縁：ナダ 口内：ハナ目 内：上はハナ目、中段はハナ目、外は夕タタキ、ハナ目	胴部外周にエエナダ	第049-6
第01012	30 焼	口：29.3 高：(21.6)	黒～にぶい褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～2mm程の角閃石を少量含む	普通 口縁：ナダ 口内：ココナダ 口外：ハナ目 内：ハナ目 外：上半は夕タタキ	口縁部外周～胴部外中段に黒焼	第049-7
第01013	30 焼	口：28.0 高：(20.2)	外：にぶい黄緑色 内：にぶい黄緑～にぶい黄褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～2mm程の角閃石を少量含む	口縁：ナダ 口内：ハナ目、指オオモエ工ナダ 口外：ハナ目 内：ハナ目	胴部外周中に黒部外周上位に黒焼	第049-4
第01014	31 焼	口：17.3 高：21.6 底厚：0.7	外：黒～黒褐色 内：黒～黒褐色			鉄線～3mmの白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口内：ハナ目 内：ハナ目 外：ハナ目、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	口縁部外周～胴部外中段に黒焼	第049-2
第01015	31 焼	口：23.0 高：(22.6)	外：にぶい暗褐色 内：にぶい暗褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～2mm程の角閃石を少量含む	普通 口縁：ココナダ 口内：ハナ目、指オオモエ工ナダ 内：ハナ目	胴部外周中に黒部外周上位に黒焼	第049-5
第01016	31 焼	高：(20.7)	外：にぶい黄緑～暗褐色 内：黄緑色			鉄線～4mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口内：ハナ目 口外：ココナダ、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	胴部外周には黒部表面黒焼	第049-9
第01017	鉄	口：(25.0) 高：(14.3)	黒～にぶい黄緑色			鉄線～1mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口内：上段はココナダ、中段はハナ目、外はココナダ、中段～下段はハナ目	口縁部外周～胴部外中段に黒焼、胴部外表面に黒焼	第049-11
第01018	31 底	高：(14.8) 脚径：14.6 底厚：0.7	外：浅黄緑～黒褐色 内：にぶい黄緑色			鉄線～3mm程の白色砂粒を少量、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	口内：ナダ 口内：ハナ目 口外：外はハナ目、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	口縁部外周～胴部外中段に黒焼、胴部外表面に黒焼	第049-3
第01019	31 底	口：14.3 高：13.6 脚径：18.1	浅黄緑～黒褐色			鉄線～3mm程の白色砂粒と、角閃石を少量含む、鉄線～1mm程の角閃石を少量含む	普通 口内：ハナ目、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ、指オオモエ工ナダ	胴部外周～胴部外中段に黒焼、胴部外表面に黒焼	第049-1



検査番号	検査年月	検査場所	位置 (床高)	色調	取上	状況	成程・調査経路	備考	検査日
第109003		壁	口: (17.5) 高: (18.0) 脚: (23.3)	外: 緑~黄褐色 内: 緑~浅黄褐色	鉄線~1mmの白色砂粒を中や多量、鉄線~1mm程度の雲母・角閃石を少量含む	普通	口: ナゾ; 口: ハケ目後ヨコナダ 内: 上半はハケ目後工具ナダ、下半はハケ目後ナダ		930-6
第109004	31	床	口: (18.9) 高: (9.5) 脚: 0.0	外: 緑 内: 明黄褐色	鉄線~1mmの白色砂粒を少量含む	普通	→ウズギギ、調査のため不明	口縁部外面に黒染。	930-13
第109005	31	支脚	高: (9.1) 脚: (15.4)	にぶい黄褐色~緑灰色	鉄線~1mm程度の白色砂粒を中や多量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量含む	良	ナゾ; 閉オキエ	上部部~外面に黒染。	930-21
第109006		壁	口: (11.8) 高: (8.2) 脚: (11.0) 底: 厚: (0.8)	外: 浅黄褐色 内: 黄灰色	鉄線~3mm程度の白色砂粒を少量、鉄線~2mm程度の雲母・角閃石を少量含む	普通	口: ナゾ; 口: ハケ目後ナダ 閉オキエ、内: ナゾ; 閉オキエ 外: 上半はハケ目後ナダ、閉オキエナダ、下半は工具ナダ		930-10
第109007		部台	高: (8.80) 脚: (18.4)	褐色	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線~2mm程度の赤色の砂粒を少量含む	普通	内: 上半はハケ目後ナダ、閉オキエ、下半はウズギギ、赤: ハケ目後外~鉄線: ヨコナダ	壁孔位。	930-19
第109008	30-1	壁	口: (4.8) 高: (6.6)	黄褐色	粗粒: 1~0.5mmの石英、長石、0.5mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	口: ナゾ; 内: ナゾ; 高: 0.5mm程度の角閃石をわずかに含む	脚部外面に灰~中位に黒染、平ねね、ミビシユエ。	931-4
第109009	31	床	口: (8.0) 高: (3.9)	灰黄褐色	中や粗粒: 1~1.5mmの石英、長石を少量、0.5mmの雲母をごくわずかに含む	良好	口: ナゾ; 内外: 閉オキエ後ナダ	口縁部外面に黒染、平ねね、ミビシユエ。	932-9
第109010	31	床	口: (9.3) 高: (9.0) 脚: 0.3	にぶい黄褐色~オレンジ色	鉄線~1mmの白色砂粒を多量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量含む	普通	内: 口縁部付近はハケ目後ヨコナダ、ほかはハケ目外: ナゾ; 底: ハケ目後ナダ	口縁部外面に黒染にスス。	932-8
第109011		壁	口: (15.4) 高: (11.2)	にぶい黄~緑灰色	1~2mmの砂粒を多量、金雲母・角閃石を含む	良	口: ヨコナダ; 外: ハケ目	口縁部外面~脚部外面にスス。	932-1
第109012		壁	口: (13.2) 高: (12.9) 脚: (15.6) 底厚: 0.6	褐色	鉄線~1mm程度の白色砂粒を少量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量、鉄線~3mm程度の赤色の砂粒を少量含む	中や不 良		底表面、丹塗り。	933-1
第109013		支脚	上端: (8.5) 高: (9.4) 脚: (12.0)	にぶい黄褐色	鉄線~1mm程度の白色砂粒を多量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量含む	普通	上端: 閉オキエ、内: 上半は閉オキエ、下半は工具ナダ; 外: ナゾ; 底: 閉オキエ、ナゾ		932-10
第109014		壁	口: (15.4) 高: (15.6)	外: 褐色 内: にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	口: ヨコナダ; 外: 上半はナゾ、中位はウズギギ後タタ		932-2
第113001		壁	高: (8.7)	外: にぶい黄褐色 内: 浅黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	部外: ヨコナダ	脚部外面に灰色の付着。	933-1
第113002		壁	口: (24.4) 高: (13.0)	褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	内: ナゾ; 外: ハケ目	底表面に黒染。	934-3
第113003		高坪	口: (8.4) 高: (8.4)	緑~赤褐色	中や粗粒	良好	口: ヨコナダ; 内: ナゾ	口縁部~脚部内面、丹塗り、本家は外面に黒染。	934-4
第113004		壁	口: (8.45) 高: (6.7)	にぶい黄褐色	中や粗粒: 1~1.5mmの石英、長石、0.1mmの雲母を少量含む	良好	口: ナゾ; 内: ハケ目 外: タタ後ナダ	底表面に黒色化、黒染。	935-3
第113005	31	床	口: (11.25) 高: (5.6)	にぶい黄褐色	中や粗粒: 3~1.5mmの白色砂粒、0.5mmの雲母を少量含む	良	口: 閉オキエ、内: ナゾ; 外: タタ後ナダ		935-2
第113006		付付	口: (13.4) 高: (2~6) 脚: 脚: (7.1) 底厚: (0.4)	にぶい黄褐色	鉄線~2mmの白色砂粒を中や多量、鉄線~1mm程度の角閃石を少量含む	普通	口: ナゾ; 口内~内: ハケ目 外~外: タタ後ウズギギ; 脚部 底の穴不明; 脚: 閉オキエ 後ヨコナダ、基部外面は、一部ハ ケ目ナダ		935-4
第113007	32	壁	口: (10.6) 高: (12.9) 脚: (18.2) 底: (6.6) 底厚: (0.3)	外: 明黄褐色 内: 明黄褐色~緑灰色	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線~1mmの雲母・角閃石を少量含む	普通	口: ヨコナダ; 内: 底内: ナ ダ; 閉オキエ、外: 上半はハケ目		936-1
第113008		壁	口: (14.8) 高: (14.4) 底: (6.6) 底厚: (1.2)	外: 緑~黄褐色 内: 褐色	1~2mmの白色砂粒を中や多量、鉄線~2mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	内: 底内: ナゾ		936-1
第113009		壁	口: (13.7) 高: (15.7~16.8) 底: (6.2) 底: 厚: (0.6)	黄褐色、一部黒色	1~3mmの白色砂粒を中や多量、鉄線~2mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	口: ヨコナダ; 内: 上半はハケ目、下半は閉オキエ後ナダ	脚部外面に黒染、重む。	936-2
第113010		底	高: (18.4) 脚: (18.8) 底: (6.2) 底: 厚: (1.3)	外: 浅黄褐色 内: 黒色	1~3mm程度の白色砂粒を多量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量含む	良好	内: 上半は~中位は工具ナダ、下半は閉オキエ、外: 工具ナダ 内: 閉オキエ、底: ナゾ	脚部外面に黒染。	936-3
第114001		壁	口: (26.8) 高: (21.2)	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色~黒褐色	1~3mmの白色砂粒を中や多量、鉄線~2mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	口: ナゾ; ヨコナダ; ロ: ハケ目 内: 外: ハケ目	口縁部外面~脚部外面に上半にスス。	937-4
第114002	32	壁	口: (21.9) 高: (29.8)	にぶい黄褐色~緑色	鉄線~1mm程度の白色砂粒を中や多量、鉄線~2mm程度の角閃石を少量含む	普通	口: ハケ目後ヨコナダ; 内外: ヨコナダ; 内: 上半はハケ目 外: ハケ目	口縁部外面~脚部外面に上半にスス。	937-1
第114003		壁	口: (27.8) 高: (29.8)	外: にぶい黄褐色 内: 明黄褐色~にぶい黄褐色	1~2mmの白色砂粒を多量、1~2mmの角閃石を少量含む	良好	口: ヨコナダ; 内: 長粒はウズギギ、中位~短粒はナゾ; 外: 上半はハケ目後外表面に黒染にスス。		937-5
第114004	32	壁	口: (14.8) 高: (15.1) 脚: (16.2)	内: にぶい黄褐色~緑灰色 内: にぶい黄褐色	鉄線~2mm程度の白色砂粒を中や多量、鉄線~1mm程度の角閃石を少量含む	良好	口: 閉オキエ; 内外: ヨコナダ; ヨコナダ; 内: 上半は閉オキエ、下半はナゾ; 外: ハケ目、一部ナ ダ		937-3
第114005		底	高: (8.2) 脚: (11.4) 底厚: (1.4)	にぶい黄褐色	1~3mmの白色砂粒を多量、1~2mmの雲母をわずかに、1~2mmの赤色の砂粒を少量含む	良好	内: 外: ハケ目、一部ナ ダ; 底内: 閉オキエ後ナダ、底: ナゾ		937-6
第114006	32	壁	口: (26.2) 高: (25.3) 底: (6.9) 底厚: (0.1)	外: 緑~黄褐色 内: にぶい黄褐色~緑灰色	鉄線~3mmの白色砂粒を多量、鉄線~1mmの雲母を少量含む	普通	内: 底内: 工具ナダ; 外: 下半は工具ナダ	口縁部内面~脚部外面に黒染。脚部外面に下半にスス。脚部外面に黒染による赤化・器表剥離。	937-2





調査番号	図面番号	形状	位置 (東・北緯)	色調	出土	検出	説明・調査方法	備考	調査者
第122921	32	塊	口：(24.2) 高：(19.6)	外：にぶい黄褐色～暗灰色 内：明黄褐色	繊維～3mmの白色砂粒を多量、 繊維状雲母・赤色粒を少量含む	普通	口端：ナブ 口内～ハケ目 口 内：多量な赤ハケ目 内：ハケ目 外：上ははハケ目、中位はハケ目 ナブ (繊維のため不明)	口縁部内面・口縁部 外面～縁部外面にスス	K02-2
第122922	32	塊	口：(14.5) 高：(8.2)	基 礎 外：にぶい黄褐色～暗灰色 内：黄褐色	繊維～3mm程の白色砂粒をやや多量、 繊維状雲母・繊維～2mm程の角閃石を少量含む	良好	口端：ナブ 口内～ハケ目 口内：多量な赤ハケ目、上ははハケ目 ナブ、下ははハケ目 底外：ハケ目 内：一部多量ナブ	口縁部内面・口縁部 外面～縁部外面にスス	K02-3
第122923	32	塊	口：(20.6) 高：(9.4)	外：にぶい黄褐色～暗灰色 内：暗褐色	繊維～3mmの白色砂粒、 繊維状雲母を多量、 繊維～2mmの角閃石を少量含む	普通	口端：ナブ 口：ハケ目 外：ハケ目 内：一部多量ナブ	口縁部内面・口縁部 外面～縁部外面にスス	K02-4
第122924	32	塊	口：(20.4) 高：(20.1) 底厚：(8.5)～(4.0)	外：にぶい黄褐色～暗灰色 内：にぶい黄褐色～暗灰色	1～3mmの白色砂粒をやや多量、 繊維状雲母・角閃石をわずかに含む	良好	口端：ナブ 口内～ハケ目 口内 外：多量ナブ、赤ハケ目 ナブ、中位は多量ナブ、下ははハケ目 底外：ハケ目	口縁部外面～縁部 外面にスス	K02-1
第122925	鉢	口：(29.4) 高：(12.7) 底厚：(6.7)	底 明黄褐色	繊維～5mmの白色砂粒を多量、 繊維～2mmの角閃石を少量含む	普通	外：上ははハケ目 底外：ハケ目 ナブ (繊維のため不明)	縁部外面下位～底部 外面にスス	K02-10	
第122926	32	鉢	口：(13.9) 高：(7.5) 底厚：(0.7)	外：にぶい黄褐色～暗褐色	繊維～3mm程の白色砂粒を多量、 繊維状雲母・角閃石を少量含む	普通	口端：ナブ 口内～底内：ハケ目 ナブ 外：多量な赤ハケ目	口縁部内面・口縁部 外面～縁部外面にスス	K02-10
第122927	皿	口：(11.0) 高：(13.4)	底 黄褐色	繊維～2mm程の白色砂粒を多量、 繊維状雲母・角閃石、赤色粒を少量含む	普通	口端：ナブ 口：ハケ目 外：上ははハケ目 外：多量な赤ハケ目	縁部外面上位に黒 焦	K02-11	
第122928	部台	高：(14.2) 幅：(16.5)	外：にぶい黄褐色	繊維～3mmの白色砂粒を多量、 繊維状雲母、繊維～2mmの角閃石を少量含む	普通	内：上ははハケ目、中位はナブ 外：ハケ目	外面にスス	K02-10	
第122929	32	部台	上端：(9.0) 高：(19.7) 幅：(13.4)	底 黄褐色～明黄褐色	繊維～4mmの白色砂粒を多量、 繊維状雲母・多色粒、 繊維～2mmの角閃石を少量含む	やや不良	内：中位はナブ 外：中位～外位は 多量ナブ	外面上位に黒焦	K02-11
第122930	34-1	皿	口：(7.9) 高：(5.6)	底 黄褐色	繊維1mmの白色砂粒を少量含む	やや不良	口：ナブ 内～底内：ナブ 外～ 底外：ナブ	底面外周に打ち直し 痕跡あり、口縁部 外周は黒化(炭化による?)、 ミコンテア	K02-10
第122931	34-1	部台	上端：(1.90) 高：(6.2) 幅：(6.2)	底 灰白色	やや粒状1～1.5mmの石英・長石を 少量含む	やや不良	ナブ	上端部～外周に黒 焦	K02-10
第122932	34-1	皿	口：(6.4) 高：(3.8)	底 黄褐色	繊維1mmの白色砂粒を少量含む	やや不良	底外周部ナブ	底面外周に黒焦、 ミコンテア	K02-11
第122933	32	部	口：(18.2) 高：(14.2) 幅：(20.9) 底厚：(6.2)	暗～赤褐色	繊維～2mm程の白色砂粒を少 量、 繊維状雲母をわずかに含む	普通	内：上ははハケ目・ハケ目と若干な (雲母のため不明) 口内：ナブ 外：ハケ目後～ハケ目 ナブ	縁部内面に黒焦、口 縁部外面～縁部外周 上下、口縁部外周～ 縁部外面下位には打 直し痕跡あり、縁部 外周に黒化(炭化による?)、 水字孔の孔状	K02-11
第122934	皿	口：(17.8) 高：(12.3)	暗褐色	繊維～3mm程の白色砂粒を多量、 繊維状雲母を少量含む	普通	内：ハケ目ナブ 外：ハケ目	口縁部内面・縁部外 面にスス	K02-4	
第122935	高杯	高：(12.5) 幅：(16.4)	明黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、1～2 mmの赤色粒をやや多量含む	良好	形外～縁外：ハケ目 縁内： ナブ 底外：ナブ	縁部穿孔部を西 外	K02-10	
第122936	塊	口：(18.4) 高：(5.6)	外：暗～暗灰色 内：暗 褐色	1～2mmの砂粒を多量を含む	良好	内外：ハケ目 ナブ (繊維のため不明) 底外：ヨコナブ	内面に黒焦	K02-3	
第122937	部台	高：(6.7) 幅：(8.0)	外：暗褐色 内：暗褐色	3mm程の砂粒を含む	良好	内：ナブ 内：ハケ目	内面にスス	K02-1	
第122938	部台	高：(13.4)	暗褐色	1～2mm以下の砂粒を含む	良好	内：上ははハケ目、中位はナブ、 下ははハケ目 外：上はは～中位は 多量ナブ、下はは多量ナブ、一部その 底ハケ目	K04-6		
第122939	塊	口：(18.2) 高：(20.5)	外：にぶい黄褐色 内：暗褐色	1～2mm程の白色砂粒、 繊維状雲母、 角閃石を少量含む	普通	口端：ヨコナブ 口内：ハケ目 外：ナブ後ハケ目 内：ハケ目 ナブ、下ははハケ目、中位は ナブ後多量な赤ハケ目 底外：部 オサエ多量な赤ハケ目	外面に黒焦	K04-1	
第122940	34-1	鉢	口：(20.5) 高：(8.0) 底厚：(1.1)	外：明赤褐色 内：明赤褐色～灰褐色	細砂粒・繊維状角閃石を含む	良好	口端：ナブ 口内：ナブ、 工痕跡 底外：外 底外オサエ多量ナブ 工痕跡の痕跡あり	平洗鉢	K04-4
第122941	鉢	口：(27.6) 高：(9.2)	内：にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、 繊維～2mmの角閃石を少量含む	良好	口端：ヨコナブ 口内：ハケ目 外：上はは多量ナブ、下ははハケ目	K04-7		
第122942	大甕	口：(46.5) 高：(12.1)	外：にぶい黄褐色～暗灰色 内：黄褐色	1mm以下の白色砂粒を多量に 含む	良好	口：ヨコナブ 内：黄褐色～赤色 ナブ 外：ナブナゲ目ナブ	外面に黒焦	K02-2	
第122943	高 天：(4.0) 天厚：(1.3) 底厚：(5.4)	外：明赤褐色 内：暗褐色	細砂粒を含むが精良	良好	内：天厚部は閉塞せず、ほかナブ	外周丹周状	K02-1		
第122944	塊	口：(17.8) 高：(6.9)	底 黄褐色	1mm程の砂粒を含む	良好	外：黄褐色ヨコナブ	口縁部に穿孔	K02-3	
第122945	塊	口：(22.4) 高：(20.5)	外：にぶい黄褐色	今中粒0.1～1.5mmの石英・長 石、 0.1mmの雲母を少量含む	良好	口：ヨコナブ 内：飯炊工ナブ 外：飯炊工ナブ (繊維のため不明)	縁部外周部にスス	K04-3	
第122946	塊	口：(26.2) 高：(13.7)～(12.9) 底厚：(6.6)	外：黄褐色 内：黄褐色	今中粒0.1～1.5mmの石英・長石を 少量、 0.1mmの雲母を少量含む	良好	口：ヨコナブ 内：ハケ目 外： 天：ナブ 内：飯炊工ナブ 外：多量ナブ、上はははナブナブ 底外：ヨコナブ	内面に黒焦、口縁部 内面にスス	K04-2	
第122947	32	鉢	口：(14.6) 高：(12.7)～(12.9) 底厚：(4.2) 底厚：(6.6)	外：黄褐色～黒色 内：にぶい黄褐色	1～3mmの白色砂粒を多量、 繊維状雲母・角閃石を少量含む	良好	口端：ヨコナブ 内：ハケ目 底外： 外：ハケ目、中位はナブ、 底外はナブ、底外との間はヨコナブ 底内：飯炊工ナブ 底外：ナブナブ	口縁部外面～縁部外 面に半円黒焦、外周 に黒焦による黒焦	K04-1
第122948	支脚	高：(8.9) 底：(11.8)	外：暗褐色 内：暗～にぶい暗褐色	1～2mmの白色砂粒をやや多量、 1～2mmの雲母を少量含む	良好	内：ナブ 内：飯炊工ナブ 外：多量ナブ、上はははナブナブ 底外：ヨコナブ	K04-7		

調査番号	探検番号	遺物	位置 (層・座)	色調	形状	状況・観察経過	備考	撮影番号
第13059	埋?	口: (18.6) 高: (13.3)	褐色	1~2mmの砂粒・角閃石を含む	良好	内: ハケ目 外: タタキ		SK09-1
第13060	造	口: (12.0) 高: 9.7 底: 0.7	外: 浅黄~黒色 内: 浅黄~灰白色	磁器片を含む	中や不良	口: 頸部はヨコナダ、ほぼ1/2ハケ目 内: 頸部はヘラナダ等、ほぼ1/2ナダ 外: 土粒むき出し、中位~下位はハケ目後ナダナダ等	底面外部に黒泥。	SK09-2
第13061	32 跡台	高: (13.9) 脚: (14.8)	外: 浅黄緑~褐色 内: 褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	内: 下位はナダ等 外: 上位は指オオエ、工具類、中位~下位は指オオエ後ハケ目 (中位は頸部のため不明)		SK09-4
第13061	埋	口: (18.4) 高: (29.5)	内: 灰褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	普通	口部: タタキ後ハケ目 内: ハケ目 外: 土多数散見するハケ目 内: ハケ目 外: 突如はヨコナダ、ほぼ1/2タタキ後ハケ目	頸部外部に黒泥。	SK79-71 72-78 撮影-1
第13062	跡台	土層部: (13.1) 高: (17.3)	外: 内: 黄緑~灰黄色 内: 灰黄色	磁器~2mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	普通	ハケ目		SK79-71 72-78 撮影-4
第13063	造	口: (18.2) 高: (8.3) 脚: (17.3)	褐色	磁器~4mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	普通	内: ヨコナダ後ハケ目等 外: 頸部はタタキ後ハケ目	外面に黒泥。	SK79-1
第13064	跡台	高: (16.2) 脚: (18.4)	黄褐色	1~2mmの砂粒を多数、金箔片、角閃石を含む	良好	頸部のため不明		SK79-1
第13065	埋	高: (7.1)	褐色	1~3mmの白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	内: 工具ナダ	穿孔は浅。	SK79-71 72-78 撮影-3
第13066	跡台	高: (8.0) 脚: (16.6)	外: 浅黄褐色 内: 灰白色	1~3mmの砂粒・角閃石を含む	良好	内: 指オオエ後ナダ 外: 下位はむき出しハケ目		SK79-3
第13067	埋	高: (16.0) 脚: (16.0)	外: 緑~黒色 内: 灰白色	1~2mmの砂粒を含む	良好		底面外部に黒泥。	SK73-4
第14001	造	口: (11.7) 高: (9.7) 脚: (16.6)	外: 内: 灰~白~灰褐色 内: 黄褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を少量、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	中や不良	外: ハケ目	内面に黒泥、頸部外面に黄砂を伴う	SK78-8
第14002	32 跡	口: (24.7) 高: 14.9 底: 0.5	外: 浅黄緑~緑~黒褐色 内: 浅黄褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	普通		頸部外面下位に黒泥、頸部外面は丹塗を伴う	SK74-6
第14003	造	口: (24.7) 高: (11.3)	内: 灰褐色	磁器~2mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	中や普通	口: ハケ目 内: ハケ目 外: 突如はヨコナダ、ほぼ1/2ハケ目	頸部外部に黒泥。	SK74-7
第14004	34-1 埋?	口: (21.8) 高: 2.45	黄褐色	約0.5~1.5mmの石英・長石を少量含む	中や普通	ナダ・指オオエ	手取ぬ、ミコチユズ。	SK74-14
第14005	34-1 埋?	高: (3.1) 底: 1.8	黄褐色	中や約0.1~1mmの石英・長石を少量、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	中や普通	ナダ・指オオエ	手取ぬ、ミコチユズ。	SK74-13
第14006	32 高杉	口: (18.1) 高: (14.3)	緑~黒色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	普通	頸外: ハケ目後ヘラミダキ	口部頸部~頸部外部、口部頸部~頸部外部に黒泥。	SK74-10
第14007	32 跡台	高: (18.8) 脚: (18.6)	内: 灰黄緑~明黄褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、数個~2mm程度の角閃石を少量含む	普通	内: ハケ目 外: 上半はハケ目		SK74-11
第14009	32 跡	口: 14.7 高: 8.9 底: 1.0	明黄褐色	磁器~4mmの白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	中や不良	脚: 下半はハケ目		SK75-1
第14009	埋	高: (3.0) 底: (5.0)	褐色	約0.5~1mmの石英・長石を含む	良好	ナダ	手取ぬ、ミコチユズ。	SK76-3
第14010	高杉	高: (7.90)	灰白~浅赤褐色	約1~1.5mmの石英・長石を少量、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	中や普通	頸外: ハケ目 頸内: ヘラミダキ	外面は緑色のため赤色。	SK79-2
第14011	跡	口: (29.6) 高: (8.8)	褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、2mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	内: ハケ目後ナダ 外: 上位~下位はタタキ、頸部のため不明、下位はヘラタタキ		SK79-71 72-78 撮影-2
第14012	瓶	高: (10.1) 底: 2.0 脚: 1.0	褐色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石を少量含む	普通	内: 底部付近は指オオエ、ほぼ1/2ハケ目 外: タタキ	外面に黒泥、穿孔は浅。	SK78-1
第14004	埋	口: (29.6) 高: (14.25)	内: 灰褐色	1~5mmの砂粒を含む	良好	口: ヨコナダ 内: ナダ 外: 上位~下位は土層むき出し、中位はハケ目		SK1-1
第14005	跡	口: (22.0) 高: 14.1 底: 7.8	外: 灰黄緑~黒色 内: 黄緑~褐色	1~3mmの砂粒を多数を含む	良好	内: 内: 内: 工具ナダ等 外: 土多数散見するハケ目 外: 土多数散見するハケ目	頸部内面・頸部外面~底部外部に黒泥。	SK18-1
第14007	高杉	高: (9.4)	緑~灰褐色	磁器~1mm程度の白色砂粒を少量、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	頸内: ナダ 頸内: 上半はナダ後ナダ後、下半はナダ 頸外: ハケ目後ナダ後	頸部の穿孔は10cm程度。	SK29-6
第14008	32 造	高: (13.0) 脚: (17.25) 底: 8.4 底厚: 1.0	外: 浅黄褐色 内: 灰白色	磁器~3mm程度の白色砂粒を多数を含む	良好	内: 内: ナダ・指オオエ 外: 底外: ハケ目後ナダ	頸部外面上位・頸部外面と底部外部面に黒泥。頸部外面上位に丹塗を伴う(撮影品)	SK20-1
第14009	高杉	高: (11.5)	内: 灰褐色	磁器~2mm程度の白色砂粒を多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	頸内: ナダ 頸内: 上半はナダ後ナダ後、下半はナダ 頸外: ハケ目後ナダ	頸部の穿孔は13cm程度。	SK29-5
第14001	埋	口: (14.0) 高: (7.0)	明赤褐色~浅黄褐色	1~3mmの白色砂粒を中や多数、数個~1mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	外: タタキ (後ハケ目)		SK29-1
第14012	32 跡	口: (18.2) 高: (11.5) 底: (7.4)	黄褐色	中や約0.5mm~1.5mmの石英・長石を少量、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	良好	口: ナダ等 内: ヘラミダキ 外: 上半はナダ等、下半はナダ等 (頸部のため不明)	丹塗あり	SK01-1
第14001	埋	高: (8.1) 底: 8.9	赤褐色	中や約1~1.5mmの石英・長石を多数、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	良好	内: ナダ 外: ハケ目、底部付近はヨコナダ 底内: 指オオエ 底外: ナダ		SK01-2
第14004	高杉	外: 明褐色~暗赤褐色 内: 緑~褐色、一部黒色		1~2mmの白色砂粒を中や多数を含む	良好	頸内: ハケ目後ナダ 頸内: ナダ 頸外: ハケ目後ヘラミダキ 頸: ハケ目	頸部の穿孔は13cm程度。	SK29-4



探検番号	図面番号	形状	寸法 (長×幅)	色調	出土	検出・調整方法	備考	写真番号
第148013	33	器台	口：13.7 高：7.4 脚幅：11.9	にぶい黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量、1～2mmの内周を少量含む	良好	内：ナズ、跡外；ハク目 器内：黄褐色に散らす。口の内側ナズ	3829-3
第148016	33	器台	上端：14.0 高：21.3 幅：16.8	にぶい黄褐色	1～2mmの白色砂粒を多量含む。黄緑～1mmの角閃石をわずかに含む	良好	内：上段はハク目、中段は指オオナズ、下段は指オオナズハク目、外：指オオナズハク目 器底：ナズ	3829-7
第148027	33	甕	口：15.6 高：17.8 底：7.6 底厚：11.2	黄緑～にぶい黄褐色	黄緑～3mm程度の白色砂粒を多量、黄緑～1mmの角閃石をわずかに含む	普通	内内：ハク目、口外：ヨコナズ 器内内：工具類、指オオナズ、内：ナズ、内：工具ナズ、底内：指オオナズ、底外：工具ナズ	3809-1 3809-10
第148028	33	鉢	口：14.6 高：8.0 底：5.1 底厚：3.6	浅黄褐色	1～2mm程度の白色砂粒を多量含む。黄緑～1mmの角閃石をわずかに含む	良好	白磁；ヨコナズ 内：上半は指オオナズ、下半は指オオナズ、外：指オオナズ、内：上半はハク目、外：上半は指オオナズ、下半は指オオナズ、器内：指オオナズ、底外：工具ナズ	3809-2
第148029	甕	口：120.4 高：14.4 底：17.2	外：浅黄～緑灰黄色 内：にぶい黄褐色	黄緑～3mm程度の白色砂粒を多量、黄緑～2mm程度の角閃石をわずかに含む	良好	口：ヨコナズ 器外：ハク目 内：上半は指オオナズ、中段～下段はナズ、外：工具ナズ、器内：ナズ、底外：工具ナズ	3809-5	
第148015	33	甕	口：121.6 高：31.8 底：8.0 底厚：0.6	外：にぶい黄緑～灰黄褐色 内：にぶい黄緑～灰黄褐色	黄緑～3mm程度の白色砂粒を多量を含む	普通	口内：ハク目ナズ、口外：ナズ 内：上半はハク目、中段～下段は黄緑のため不明、外：ハク目	3809-1 3809-2
第148016	33	鉢	高：12.7 底：11.1	明黄褐色～褐色	黄緑～3mmの白色砂粒を多量含む。黄緑～1mm程度の角閃石を少量含む	普通	内：内側；指オオナズ（磨減が顕著） 外：底部分近工ナズ、底外：工具ナズ、指オオナズ	3809-5
第148017	33	鉢	口：12.6 高：13.3 底：7.7 底厚：0.7	外：橙～にぶい黄緑～褐色 内：橙褐色	黄緑～3mmの白色砂粒を多量、黄緑～1mm程度の角閃石を少量含む	普通	口内：工具ナズ、指オオナズ、口外：ヨコナズ 内：工具ナズ、内：ハク目、底内：ナズ、指オオナズ、底外：ナズ	3809-7
第148018	33	鉢	口：19.7 高：15.1 底：11.2	橙～にぶい褐色	黄緑～3mm程度の白色砂粒を多量、黄緑～1mm程度の角閃石を少量含む	普通	白磁；指オオナズ、ほぼは指オオナズ、工具ナズ	3809-6
第148019	甕	口：13.6 高：13.6 底：(5.4) 底厚：(6.9)	外：にぶい赤褐色 内：赤褐色	1～2mmの砂粒を多量を含む	良好	内～底内；指オオナズナズ、外：ナズ、底外：ハク目、指オオナズ	3809-3	
第148025	甕	口：13.6 高：18.2 底：11.2	にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒、金箔を含む	良好	口外：指オオナズ、ヨコナズ、ハク目	3811-1	
第148131	甕	口：13.4 高：18.2 底：11.2	外：にぶい黄緑～浅黄褐色 内：浅黄褐色	1～2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口：ハク目、指オオナズ、内：指オオナズ、外：指オオナズ、内：指オオナズ、外：指オオナズ	3811-2	
第148132	33	器フ	口：3.25 高：4.4 底：4.9	浅黄褐色	径0.1mmの白色砂粒を少量含む	良好	ナズ、指オオナズ	3819-1
第148134	甕	口：121.8 高：18.4 底：11.4	外：浅黄褐色～褐色 内：灰黄褐色～緑灰色	2～3mmの砂粒、金箔を含む	良好	口内：ヨコナズ 白内：ハク目、口外：ハク目、指オオナズ、内：ナズ、外：ナズ、指オオナズ、内：ナズ、外：ナズ、指オオナズ	3819-1 3819-2	
第148135	甕	口：117.6 高：112.95	にぶい黄緑～褐色	1～2mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口内：ヨコナズ 内外：ハク目	3819-2	
第148136	甕	口：19.0 高：19.0 底：11.4	外：明黄～黒色 内：にぶい黄褐色	2～3mmの砂粒を多量、角閃石を含む	良好	口：黄緑のため不明、内：ナズ、外：黄緑のため不明、中段～下段はハク目、底外：黄緑のため不明	3819-3	
第148137	甕	口：23.6	外：灰黄褐色～褐色 内：灰黄褐色～緑灰色	1～3mmの砂粒、角閃石を含む	良好	口内：ハク目、口外：多量赤褐色、口内：上半はハク目、下半はハク目、外：上半はハク目、下半はハク目、中段～下段はタタキハク目、底外：タタキハク目	3819-4	
第131328	高杯	口：15.4 高：6.4	明赤褐色	1mm以下の砂粒をわずかに含むが緑色	良好	口内：ヨコナズ	3838-1	

<三沢南崎遺跡 3 出土石器・鉄器・ガラス・土製品>

探検番号	図面番号	形状	寸法 (長×幅)	色調・石種	出土	検出・調整方法	備考	写真番号
第14801	42-1	石核	長：1.3 幅：1.9 厚：0.3 重：0.17	黒曜石				3831-1
第14802	42-1	石核	長：1.7 幅：2.1 厚：0.9 重：1.61	黒色細粒質安山岩				3831-1
第14803	42-2	石核	長：0.40 幅：0.0 厚：18.5 重：0.17	黄岩質砂岩			表面の風化層は、	3831-2
第14804	42-1	石核	長：2.1 幅：1.4 厚：0.4 重：0.97	黒曜石				3831-1
第14805	46	砥石	長：16.6 幅：6.9 厚：6.4 重：156.12	石英質砂岩				3831-4
第14806	41-1	二次加工工具片	長：3.7 幅：1.1 厚：0.7 重：0.79	黒曜石				3831-1



線区番号	駅番号	駅名	位置(度分秒)	名称/石種	軌上	構造	成形・調整方法	備考	標準番号
第14087	42-2	紙石	長: 25.2 幅: 15.9 厚: 4.3 重: 2700	緑輝砂岩					K308-17
第14088	41-1	スクラ イパー	長: 2.5 幅: 2.0 厚: 0.4 重: 1.6	黒色燧岩質安山岩				SC07出土遺物として扱う。	K308-18
第14089	42-2	石瓦	長: 12.8 幅: 4.6 厚: 0.6 重: 33.26	赤褐色泥岩					K308-19
第14090		紙石	長: 08.1 幅: 3.5 厚: 2.3 重: 93.48	石英質砂岩				SC07出土遺物として扱う。	K308-20
第14094	35-2	円盤	長: 6.0 幅: 5.45	外: 上記の褐色 内: 上記の黄色	やや粗2mm以下の石英・長石・雲母等をやや多く含む	良好	内: ナデ 外: ココナデ・ナデ	板目境線部～朝臣土位を打ち欠く。外面はススガシ量付番。	1004-1
第14095	42-1	石礫	長: 3.4 幅: 1.8 厚: 0.4 重: 2.20	黒色燧岩質安山岩					K310-1
第14096		紙石	長: 05.31 幅: 1.87 厚: 2.8 重: 92.75	頁岩					K310-1A
第14097	42-1	石礫	長: 02.03 幅: 1.8 厚: 0.4 重: 1.91	黒曜石					K313-1
第14098	42-2	石瓦丁	長: 14.4 幅: 4.4 厚: 0.9 重: 68.72	頁岩質砂岩				孔隙: 0.35	K313-2
第14099	23	不明	長: 1.2 幅: 0.50 重: 0.35	黄褐色	やや軟0.1～1.2mmの石英・長石を少量、0.1mmの雲母をごくわずかに含む	良好	内: ナデ・一層粗オオネ 外: 粗オオネ後ナデ	外面上面に準拠。	K314-1
第14104	42-2	石瓦	長: 05.37 幅: 1.87 厚: 0.45 重: 2.28	灰色頁岩					K317-10
第14105	42-2	石瓦	長: 05.07 幅: 1.87 厚: 0.4 重: 2.21	灰色頁岩					K317-12
第14106	41-1	スクラ イパー	長: 4.6 幅: 4.6 厚: 0.7 重: 16.17	黒色燧岩質安山岩					K317-19
第14107	44-2	石割	長: 4.8 幅: 8.9 厚: 1.0 重: 33.66	頁岩				表面風化激しい。	K317-1
第14108	39-2	紙石	長: 7.7 幅: 8.7 厚: 1.1 重: 91.68	砂岩					K317-11
第14109		紙石	長: 28.1 幅: 13.2 厚: 8.7 重: 3000	花崗岩					K317-18
第15081	37-2	ナリヤ ソナ	長: 03.13 幅: 2.1 厚: 0.2 重: 1.9						K317-15
第15082	37-2	ナリヤ ソナ	長: 04.80 幅: 1.65 厚: 0.2 木質厚: 0.26 重: 1.1					持ち手側。	K318-1
第15083	43-1	石瓦	長: 03.30 幅: 4.5 厚: 0.7 重: 44.89	赤褐色泥岩					K320-12
第15084	43-1	石瓦丁	長: 07.80 幅: 54.8 厚: 0.2 重: 41.29	灰色頁岩					K320-13
第15085	43-1	石瓦丁	長: 08.11 幅: 03.03 厚: 0.7 重: 25.13	頁岩質砂岩					K320-15
第15086	43-1	石瓦	長: 14.4 幅: 3.7 厚: 0.8 重: 25.07	頁岩					K320-11
第15087	45-1	片方板 砂	長: 8.6 幅: 4.4 厚: 1.3 重: 102.97	砂岩					K320-16

調査番号	図面番号	形状	寸法(長×幅)	色調/石材	出土	検出	経緯・調整状況	備考	調査年度
第33008		投擲	長:3.9 幅: 3.1 厚:1.9 重: 36.76	安山岩					928-01
第33009		投擲	長:3.5 幅: 2.2 厚:1.9 重: 22.9	安山岩					928-02
第33010		投擲	長:3.8 幅: 2.7 厚:2.1 重: 27.07	安山岩					928-03
第33011		投擲	長:02.5 幅:3.1 厚:2.1 重: 25.58	安山岩					928-04
第33012	45-1	石斧	長:18.5 幅: 7.4 厚:0.5 重: 375.57	玄武岩				表面風化激しい。	928-07
第33013	46	砥石	長:18.6 幅: 9.8 厚:4.6 重: 996.38	石英質砂岩					928-09
第33014	46	砥石	長:13.3 幅: 9.4 厚:5.6 重: 1198.44	花崗岩					928-09
第33015	46	砥石	長:19.2 幅: 14.7 厚:9.5 重: 3890	砂岩					928-09
第33016	43-1	石楯丁	長:16.31 幅:0.23 厚:0.6 重:14.44	赤褐色灰岩					929-01
第33017	43-1	石楯丁	長:16.01 幅:4.0 厚:0.7 重: 33.25	頁岩					929-01
第33018	39-2	砥石	長:13.8 幅: 6.8 厚:1.3 重: 223.26	砂岩					927-03
第33019	43-1	石楯丁	長:19.13 幅:3.4 厚:0.5 重: 31.82	赤褐色灰岩					927-02
第33020	41-1	スタイル イマー	長:4.0 幅: 1.4 厚:0.7 重: 14.72	黒色凝結質安山岩					927-01
第33021	37-2	ヤリ先 シテ	長:08.50 幅:1.15 厚: 0.4 重:4.6						927-01
第33022	44-2	石鏝	長:02.0 幅:2.4 厚:0.2 重: 0.59	赤褐色灰岩				先端および縁部欠損。	928-01
第33023	44-2	石鏝	長:02.91 幅:2.2 厚:0.2 重: 0.66	頁岩				先端欠損。	928-01
第33024	43-2	石楯丁	長:14.51 幅:4.31 厚:0.8 重:18.78	灰色頁岩					928-04
第33025	43-2	石楯丁	長:16.1 幅:3.6 厚:0.6 重: 15.79	赤褐色灰岩					928-05
第33026	43-2	石楯丁	長:12.91 幅:0.31 厚:0.1 重:6.18	粘板岩					928-05
第33027	43-2	石楯丁	長:02.31 幅:0.31 厚:0.6 重:3.93	頁岩質砂岩					928-07
第33028		投擲	長:3.8 幅: 3.1 厚:2.2 重: 31.99	安山岩				3割セット。	928-02
第33029		投擲	長:5.0 幅: 4.1 厚:2.7 重: 67.83	安山岩				3割セット。	928-02
第33030		投擲	長:4.1 幅: 3.6 厚:2.0 重: 35.42	安山岩				3割セット。	928-02

検出番号	図面番号	形状	長さ(最大値)	幅	厚さ	重量	材質/石材	加工	形状・調整技法	備考	登録番号
第55図10		投擲	長: 5.5 幅: 2.0 厚: 2.1 重: 38.88				灰山岩				K28-10
第55図11		投擲	長: 2.9 幅: 2.3 厚: 1.9 重: 15.8				灰山岩				K28-11
第55図12		投擲	長: 3.3 幅: 3.1 厚: 2.0 重: 27.12				灰山岩				K28-12
第55図13	38-2	砥石	長: 11.3 幅: 5.6 厚: 1.0 重: 65.22				花崗岩				K28-13
第55図14	40-3	磨石	長: (7.2) 幅: 9.1 厚: 5.0 重: 474.72				灰山岩				K28-14
第55図15	46	台石	長: 11.0 幅: 10.2 厚: 1.1 重: 995.48				花崗岩				K28-15
第55図16	46	台石	長: 17.2 幅: 17.4 厚: 4.9 重: 2300				花崗岩				K28-16
第60図1	40-2	碧玉	長: 1.35 幅: 0.45 厚: 0.45				ガラス・タフ			やや風化する。	K28-17
第60図2	40-2	碧玉	長: 1.2 幅: 0.7 厚: 0.7				碧玉				K28-18
第60図3	44-2	結縛	径: 7.0 厚: 1.66 重量: (1.6)				緑色片岩	ほぼ全面以下に石灰・長石・雲母等をわずかに含む		ナデ。上面は未貫通の刺状文ナデ。	K28-19
第60図4	39-1	砥石	長: 13.8 幅: 4.7 厚: 1.8 重: 195.43				深沢岩				K28-20
第60図5	35-2	投擲	長: (2.65) 幅: (2.4) 重: 2.05				褐色	径1.5mm以下の石灰・長石・雲母等をわずかに含む		ナデ・段オサエ	K28-21
第60図6	45-2	砥石	長: 8.2 幅: 4.3 厚: 3.4 重: 156.41				灰山岩				K28-22
第60図7	36-1	鉄錐	長: 3.5 幅: 1.5 厚: 0.25 重: 3.1							継皮を「X」字部に得く。	K28-23
第60図8	37-2	磨り鉢	長: (2.8) 幅: (1.85) 厚: 0.4 重: 5.1								K28-24
第60図1	43-2	6角7	長: (8.1) 幅: (9.0) 厚: 0.7 重: 25.95				真砂質砂岩				K28-25
第60図2	45-2	素材削片	長: 4.5 幅: 5.3 厚: 0.6 重: 18.66				緑色片岩			表面風化激しい。	K28-26
第60図3	44-2	結縛	径: (3.3) 厚: (2.7) 重: 0.5 重量: 0.56				真砂質砂岩				K28-27
第60図4	39-1	砥石	長: 16.9 幅: 2.5 厚: 1.5 重: 150.77				花崗岩				K28-28
第60図5		投擲	長: 4.2 幅: 3.7 厚: 2.8 重: 55.27				灰山岩				K28-29
第60図6		投擲	長: 5.3 幅: 5.7 厚: 2.9 重: 65.15				灰山岩				K28-30
第60図7		投擲	長: 4.7 幅: 3.5 厚: 2.3 重: 65.6				灰山岩				K28-31
第60図8		投擲	長: 5.0 幅: 2.1 厚: 2.4 重: 38.97				灰山岩				K28-32

線区番号	駅番号	駅名	形状(長さ幅)	色調/石材	加工	構造	経緯・調整方法	備考	標準色
第63009		投券	長: 4.4 幅: 3.1 厚: 1.6 重: 26.15	安山岩					820-10
第63010		投券	長: 3.1 幅: 2.7 厚: 1.3 重: 16.39	安山岩					820-17
第63011	46	台石	長: 12.2 幅: 8.1 厚: 7.2 重: 1166.63	花崗岩					820-19
第63012	37-2	タリ盛 シナ	長: 03.077 幅: 1.37 厚: 0.50 重: 4.2						820-11
第63013	27	網約	長: 18.3 幅: 6.0 厚: 5.15 重: 3.9	明炭褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	階オサス後ナゾ	手摺ね。	820-20
第73001	39-2	礫石	長: 7.6 幅: 9.9 厚: 1.5 重: 139.98	細粒砂岩					820-13
第73002	43-2	石版丁	長: 06.43 幅: 03.97 厚: 0.5 重: 10.85	緑色片岩					820-13
第73003	42-1	石版	長: 12.9 幅: 12.0 厚: 0.9 重: 2.75	黒色細粒質安山岩				脚部・黒形欠損	820-11
第73004	41-1	スクラ イバー	長: 4.4 幅: 4.8 厚: 1.0 重: 23.29	黒色細粒質安山岩					820-12
第73005		田石	長: 09.10 幅: 06.43 厚: 4.3 重: 359.63	安山岩					820-18
第73006	38-2	礫石	長: 10.2 幅: 4.7 厚: 3.0 重: 126.34	粘板岩					820-15
第73007		投券	長: 3.5 幅: 2.4 厚: 2.2 重: 22.31	安山岩				2階セット。	820-10
第73008		投券	長: 3.6 幅: 2.5 厚: 2.0 重: 27.35	安山岩				2階セット。	820-10
第73009		投券	長: 4.6 幅: 3.5 厚: 2.2 重: 31.5	安山岩					820-18
第73010		投券	長: 4.4 幅: 3.7 厚: 2.7 重: 36.75	安山岩					820-17
第73011		投券	長: 4.7 幅: 3.5 厚: 2.9 重: 31.47	安山岩					820-19
第74001	30-2	土玉	横: 1.9 孔 径: 0.4 高: 1.5	浅黄褐色	径0.1mmの白色砂粒を少量含む	不良			820-11
第74002		礫石	長: 4.8 幅: 3.9 厚: 1.3 重: 27.29	砂岩					820-12
第74003	46	台石	長: 15.1 幅: 12.4 厚: 7.9 重: 2190	花崗岩					820-13
第74004		礫石	長: 03.43 幅: 02.53 厚: 0.5 重: 4.36	粘板岩					823-11
第74005	43-2	石版丁	長: 12.47 幅: 12.0 厚: 0.9 重: 25.43	赤褐色泥岩					820-11
第74006	44-1	石版丁	長: 14.2 幅: 3.7 厚: 0.7 重: 20.59	砂岩					820-11
第74007	45-2	ペン マー	長: 5.1 幅: 3.7 厚: 3.2 重: 80.8	安山岩					820-12

調査番号	図面番号	部材	寸法 (長さ×幅)	色調/石材	取上	状況	成層・埋蔵深度	備考	調査番号
第41図1	41-2	襖ワ	長: 4.2 幅: 2.6 厚: 1.0 重: 17.97	黒色細粒質安山岩					IC40-02
第41図2	44-1	石瓦下	長: 16.11 幅: 13.77 厚: 1.1 重: 25.58	真砂質砂岩					IC40-03
第41図3		投擲	長: 4.0 幅: 3.0 厚: 2.2 重: 33.21	安山岩				割セット。	IC40-09
第41図4		投擲	長: 4.4 幅: 3.1 厚: 2.5 重: 43.72	安山岩					IC40-01
第41図5		投擲	長: 4.3 幅: 3.5 厚: 1.6 重: 22.37	安山岩				割セット。	IC40-05
第41図6		投擲	長: 5.0 幅: 3.2 厚: 1.8 重: 41.36	安山岩					IC40-06
第41図7		投擲	長: 3.8 幅: 2.0 厚: 1.7 重: 18.47	安山岩					IC40-03
第41図8		投擲	長: 3.1 幅: 2.1 厚: 2.3 重: 22.29	安山岩					IC40-02
第41図9	40-1	砥石	長: 18.0 幅: 5.2 厚: 2.3 重: 106.75	石英質岩					IC40-04
第47図1	44-1	石瓦下	長: 15.33 幅: 15.00 厚: 0.6 重: 45.47	真砂質					IC41-01
第47図2	44-2	粘板	長: 13.90 幅: 8.6 厚: 0.25 重: 15.04	粘板岩					IC41-02
第47図3		砥石	長: 4.3 幅: 3.2 厚: 0.6 重: 9.43	フォスフェルスカ					IC42-01
第47図4	44-1	石瓦下	長: 15.67 幅: 15.77 厚: 0.6 重: 45.88	真砂質砂岩					IC42-02
第47図5	44-2	石瓦下	長: 15.90 幅: 15.4 厚: 0.7 重: 49.73	真砂					IC42-01
第47図6	39-1	砥石	長: 7.9 幅: 3.5 厚: 2.5 重: 64.65	粘板岩					IC43-03
第48図1	36-2	罫線	長: 1.8 幅: 16.9 厚: 0.25 重: 9.6						IC41-03
第48図2	36-2	罫線	長: 2.88 幅: 16.31 厚部 厚: 0.25 厚部 厚: 0.75 重: 22.8						IC41-02
第48図3	37-2	罫	長: 17.76 幅: 1.4 厚: 1.15 重: 7.4						IC41-01
第48図4	45-1	扁平片 方石質	長: 15.27 幅: 2.4 厚: 0.6 重: 11.86	凝灰岩					IC35-01
第48図5	35-2	内敷	長: 2.3 幅: 2.6 厚: 0.55 重: 3.1	浅黄緑～黄灰色	中央部3m以下の石炭・長石・ 雲母等を含む赤土層	貝	手取ね。		IC34-01
第48図6	37-1	ヤリガ シテ	長: 16.1 幅: 1.4 厚: 0.55 重: 6.6					割取れのため、本来 の厚さよりも厚く なっている。	IC40-04
第48図7	37-1	ヤリガ シテ	長: 13.1 幅: 1.1 厚: 0.95 重: 2.4						IC40-04
第48図8	37-1	ヤリガ シテ	長: 15.26 幅: 1.17 厚: 0.49 重: 6.6						IC40-03

調査番号	図面番号	品目	寸法(長さ・幅)	色調/石材	出土	検出	検出・調整技法	備考	写真番号
第90209	37-1	ヤリ頭 シナ	長: (4.1) 幅: 1.17 厚: 0.3 重: 0.0						904-11
第90210	38-2	鋼鎌	長: 1.5 幅: 12.0 厚: 0.25 重: 2.5						904-10
第102081	38-1	鋤先	長: 6.0 幅: 11.6 厚: 0.27 重: 78.5						903-11
第102082		鉄斧	長: 3.3 幅: 3.0 厚: 2.3 重: 35.29	安山岩					908-03
第102083		鉄斧	長: 5.0 幅: 3.1 厚: 1.9 重: 35.17	安山岩					908-04
第102084	44-1	石瓦丁	長: (2.9) 幅: (2.3) 厚: (0.7) 重: 5.95	赤紫色花崗					908-01
第102085	40-1	砥石	長: (7.9) 幅: 3.7 厚: 2.4 重: 170.28	石英礫岩					904-04
第102086	41-2	標々	長: 4.7 幅: 2.7 厚: 1.1 重: 15.21	黒色凝結質安山岩				未製品?	904-01
第102087	46	砥石	長: 16.0 幅: 10.1 厚: 4.1 重: 948.05	細粒砂岩					904-03
第102088	38-2	鉄斧	長: (1.71) 幅: 3.07 厚: 0.52 重: 5.6						908-11
第102089	45-2	石材	長: 3.8 幅: 6.1 重: 49.26	黒色凝結質安山岩					908-05
第102090	44-1	石瓦丁	長: 11.1 幅: 2.6 厚: 0.7 重: 42.09	赤紫色花崗					908-01
第107081	41-2	石鎌	長: 2.1 幅: 1.3 厚: 0.4 重: 1.25	黒色凝結質安山岩					908-01
第107082	42-1	石鎌	長: 3.5 幅: 2.2 厚: 0.3 重: 2.08	黒色凝結質安山岩					903-01
第107083	41-1	ヌタ イール	長: 3.0 幅: 4.3 厚: 0.6 重: 10.59	黒色凝結質安山岩					908-02
第107084	37-2	刀子	長: (1.53) 幅: (0.26) 厚: 0.21 重: 0.1						903-11
第107085	42-1	石鎌	長: 3.5 幅: 2.2 厚: 0.5 重: 2.89	黒色凝結質安山岩					903-01
第117081	46	台石	長: 38.9 幅: 17.0 厚: 3.2 重: 1296.39	玄武岩					904-01
第117082	39-1	砥石	長: (4.9) 幅: (2.9) 厚: 2.1 重: 22.49	細粒砂岩					903-02
第117083	46	砥石	長: 17.3 幅: 14.4 厚: 4.7 重: 1253.29	細粒砂岩					903-01
第117084	45-2	石材	長: 18.5 幅: 9.5 厚: 1.6 重: 184.36	黒色凝結質安山岩					903-05
第117085	40-2	小玉	径: 0.5 厚: 0.0	ガラス					904-11
第117086	42-1	石鎌	長: (2.7) 幅: (1.4) 厚: 0.3 重: 0.99	黒色凝結質安山岩				脚部欠損。	903-01

線区番号	架設区間	架設区	位置(度々)	名称/石種	軸上	橋底	成形・調整方法	備考	架設年月
第117007	41-2	石橋	長: 1.9 幅: 2.6 厚: 0.6 重: 1.92	黒色融着質安山岩					037-02
第117008	45-2	石材	長: 6.2 幅: 6.3 厚: 2.4 重: 115.99	黒色融着質安山岩					037-06
第117009	38-2	礎石	長: 10.2 幅: 2.0 厚: 1.3 重: 69.3	粘板岩					037-04
第117010	38-2	礎石	長: 11.3 幅: 1.2 厚: 1.2 重: 17.03 幅: 7.0 幅: 0.2 重: 2.2	粘板岩					037-14
第127001	40-1	礎石	長: 05.4 幅: 0.2 重: 68.95	赤色砂岩					030-01
第127002	45-1	柱状片 基石	長: 1.9 幅: 2.3 重: 36.39	凝灰岩					030-01
第127003		基石	長: 19.5 幅: 14.4 厚: 7.1 重: 3400	花崗岩					030-05
第127004	41-1	スタ ンパー	長: 3.6 幅: 3.8 厚: 0.6 重: 7.77	黒色融着質安山岩					030-01
第127005	40-3	礎石	長: 7.8(4) 幅: 0.0 厚: 1.1 重: 279.74	安山岩					030-06
第127006	41-1	スタ ンパー	長: 2.2 幅: 4.4 厚: 1.1 重: 11.44	黒色融着質安山岩					030-01
第127007	45-0	石材	長: 3.0 幅: 2.6 厚: 2.8 重: 73.86	赤タロム雲母岩					030-02
第130001	36-2	鋼橋	長: 1.9 幅: (4.65) 対照 厚: 0.2 曲部 厚: 0.7 重: 7.3						030-01
第130002	38-1	鉄橋	長: 02.9 幅: 0.0 厚: 0.8 重: 15.8						030-02
第130003	35-2	投擲	長: 03.0 幅: 2.8 厚: 0.25	褐色	注詳前。1m以下の石巻・長 石・雲母等を少し含む	員	ナダ・熊オヤエ		030-08
第130004	41-1	スタ ンパー	長: 4.0 幅: 4.7 厚: 1.0 重: 16.25	黒色融着質安山岩					030-01
第130005	45-2	石材	長: 05.0 幅: 4.5 厚: 7.5 重: 199.75	黒色融着質安山岩					030-09
第130006	40-2	小玉	径: 0.4 厚: 0.25	ゴツス					030-07
第130007		礎石	長: 02.0 幅: 3.6 厚: 3.2 重: 63.72	粘板岩					030-04
第130009	37-1	ア ン ク	長: 02.640 幅: 1.03 厚: 0.3 重: 0.8						030-04
第130010	37-1	ア ン ク	長: 05.105 幅: 1.05 厚: 0.35 対照厚: 0.12 重: 18.03						030-04
第130011	36-2	鋼橋	長: 2.7 幅: (2.7) 厚: 0.18 重: 6.1						030-02
第130012	40-3	礎石	長: 5.4 幅: 5.7 厚: 2.9 重: 105.95	安山岩					030-01
第130013	46	基石	長: 04.0 幅: 0.1 厚: 3.1 重: 62.43	安山岩					030-04
第130014	46	石橋	長: 11.50 幅: 0.90 厚: 1.1 重: 38.27	粘板岩					071-01

調査番号	図面番号	形状	寸法 (長x幅)	色調/石材	加工	検定	成形・調整技法	備考	数量	
第130図13	30-2	投擲	長：6.8 幅： 2.53 厚： 0.15	にぶい褐色	やや軽2mm以下の石英・長石・ 雲母等をやや多く含む		良	ナブ・指オサエ	黒面。	879-17
第130図14	30-1	投擲	長：(6.18) 幅：2.53 厚： 0.5 重：13.6							879-11
第130図17	30-1	投擲	長：(4.30) 万 幅幅：1.44 重 部幅：0.71 万部厚：0.83 某部厚：0.68 重：8.4							878-11
第140図1	41-1	3x3 インバー	長：3.0 幅： 4.9 厚：0.8 重：14.16	黒色縞縞質安山岩						881-11
第140図2	45-1	卵石	長：8.0 幅： 4.9 厚：3.5 重： 106.98	安山岩						881-14
第140図3		投擲	長：3.4 幅： 2.40 厚：2.2 重：未	砂岩						881-11
第140図6	46	卵石	長：8.0 幅： 10.0 厚：4.5 重： 878.98	砂岩						882-11
第140図9		卵石	長：6.9 幅： 5.6 厚：2.5 重： 118.77	砂岩						881-12
第150図1	45-2	剥片	長：4.4 幅： 5.1 厚：1.8 重： 35.75	黒色縞縞質安山岩						884-11
第150図2	44-1	石片	長：(6.3) 幅：(5.0) 厚：1.1 重：29.27	緑色片岩						888-11
第150図3		投擲	長：4.9 幅： 3.4 厚：2.7 重： 60.73	安山岩						884-13
第150図4		投擲	長：4.2 幅： 2.3 厚：1.7 重： 27.44	安山岩						884-13
第150図5		投擲	長：4.1 幅： 3.2 厚：2.5 重： 28.27	安山岩						884-13
第150図6		投擲	長：3.8 幅： 2.0 厚：2.7 重：18.41	安山岩						884-13
第150図10		卵石	長：3.5 幅： 3.2 厚：2.6 重： 39.93	石英斑岩						884-14
第150図11	44-2	片縞縞 未成品	長：6.4 幅： 7.4 厚：0.9 重： 34.38	緑色片岩						888-14
第150図12	44-1	石片	長：(3.4) 幅：(2.9) 厚：0.5 重：7.82	頁岩質砂岩						888-11
第150図13		卵石	長：(6.6) 幅：(5.0) 厚：1.0 重：25.85	砂岩						888-13
第150図14	37-2	ナリカ ンナ	長：(3.8) 幅：1.17 厚：0.9 重： 3.7							888-11
第151図3	35-2	投擲	長：4.8 幅： 2.2	黒褐色	やや軽0.1～0.5mmの白色砂粒を 少量含む		良好	ナブ・指オサエ	手製。一部、取柄 のため磨削。	891-11



写真図版







三沢南端遺跡2・3・4全照(台成写真、写真上方が北)

図版2



①三沢南崎遺跡3 Ⅰ区全景(写真上方が東)



②調査区及び周辺風景(南西から)



①1号住居 遺物出土状況 (南西から)



②1・3号住居 完備状況 (南西から)



③2号住居屋内土坑 遺物出土状況 (東から)



④4号住居 遺物出土状況 (南から)



⑤4号住居 貼床検出状況 (南から)



⑥5号住居 遺物出土状況 (西から)



⑦7号住居 完備状況 (北から)



⑧6号住居 検出状況 (北から)

図版4



①7号住居 遺物出土状況 (南から)



②7号住居 完掘状況 (南から)



③8号住居 完掘状況 (東から)



④9号住居 貼床検出状況 (南から)



⑤10号住居 貼床検出状況 (北西から)



⑥11号住居 完掘状況 (南から)



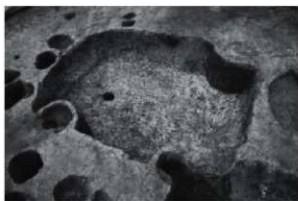
⑦12号住居屋内土坑 遺物出土状況 (南から)



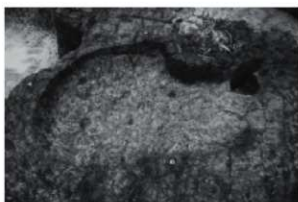
⑧12号住居 完掘状況 (南東から)



①13号住居 遺物出土・完掘状況（北から）



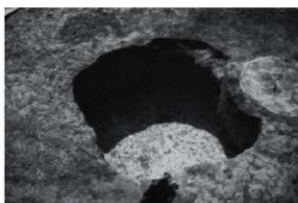
②1号土坑 完掘状況（東から）



③2号土坑 完掘状況（北から）



④3号土坑 完掘状況（南から）



⑤4号土坑 完掘状況（北から）



⑥5号土坑 遺物出土・完掘状況（南西から）

図版6



①6号土坑 完掘状況 (南から)



②7号土坑 完掘状況 (南から)



③8号住居 完掘状況 (南東から)



④9号土坑 完掘状況 (南東から)



⑤三沢南崎遺跡3 II区全景 (写真上方が東)



①15号住居 遺物出土・完掘状況 (南から)



②16号住居 土層・完掘状況 (南から)



③Ⅱ区17号住居 完掘状況 (南東から)



④Ⅲ区17号住居 貼床検出状況 (北東から)



⑤Ⅱ区20号住居 完掘状況 (南から)



⑥Ⅲ区20号住居 貼床検出状況 (北西から)



⑦Ⅱ区14号土坑 完掘状況 (北から)



⑧Ⅲ区14号土坑 完掘状況 (南から)

図版8



①23号住居 遺物出土状況 (北西から)



②25号住居 遺物出土状況 (南西から)



③14・23・25号住居 完掘状況 (西から)



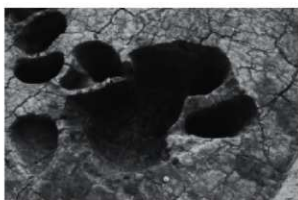
④24号住居 完掘状況 (南西から)



⑤26号住居 完掘状況 (南東から)



⑥10号土坑 土層断面 (南から)



⑦11号土坑 完掘状況 (北東から)



⑧II区調査風景 (東から)



三沢町崎道跡 3 Ⅲ区全景（写真上方が北）

図版10



①27号住居 完掘状況 (北西から)



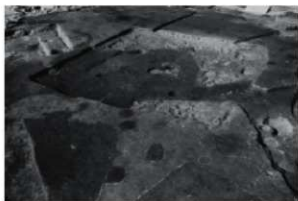
②19号住居 完掘状況 (南から)



③28号住居 ベッド状遺構検出状況 (南から)



④28号住居屋内土坑 遺物出土状況 (北東から)



⑤28号住居 貼床検出状況 (南東から)



⑥29号住居 完掘状況 (北西から)



⑦30号住居 遺物出土状況 (南から)



①30号住居 焼土・炭化物検出状況 (南から)



②30号住居 完掘状況 (南から)



③31号住居 貼床検出状況 (東から)



④32号住居屋内土坑 遺物出土状況 (北から)



⑤32号住居 貼床検出状況 (東から)



⑥33号住居 完掘状況 (西から)



⑦34号住居 貼床検出状況 (北西から)



⑧35号住居 遺物出土状況 (南東から)

図版12



①35号住居 貼床検出状況 (北から)



②36号住居 完掘状況 (東から)



③37号住居 貼床検出状況 (南東から)



④38号住居 貼床検出状況 (北西から)



⑤39号住居 貼床検出状況 (南西から)



⑥40号住居 貼床検出状況 (東から)



⑦41号住居内ピット 遺物出土状況 (南から)



⑧41号住居 貼床検出状況 (南から)



①42号住居 貼床検出状況 (北から)



②43号住居 遺物出土状況 (西から)



③43号住居 完掘状況 (北西から)



④44号住居 遺物出土状況 (南西から)



⑤44号住居 貼床検出状況 (南から)



⑥45号住居 遺物出土状況 (南西から)



⑦45号住居 貼床検出状況 (北から)



⑧46号住居 遺物出土状況 (1) (西から)

図版14



①46号住居 遺物出土状況 (2) (東から)



②46号住居 完掘状況 (東から)



③47号住居 完掘状況 (東から)



④48号住居 遺物出土状況 (西から)



⑤48号住居 貼床検出状況 (東から)



⑥49号住居 完掘状況 (北西から)



⑦50号住居内ピット 遺物出土状況 (南から)



⑧50号住居 貼床検出状況 (南から)



①51号住居 貼床検出状況 (北東から)



②52号住居 貼床検出状況 (北から)



③53号住居 貼床検出状況 (東から)



④54号住居 貼床検出状況 (東から)



⑤55号住居 貼床検出状況 (南から)



⑥56号住居 貼床検出状況 (北から)

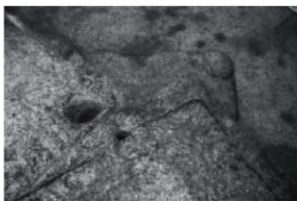


⑦57号住居 遺物出土状況 (西から)



⑧57号住居 完掘状況 (西から)

図版16



①58号住居 完掘状況 (南東から)



②59号住居 完掘状況 (南から)



③60号住居 完掘状況 (北から)



④61号住居 貼床検出状況 (東から)



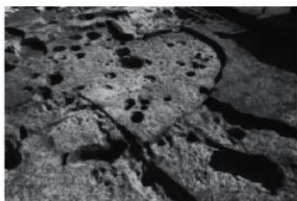
⑤62号住居 貼床検出状況 (西から)



⑥63号住居 完掘状況 (西から)



⑦64号住居 完掘状況 (北から)



⑧65号住居 完掘状況 (北西から)



①66号住居 完掘状況 (北から)



②67号住居 完掘状況 (北西から)



③68号住居 貼床検出状況 (北西から)



④69号住居 貼床検出状況 (北から)



⑤70号住居 完掘状況 (北から)



⑥71号住居 完掘状況 (北から)



⑦72号住居 完掘状況 (南から)



⑧73号住居 完掘状況 (北から)

図版18



①74号住居 遺物出土状況（東から）



②74号住居 完掘状況（北から）



③75号住居 完掘状況（北東から）



④76号住居 完掘状況（北から）



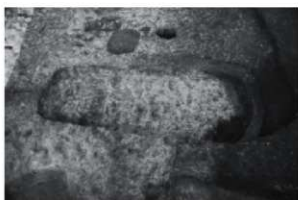
⑤77号住居 完掘状況（北から）



⑥78号住居 完掘状況（南から）



⑦17号土坑 完掘状況（西から）



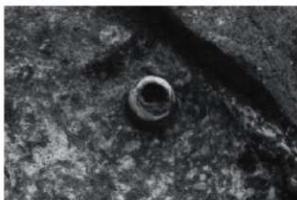
⑧18号土坑 完掘状況（南西から）



①18号土坑 完掘状況 (南から)



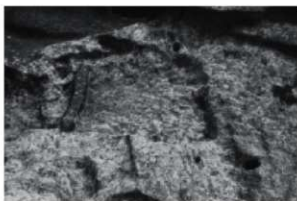
②19号土坑 完掘状況 (西から)



③20号土坑 遺物出土状況 (西から)



④20号土坑 完掘状況 (北から)



⑤21号土坑 完掘状況 (北から)



⑥22号土坑 完掘状況 (南から)

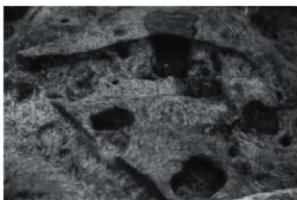


⑦23号土坑 完掘状況 (北東から)



⑧24号土坑 完掘状況 (東から)

図版20



①25号土坑 完掘状況 (西から)



②26号土坑 完掘状況 (西から)



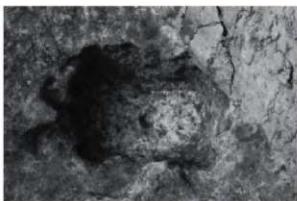
③27号土坑 完掘状況 (南東から)



④28号土坑 完掘状況 (南から)



⑤29号土坑 完掘状況 (南から)



⑥30号土坑 完掘状況 (東から)



⑦31号土坑 完掘状況 (東から)



⑧32号土坑 完掘状況 (北から)



①33号土坑 完掘状況 (北から)



③I区4号溝 土層・完掘状況 (南東から)



②15号土坑 完掘状況 (北西から)



④8号溝 完掘状況 (南西から)



⑤10号溝 完掘状況 (南西から)



⑥11号溝 完掘状況 (北西から)



⑦12号溝 完掘状況 (北から)

図版22



①9号溝 土層断面 (1) (南から)



②9号溝 土層断面 (2) (南から)



③9号溝 土層断面 (3) (南西から)



④9号溝 土層断面 (4) (南西から)



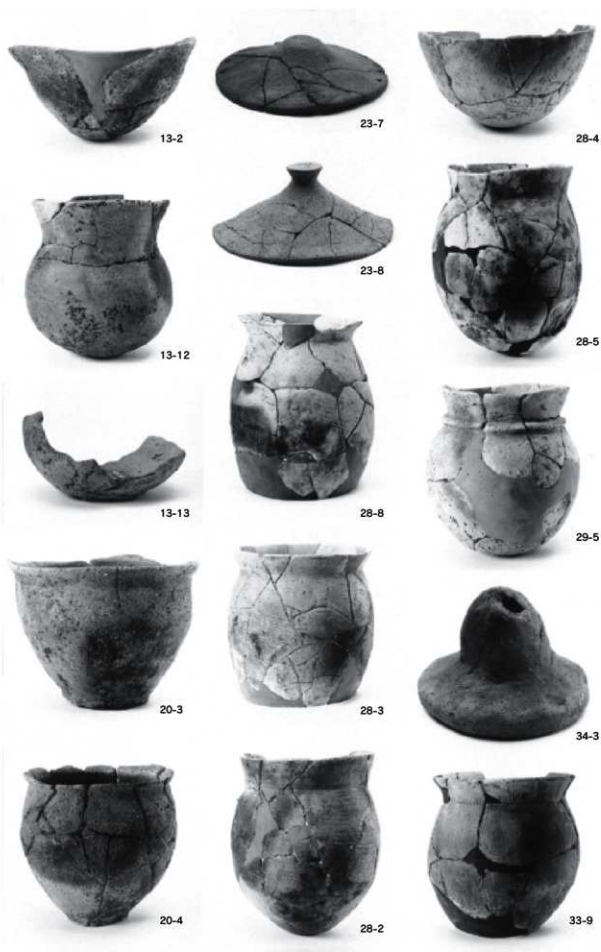
⑤9号溝 完掘状況 (北東から)



⑥1号土塚墓 土層断面 (南から)

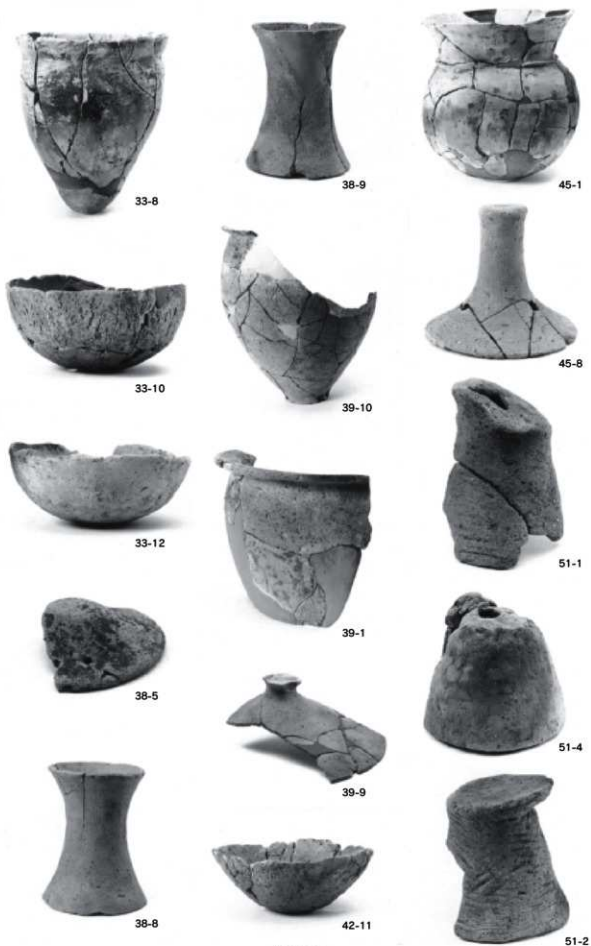


⑦1号土塚墓 完掘状況 (南から)

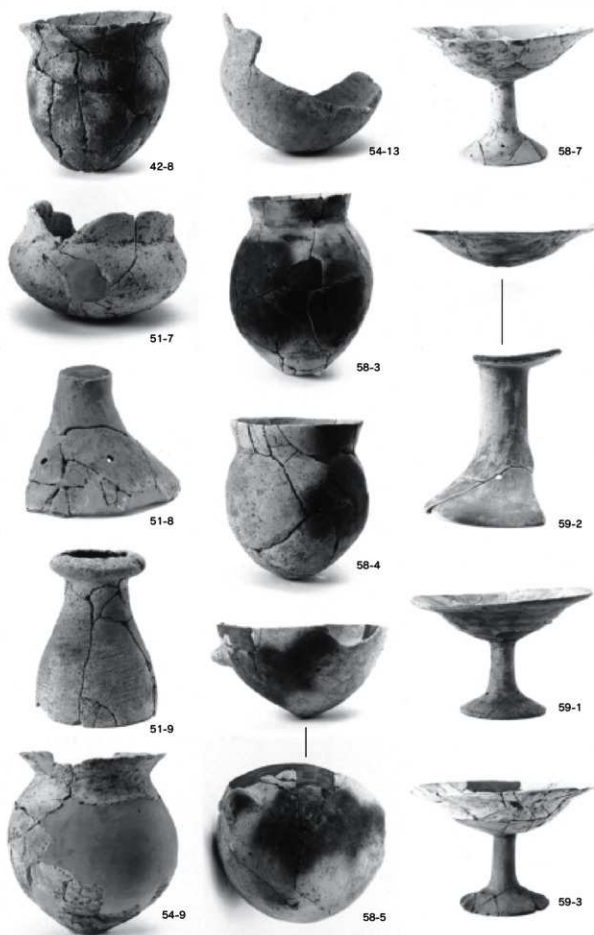


出土土器①

図版24

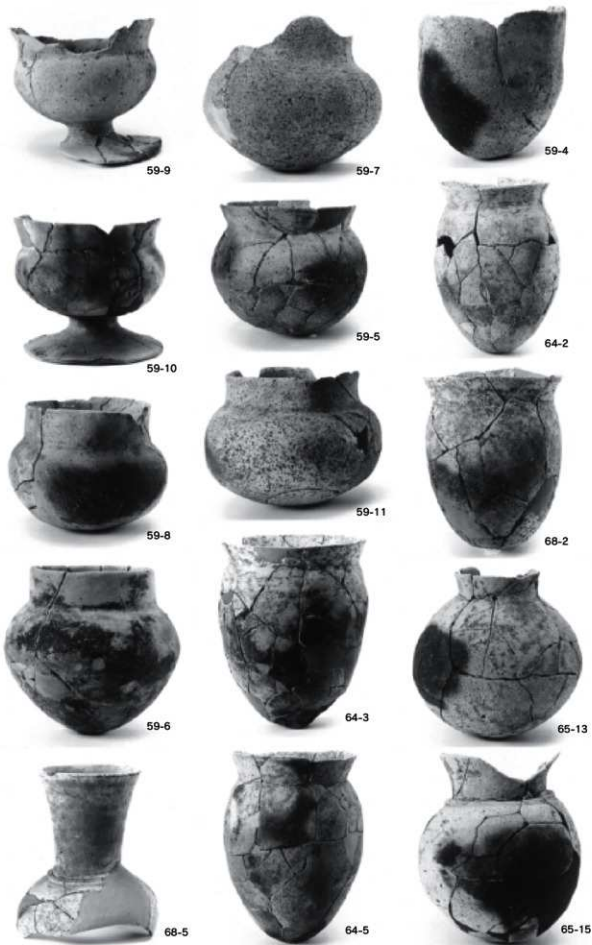


出土土器②



出土土器③

図版26



出土土器④



65-2



65-7



70-1



65-5



65-8



70-3



65-6



65-14



70-4



65-10



65-14



70-5



65-11



63-13



71-4

出土土器⑤

図版28



71-3



72-7



82-4



71-5



79-2



82-2



72-10



79-9



82-5



72-12



79-7



82-6



72-6

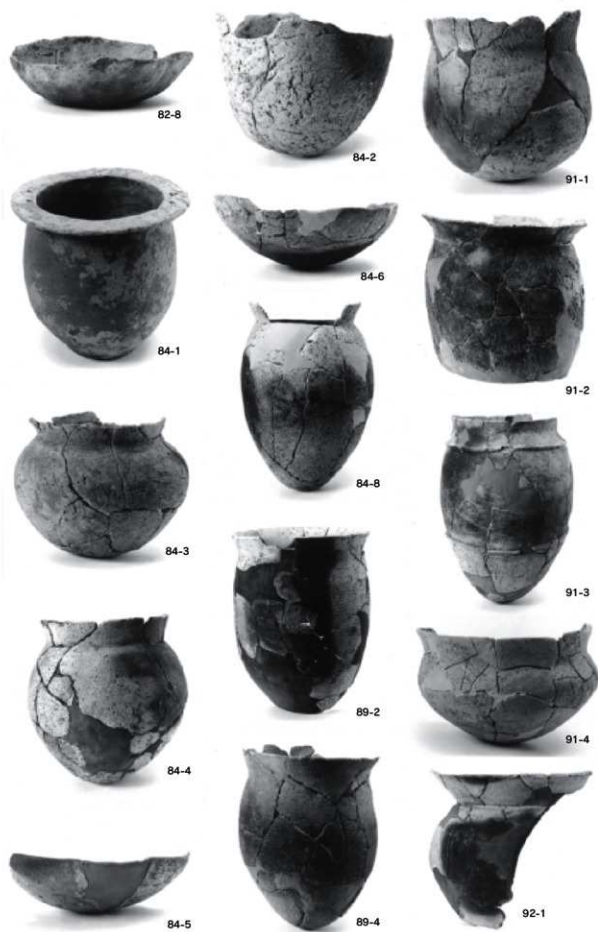


82-1



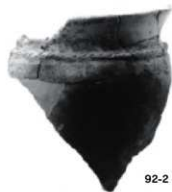
82-7

出土土器⑥



出土土器⑦

図版30



出土土器⑧



101-2



104-6



109-5



101-3



104-4



109-9



101-8



109-1



109-10



101-9



109-2



113-5



101-10



109-4



113-6

出土土器⑨

図版32



113-7



122-2



141-2



116-2



122-9



141-6



116-4



122-13



141-8



116-6



132-7



146-12



122-6



132-11



146-8

出土土器⑩



146-15



150-7



150-17



146-16



150-15



150-18



150-8



150-16



151-2

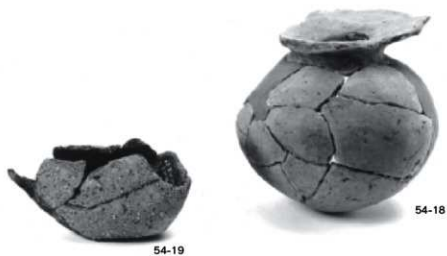


101-6

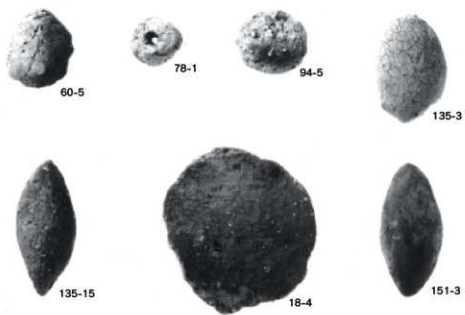


92-3

出土土器①



①出土土器

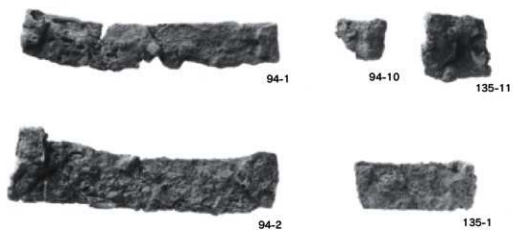


②出土土製品

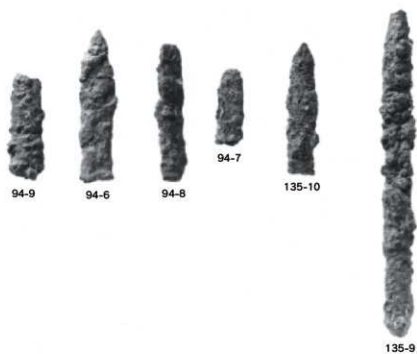
図版36



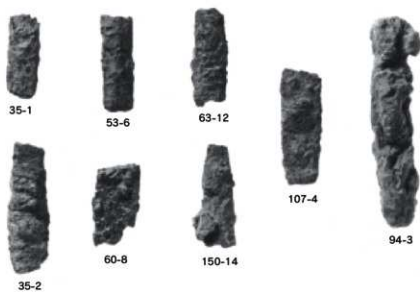
①出土鉄器 (鉄鏃)



②出土鉄器 (摘鎌)



①出土鉄器 (ヤリガンナ1)



②出土鉄器 (ヤリガンナ2)

図版38



102-1



135-2



102-8

①出土鉄器



55-13



73-6



117-9



117-10



135-8

②出土石器 (砥石1)



60-4



63-4



87-6



117-2

①出土石器（砥石2）



34-8



53-3



73-1

②出土石器（砥石3）

図版40



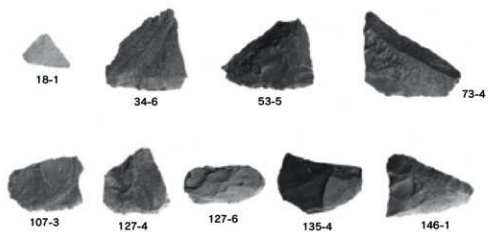
①出土石器（砥石4）



②出土玉類



③出土石器（砥石・磨石）



①出土石器 (スクレイパー)

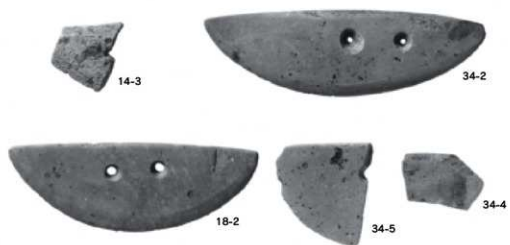


②出土石器 (打製)

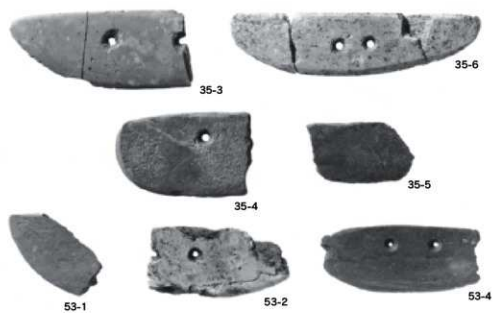
図版42



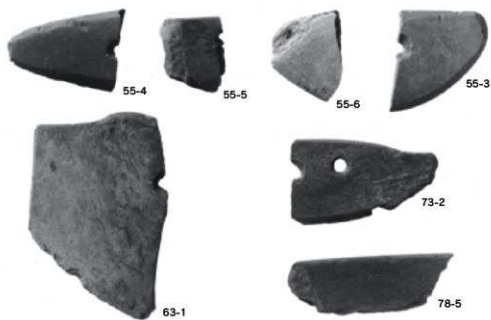
①出土石器 (石鏃)



②出土石器 (石鏃丁1)

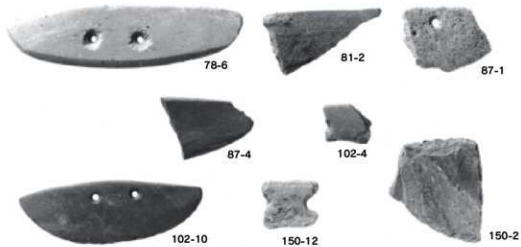


①出土石器 (石苞丁2)

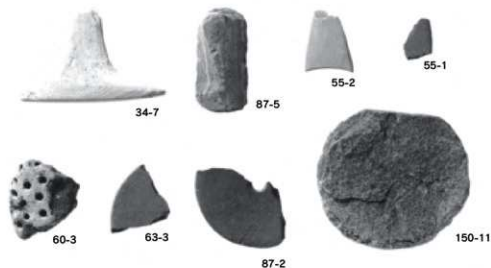


②出土石器 (石苞丁3)

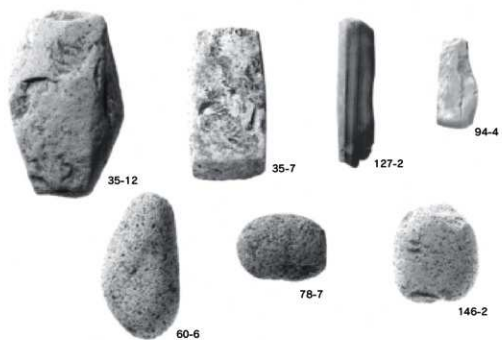
図版44



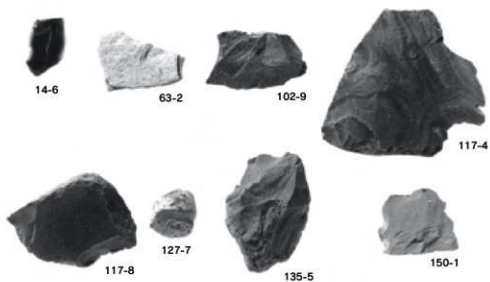
①出土石器 (石彫丁4)



②出土石器・土製品



①出土石器 (石斧等)



②出土石材

図版46



14-5



55-15



117-3



35-14



63-11



135-13



35-13



102-7



135-14



55-16



78-3



146-6



35-15



14-7



117-1

出土石器

報告書抄録

ふりがな	みつさわみなみざきいせき							
書名	三沢南崎遺跡3							
副書名	小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第242集							
編著者名	上田 恵							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財センター							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL. 0942-75-7555							
発行年月日	平成21(2009)年3月13日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三沢南崎 遺跡3	福岡県 小郡市 三沢字南崎	40216		33° 25′ 01″	130° 33′ 48″	20070705 ～ 20080215	1780 m ²	県道 本郷基山線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三沢南崎 遺跡3	集落	弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代前期	竪穴住居・溝 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑	土器・石器類 土器・石器類 土器・石器・鉄器類 土師器・鉄器類		鳥形土製品出土		



三沢南崎遺跡 3

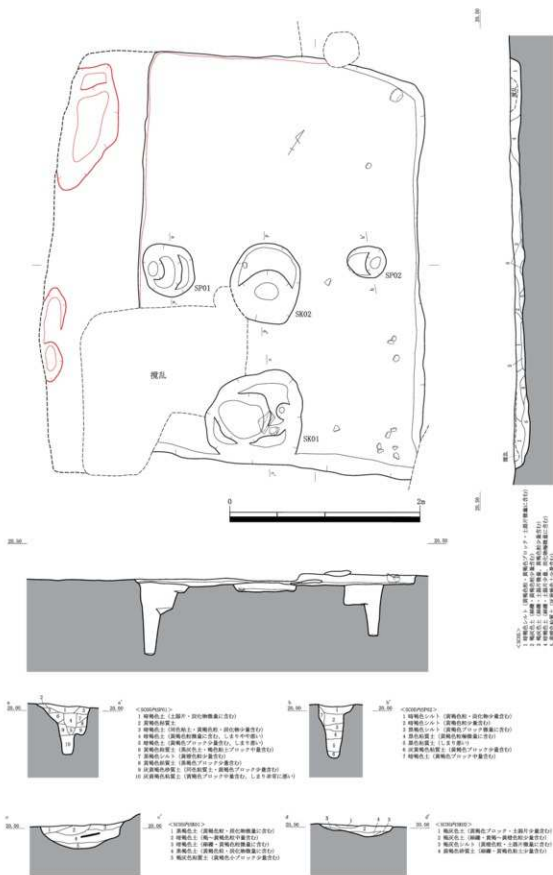
—小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査—

小郡市文化財調査報告書第 242 集

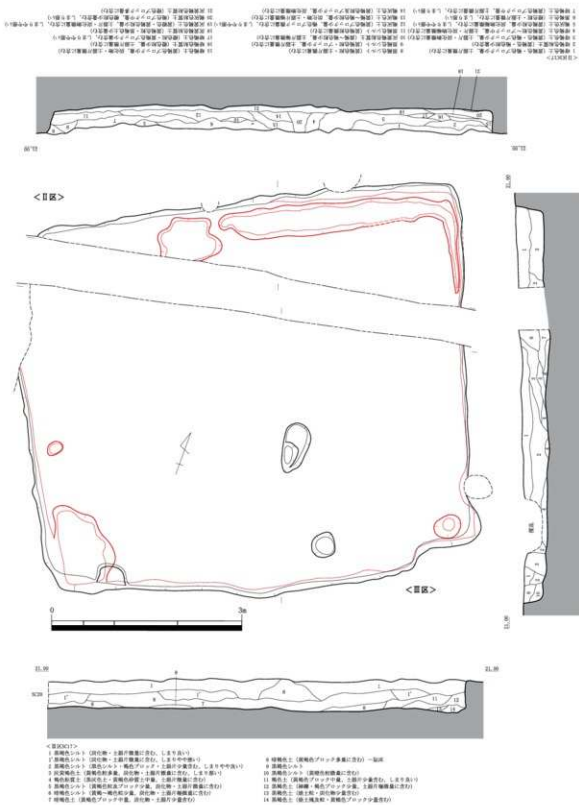
平成 21 年 3 月 13 日

発 行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 2 5 5 - 1
印 刷 株式会社 四ヶ所
福岡県朝倉市馬田 3 3 6



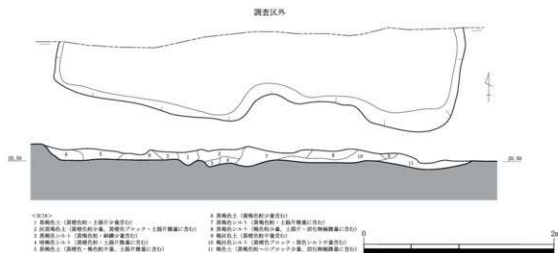


第10図 5号住居 (S=1/40)

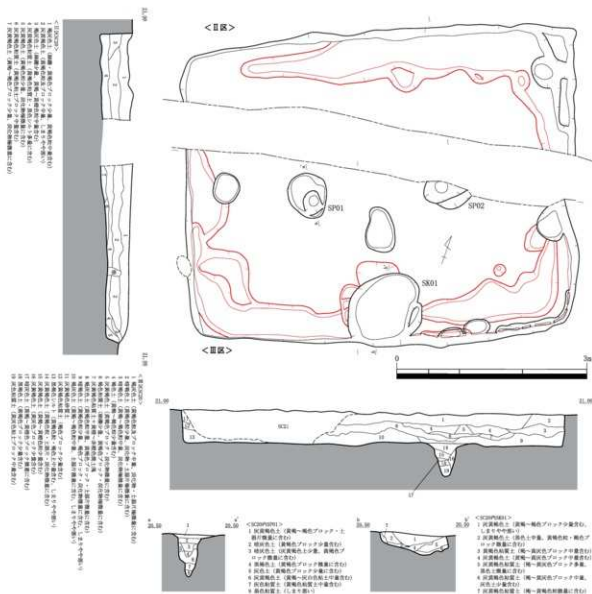


第32図 17号住居 (S=1/60)

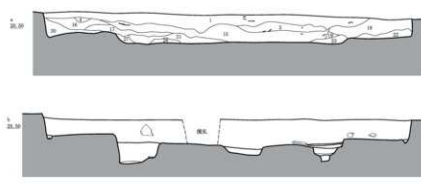
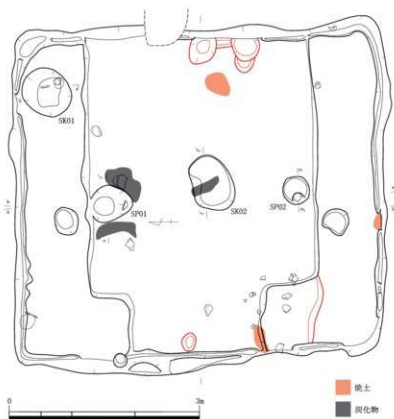




第36図 18号住居 (S=1/40)



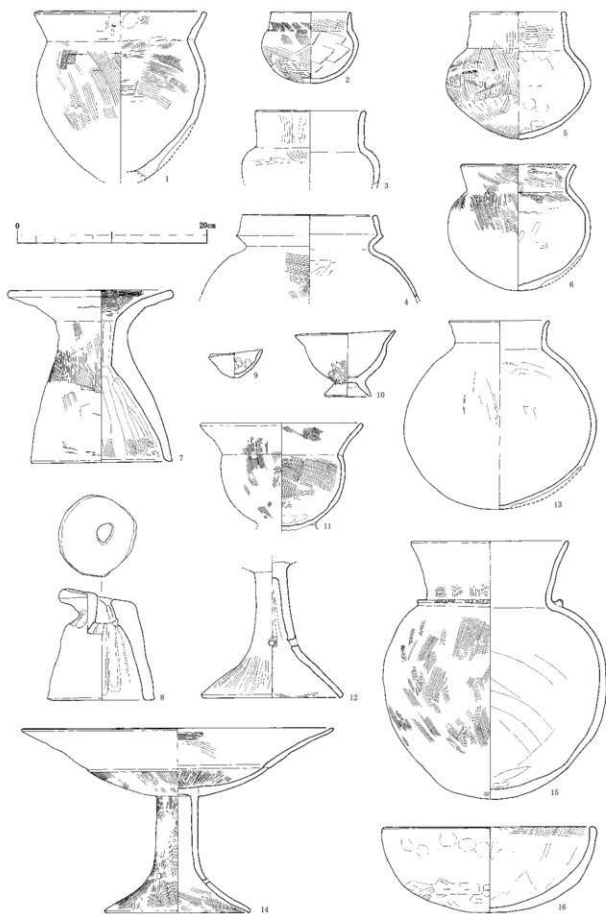
第37図 20号住居 (S=1/60)



- <SK01>
- 1 換土上 (1)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 2 換土上 (2)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 3 換土上 (3)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 4 換土上 (4)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 5 換土上 (5)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 6 換土上 (6)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 7 換土上 (7)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 8 換土上 (8)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 9 換土上 (9)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 10 換土上 (10)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 11 換土上 (11)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 12 換土上 (12)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 13 換土上 (13)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 14 換土上 (14)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 15 換土上 (15)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 16 換土上 (16)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 17 換土上 (17)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 18 換土上 (18)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 19 換土上 (19)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 20 換土上 (20)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 21 換土上 (21)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 22 換土上 (22)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 23 換土上 (23)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 24 換土上 (24)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 25 換土上 (25)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 26 換土上 (26)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 27 換土上 (27)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 28 換土上 (28)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 29 換土上 (29)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり
 - 30 換土上 (30)換土層、換土層直下はプロットと張り付いた、しきり面あり



第62図 32号住居 (S=1/60)



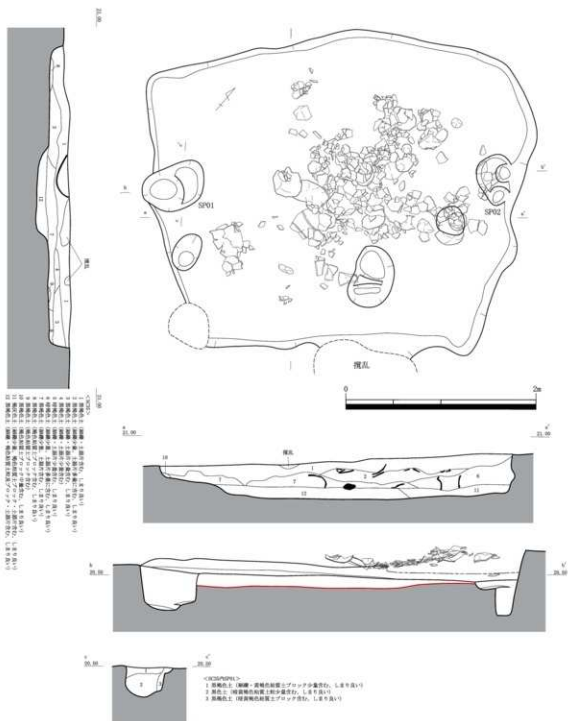
第65図 32号住居出土土器② (S-1/4)

出土遺物 (第68図/図版39)

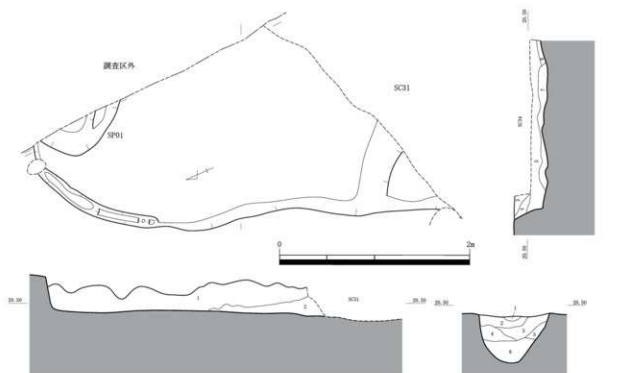
埋土から少量の土器・石器が出土しているが、小片が多く原型は留めない。胴部が円形に張り、とがった底部を持つ古墳時代初頭の甕、脚部に穿孔し受部が小型の器台等、外来系要素を持つ土師器類が見られる。その他、図示した砥石、石斧片、投弾等、微量の石器・鉄器類が出土している。

35号住居 (第69図/図版11)

調査区中央南東寄りに位置し、50・60・65号住居、18号土坑を切る。主軸は北東―南西方向で、長軸4.0×短軸3.15m、検出面からの深さは0.31mを測る。平面プランはひずみのある長方形で、主柱は掘り込みの際にある2本であると判断した。検出段階から極めて多量の遺物を確認している。主柱以外の掘り



第69図 35号住居 (S=1/40)

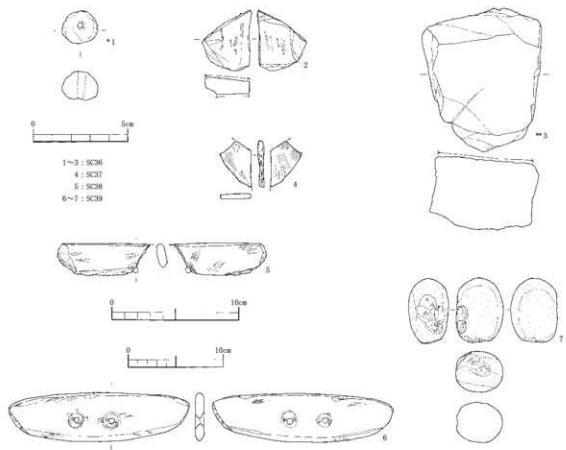


<SC29>
 1 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 2 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 3 築地土 1層敷地内層土を含む。しまりあり
 4 築地土 1層敷地内層土を含む。しまりあり
 5 築地土 1層敷地内層土を含む。しまりあり

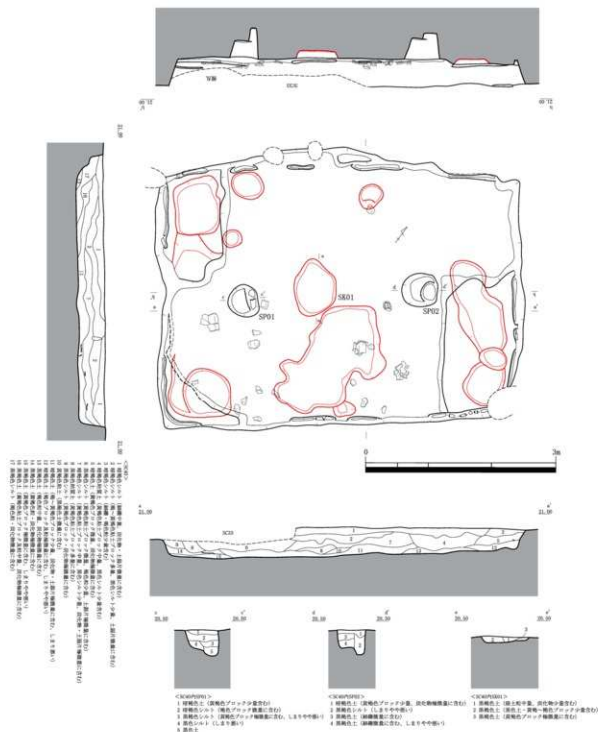
6 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 7 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり

<SC29P201>
 1 築地土 1層敷地内層土を含む。しまりあり
 2 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 3 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 4 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 5 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 6 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり
 7 築地土 1層敷地内層土に灰アゾック層を含む。しまりあり

第77図 39号住居 (S=1/40)



第78図 36・37・38・39号住居出土土製品・石器 (S=1/3, *付はS=1/2, **付はS=1/4)

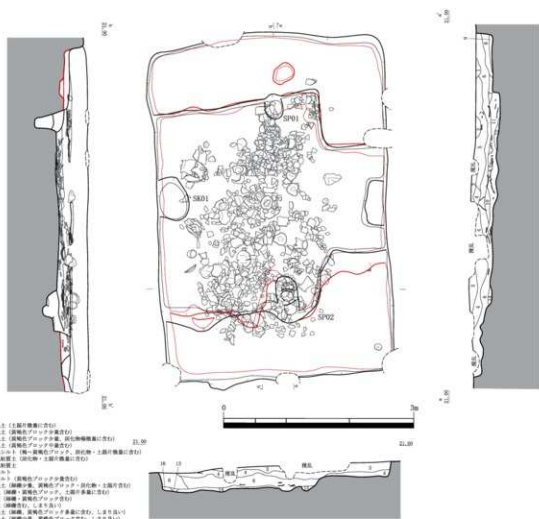


第80図 40号住居 (S=1/60)

出土遺物 (第81・82図/図版28・29・40・41・44)

遺構図に示したように、床面を中心に埋土からまとまった量の遺物が出土している。但し、原型を留めるものはほぼ床面直上で出土したものに限定される。甕類は口縁部が直立し、体部外面に平行タタキが残るものと、口縁部がくの字形に屈曲し胴部が長胴化してハケ調整のみを施すものが混在するが、後者が主体となっている。同時に底部が丸底の小型甕も見られることから、この住居の時期が転換期になると考えられる。小型の鉢類は外面に平行タタキを残す薄手のものと、工具ナデあるいは指ナデの残る肉厚のものも混在している。

石器類は図示した石冠丁、楔状製品、砥石の他、多数の投擲物が出土している。また用途不明であるが、鉄製品が1点確認されている。



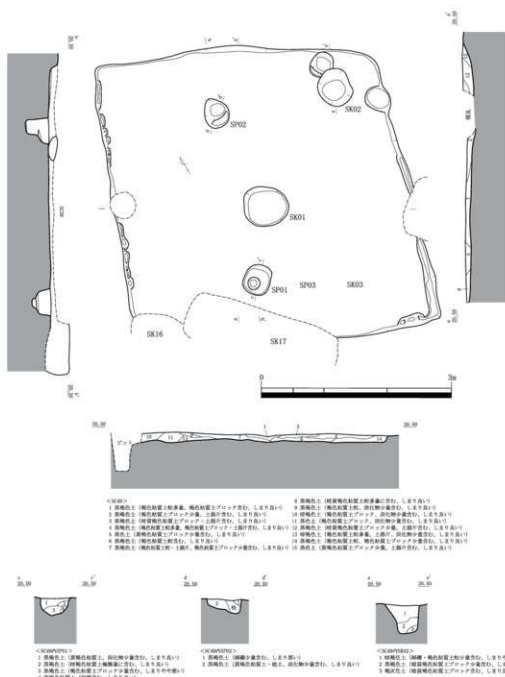
第88図 44号住居 (S=1/60)

残す。

石器類は図示した石砲丁、石剣の刃部、砥石の他、花崗岩の台石が出土している。鉄製品は認められない。

44号住居 (第88図/図版13)

調査区南東隅に位置し、59号住居を切る。上面は多数の攪乱で破壊されていたが、遺構の底面にまでは及んでいなかった。東西を主軸とし、2柱の構造を採る。平面プランは長方形を呈し、長軸5.4×短軸3.6m、検出面からの深さ最大0.35mを測る。東西・北辺に幅0.9～1.2m、高さ0.15mのベッド状遺構を持つ。ベッド状遺構は段掘りののち、厚く黄褐色粘質土を貼り付けており、堅固な造りとなっている。北辺中央部のみベッド状遺構が途切れており、この部分に黄褐色粘質土を盛り上げたテラス状の段差が認められることから、この部分を出入口として使用していたと考えられる。柱間に土坑は認められない。南辺中央に浅い不整形の掘り込みがあり、この部分が炉跡に相当すると考えられる。黄褐色粘質土を用いた貼床は床面全体に施されているが、特にベッド状遺構の段差を維持することを目的としていたようである。西側のピットを除き、貼床下に目立った掘り込み等は認められない。



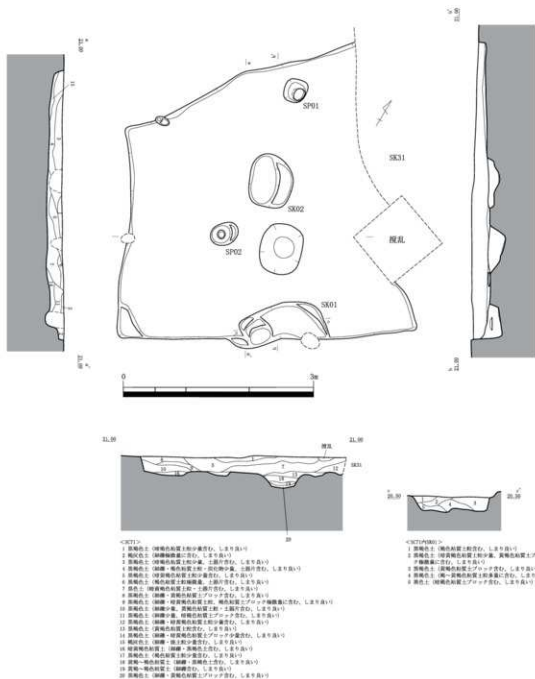
第100図 49号住居 (S-1/60)

50号住居 (第103図/図版14)

調査区中央部南東寄りに位置し、35号住居に切られ、51・57・60・65号住居を切る。主軸は北東-南西方向で、2柱の構造を採る。長軸6.9×短軸5.2m、検出面からの深さは最大0.35mを測る。柱穴はSP02とSP01に切られた下層ピットを想定している。いずれも掘り込みは深く、しっかりとした構造である。東の柱穴周辺には小型のピットを3基検出しているが、主柱の補助的役割を果たしていた可能性がある。

南辺を除く3面に幅0.8m、高さ0.2mのベッド状遺構をめぐらせる。このベッド状遺構は、北辺の全体と、西辺の北半分は段掘りで地山をのこして、西辺の南半分と東辺は黄褐色粘質土を厚く積み重ねて構築している。粘質土積み重ねの体裁を採る部分は、下層に他遺構が存在するため、やむなくその方法を採用したと思われる。南辺の一部は35号住居に削平されているが、ここにベッド状遺構は延長しない。

ベッド状遺構の上面を含め、全体に黄褐色粘質土で貼床を施している。貼床下は南辺に湿気抜きのためと思われる溝状の掘り込みが認められる他、北東には不整形の土坑状の掘り込みが、北西にはピット状の

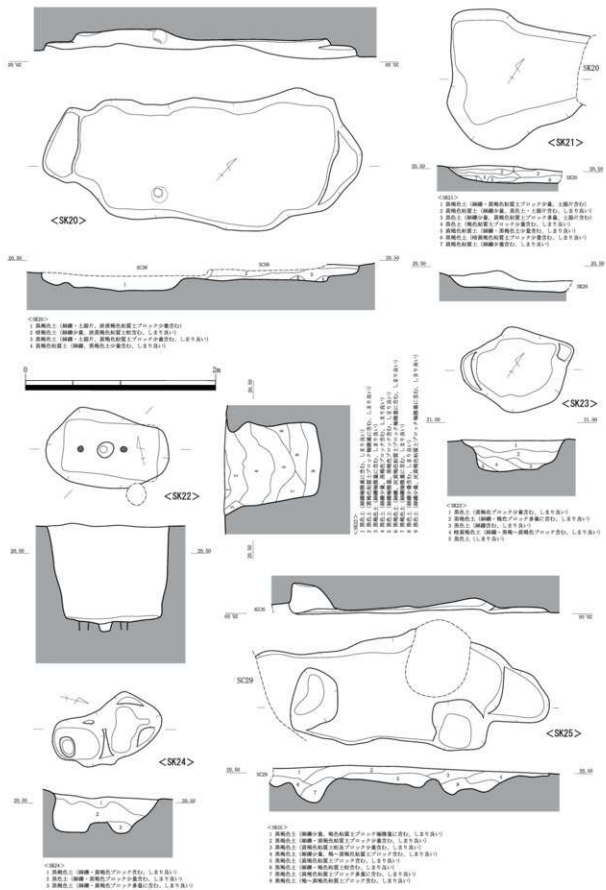


第134図 71号住居 (S=1/60)

ビットを伴う不整形の土坑が確認されている。位置と形状から、SK02が礎跡であったと思われる。その他、遺構に伴うと見られる施設は検出されていない。また、貼床状の痕跡も認められなかった。

出土遺物 (第135・138図/図版35・36・46)

遺物は細片が極少量出土するのみである。時期を示す土器を2点のみ図示している。脚部に穿孔を施す、薄手の器台。弥生時代後期の所産。その他、石鎌の半加工品、鉄鎌等が出土している。石器・鉄製品の出土はわずかだが、ほぼ同量である。



第144図 20~25号土坑 (S=1/40)

図版34



①出土土器 (ミニチュア1)



②出土土器 (ミニチュア2)